東京大学構内遺跡調査研究年報 14

2020年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 14

2020 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

例　言

1．本書は 2020 年 4 月 1 日から 2021 年 3 月 31 日までに東京大学埋蔵文化財調査室が実施した、埋蔵文化財発掘調査およびそれに関わる研究、教育、普及などの諸活動をまとめた東京大学構内遺跡調査研究年報と東京大学構内遺跡に関わる調査・研究成果である東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要を合冊したものである。

2．上記期間に行った発掘調査のうち、埋蔵文化財が確認できたものについて略報を掲載した。

3．遺構の略号は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で採用している方式を参照し、前に遺構の性格、後ろに各調査地点ごとに 1 から通し番号を付与した。前に付した遺構番号の性格の略称は、個々の報告の凡例を参考にされたい。

4．本書の作成は室員があたり、大成が編集を行った。

5．本書に添付した CD-ROM には、印刷本と同内容の電子版（PDF 形式）を収録している。

6．本書掲載・収録の諸データは、営利を伴わない学術目的の個人論文などの使用を除いて無断転載を禁止する。

7．発掘調査に伴う図面、出土遺物等は、東京大学埋蔵文化財調査室が、東京大学駒場Ⅰ教養キャンパス（東京都目黒区駒場 3-8-1）、東京大学駒場Ⅱリサーチキャンパス（東京都目黒区駒場 4-6-1）、東京大学工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡 414）において管理、運用、保管を行っている。

目　次

例　言
目　次

年報編
東京大学構内遺跡の調査 …… 3
東京大学構内遺跡調査一覧 …… 4

第Ⅰ章　埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）…… 19
第１節　本郷構内の事前調査
1. 本郷 277　医学部附属病院基幹整備共同溝 …… 21
2. 本郷 297　基幹環境整備（言問通り横断管路）Ⅱ期 …… 33
3. 本郷 308　外灯 C-5，C-61 電源改修 …… 43
第２節　本郷構内の試掘調査
1. 本郷 288　野球場北側擁壁改修 …… 45
2. 本郷 298　農学部１号館機械設備 …… 58

第Ⅱ章　調査資料の整理・研究および公開・活用
第１節　調査資料の整理
1. 整理事業概要 …… 63
2. 外部委託 …… 63
第２節　調査・研究成果の公開・活用
1. 報告書・年報 …… 63
2. 広報活動 …… 63
3. 教育・普及 …… 63
4. 資料の提供・貸出 …… 64
附　埋蔵文化財調査室要項 …… 66
埋蔵文化財調査室規則 …… 66
埋蔵文化財調査室組織表 …… 66

報告編
東京大学構内遺跡発掘調査報告
東京大学本郷構内の遺跡　東京都下水道地点発掘調査報告 …… 69
東京大学本郷構内の遺跡　基幹環境整備（言問通り横断管路）
電気管路地点発掘調査報告 …… 97

紀要編

東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 14

東京大学構内遺跡編年修正について　堀内　秀樹　大貫　浩子 …… 143

東京大学医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した色絵磁器色絵具の分析
新免　歳靖　顧錦娟　水本和美 …… 151

年　報　編

2020 年度

東京大学構内遺跡の調査

東京大学は、農学生命科学研究科附属演習林を併せると全国 21 都道県におよび、326,809,180 ㎡を所有（一部借入）している。このうち本郷（東京都文京区）、駒場（東京都目黒区）、柏（千葉県柏市）の 3 構内を拠点キャンパスと位置付けている。本郷構内は本郷、弥生、浅野の 3 キャンパス全体で 559,176 ㎡、駒場構内は Ⅰ（教養学部など）、Ⅱ（リサーチキャンパス）全体で 352,180 ㎡、柏構内は 412,291 ㎡を所有している。また、その他周知の遺跡として登録され、現在までに試掘を含め調査を実施した所有地に、研究関連施設では理学系研究科附属植物園本園、農学生命科学研究科附属技術基盤センター（小石川樹木園）、総合研究博物館小石川分館が所在する白山構内（東京都文京区、160,787 ㎡）、医科学研究所が所在する白金台構内（東京都港区、68,906 ㎡）、理学系研究科附属臨海実験所（神奈川県三浦市、68,737 ㎡）、福利厚生関連施設では追分インターナショナルハウス（東京都文京区、1,576 ㎡）、白金台ロッジ（東京都港区、2,453 ㎡）、三鷹国際学生宿舎（東京都三鷹市、29,438 ㎡）、検見川総合運動場（千葉県千葉市、273,027 ㎡）、目白台インターナショナル・ビレッジ（東京都文京区、28,509.35 ㎡）がある。

本郷構内では旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末～前期集落・後晩期包蔵地）、弥生時代（後期集落）、古墳時代（前～後期集落）、平安時代（集落）、江戸時代（大名屋敷・武家地・町地・寺社地）、近代にわたる大規模複合遺跡群で、「文京区 No.47 本郷台遺跡群」として登録されている。また、その一部（浅野地区内）は、「文京区 No.28 弥生町遺跡群」として登録され、1975 年に文学部考古学研究室、理学部人類学教室が合同調査を行った「向ヶ岡貝塚」（No.28-C 地点）は、1976 年に国史跡に指定されている。

駒場構内のうち駒場Ⅱ地区は、近年の再開発に伴い構内の試掘調査を実施しているが、遺跡は確認されていない。駒場Ⅰ地区は、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期集落）、平安時代、近世（農村）の遺跡が確認され、全体が「目黒区 No.1　東京大学駒場構内遺跡」として登録されている。

柏構内（現状所有範囲）は開発前に千葉県教育委員会による試掘調査が行われたが、遺跡は確認されていない。

白山構内は、すでに明治初頭、エドワード・S・モースによって貝塚の存在が紹介されており、「小石川植物園内貝塚」として周知されてきた。また、1918 年には東京府の旧跡として指定された歴史を持つ。現在では構内全域が縄文時代（前～晩期集落・貝塚）、江戸時代（大名屋敷・幕府御用地・武家地）の複合遺跡「文京区 No.81 小石川御薬園跡」、その一部が「文京区 No.21 小石川植物園内貝塚・原町遺跡」として登録されている。2012 年 9 月 19 日には「小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）」として、161,588.4 ㎡が国の史跡名勝に指定された。

医科学研究所は、2000 年度の発掘調査（白金台 5）で旧石器時代（ブロック）、江戸時代（大名屋敷）の遺跡が確認され、その一部は、「港区 No.135 遺跡」として登録されている。

東京大学構内遺跡調査一覧

本郷構内調査一覧

構内	番号	年度	略称(旧略称)		調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	1	1983	(U)		山上会館	事前	1984.3.7～1986.7.17	1500	西田・谷・大貫	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	2-1	1984	HHB	(法)	法学部4号館	事前	1984.4.1～1985.3.31	2500	大塚	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
	2-2			(文)	文学部3号館					
本郷	3	1985	HGS(G)		御殿下記念館	事前	1985.7.29～1987.6.30	6000	寺島・大貫・倉林	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	4-1	1984	HHC	(病中)	医学部附属病院中央診療棟	事前	1984.10.1～1987.3.31	7700	藤本・小川	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点』
	4-2			(エネセン)	設備管理棟					
	4-3			(給水)	給水設備棟					
	4-4			(共同溝)	共同溝他					
本郷	5	1984	HS7(理D)		理学部7号館	事前	1985.2.1～10.8	750	羽生	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 理学部7号館地点』
本郷	6	1986	－		文京区湯島4丁目～弥生2丁目地先間配水管布設替	立会	1986.5.12～7.20	－	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	7	1987	－		新タンデム棟	試掘	1988.2.15～17	28	成瀬・武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	8	1987	－		弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15～16	－	武藤	近世
本郷	9	1989	VMC		農学部家畜病院	事前	1990.1.31～3.14	1040	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	10	1990	HG		医学部附属病院外来診療棟	事前	1990.6.27～1991.2.21	5500	成瀬・堀内・武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点』
本郷	11	1991	－		農学部ガラス室	試掘	1991.8.12～13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	12	1992	FAL		農学部図書館	事前	1993.3.9～3.25	408	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	13	1992	FA792		農学部7号館I期	事前	1992.10.6～11.16	1170	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	14	1992	K14(工14)		工学部14号館	事前	1992.11.26～1993.2.23	1785	成瀬・堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 工学部14号館地点』
本郷	15	1992	YS		薬学部南館[薬学部新館]	事前	1992.10.21～12.18	1300	堀内・寺島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書16 薬学部南館地点・薬学部資料館地点』
本郷	16	1993	FA793		農学部7号館II期	事前	1993.11.3～26	1000	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	17	1993	FE1		工学部1号館	事前	1993.12.6～1994.2.10	616	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点』
本郷	18	1993	SK		教育学部総合研究棟	事前	1993.11.18～12.28	1007	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
本郷	19	1993	HN		看護職員等宿舎1号棟[看護婦宿舎]	事前	1993.8.4～1994.1.17	746	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15 医学部附属病院 看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(1)』
本郷	20	1993	TUM		総合研究博物館新館	事前	1994.2.14～4.8	600	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書11 総合研究博物館新館地点』
本郷	21	1993	MRI		臨床試験棟[MRI-CT棟]	事前	1994.1.18～3.12	400	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15 医学部附属病院 看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(1)』
本郷	22	1994	HF		山上会館龍岡門別館	事前	1994.8.17～10.17	593	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	23	1994	HW(病棟)		医学部附属病院入院棟A	事前	1994.4.21～11.16、1995.1.31～1996.6.6	6096	成瀬・原・鮫島・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	24	1994	HIKN(医研)		医学部教育研究棟	事前	1994.11.17～1995.4.28、1997.3.10～4.25、1998.11.2～12.25、2002.9.3～12.25	2901	堀内・鮫島・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書14 医学部研教育究棟地点』
本郷	25	1994	HND		医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場	事前	1995.1.30～3.3	45	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	26	1994	－		法文十字路外灯	立会	1994.9.5	－	成瀬・鮫島	近世
本郷	27	1994	－		理学部1号館	立会	1994.10.3～18	－	寺島	遺構・遺物なし
本郷	28	1995	FPS		薬学部資料館	事前	1995.7.24～9.1	540	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書16 薬学部南館地点・薬学部資料館地点』
本郷	29	1995	ACC		情報基盤センター変電室1	事前	1995.7.18～31	78	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	30	1995	AFC		工学部風工学実験室支障ケーブル地点	事前	1995.8.22～9.22	63	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	31	1995	－		ATMネットワーク施設整備	立会	1995.11.20～24	－	武藤・堀内・鮫島・原	近世
本郷	32	1994	－		医学部附属病院看護師宿舎電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2	－	原	遺構・遺物なし
本郷	33	1996	EQL		地震研テレメタリング地震観測施設	事前	1996.4.15～5.2	360	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	34	1996	－		野球グランド	立会	1996	－	寺島	遺構・遺物なし
本郷	35	1993	－		経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28、1994.5.14	－	成瀬	近世
本郷	36	1993	－		農学部ガス管埋設	立会	1993.10.15	－	成瀬	近世
本郷	37	1994	－		屋外環境整備等　龍岡門～附属病院	立会	1994.10.13	－	成瀬・原	近世
本郷	38	1994	－		医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	39	1994	－		史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10	－	成瀬	近世
本郷	40	1995	AFL		工学部風工学実験室	事前	1996.1.22～3.7	252	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	41	1996	IML	インテリジェント・モデリング・ラボラトリー	事前	1996.4.15～6.20	626	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
本郷	42	1996	－	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4	－	成瀬	近世
本郷	43	1996	HWK1	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.12～5.18	20	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	44	1996	HWK2	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.27 ～6.27	102	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	45	1996	HWK3	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.3～6.20	184	大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	46	1994	－	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24	－	成瀬	近世
本郷	47	1996	HWK4	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.24～6.28	5	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	48	1996	HNⅡ	看護職員等宿舎3号棟[看護婦宿舎Ⅱ期]	事前	1996.11.5～1997.1.31	525	原・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15 医学部附属病院 看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(1)』
本郷	49	1997	－	外灯整備1	立会	1997.4.13～30	－	原	近世
本郷	50	1997	－	外灯整備2	立会	1997.4.13～30	－	原	近世
本郷	51	1997	－	外灯整備3	立会	1997.4.13～30	－	原	近世
本郷	52	1997	－	農学部(21世紀館)木質ホール	試掘	1997.7.14～18	50	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	53	1998	AFⅣ	工学部風環境シミュレーション風洞実験室	事前	1999.1.7～25	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	54	1999	HES99	総合研究棟[文・経・教・社研]	事前	1999.5.24～11.2	1000	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	55	1999	HHC299(2中)	医学部附属病院第2中央診療棟	事前	1999.10.12～2000. 2.25、2001.7.23～2002.12.19	4017	成瀬・原・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	56	1999	－	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16～17	16	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	57	1999	－	環境安全センター	立会	2000.1.17	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	YM	医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期	事前	2000.2.5～3.31	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12 医学部附属病院受変電設備棟地点』
本郷	59	2000	KK	工学部基幹整備共同溝	事前	2000.7.3～ 7.12、10.11～10.14、2001. 2.21～ 2.28	900	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	60	2000	HWK6	医学部附属病院基幹整備外構施設等	事前	2000.9.21～11.14	200	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	61	2001	TS	工学部武田先端知ビル	事前	2001.6.4～8.7、2001.11.28～12.28	740	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	62	2001	NSK01	農学部生命科学総合研究棟	事前	2001.9.21～10.19	1800	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	63	2001	－	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5～6	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	64	2001	－	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7	－	成瀬	近世
本郷	65	2002	LS03	法学系総合研究棟	事前	2003.2.17～4.18	946	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66－1	2002	YGS (YGS02)	薬学系総合研究棟[薬学系総合研究棟1期]	事前	2002.8.1～2003.2.28	1260	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
	66－2	2004	YGS (YGS04)	薬学系総合研究棟[薬学系総合研究棟2期]		2004.7.26～8.4、2004.11.17～2005.2.4	540		『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	67	2002	－	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9～17	32	堀内	縄文・弥生・古墳・近世・近代
本郷	68	2002	INC	インキュベーション施設	事前	2003.3.6～6.7	1051	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	69	2002	－	地震研仮設建物	立会	2002.5.14～16	－	堀内	遺構・遺物なし
本郷	70	2002	－	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28	－	堀内	遺構・遺物なし
本郷	71	2004	HEQ04	地震研究所総合研究棟	事前	2004.8.30～2005.2.28	1474	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	72	2004	SC1	理学部1号館前	事前	2004.11.29～12.3	32	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	73	2004	－	クリニカルリサーチセンターA棟I期[疾患生命研究センター]	試掘	2004.11.29～12.1	24	成瀬	古墳・近世
本郷	74	2008	HHN308	医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期	事前	2008.4.1～8.1	550	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	75	2005	KOS05	工学系総合研究棟立坑	事前	2005.9.13～14	17	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	76	2005	HVP06	ベンチャープラザ	事前	2006.3.6～5.16	760	追川・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	77	2005	－	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5	大成	近世
本郷	78	2006	HJF06	情報学環・福武ホール	事前	2006.6.5～12.8、2007.2.5～23	1766	大成・成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	79	2006	－	農学部コイトトロン温室	立会	2007.1.16	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	80	2006	－	工学部もの作り実験工房	立会	2007.2.22	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	81	2007	HEA07	経済学研究科学術交流棟	事前	2008.3.17～7.11、9.11～24、2009.2.2～10	451	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	82	2007	HKM07	懐徳門	事前	2007.6.20～7.20	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	83	2007	－	向ヶ丘ファカルティハウス	試掘	2007.10.22～25	50	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	84	1984	NK84	農学部共同溝	事前	1984.7.9～23	50	今村啓爾	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	85	2007	－	薬学部東法面階段設置	立会	2008.3.14	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	86	2008	－	雨水管改修	立会	2009.2.2～16	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	87	2008	HTG08	東京都下水道	事前	2008.12.7～12.25、2009.11.27～12.8	39	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	88－1	2008	－	耐震対策事業ガス管改修	立会	2008.11.19、11.20	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
	88－2	2009				2009.5.11～13、15、23、31、6.18、8.27	－		『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	89	2008	－	弥生地区屋外ガス配管改修	立会	2008.11.25～12.17	193	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	90	2009	－	薬学部研究実験棟	試掘	2009.4.16	10	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	91	2009	HHP09	医学部附属病院立体駐車場	事前	2009.12.13～2010.2.25	3034	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	92	2009	HGG09	学生支援センター	事前	2009.7.21～7.30	440	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	93	2009	H7I09	伊藤国際学術研究センター	事前	2009.7.30～2010.2.12、5.17～5.31、2011.7.21～26、9.16～10.28	1710	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	94	2009	HNS09	分生研・農学部総合研究棟	事前	2010.1.25～3.31、2010.7.28～8.11	1731	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	95	2009	－	農学生命科学研究科フードサイエンス棟	立会	2009.10.22、11.2	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	96	2009	－	工学部新3号館建替時待避用仮設建物	試掘	2009.12.14～12.17	64	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	97－1	2009	HKS09	基幹整備(流域⑧排水)A区	事前	2010.3.3～3.19	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
	97－2	2010		基幹整備(流域⑧排水)B区		2010.11.27～12.6	42		
本郷	98	2010	－	原子動力実験棟	試掘	2010.4.9	16	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99－1	2010	HLS10(HLS10－1)	法学部3号館増築	事前	2010.7.20～8.23	60	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
	99－2		(HLS10－2)			2011.1.18～26	268	大成	
	99－3	2011	(HLS10－3)			2011.5.16～7.26	406	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	100	2010	HK311	工学部新3号館	事前	2011.1.4～10.11	4595	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	101	2010	HMH10	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大	事前	2010.12.9～2011.1.26	30	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	102	2010	－	本郷通り囲障改修	立会	2010.12.2、12.13	－	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	103	2011	HKK11	春日門横教育研究棟	事前	2011.12.1～2012.7.20	949	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8、9所収
本郷	104	2010	－	防犯用ネットワークカメラ賃貸借	立会	2010.7.30～8.11	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	105	2010	－	弥生地区屋外ガス配管改修	立会	2010.8.31～9.11	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	106	2010	－	薬学ゲート前舗装改修	立会	2011.2.7、9、15～16、18、21～22	－	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	107	2011	－	総合図書館前クスノキ移植	立会	2011.6.9～15	－	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	108	2011	－	旧原子力センター別館改修	立会	2011.6.22	16	堀内	遺構・遺物なし
本郷	109	2011	－	仮設キュービクル設置	立会	2011.9.1	18	大成	遺構・遺物なし
本郷	110	2011	－	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期	試掘	2011.11.29～12.2	6	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	111	2011	－	総合図書館西側道路構造調査	立会	2011.10.18	4	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	112	2011	－	クリニカルリサーチセンターB棟	試掘	2011.11.29～12.2	25	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	113	2011	HHWB12	医学部附属病院入院棟Ⅱ期	事前	2012.3.1～11.30、2013.8.19～10.3、2014.2.5～2015.2.19	4391	成瀬・香取・小川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	114	2010	－	下水本管改修	立会	2010.6.17、21	－	原	遺構・遺物なし
本郷	115	2012	HTP12	図書館前クスノキ移植	事前	2012.5.7～6.18	60	追川	近世
本郷	116	2011	－	旧原子力研究総合センター別館電気設備	立会	2011.9.20、10.25	－	原	遺構・遺物なし
本郷	117	2011	－	農学部3号館西側舗装改修	試掘	2011.12.14～2012.1.13	14	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	118	2011	－	ガス管改修	試掘	2011.9.5～9.19	18	原	遺構・遺物なし
本郷	119	2011	HNS09	分生研・農学部総合研究棟	事前	2011.7.26～27	7	原	遺物のみ
本郷	120	2011	－	分生研・農学部総合研究棟基幹整備	試掘	2011.9.10～17、11.20～21	9	原	遺構・遺物なし
本郷	121	2012	－	農学部1号館北側舗装改修	立会	2012.7.10～14	2	原	近代
本郷	122	2012	－	伊藤国際舗装改修	立会	2012.7.14	1	原	遺構・遺物なし
本郷	123	2012	－	春日門門扉やりかえ	立会	2012.9.4、10	5	大成	遺構・遺物なし
本郷	124	2012	－	農学生命科学研究科閉鎖系温室	立会	2012.9.26～27	31	原	遺構・遺物なし
本郷	125－1	2012	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期	事前	2012.12.17～2014.9.12	3341	追川・小川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	126	2012	－	原子力別館北側雨水配管改修	立会	2012.12.17～20	21	原	遺構・遺物なし
本郷	127	2012	－	工学部4号館屋外排水管改修	試掘	2012.2.20	10	原	遺構・遺物なし
本郷	128	2012	－	農学部1号館北側他舗装改修	立会	2013.1.21、2.1、20、3.7、11、12、14、15、18、19	2750	原	遺構・遺物なし
本郷	129	2012	－	理学部2号館舗装改修	立会	2012.12.25、26、2013.1.21、2.1、3	1000	原	遺構・遺物なし
本郷	130	2012	－	工学部3号館施設整備(ガス)	事前	2012.11.5、13	－	成瀬・堀内	遺構・遺物なし
本郷	131	2012	－	医学部モニュメント	立会	2013.3.25	11	追川	近代
本郷	132	2013	－	タンデム加速器研究棟北側側溝改修	立会	2013.4.8	16	原	遺構・遺物なし
本郷	133	2013	－	工学部9号館西側舗装改修	立会	2013.4.10	23	原	遺構・遺物なし
本郷	134	2012	－	工学部3号館施設整備(下水他)	事前	2013.3.18、27、4.1、8～10、22、23、30、5.1、9、10、13、14、21～23、6.15、17、18、24～26、28、7.1～3、5	490	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	135	2013	－	農学部水田取設	試掘	2013.6.4、5、7、8、10	101	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	136	2013	－	農学部正門舗装改修	試掘	2013.6.17	3	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	137	2013	－	浅野民間地	試掘	2013.7.18	44	原	遺構・遺物なし
本郷	138	2013	－	工学部3号館施設整備(雨水)	立会	2013.7.22、26、31	41	堀内	近世遺構面確認
本郷	139	2013	－	保育園前歩道植栽	立会	2013.8.4	42	堀内	遺構・遺物なし
本郷	140	2013	－	春日門総合研究棟外構	立会	2013.7.29、31、8.1、5、2014.1.29、2.4	107	大成	近世遺構面確認
本郷	141	2013	－	工学部3号館施設整備(下水2)	立会	2013.8.24	－	堀内	遺構・遺物なし
本郷	142	2013	－	農学部東側外構	試掘	2013.9.10	7	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	143	2013	－	講堂改修	事前	2013.9.26、10.21～25、11.5、11、12.12、13、16、2014.11.11、13～15、18、19、27、28、12.5、9、11、13、15、17	539	原・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	144	2013	－	看護職員等宿舎5号棟擁壁	試掘	2013.9.2、3	13	香取	近世・近代整地層
本郷	145	2013	－	医学部中央総合館前誘導ブロック設置	立会	2013.9.27	－	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	146	2013	HAC13	アカデミックコモンズ	事前	2013.9.10～2014.3.31	1200	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	147	2013	－	国際科学イノベーション総括棟	試掘	2013.7.23～7.26	48	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	148	2013	HIN14	国際科学イノベーション総括棟	事前	2014.1.14～7.23、2014.8.18～8.21	1480	大成・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	149	2013	−	(弥生)テニスコート夜間照明設置	立会	2013.12.20	4	大成	遺構・遺物なし、時期不明硬化面
本郷	150	2013	−	農学部正門舗装改修	立会	2014.1.29、2.3、16～18	510	原	遺構・遺物なし
本郷	151	2013	−	農学生命科学研究科閉鎖系温室	試掘	2014.1.29	18	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	152	2013	−	地震研究所北側囲障改修	試掘	2014.2.13、17、21	40	原	遺構・遺物なし
本郷	153	2014	−	理学部1号館	試掘	2014.5.16、19	21	原・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	154	2013	−	保育園前漏水	立会	2014.1.10、14	1	堀内	遺構・遺物なし
本郷	155	2013	−	懐徳門舗装	立会	2014.1.29、2.5、2.10	277	堀内	遺構・遺物なし
本郷	156	2013	−	博物館AMSラボ電気改修	立会	2014.2.6	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	157	2013	−	第2本部棟外構	立会	2014.2.22～23	4	堀内	遺構・遺物なし
本郷	158	2013	−	街灯整備	立会	2014.3.11～14	46	堀内	遺構・遺物なし
本郷	159	2014	−	弓道場脇フェンス	立会	2014.4.7	5	堀内	遺構・遺物なし
本郷	160	2014	−	文系総合研究棟	試掘	2014.4.9～11	27	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	161	2014	−	懐徳館庭園給水引き込み	立会	2014.4.22	−	原・清水	遺構・遺物なし
本郷	162	2014	−	工学部4号館改修	試掘	2014.6.23、27、7.3、4、10、8.12	47	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	163	2014	−	法文2号館給水管改修	立会	2014.6.4	8	堀内	遺構・遺物なし
本郷	164	2014	−	イノベーション棟現場事務所	立会	2014.6.5	−	追川	遺構・遺物なし
本郷	165	2014	−	弓道場テント基礎移設	立会	2014.7.3	1	清水	遺構・遺物なし
本郷	166	2014	−	農学部門衛所漏水対応	立会	2014.7.15	−	原	遺構・遺物なし
本郷	167	2014	−	安田講堂花壇漏水対応	立会	2014.7.30	1	小川	遺構・遺物なし
本郷	168	2014	−	アカデミックコモンズ 2次調査	事前	2014.8.13～10.31、11.25、12.10、12	475	堀内・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	169	2014	HEK14	文系総合研究棟	事前	2014.10.14～11.5	180	堀内・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	170	2014	−	七徳堂改修外構	立会	2014.11.21、2015.1.13、14	130	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	171	2014	−	図書館横仮設建物建設に伴う舗装石除去	立会	2014.9.4	930	堀内	遺構・遺物なし
本郷	172	2014	−	第二食堂前カーゲート付近舗装改修	立会	2014.11.21	78	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	173	2014	−	医学部附属病院第二中央診療棟前車道バリカー設置	立会	2014.12.19	1	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	174	2014	−	本郷キャンパスバリアフリー関係整備	立会	2014.12.22、2015.1.20、21	169	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	175	2014	−	図書館仮設キュービクル設置	立会	2014.11.26	8	清水	遺構・遺物なし
本郷	176	2014	−	ネットワーク監視カメラ設置	立会	2014.12.2	5	清水	遺構なし、近世磁器1点
本郷	177	2014	−	工学部1号館前広場シダレザクラ移植	試掘	2015.1.6、7	5	香取	近世遺構・遺物
本郷	178	2014	HN614	農学部6号館改修	事前	2015.1.7～9、4.27、28	38	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	179	2014	−	安田講堂前広場の整備	試掘	2015.1.6、7、2.18	405	香取	近現代
本郷	180	2014	−	生物環境ガラス温室	立会	2015.1.16	9	原	遺構・遺物なし
本郷	181	2014	−	農学部グランド門扉改修	立会	2015.1.21、2.3	3	香取	近世
本郷	182	2014	HCRG15	医学部附属病院CRC棟ほか外構	事前	2015.3.16～9.25	162	追川	近世
本郷	183	2014	−	地震研究所北側囲障改修	立会	2015.2.6	153	原	遺構・遺物なし
本郷	184	2014	−	上野英三郎博士とハチ公(仮)台座	立会	2015.2.6	3	原	遺構・遺物なし
本郷	185	2014	−	バス通り誘導ブロック整備	立会	2015.2.20、23、24	25	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	186	2014	−	薬学本館埋設配管	立会	2015.2.23、24	14	小川	遺構・遺物なし
本郷	187	2014	−	工学部船舶運動性能試験水槽埋設配管	立会	2015.3.16	5	清水	遺構・遺物なし
本郷	188	2015	−	総合研究棟(理学系)	試掘	2015.4.7、9、10	36	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	189	2015	−	上野英三郎博士とハチ公(仮)解説板	立会	2015.5.11	5	原	遺構・遺物なし
本郷	190	2015	−	農学部正門守衛所	立会	2015.5.1	1	原	遺構・遺物なし
本郷	191	2015	−	情報学環・福武ホール漏水補修	立会	2015.5.2	3	清水	遺構なし、近世磁器1点
本郷	192	2015	−	安田講堂監視カメラ	立会	2015.5.25	52	原	遺構・遺物なし
本郷	193	2015	−	中央食堂第二購買部散水栓修理	立会	2015.6.28	0.3	原	遺構・遺物なし
本郷	194	2015	−	理学部1号館新営に伴う支障排水管盛替	立会	2015.6.25	4	原	遺構・遺物なし
本郷	195	2015	−	農学部東別館漏水補修	立会	2015.5.4	1	香取	遺構・遺物なし
本郷	196	2015	−	総合研究博物館裏街灯取替	立会	2015.6.8	2	小川	遺構・遺物なし
本郷	197	2015	−	文系総合研究棟仮設電気	立会	2015.7.15～7.17	2	平石・香取	遺構・遺物なし
本郷	198	2015	HR115	理学部1号館	事前	2015.8.17～12.9	530	原・小川・平石	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	199	2015	−	御殿下グラウンド北側チェーンゲート取設	立会	2015.8.20、21	9	原	遺構・遺物なし
本郷	200	2015	−	農学部1号館西側外構	立会	2015.9.1、15	20	原	遺構・遺物なし
本郷	201	2015	−	浅野街灯整備	試掘	2015.9.7	2	香取	遺構・遺物なし
本郷	202	2015	−	安田講堂マンホール	立会	2015.11.27	1	原	遺構・遺物なし
本郷	203	2015	−	国際科学イノベーション総括棟外構	立会	2015.12.14	82	大成	遺構・遺物なし
本郷	204	2015	−	農学部漏水	立会	2016.1.12	0.6	香取	遺構・遺物なし
本郷	205	2015	−	理学系総合研究棟仮設電気	立会	2016.1.19	0.6	小川	遺構・遺物なし
本郷	206	2015	HR115	理学部1号館外構	事前	2016.1.19、22、25、28、2016.2.12、16、17、19	175	小川・平石	『東京大学構内遺跡調査研究年報11』所収
本郷	207	2015	HMK16	各門サイン設置	事前	2016.2.1～3	8	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報11』所収
本郷	208	2015	−	工学部3号館外周道路舗装部補修	立会	2016.2.19	36	平石	遺構・遺物なし
本郷	209	2015	−	医学部総合中央館西側駐車場改修	立会	2016.3.4	218	平石	遺構・遺物なし
本郷	210	2015	−	環境安全研究センター漏水	立会	2016.2.10	0.5	堀内	遺構・遺物なし
本郷	211	2015	−	附属図書館(教育学部等)改修	立会	2016.1.6、9、2.15、16、2.29～3.2	81	清水	遺構なし・近世陶器数点
本郷	212	2015	−	安田講堂南側舗装改修	立会	2016.3.1、8	38	香取	遺構・遺物なし

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	213	2015	−	理学部2号館前生垣	立会	2016.3.14	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	214	2016	−	低温センターA004室アース	立会	2016.4.19	3	原	遺構・遺物なし
本郷	215	2016	−	第一研究棟西側圃場整備	立会	2016.6.3	21	平石	遺構・遺物なし
本郷	125−2	2015	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（13区）	事前	2016.3.28～4.14	9	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	125−3	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期 （ガス配管）	立会	2016.4.26	31	追川	遺構・遺物なし
本郷	125−4	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（14区）	事前	2016.8.26～9.2	124	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	125−5	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期 （ガス配管竪坑）	立会	2016.5.26	0.4	追川	遺構・遺物なし
本郷	125−6	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期（15区）	事前	2016.5.19	23	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	216	2016	−	教育学部機械設備改修	立会	2016.7.4	7	小川	遺構・遺物なし
本郷	217	2016	−	附属図書館（教育学部等）改修電気設備	立会	2016.8.29	3	平石	遺構・遺物なし
本郷	218	2016	−	農学部正門ステンレスポール更新	立会	2016.10.19	0.2	原	遺構・遺物なし
本郷	219	2016	−	構内各所サイン設置	立会	2016.11.16～19、21	10	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	220	2016	−	育徳園内倒木樹木の撤去作業	立会	2016.10.22	1	原	遺構・遺物なし
本郷	221	2016	−	安田講堂北側誘導ブロック	立会	2017.1.12、13	8	原	遺構・遺物なし
本郷	222	2016	−	附属図書館（教育学部等）改修機械設備	立会	2017.1.11	7	原	遺構・遺物なし
本郷	223	2016	−	朱舜水碑現設置場所	立会	2017.2.7、8、16	86	原	遺構・遺物なし
本郷	224	2016	−	朱舜水碑移転先	立会	2017.2.17、20、25	32	原	遺構・遺物なし
本郷	225	2016	−	医学部附属病院内駐輪場	立会	2017.2.13	10	追川	遺構・遺物なし
本郷	226	2016	−	附属図書館ダムウェーター新設	立会	2017.1.24	16	堀内	遺構・遺物なし
本郷	227	2016	−	正門整備	立会	2017.3.9、13、15、16	209	原	遺構・遺物なし
本郷	228	2016	−	医学部本館脇樹木	立会	2017.2.23	0.2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	229	2016	−	農学部サッカー部室	立会	2017.3.1、4.17、8.29	109	堀内・大成	遺構・遺物なし
本郷	230	2016	−	育徳園柵修理	立会	2017.3.22～24、28、30	(35)	原	遺構・遺物なし
本郷	125−7	2017	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期 （16区・17区）	事前	2017.4.1～7.28	3621	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
本郷	231	2017	HR115	理学部1号館南側外構	事前	2017.5.10、29	7	原	遺構・遺物なし
本郷	232	2017	−	動物センター前土質調査	立会	2017.4.25	1	原	遺構・遺物なし
本郷	233	2017	−	アカデミックコモンズ雨水排水管	立会	2017.4.12・13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	234	2017	−	アカデミックコモンズ補給水管盛替え	立会	2017.5.25	11	大成	遺構・遺物なし
本郷	235	2017	HNY	看護職員等宿舎5号棟擁壁	事前	2017.8.4～20	53	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
本郷	236	2017	−	野球場ブルペン改修	立会	2017.7.14.15.22.23	376	原	遺構・遺物なし
本郷	237	2017	−	理学部1号館ガス管・配水管	立会	2017.8.23.29	15	原	遺構・遺物なし
本郷	238	2016	−	第一研究棟中庭排水切り替え	立会	2016.5.19、20	13	追川	近世
本郷	239	2017	−	御殿下グラウンド西側舗装改修	立会	2017.9.16	5	清水	遺構・遺物なし
本郷	240	2017	−	工学部6号館北立ち枯れ樹木伐採	立会	2017.9.19	8	堀内	遺構・遺物なし
本郷	241	2017	−	列品館西側舗装改修	立会	2017.9.20	13	原	遺構・遺物なし
本郷	242	2017	−	入院棟B棟東側道路改修	立会	2017.9.14	500	追川	遺構・遺物なし
本郷	243	2017	−	中央食堂その他改修（EV新設）	立会	2017.12.4	12	原	遺構・遺物なし
本郷	244	2017	HKO18	基幹・環境整備（言問い通り横断管路）	事前	2018.3.30～4.2、5、12、16、5.10、16、17、12.17	203	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
本郷	245	2017	HCRB17	クリニカルリサーチセンターB棟	事前	2018.1.15～4.4	93	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
本郷	246	2017	−	育徳園石組補修	立会	2017.12.6	0.6	原	近代（裏込から磁器、レンガ）
本郷	247	2017	−	中央食堂改修機械設備	立会	2018.1.18、19	26	原	遺構・遺物なし
本郷	248	2017	−	農学部グラウンド防球フェンス新設	立会	2018.1.16	5	堀内	遺構・遺物なし
本郷	249	2017	−	医学部総合中央館1階改修・既設管接続	立会	2018.2.15	4	大成	遺構・遺物なし
本郷	250	2017	−	山上会館龍岡門別館東側及び広報センター東側実生木伐採・抜根作業	立会	2018.3.20	8	香取	遺構・遺物なし
本郷	251	2017	−	医学部総合中央館中庭照明改修	立会	2018.3.22	1	香取	遺構・遺物なし
本郷	252	2017	−	旧東大出版会北側植栽整備	立会	2018.3.23	3	堀内	遺構・遺物なし
本郷	253	2017	−	外来診療棟西側配管	立会	2018.3.23～24	6	小川	遺構・遺物なし
本郷	254	2017	−	育徳園低木撤去植替え	立会	2018.3.27	50	大成	遺構・遺物なし
本郷	255	2018	−	外来診療棟南側こいのぼり基礎	立会	2018.4.6	0.6	小川	遺構・遺物なし
本郷	256	2018	−	医学部附属病院バス停渡り配管	立会	2018.5.2	10	小川	遺構・遺物なし
本郷	257	2018	−	学生第二食堂横広場整備	立会	2018.5.10	15	大成	遺構・遺物なし
本郷	258	2018	−	学生第二食堂前外構	立会	2018.6.22	506	大成	遺構・遺物なし
本郷	259	2018	−	医学部附属病院南研究棟外構	立会	2018.7.23	53	追川	遺構・遺物なし
本郷	260	2018	−	農学部7号館西側道路漏水	立会	2018.10.9	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	261	2018	−	工学部11号館南側ハンドホール補修	立会	2018.10.22	0.2	小川	遺構・遺物なし
本郷	262	2018	−	プレハブ研究A棟案内表示板設置	立会	2018.10.25	0.5	小川	遺構・遺物なし
本郷	263	2018	−	育徳園倒木	立会	2018.10.01、16、17	7	原	近代盛土、遺物なし
本郷	264	2018	−	向ヶ丘ファカルティハウス中庭整備	立会	2018.11.5	96	香取	遺構・遺物なし
本郷	265	2018	−	最先端臨床研究センター西側喫煙所衝立設置	立会	2018.121	3	香取	遺構・遺物なし
本郷	266	2018	HKD18	基幹・環境整備（電気管路）	事前	2018.12.17～21、 2019.1.28～2.5	57	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	267	2018	−	東御長屋井戸跡サイン板設置	立会	2019.1.24	0.5	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	268	2018	−	育徳園路等補修	立会	2019.1.21、22、23、25、28、29、30、31、2.1	−	原	池底確認・遺物なし。一段目 護岸杭列園路側10.5m、二段目 護岸杭列池側21m
本郷	269	2018	−	農学部ファカルティハウス外構ブロック塀補強	立会	2019 .1.31、2.1	9	原	遺構・遺物なし
本郷	270	2018	−	野球場防球ネット増設	立会	2019.2.20、21、27	6	香取	遺構・遺物なし

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	271	2018	−	東洋文化研究所北側外構スロープ手摺撤去	立会	2019.2.28	1	小川	遺構・遺物なし
本郷	272	2018	−	野球場フェンス補修	立会	2019.3.6	2	原	遺構・遺物なし
本郷	273	2018	−	第二食堂前植栽帯改修	立会	2019.3.8	105	小川	遺構・遺物なし
本郷	274	2018	−	本郷通り囲障改修	立会	2019.3.20	8	堀内	遺構・遺物なし
本郷	275	2019	−	野球場正面入口前マンホール嵩下げ	立会	2019.4.24	3	香取	遺構・遺物なし
本郷	276	2019	−	言問通り横断管路	試掘	2019.7.8～8.2	112	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
本郷	277	2019	HWK19	医学部附属病院基幹整備共同溝	事前	2019.8.5～2021.2.22	281	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	278	2019	−	農学生命科学図書館他ブロック塀改修	立会	2019.8.2	1	原	遺構・遺物なし
本郷	279	2019	−	第2本部棟系統排水管改修	立会	2019.8.3	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	280	2019	−	仮設プレハブ取説	立会	2019.08.23、24、26	16	香取	遺構・遺物なし
本郷	281	2019	−	工学部列品館耐震	立会	2019.10.08	31	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
本郷	282	2019	−	安田講堂サイン設置	立会	2019.10.18	1	堀内	遺構・遺物なし
本郷	283	2019	−	給水管改修	立会	2019.12.9	352	原・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
本郷	284	2019	−	医学部5号館改修(その1) 同(その2)	立会	2019.12.5 2020.3.2、16	12 24	堀内	遺構・遺物なし(レンガ基礎確認)
本郷	285	2019	−	医学部2号館本館耐震改修	立会	2019.12.10	2	追川	遺構・遺物なし
本郷	286	2019	−	農学部1号館耐震改修工事に伴う仮設建物	試掘	2019.12.18、19、2020.2.25	361	大成	A～D区あり。A区調査必要なし、B区立会、 C・D区試掘遺構なし(震災に伴う灰層にパックされたレンガ基礎確認)
本郷	287	2019	−	医学部3号館南西側高圧ケーブル敷設	立会	2020.1.22、29	40	大成	遺構・遺物なし
本郷	288	2019	HYK20	野球場北側擁壁改修	試掘	2020.1.9～11.9	387	堀内・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	289	2019	−	理学部三角広場改修	立会	2020.2.3、2.12～13、3.2～3、3.16、4.1、4.11、4.16、5.22、6.10、6.26、7.14、8.20	1341	小川・堀内	遺構・遺物なし
本郷	290	2020	−	総合研究博物館改修機械設備	立会	2020.5.13	3	大成	遺構・遺物なし
本郷	291	2010	−	農学部3・5号館間	立会	2010.6.10	16	原	遺構・遺物なし
本郷	292	2010	−	弥生門前掘削	立会	2010.6.11	30	原	遺構・遺物なし
本郷	293	2020	−	農学部1号館電気	立会	2020.5.11	39	堀内	遺構・遺物なし
本郷	294	2019	−	附属図書館改修Ⅳ期	立会	2020.3.26、7.20	62	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	295	2019	−	七徳堂東側樹木樹勢回復作業	立会	2019.3.26	5	大成	遺構・遺物なし
本郷	296	2019	−	浅野地区旧宿舎付近車止め設置	立会	2020.3.30	0.4	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	297	2020	HOKⅡ20A HOKⅡ20Y	基幹・環境整備(言問通り横断管路)Ⅱ期	事前	2020.4.7、5.7～7.31	369	大成・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	298	2020	HA120	農学部1号館機械設備	試掘	2020.6.8～6.16	148	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	299	2020	−	共同溝東側陥没	立会	2020.9.3～7	4	追川	遺構・遺物なし
本郷	300	2020	−	工学部5号館改修電気設備	立会	2020.09.14	4	小川	遺構・遺物なし
本郷	301	2020	−	赤門前銀杏根系調査	立会	2020.10.6	5	香取	遺構なし・近世、近代
本郷	302	2020	−	農学部1号館改修(設備)	立会	2020.10.20	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	303	2020	−	弥生キャンパス消火栓改修	立会	2020.12.19	5	小川	遺構・遺物なし
本郷	304	2020	−	工学部1号館地下1階部材実験室改修機械設備	立会	2021.12.21	2	大成	遺構・遺物なし
本郷	305	2020	−	中央食堂熱源改修その他	立会	2021.1.26、2.10、4.5	173	小川	遺構・遺物なし
本郷	306	2020	−	情報基盤センターHubサイト移設に伴う通信設備改修	立会	2021.2.12	4	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	307	2020	−	第2期誘導ブロック敷設に伴う雨水桝移設	立会	2021.2.18	2	小川	遺構・遺物なし　※福武ホール前
本郷	308	2020	−	外灯C-5_C-61電源改修	事前	2021.3.12	9	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収

駒場Ⅰ地区調査一覧

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒I	1	1991	−	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒I	2	1993	FGE	教養学部情報教育棟	事前	1993.8.10～10.20	940	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒I	3	1993	−	数理科学研究科棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
駒I	4	1994	−	数理科学研究科棟擁壁	立会	1995.1.20～27	−	武藤	近代
駒I	5	1994	−	数理科学研究科棟関連東電マンホール増設・管路新設	立会	1995.1.24～4.12	−	武藤	縄文・平安
駒I	6	1995	−	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒I	7	1995	−	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒I	8	1995	−	数理科学研究科棟ガス・水道管埋設	立会	1995.5.17～18、6.27～28	−	武藤	遺構・遺物なし
駒I	9	1996	数理	数理科学研究科Ⅱ期棟	事前	1996.12.12～1997.2.6	1160	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
駒I	10	1997	−	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒I	11	1999	−	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒I	12	2000	KL	駒場図書館	事前	2000.7.27～8.30	1778	大成・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
駒I	13	2001	−	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～25	60	堀内	遺物・遺構なし
駒I	14	2001	−	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～26	53	大成	遺物・遺構なし
駒I	15	2005	KCP	コミュニケーションプラザ	事前	2005.4.22～7.21	4327	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒I	16	2003	KGK	国際学術交流棟	事前	2003.5.16～7.9	620	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒I	17	2005	−	教養学部5号館他改修	立会	2005.8.10、17、19	300	大成	遺構・遺物なし
駒I	18	2006	−	教養学部8号館エレベーター敷設	立会	2006.10.20	−	堀内	遺構・遺物なし
駒I	19	2006	−	教養学部ロッカー棟	試掘	2006.11.13～16	21	堀内	遺構・遺物なし

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒I	20	2007	−	初年次活動センター新築	立会	2007.12.20	85	追川	遺構・遺物なし
駒I	21	2009	−	基幹整備(排水)	立会	2010.1.14、21、28	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒I	22	2009	−	理想の教育棟	試掘	2010.2.1～5	220	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒I	23	2011	−	巻藁練習場	立会	2012.1.23	12	成瀬	遺構・遺物なし
駒I	24	2012	−	屋外トイレ	立会	2012.7.23～25	42	堀内	遺構・遺物なし
駒I	25	2012	−	理想の教育棟II期棟	試掘	2012.7.30～8.3	49	堀内	遺構なし・近代遺物あり
駒I	26	2012	−	コミュニケーションプラザ横共同溝埋設	試掘	2012.9.24～27	34	小川	遺構・遺物なし
駒I	27	2012	−	倉庫	立会	2013.2.28	40	香取・堀内	遺構・遺物なし
駒I	28	2014	−	教養学部並木通り根上り対策	立会	2014.9.4、8、10	64	大成	遺構・遺物なし
駒I	29	2014	−	電話交換機設備更新	立会	2014.11.29	7	堀内	遺構・遺物なし
駒I	30	2014	−	教養学部並木通り舗装改修	立会	2015.2.3、12、23、3.10	77	大成	遺構・遺物なし
駒I	31	2015	−	6号館改修に伴う埋設管敷設	立会	2015.7.23	4	小川・平石	遺構・遺物なし
駒I	32	2015	−	正門前排水改修	立会	2015.8.21、25	50	香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
駒I	33	2015	−	並木通り舗装改修(II期)	立会	2016.2.4、15、17、22、3.10、14	824	原	遺構・遺物なし
駒I	34	2016	−	野球場排水改修	立会	2017.2.8、14	121	原	遺構・遺物なし
駒I	35	2016	−	教養学部5号館引込幹線	立会	2017.3.6～8	28	原	遺構・遺物なし
駒I	36	2017	−	並木通り舗装改修(III期)	立会	2018.1.30	481	原	遺構・遺物なし
駒I	37	2017	KKT18	駒場仮設体育館	事前	2018.2.5～16	376	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒I	38	2017	−	駒場体育館	試掘	2018.3.5～3.26	155	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒I	39	2018	−	大隈良典博士ノーベル賞受賞記念碑	立会	2018.4.16	0.4	成瀬	遺構・遺物なし
駒I	40	2018	−	駒場体育館新営に伴う電気配管掘削	立会	2018.5.3～5、15、21、6.6、7、22、25～27、7.26	183	原	遺構・遺物なし
駒I	41	2018	KKT18	駒場仮設体育館外構	立会	2018.6.6、6.8	38	堀内	遺構・遺物なし
駒I	42	2018	KTS18	駒場体育館新営に伴う機械設備切廻	事前	2018.6.28、7.2、3、18	25	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒I	43	2018	KTK18	駒場体育館	事前	2018.7.2～8.27	430	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒I	44	2018	−	7号館西側排水管破損修理	立会	2018.10.18	22	小川	緊急対応。遺構・遺物なし
駒I	45	2018	−	テニスコート夜間照明設置	立会	2018.11.30	36	大成	遺構・遺物なし
駒I	46	2018	−	野外トイレ解体	立会	2018.12.20、21、25、2019.2.4、4.24	90	原	遺構・遺物なし
駒I	47	2018	−	駒場体育館	立会	2019.2.27、3.8、4.5	416	原	遺構・遺物なし
駒I	48	2018	−	第一グランド改修	立会	2019.2.6	1	香取	遺構・遺物なし
駒I	49	2019	−	東京電力ケーブル等撤去	立会	2019.12.6、12、13、18	47	堀内	遺構・遺物なし
駒I	50	2019	−	駒場体育館雨水浸透	立会	2020.2.27	20	堀内	遺構・遺物なし
駒I	51	2019	−	駒場体育館周辺	立会	2020.3.2、4、13	84	堀内	遺構・遺物なし
駒I	52	2019	−	駒場Iブロック塀対策	立会	2020.1.31、2.6、17、27	86	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
駒I	53	2020	−	美術博物館学際交流展示室空調設備改修	立会	2020.6.2、7.13、9.3、9.14	17	小川	遺構・遺物なし
駒I	54	2020	−	トレーニング体育館下の土壌汚染調査	立会	2020.9.3、4	0.3	香取	遺構・遺物なし

駒場II地区調査一覧

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒II	1	1996	−	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒II	2	1996	−	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒II	3	1996	−	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒II	4	1998	−	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒II	5	1998	−	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
駒II	6	1998	−	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13～15	50	大成	遺構・遺物なし
駒II	7	2002	−	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
駒II	8	2003	−	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし
駒II	9	2008	−	保育施設	立会	2008.7.9～14	−	大成	遺構・遺物なし

白山構内調査一覧

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
白山	1	1991	−	理学部附属植物園研究温室I期(原町遺跡)	試掘	1991.7.24～25	5	武藤	縄文
白山	2	1992	KO	理学部附属植物園研究温室II期(原町遺跡)	事前	1992.5.25～6.6	200	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
白山	3	2000	KI	総合研究博物館小石川分館増築	事前	2000.11.27～12.4	70	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
白山	4	2002	KNK	農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室	事前	2002.9.24～10.7	91	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	5	2007	BGY07	理学系研究科附属植物園・医学部創設150周年記念(小石川養生所復元)建物	試掘	2007.9.3～4	43	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
白山	6	2010	KBG10	理学系研究科附属植物園本園・下水・電源ケーブル埋設枡・埋設溝	事前	2010.9.6～15	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
白山	7	2010	−	理学系研究科附属植物園本園・旧小石川養生所井戸柵改修	立会	2011.1.17	−	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	8	2011	−	農学生命科学研究科小石川樹木園・万年塀改修	立会	2011.4.1	30	成瀬	遺構・遺物なし
白山	9	2016	B-KSH-H28	国指定名勝及び史跡小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)第1地点	事前	2016.9.24～2018.1.31	2715	成瀬・香取・小川・平石	文京区支援事業 縄文・近世・近代・現代
白山	10	2017	B-KSH-3T	国指定名勝及び史跡小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)第3地点	試掘	2018.1.22～2.2	111	成瀬・香取・小川	文京区支援事業 近世・近代・現代
白山	11	2019	B-KSH-3	国指定名勝及び史跡小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)第3地点	確認	2019.5.21～11.29	526	成瀬・小川	文京区支援事業 縄文・近世・近代・現代

白金台構内調査一覧

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
白金台	1	1992	−	医科学研究所看護師宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	2	1994	−	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	3	1995	−	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	4	2000	−	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟新営	試掘	2000.7.5～7	53	追川	江戸
白金台	5	2000	SBS00	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟	事前	2000.10.27～2001.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
白金台	6	2021	−	白金台囲障改修	事前	2020.2.3、6.3、2021.2.1～6.21	582	堀内・香取	近世

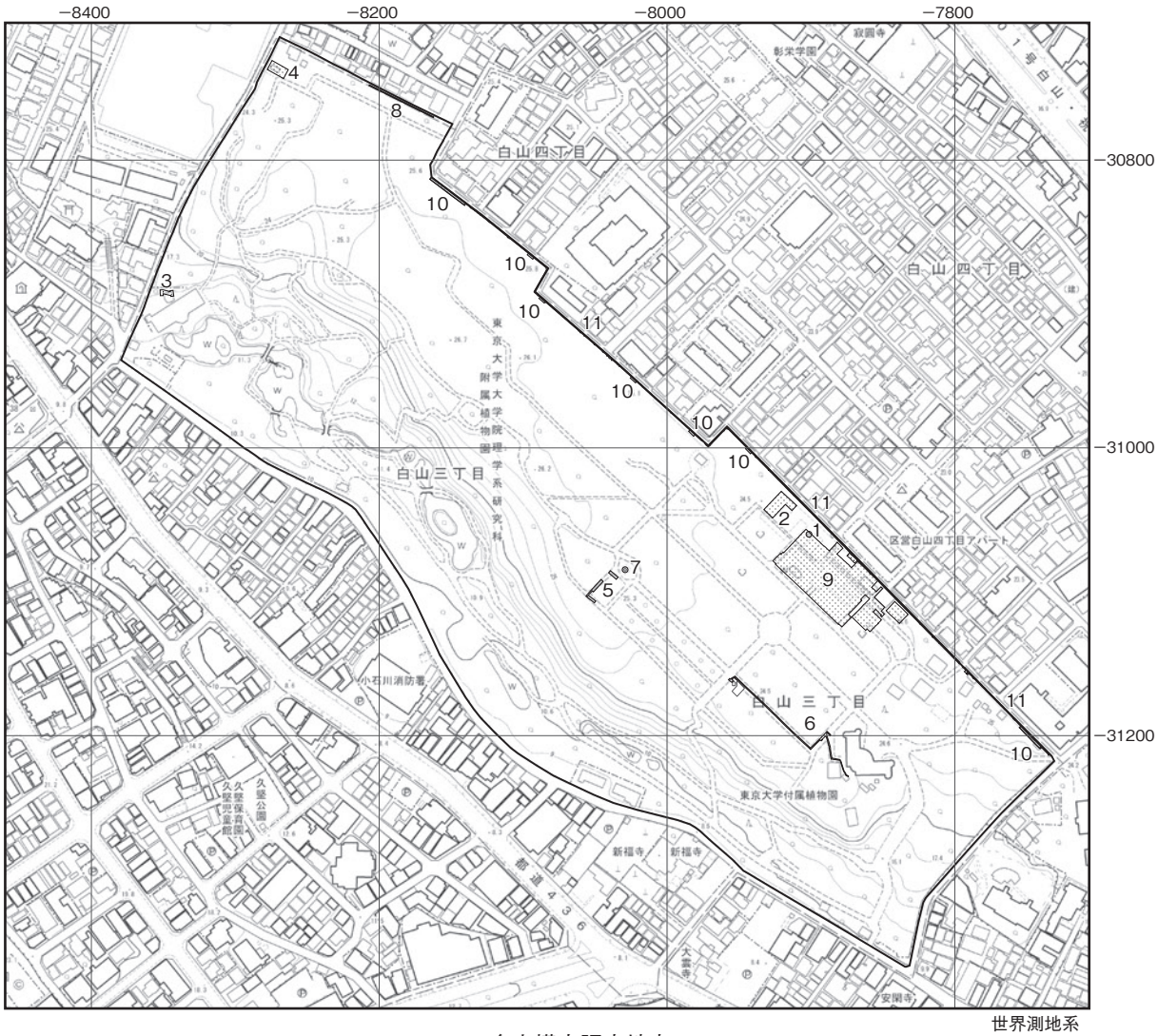
その他の構内調査一覧

構内	行政区	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
他	文京区	1991	−	追分学寮	試掘	1991.8.23～24	16	成瀬	近世
他	豊島区	1991	−	豊島学寮	試掘	1991.8.26～30	29	武藤	遺構・遺物なし
他	三鷹市	1991	−	井の頭学寮	試掘	1991.9.30～10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
他	港区	1991	−	白金学寮	試掘	1991.11.25～26	10	武藤	近世
他	三鷹市	1992	三广1	三鷹国際交流会館(長嶋遺跡)I期	事前	1992.6.29～9.19	2100	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
他	三浦市	1992	MMBS	理学部附属臨海実験所新研究棟(新井城)	事前	1992.7.20～9.25	1700	武藤・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	三浦市	1993	−	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設	立会	1993.4.20～23	−	武藤	中世
他	三浦市	1993	−	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築	立会	1993.5.7～8	−	武藤	中世
他	三鷹市	1993	三广2	三鷹国際交流会館(長嶋遺跡)II期	事前	1993.5.28～11.8	3280	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
他	三鷹市	1994	三广3	三鷹国際交流会館(長嶋遺跡)III期	事前	1994.5.13～8.17	1950	堀内・鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
他	千葉市	1994	GMB	検見川運動場体育セミナーハウス(玄藩所遺跡)	事前	1994.7.19～8.21	496	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
他	柏市	1996	−	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28～29	125	武藤	遺構・遺物なし
他	文京区	2007	−	追分国際学生宿舎	事前	2007.12.3～2008.3.25	776	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
他	文京区	2016	メジロ15	目白台国際宿舎	事前	2016.6.17、21、2016.7.20～2017.4.4	9373	大成・小川・平石	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
他	文京区	2018	−	目白台国際宿舎・外構樹木	立会	2018.9.26	15	大成	遺構・遺物なし
他	文京区	2019	−	目白台国際宿舎・外構整備その2	立会	2019.4.3、4、25、5.16	−	大成	遺構・遺物なし

本郷構内調査地点(1)事前調査

本郷構内調査地点(2)試掘・立会調査

−37500
−37700
−37900
−13100
−13300
−13500
−13700
世界測地系
S=1/5000
駒場I地区調査地点



世界測地系
白山構内調査地点　S=1/5000

−39800
−40000
−9600
−9800
−10000
世界測地系
S=1/2500
白金台四丁目
東京大学医科学研究所
附属病院
白金台駅
都道418
都道418号北品
白金台四丁目

白金台構内調査地点

第Ⅰ章　埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2020年度は、本郷構内、駒場Ⅰ地区、白金台構内調査において、以下の通りの調査を室員6名で対応した。

本郷構内では事前調査が3件、試掘調査1件、立会調査11件を実施した。また駒場Ⅰ地区では立会調査2件、白金台構内では事前調査1件を実施した。

事前調査を実施した本郷277医学部附属病院基幹整備共同溝は2019年度からの継続調査である。本郷297基幹環境整備（言問通り横断管路）Ⅱ期では近代基礎遺構や井戸、近世の大形土坑、弥生時代の方形周溝墓の周溝などが検出されている。この周溝は本郷30工学部風工学実験室支障ケーブル地点（『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9浅野地区Ⅰ』）で検出された周溝の一部であることが確認された。白金台6囲障改修地点では、ピット列、厠遺構をはじめ120基以上の遺構が検出された。

本郷構内

＜事前調査＞3件

2019年8月5日～2021年2月22日　本郷277医学部附属病院基幹整備共同溝（担当：追川）

2020年4月7日、5月7日～7月31日　本郷297基幹・環境整備（言問通り横断管路）Ⅱ期（担当：大成・堀内）

2021年3月12日　本郷308外灯C-5, C-61電源改修（担当：追川）

＜試掘調査＞1件

2020年6月8日～6月16日　本郷298農学部1号館機械設備（担当：堀内）

＜立会調査＞11件

2020年5月13日　本郷290総合研究博物館改修機械設備（担当：大成）

2020年5月11日　本郷293農学部1号館電気（担当：堀内）

2020年9月3日～9月7日　本郷299共同溝東側陥没（担当：追川）

2020年9月14日　本郷300工学部5号館改修電気設備（担当：小川）

2020年10月6日　本郷301赤門前銀杏根系調査（担当：香取）

2020年10月20日　本郷302農学部1号館改修（設備）（担当：堀内）

2020年12月19日　本郷303弥生キャンパス消火栓改修（担当：小川）

2020年12月21日　本郷304工学部1号館地下1階部材実験室改修機械設備（担当：大成）

2021年1月26日、2月10日、4月5日　本郷305中央食堂熱源改修その他（担当：小川）

2021年2月12日　本郷306情報基盤センターHubサイト移設に伴う通信設備改修（担当：成瀬）

2021年2月18日　本郷307第2期誘導ブロック敷設に伴う雨水枡移設（担当：小川）

駒場Ⅰ地区

＜立会調査＞2件

2020年6月2日、7月13日、9月3日、9月14日　駒Ⅰ53美術博物館学際交流展示室空調設備改修（担当：小川）

2020年9月3日、4日　駒Ⅰ54トレーニング体育館下の土壌汚染調査（担当：香取）

白金台構内

＜事前調査＞1件

2020年2月3日、6月3日、2021年2月1日～6月21日　白金台6囲障改修（担当：香取、2019年度から継続）

第1節　本郷構内の事前調査

1. 本郷277　医学部附属病院基幹整備共同溝地点

所 在 地　東京都文京区本郷7-3-1 東京大学本郷構内（文京区No.47・本郷台遺跡群）
調査期間　2019年8月5日～2021年2月22日
調査面積　281㎡
調査担当　追川　吉生（東京大学埋蔵文化財調査室）

1. 調査の経緯と経過

東京大学医学部附属病院では、災害時の病院インフラ機能強化を目的とした基幹整備の一環として、大学内の既存共同溝に接続する新たな共同溝の敷設を計画した。計画された共同溝は、訪問者用駐車場入口の西側附近から中央棟東の北側までの区間であり、インフラはそこから入院棟B方向へ引き込むものとされた（1・2図）。

工事予定地周辺では、立体駐車場地点（構内調査地点91番、以下同）、クリニカルリサーチセンター（CRC）地点（125番）、国際科学イノベーション総括棟地点（148番）などで調査が既に行われている（1図）。上記の計画では、共同溝本体についてはシールド工法によって工事が進められるため、その掘削深度は遺跡の遺存深度よりも深い。しかし、共同溝両端に設けられる2ヶ所の立坑と、共同溝から病院へと配管を引き込む部分の掘削工事では、周辺地点の調査成果から遺跡が良好に遺存しており、掘削工事によって遺跡が破壊されることが推測された。そこで上記3箇所を中心に、工事の進捗に伴い掘削の必要が生じた場所についても適宜事前調査を実施することとした。

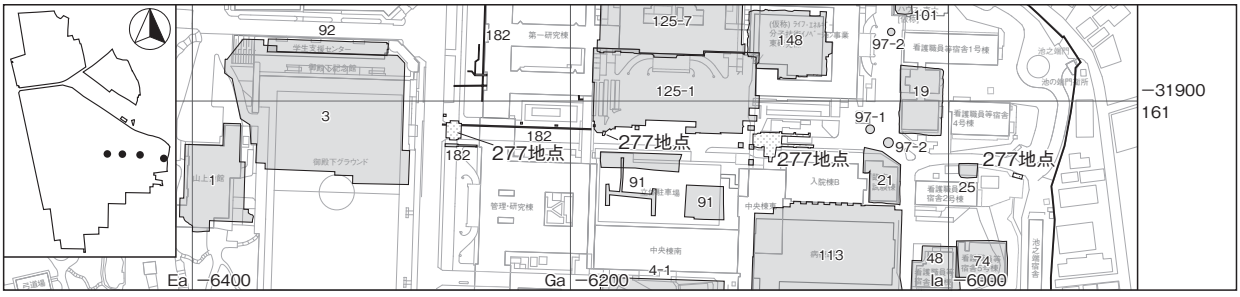
2. 調査の概要

本地点では最終的に7ヶ所の調査区について、発掘調査を実施した。1区および2区は共同溝の東西両端に設けた立坑の掘削工事に対応した調査区である（東側が1区、西側が2区）。3区は共同溝から病院施設へと引き込む配管の設置に伴う調査区である。当初は共同溝から入院棟Bまでの南北30m以上にわたる調査区として調査計画を立案したが、その後の工事計画の変更に伴い、東側の立坑（1区）に接する南北8mの範囲に縮小した（2図）。

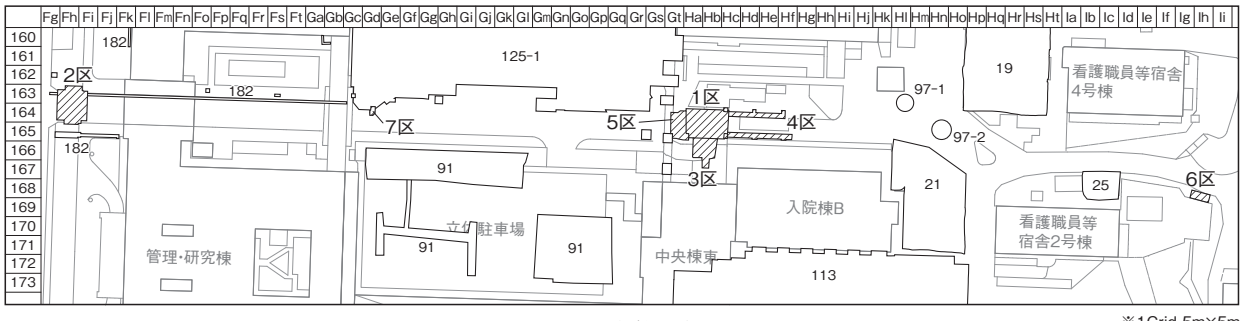
4区は東側の立坑（1区）に建設機械を設置するための掘削に伴う調査である。調査区の大部分は遺構確認面よりも浅い掘削だったが、1区に隣接した部分の掘削のみ遺構確認面に到達し、礎石を一基検出した。

5区は1区西側にひろがっていた汚染土壌の除去に伴う発掘調査である。遺構・遺物は見られなかった。

6区は電気設備のボックスカルバートを地中に埋設す



1図　調査地点位置図



※1Grid 5m×5m

2図　調査箇所位置図

る工事に伴う発掘調査である。本地点で最も東側に位置する調査区で、本郷台から根津谷へ向かう傾斜地に位置している。そのため盛土層が厚く、近代の道路面を確認したところで調査を終了した。

7区は推進工事の機械掘削を進める上で支障となった地中障害物を撤去するのに伴う調査である。掘削範囲はCRC地点の一部を含み、調査対象となる面積は狭小だったが、2基の遺構を検出した。遺物は出土していない。

東西300mの範囲に点在する調査区のうち、最も東側に位置する6区は、本郷台から根津谷へと向かう傾斜地に位置している。それ以外の調査区は、本郷台（M2面）に立地している。

医学部附属病院の敷地は、江戸時代には加賀藩、大聖寺藩、富山藩、高田藩の大名屋敷と、講安寺の境内を含んでいる。そのうちCRC地点では、加賀藩邸と富山藩邸の屋敷境を検出している。共同溝はこの屋敷境遺構の20m南側に敷設されているが、当該箇所は推進工区にあたるため調査の対象外となっている。しかしCRC地点の調査成果を踏まえれば、本地点2区のみが加賀藩邸内に含まれ、他の調査区は富山藩邸内にあたると考えられる。

3. 調査の結果

1区・3区

縄文時代～古墳時代

縄文時代から古墳時代の竪穴住居址を少なくとも3基検出した（3図）。SI1037は住居址の南西隅のみを検出した。硬化面の残りは部分的で、住居址の溝の状況から複数基の住居が切り合っていることが推測できるが、江戸時代の遺構によって壊されていることに加え、調査区の四隅に設置せざるを得なかった火打ち・腹起しが障害となり、切り合い関係を明確にすることができなかった。土器は縄文時代から古墳時代に帰属するものだが、いずれも破片である（3図のドット）。

SI1054は弥生土器が1区側の住居址北端から出土した。3区側では後述するように大規模廃棄土坑が複数基切り合っており、これらによってSI1054の大部分は破壊されていた。

江戸時代

1区からは地下室3基、土坑16基、便所1基、礎石4基、溝7基、柱穴32基など75基の遺構を検出した。3区では地下室1基、土坑20基、柱穴10基など37基の遺構を検出した（4図、9図、10図）。調査範囲は東西8m、南北最大15m（1区・3区を合わせて）と狭小だが、遺構の分布状況は南北で大きく異なっている。

1区の中央付近から北側では、道路、溝、地下室などを検出した。調査区北端に東西方向に延びる溝SD1036がある。東側の立ち上がりは確認したが、西側については調査区外へと続いているため規模は不明である。その北側には硬化面が認められた。その分布範囲は調査区北側を画する工事塀との間に限定されているが、遺構の状況から道と捉えている（SR1032）。

1区では地下室を3基検出したが、いずれもSD1036の南側から調査区中央付近までの範囲に構築されている。SU1030とSU1034はどちらも掘削深度が確認面から3mと深く、形態も類似している。両者の間隔は5mだが、これが詰人空間の長屋にみられるような直線状に列をなす地下室群の一部になるかは不明である。SU1034の南側で検出したSU1045は南北2.3m、東西1.6m、深さ1.3mの地下室である。大量のカワラケと食物残滓のほか、ガラス製品が出土した。地下室の周辺では便所遺構も検出している。

建物遺構や井戸は未検出だが、地下室や便所遺構の存在から、1区北側は地下室の機能していた段階では居住空間だったことが推測できる。

廃棄土坑には多量の陶磁器のほか、食物残滓や炭化物などが多く含まれており、覆土には青灰色粘土も目立つ。1区南側ではこうした覆土を特徴とする不定形の土坑が数基認められるが、3区内では3m以上の深さのある大型土坑（SK3019、SK3020、SK3038）が切り合った状態で検出した（5図、10図）。これらの大型土坑は調査区外に及んでいるため、平面の形状や規模は不詳である。

SK3020の東側で検出したSK3010は地山を掘り込んだ階段部分のみが残り、遺構の大部分はSK3020によって壊されているが、階段を設けていることからこれも本来は深い土坑だったことが推測される。こうした大型土坑以外にもいくつかの土坑が切り合っている状況がみられることから、この一画が藩邸内のゴミ処理場として繰り返し利用されていたことがうかがえる。

1区から3区にかけて、SD1036の東端に揃うようにピット列が並ぶ。3区の廃棄土坑群はこのピット列よりも西側に分布することから、これが廃棄場を区画する塀や柵といった施設と考えられる。

近代

1区でレンガ建物の基礎（SI1001）、土坑、柱穴などを検出した。SI1001は西側に突出した平面形を呈しているが、その西側で硬化面（道路）を検出しているので、建物の北東隅にあたると考えられる（6図、11図）。4区の調査でも現地表面を掘削するとレンガ基礎が確認できたが、これがSI1001と一連の建物になるかは現段階では不明である。南側は3区に続いている（SI3001）。

しかしSI3001は撹乱によって壊されていたため、レンガ建物の南北長についても明らかにすることはできなかった（12図）。SI3001ではレンガが継ぎ足されている状況が確認できるので、ある段階で改築されたことがうかがえる。レンガはイギリス積みで、部分的に有孔レンガも利用されている。

2区

江戸時代

既存共同溝の掘山や近代建物（SI2001）の基礎などによって調査区の1/3は壊されていたが、地下室、土坑、溝、柱穴、井戸など56基の遺構を検出した（7図、13図）。西方向の溝SD2013や南北方向のSD2052は溝の中にピットを伴っており、塀に伴う溝であることがうかがえる。しかし春日通りを軸にしている加賀藩邸の詰人空間としては、これらの溝は軸を異にしているので、加賀藩邸に伴う遺構であるのかは更に検討が必要である。

井戸は調査区北西端でSE2005と、調査区中央付近でSE2038を検出した。SE2005は調査区内で検出したのが遺構北側半分だったことと、これを避けるようにSI2001の基礎がアーチ状に築かれていたことから、安全上の理由で調査は遺構プランを確認するに留めた。SE2038は遺構検出面から1.5mほどで地山を確認した。断ち割りをしたところ、井戸底部の中央付近では垂直方向に土壌の酸化が認められるが、水管の痕跡とは考えにくい形状のため上水井戸の可能性が高い。

近代

レンガ建物（SI2001）の基礎を検出した。検出範囲は南北8.1m、東西6.0mで、東側と南側が調査区外に続いている（8図、14図）。建物の北西隅にあたる。基礎の外縁部はレンガ積みで、その内側には漆喰が貼られており、11基の礎石を検出した。礎石は南北方向に3条の列をなす。東側の列（礎石1～4）と西側の列（礎石8～11）は3.6m間隔で並ぶが、中央の列は東西の礎石列とは位置がずれている。また各礎石の最上段の石も臍穴を有する四角形に成形されたものと、自然石を用いるものとがある。こうした遺構の状況から、SI2001はある時期に改築された可能性がうかがえる。

4. 調査のまとめ

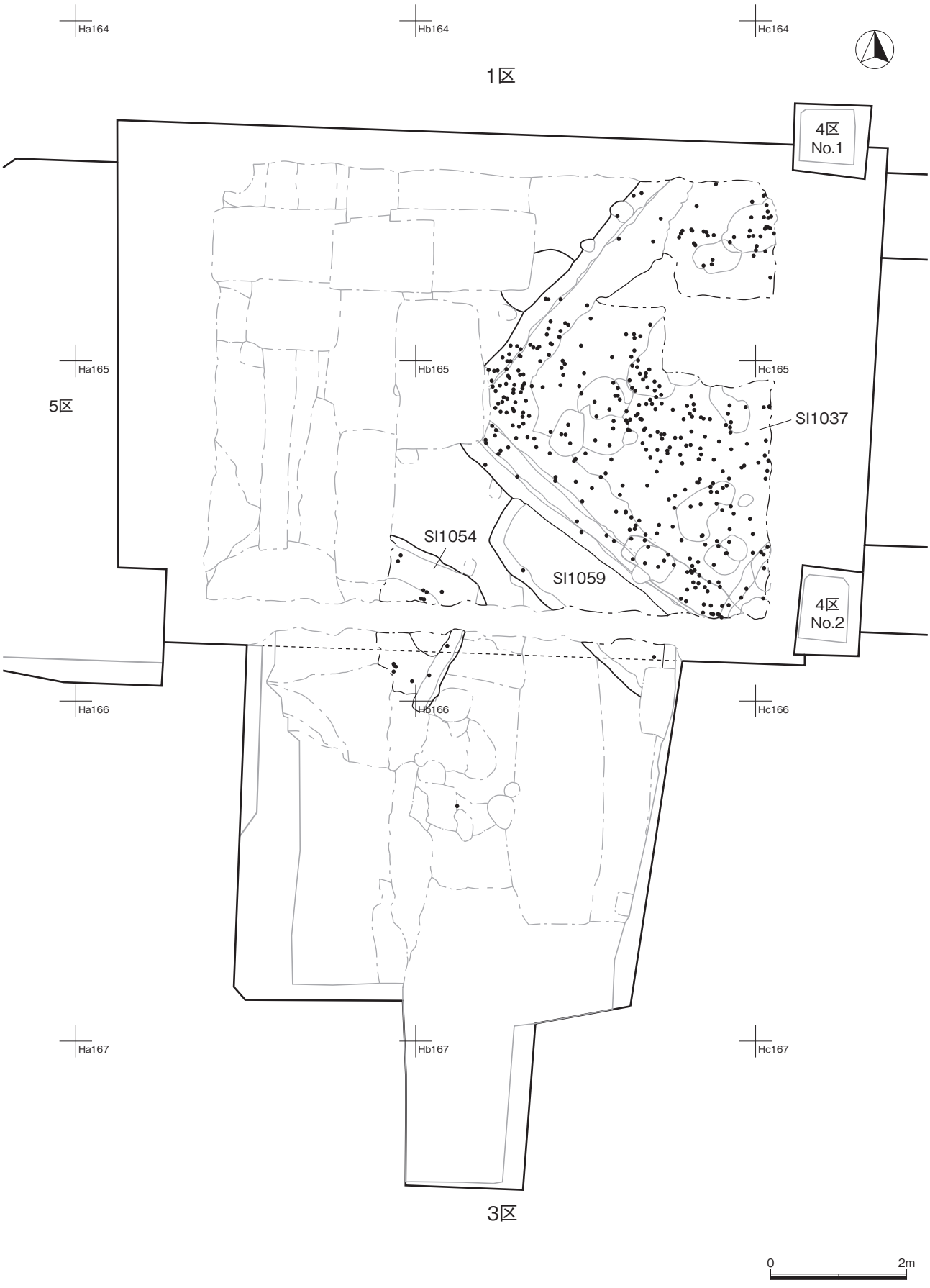
富山藩邸の調査では1区から3区にかけて、藩邸内の大規模なゴミ処理場が存在したことが明らかになった。調査地点と絵図との照合は今後の課題であるが、1区で東西にのびる溝とそれに平行する道を検出していることと、CRC地点で御殿空間と詰人空間とを画する堀を検出していることから、調査区は御殿空間南西の詰人空間との間にひろがる空閑地から詰人空間にかけての範囲にあたる可能性が高い。現段階では廃棄土坑群の年代的位置付けは不明だが、SK3022（SK3020の上に構築された土坑で、撹乱のため調査区西側壁面で堆積のみ確認）が幕末期の亙廃棄土坑であることから、その構築年代は富山藩邸の廃止から御殿の一部が山上会議所として利用されるために曳家される時期にあてられよう。従って大型廃棄土坑群の廃絶年代はそれ以前ということになる。出土遺物を瞥見した限りでは、肥前製の広東碗も認められるものの、19世紀代に帰属する遺物が中心的な位置を占めている。

19世紀代の富山藩邸を描いた『江戸御上屋敷絵図』や『池之端東屋敷絵図』（いずれも富山県立図書館蔵）では、御殿空間の南側一帯には長屋が存在したことがうかがえるが、廃棄土坑群の年代的位置付けが19世紀代であるならば、いずれかの段階で長屋が廃絶されてゴミ処理場へと変化したことになる。

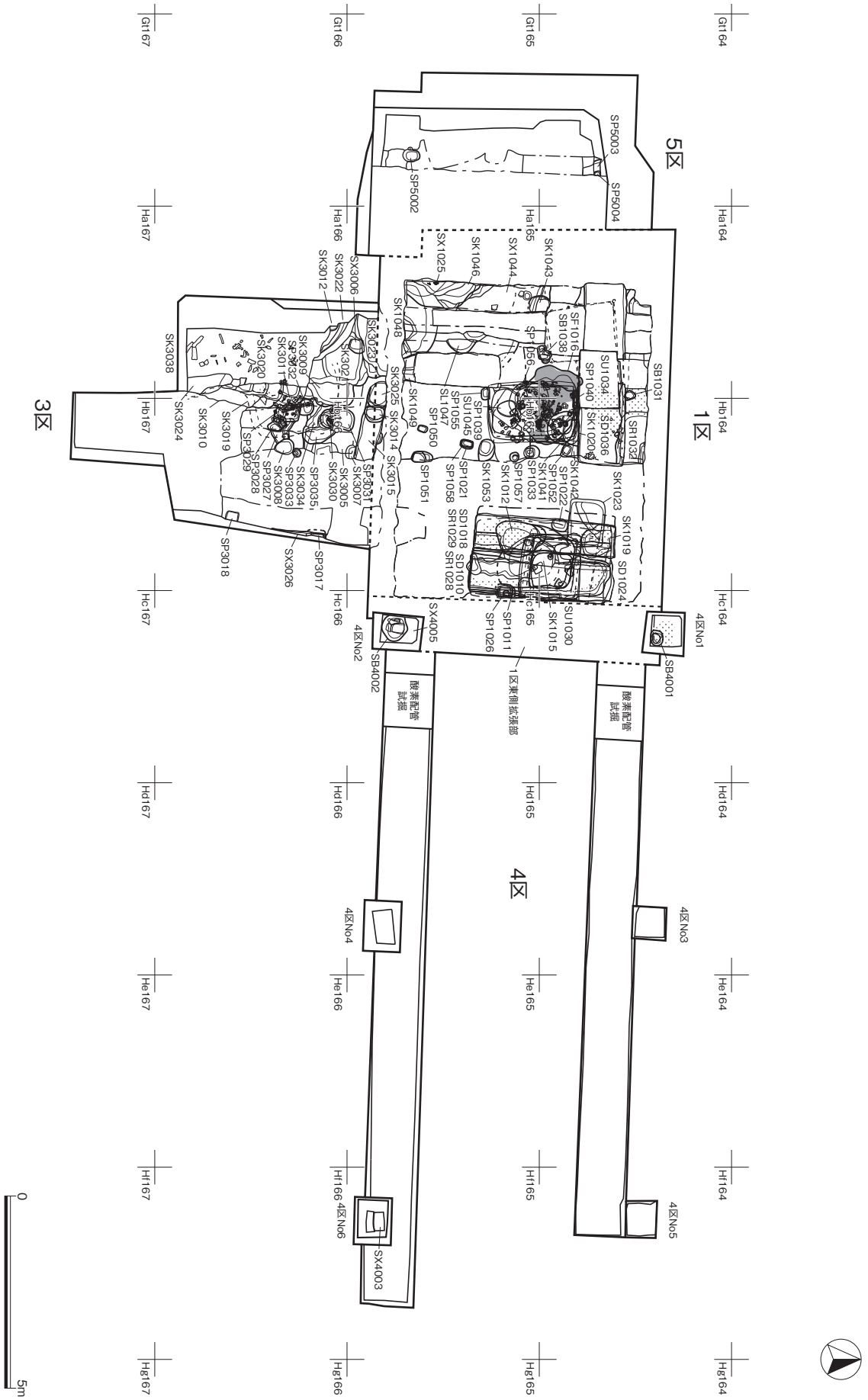
CRC地点でも、19世紀代に長屋を壊して構築された大型廃棄土坑群を検出している。これに連なる大型廃棄土坑を、CRC地点の南側に位置する立体駐車場地点でも検出しており、少なくとも南北40m以上にわたるゴミ処理場であったことがうかがえる。これらの廃棄土坑は出土遺物から19世紀代に位置付けられ、本地点で検出した廃棄土坑群と年代的に重複している時期もあったと考えられる。

本遺跡工学部1号館地点や宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡をはじめとして、19世紀代の大名屋敷跡遺跡では大型廃棄土坑が認められる例が少なくない。おそらくこれは該期になってから大名屋敷のゴミ処理システムが、屋敷外への搬出から藩邸内での処理に変わったことを反映したものと考えられる。しかし本地点とCRC地点のゴミ処理場の距離はわずか50ｍに過ぎず、10万石、11,000坪の富山藩邸に、同時期にこれほどの規模のゴミ処理場が2ヶ所も必要だったかは今後の検討課題である。隣接する宗藩や、同じく支藩である大聖寺藩から持ち込まれたゴミの有無も含め、CRC地点、立体駐車場地点の遺物とともに、分析を進めていく必要がある。

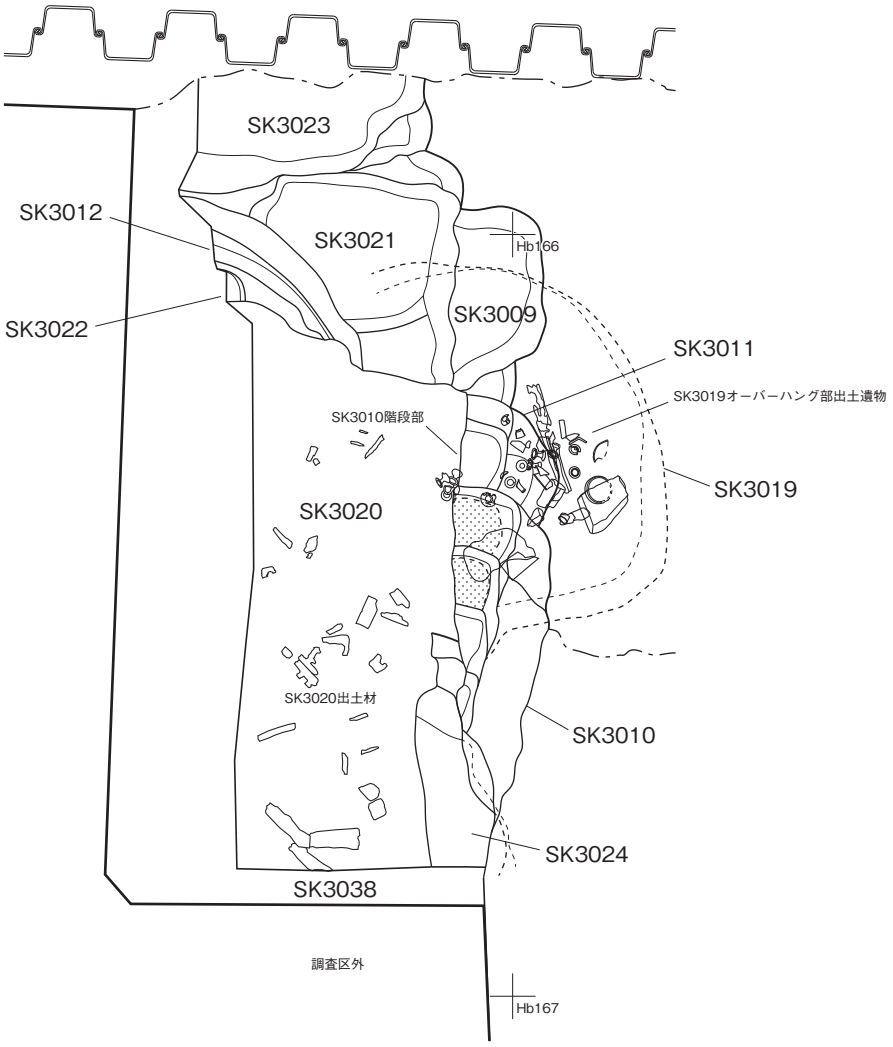
加賀藩邸側の調査では藩邸東側の詰人空間の一部を調査した。しかし遺構は溝や土坑などがわずかに認められるに過ぎず、廃棄土坑もないことから、空閑地だったことがうかがえる。しかし狭小な調査区であったにもかかわらず井戸を2基検出していることから、藩邸絵図との照合が期待される。これによって加賀藩邸東縁に位置する諸地点の空間構成についても、より具体的な検討を進めていきたい。



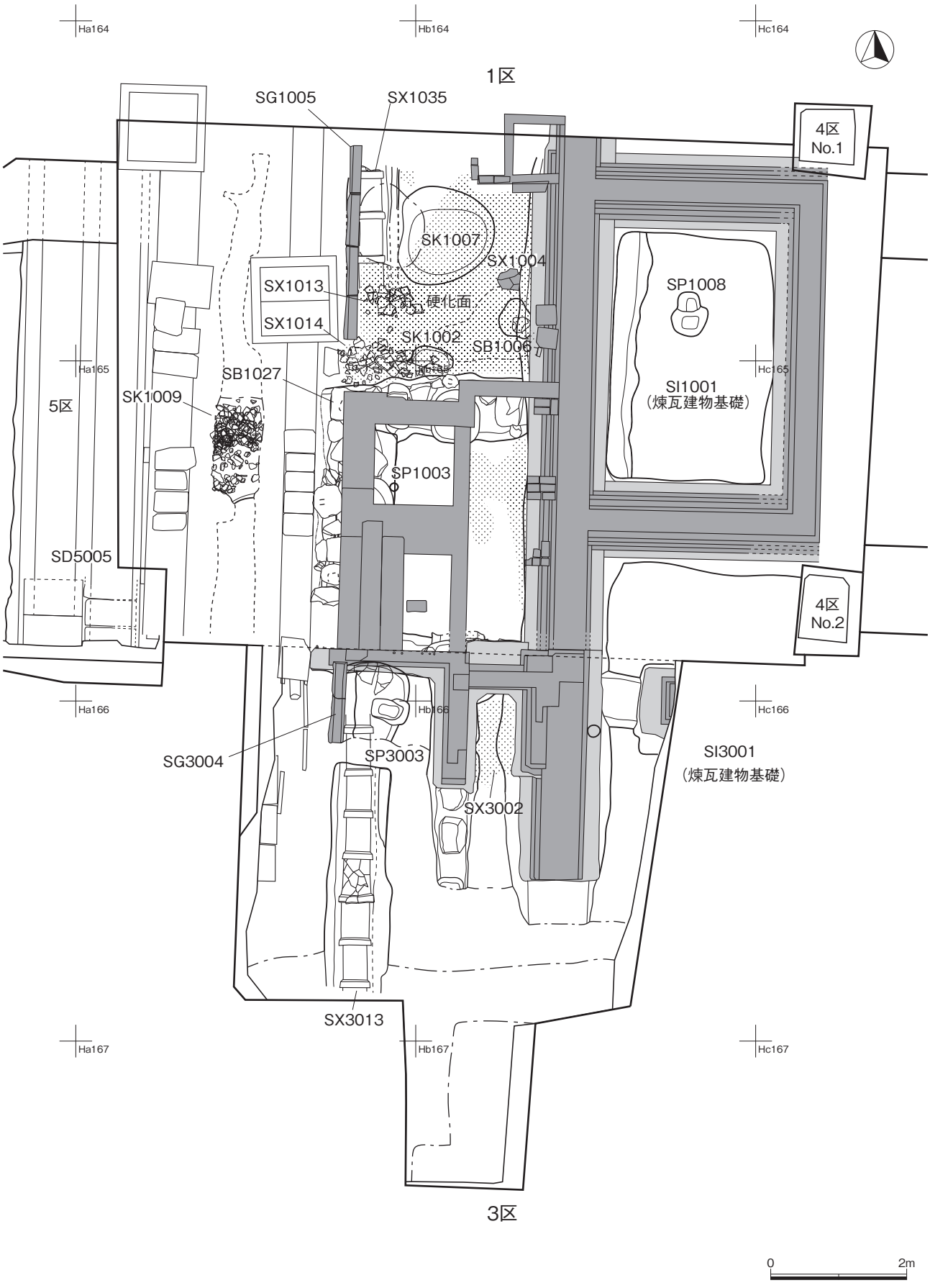
3図　1区・3区遺構分布（縄文時代～古墳時代）



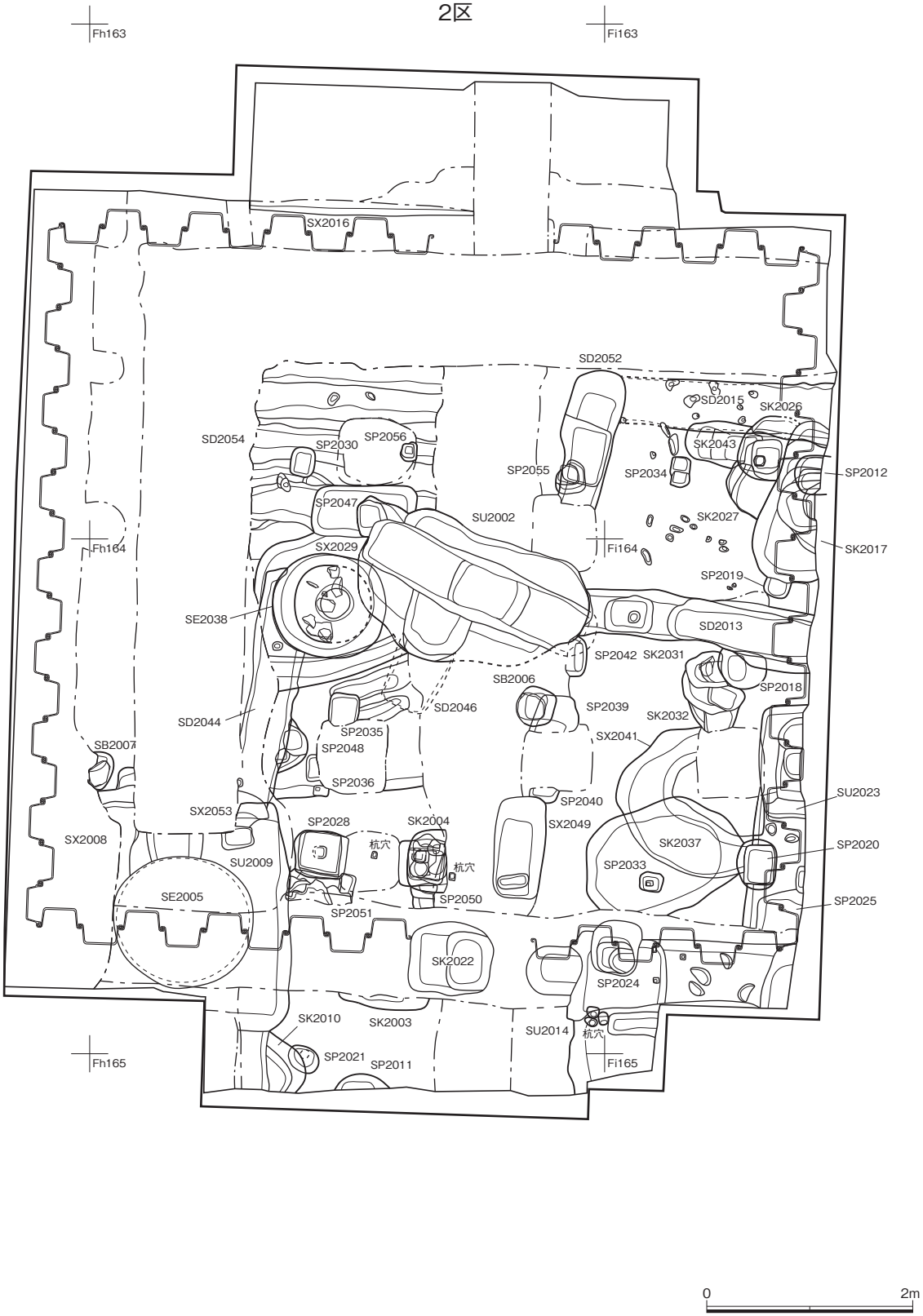
4図　１区・３区遺構分布（江戸時代）



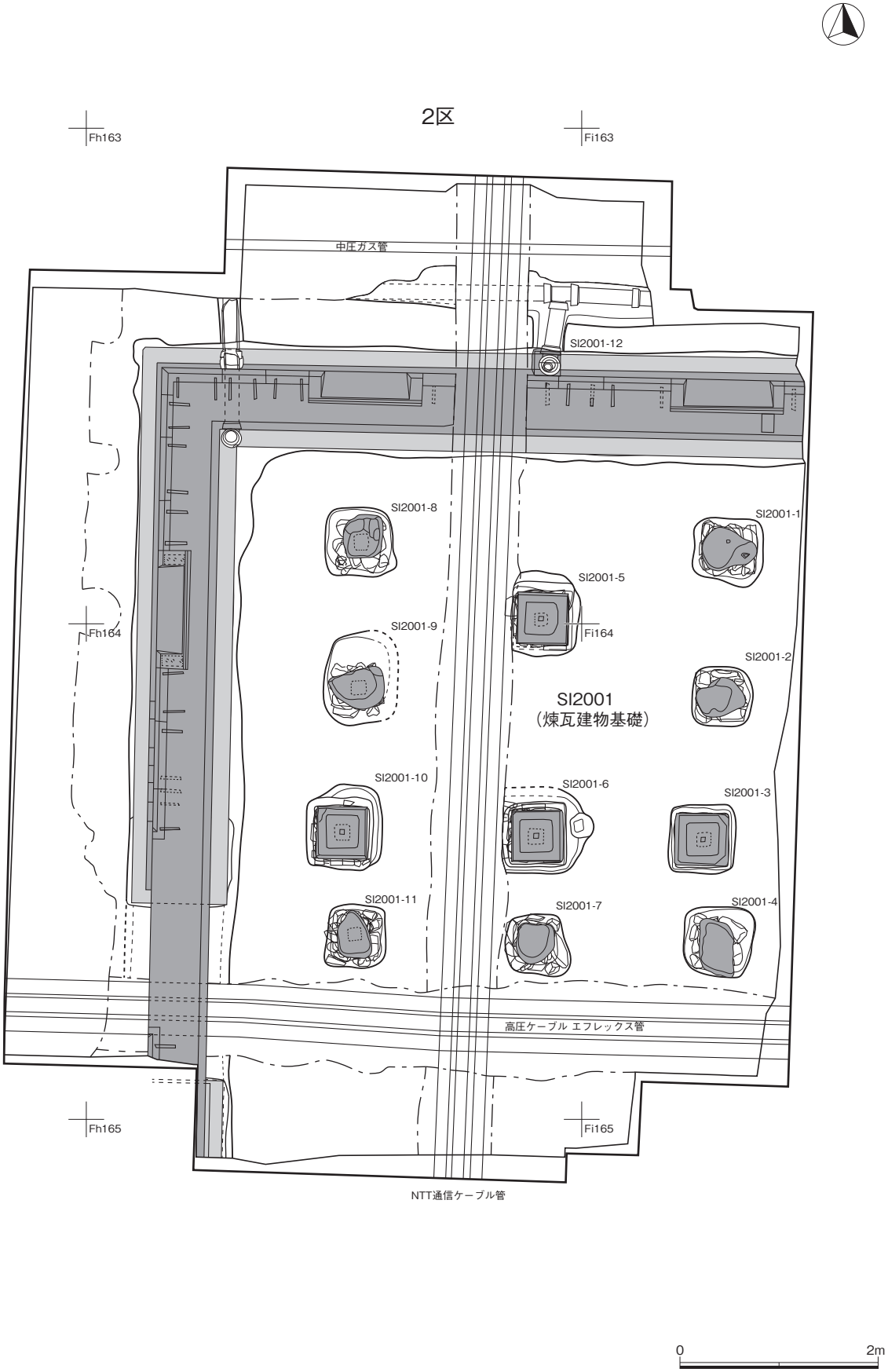
5図　廃棄土坑群（SK3019、SK3020、SK3038ほか）



6図　1区・3区遺構分布（近代）



7図　2区遺構分布（江戸時代）


2区
Fh163
Fi163
中圧ガス管
SI2001-12
SI2001-8
SI2001-1
SI2001-5
Fh164
Fi164
SI2001-9
SI2001-2
SI2001
（煉瓦建物基礎）
SI2001-10
SI2001-6
SI2001-3
SI2001-11
SI2001-7
SI2001-4
高圧ケーブル エフレックス管
Fh165
Fi165
NTT通信ケーブル管
0
2m

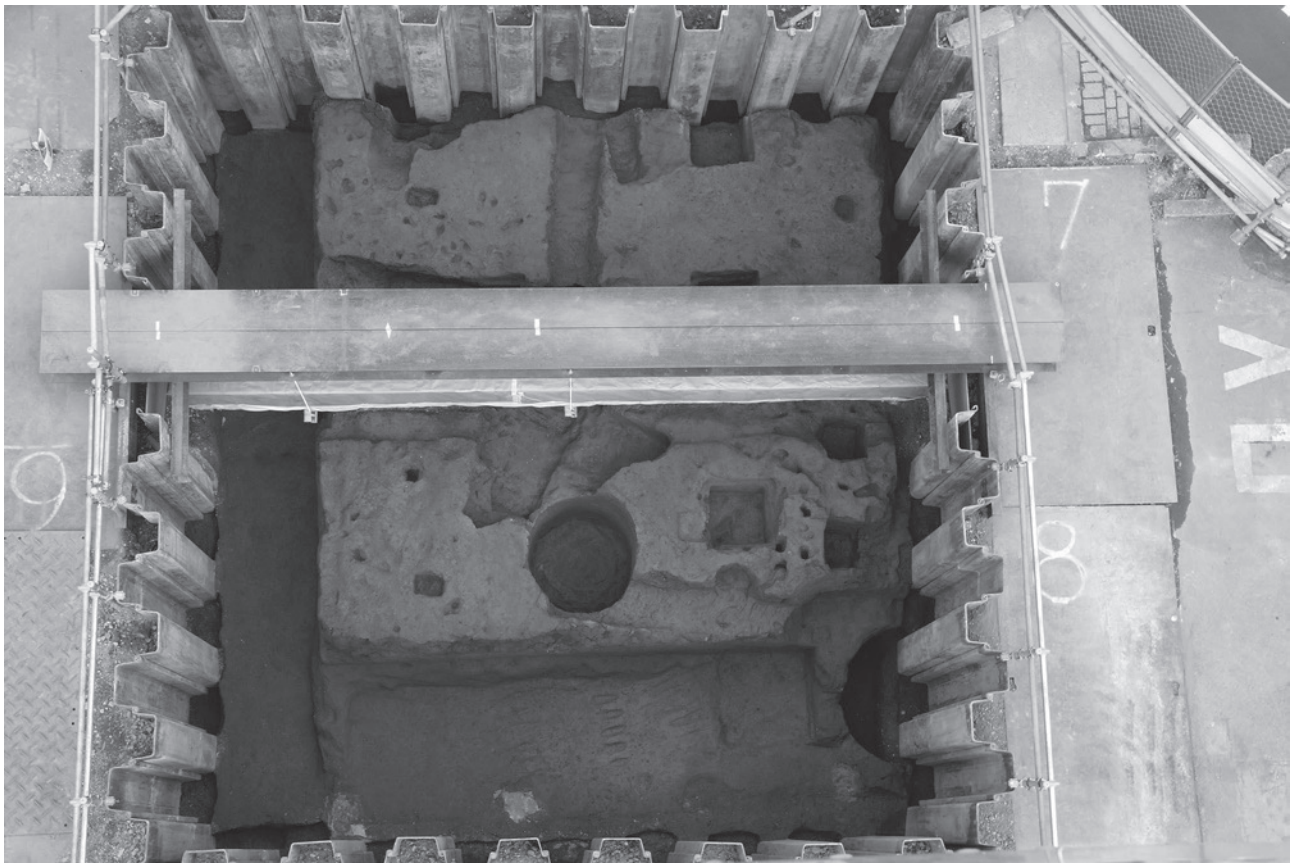
8図　2区遺構分布（近代）

9図　１区全景（西から）

10図　３区全景（南から）

11図　SI1001（西から）

12図　SI3001（南から）



13図　２区遺構検出状況（江戸時代）

14図　２区遺構検出状況（近代）

2. 本郷 297　基幹・環境整備（言問通り横断管路）Ⅱ期

所 在 地　東京都文京区弥生 1-1-1（本郷台遺跡群・文京区遺跡 No.47）
東京都文京区弥生 2-11-16（弥生町遺跡群・文京区遺跡 No.28）

調査期間　2020 年 4 月 7 日～ 7 月 31 日（4 月 8 日～ 5 月 6 日中断）

調査面積　368.7 ㎡
・弥生地区（HOK Ⅱ 20Y）：285.3 ㎡（No.1 ～ No.4：251.56 ㎡、No.4：33.74 ㎡）
・浅野地区（HOK Ⅱ 20A）：83.4 ㎡（No.5：15.79 ㎡、No.5 ～ No.6：37.6 ㎡、No.6：30.01 ㎡）

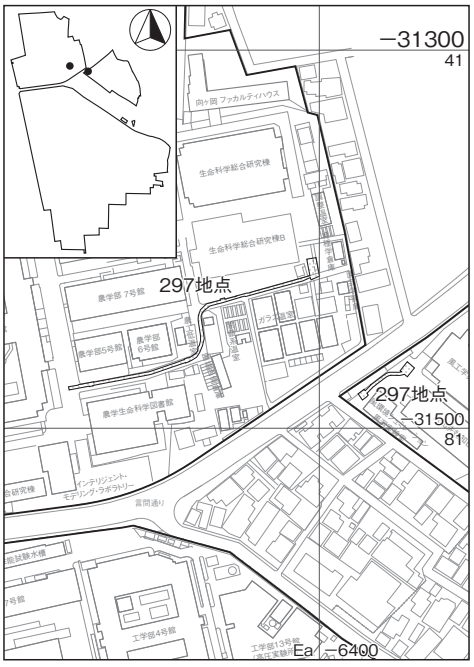
調査担当　堀内　秀樹　大成　可乃（東京大学埋蔵文化財調査室）

1. 調査の経緯と経過

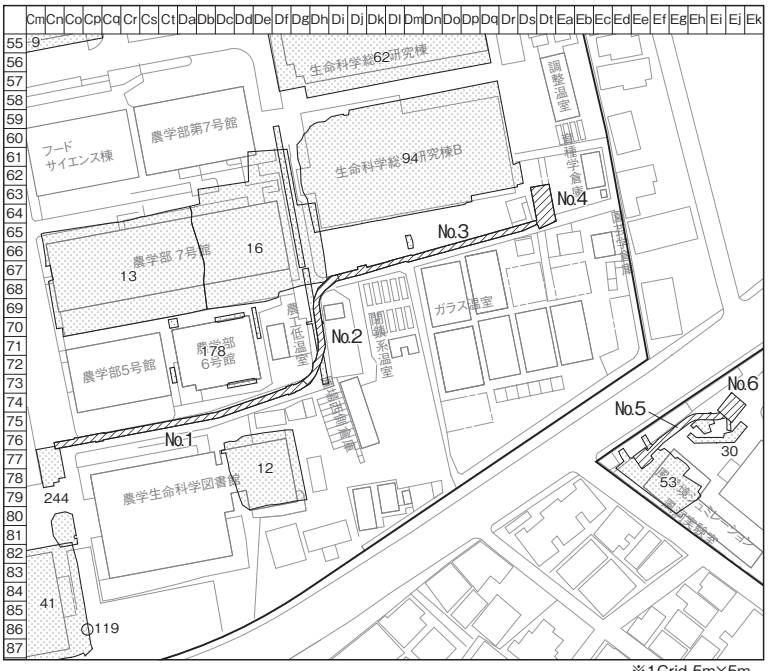
東京大学では本郷構内農学生命科学図書館と農学部 5 号館の間から言問通りを縦断し、通りに面した浅野地区通用門付近の共同溝まで延びる横断管路の設置を計画している（1 図）。その中には 3 箇所のハンドホール（No.1 ～ No.3）とマンホール（No.4 ～ No.6）の設置が含まれている（2 図）。弥生地区地点（HOK Ⅱ 20Y）は本郷台遺跡群として、浅野地区地点（HOK Ⅱ 20A）は本郷台遺跡群と弥生町遺跡群として文京区周知の遺跡に登録されている。また、弥生地区地点に隣接する本郷 94 分生研・農学部総合棟地点では、弥生時代から近代にかけて 6 つの遺構面と 260 基の遺構が確認され（東京大学埋蔵文化財調査室 2012）、浅野地区地点に隣接する本郷 30 工学部風工学実験室支障ケーブル地点では、弥生時代の方形周溝墓の周溝が確認され、壺形土器が出土（東京大学埋蔵文化財調査室 2009）しており、本計画地点でも遺跡の広がりが想定された。

東京大学施設部より依頼を受けた東京大学埋蔵文化財調査室では、2019 年 7 月 11 日～ 8 月 6 日に試掘調査を実施、弥生地区で江戸時代の整地面や地下室、明治時代の整地面、基礎を検出、浅野地区では方形周溝墓の周溝と考えられる溝状遺構が検出された。この調査結果を受けて施設部と埋蔵文化財調査室が協議を行い、2020 年 4 月 7 日から 7 月 31 日の約 4 ヶ月間で 368.7 ㎡の本調査を実施した。この間、世界的に流行した新型コロナウイルス感染症による日本政府の緊急事態宣言や大学の活動制限などが発出された事で、調査期間や体制の調整などを行ったため、開始直後の 4 月 8 日～ 5 月 6 日まで調査を中断した。調査は、基本的にマンホールや管路工事によって壊される範囲を対象として行うことが申し合わされ、それ以上は遺構の状況等に合わせて対応することとした。

以下、弥生、浅野各地区毎にその結果を述べる。



1 図　調査地点位置図



※1Grid 5m×5m
2 図　調査箇所位置図

2. 調査概要と結果

(1) 弥生地区（3 図）

No.1 ～ No.2（5 ～ 7 図）

No.1 ～ No.2 は、弥生地区最西端に位置し、管埋設計画に沿って東西方向に長さ約 62m、幅約 1.6m で設定された。ここでは No.1 以東長さ約 11m 大学共同溝への接続部分を含んで取り扱う。調査区は、南側に本郷 12 農学部図書館地点、北側やや離れて本郷 13、本郷 16 農学部 7 号館地点（Ⅰ、Ⅱ期）に挟まれた場所に位置している。現況では、西端から 22m 東付近が最も標高が高く、それ以東では緩やかに西へ下る緩斜面になっている。ローム面での標高は、西端で 20.5m ～ 20.6m、最も高い 22m 東付近で 20.7m、No.2 付近で 18.8m であった。

調査は、ローム面までに確認された近代以前の遺構・遺物の調査および No.1 と No.2 の 2 箇所に旧石器時代の試掘トレンチを設定し（3 図「調査区 1」、「調査区 2」）、調査を行った。確認された遺構・遺物は、近世から近代にかけての時期であったが、その主体は近代であった。

旧石器時代　試掘トレンチを 2 箇所設定した。調査区 1 では、武蔵野台地標準層位Ⅶ層以下が確認され、武蔵野ローム層ⅩⅡ層までの調査を行った。調査区 2 では、同Ⅶ層以下が確認されたが、ⅩⅡ層以下は水性土壌化しており、ⅩⅢ層以下は顕著であった。両調査区とも遺物は出土しなかった。

近世から近代　確認された関東ローム層は、最も高い層位でⅦ層であった。また、周囲の調査地点を含めてロームが削平されており、近世初期から近代にかけて大がかりな地業が行われたと考えられる。近世から近代の遺構面が最も良好に遺存していた中央部付近では、4 枚の遺構面（上から A ～ D 面と命名、D 面はローム面）が確認され、おおむねその上面は硬化しており、ある時期の生活面として利用されていたと思われる。このうち近世の遺構が確認された面は、D 面のみであることから、A ～ C 面は近代以降に機能していたと推定された。

SK44 は、No.1 付近で確認された遺構である。東、西を現代の撹乱で切られ、南が調査区外であることから遺構全体の様子は窺えなかった。本遺構からは、碗、皿、土瓶、徳利などの陶磁器、瓦、ワインボトル、碁石などの土製品をはじめ江戸時代末から明治時代初期の生活遺物が多く出土した（7 図）。

SE45 は、中央付近に位置する井戸である。南半が調査区外にあり、遺構全体の状況は不明である。SE45 外側には方形の付帯施設と推定される土坑（SK52）があり、坑底の形状や土層の観察から井桁が設置されていたと考えられる。近世に属する遺物が多く出土しているが、遺構の確認面は近代面であったことから、遺構の廃棄は近代まで下るものと推定される（堀内）。

No.2 ～ No.3（8 ～ 11 図）

No.2 ～ No.3 は、弥生調査区中央に位置し、東西方向の管路を南北に結節するように設定された。規模は、管埋設計画に沿って S 字状に曲がる長さ約 40m、幅約 1.6m である。設定位置は、2011 年に行った本郷 120 分生研・農学部総合研究棟基幹整備に伴う試掘調査時の調査範囲と重複する部分が多くを占めていた。調査区南側は、No.1 ～ No.2 東端に確認された大形遺構 SK50 の範囲にあたり、ローム層は確認されていない。北側は、東京大学期のブロック塀を伴うコンクリート製小建造物によって壊されていたが、建物周囲には近世初期から近代にかけて大きく削平された土壌化した武蔵野ロームが確認された。遺構は確認されなかった。また、No.3 に接続する北端部では、3 枚の近代硬化面が確認され、農学部の圃場入口付近の道が、頻度高く作り替えられていたことが推定できた。

SK50 は、No.2 東から続く大形土坑で、全掘していないため遺構全体の様子は不明である。本調査では、遺構の南壁が No.2 付近で確認されたのみであり、坑底は確認できなかったものの、少なくとも東西 10m 以上、深さは 1.8m 以上の規模を持つ遺構であることが確認できた。遺物は、近世の陶磁器、土器などが主体を占めており、水戸藩邸に伴う遺構である可能性がある（堀内）。

No.3 ～ No.4（12 ～ 18 図）

No.3 ～ No.4 は弥生地区西側に位置し、管埋設計画に沿って長さ約 47m、幅約 1.6m で東西方向に設定された。ローム上面の標高は、東端で 16.4m、No.3 付近で 17.1m で、西から東へ非常に緩やかに下る斜面となっている。表土下はローム面を含めて 3 枚の遺構面が確認され、上位から近代遺構面、近世遺構面、ローム面とした。

近代遺構面ではいくつかの建築遺構（基礎）が出土している。最も新しい遺構はレンガ積みのもので（SB30）、近接する 2013 年に行った本郷 135 水田取設工事に伴う試掘調査で確認された SB1 に相当するものと判断できる。また、本郷 135 調査 SB2 に相当する方形の掘り込みを持ち、根石を配する柱基礎が並ぶ建物遺構がこれに切られて確認された（SP27、SP34、SP40、SP41、SP42 など）。この両建物基礎は、焼土層にパックされており、関東大震災前のものと推定される。この他、明らかに柱痕を伴うピットが確認されたが、いずれも近代遺構面に伴うピットであった。

明確に近世遺構面に帰属する遺構は、確認できなかったが、やや硬化した面が確認された。また、近世遺構面

下層から一分金が出土している（18 図）（堀内）。

No.4（19 ～ 21 図）

東西 5.5m、南北 4m の方形範囲の調査に加え、支障となるガス管と、その切り回し部分の範囲（No.4 マンホールの北側に幅 0.9m、全長 17.9m、掘削深度平均 0.55m、コの字形）の調査を実施した。

ガス管切り回し部分についてはローム面まで到達せず、すべて近代以降の盛土内あるいは既設管掘方の埋土内におさまり、遺構、遺物は検出されなかった。

マンホール部分については地表面下約 1m で調査区全体に黒色土主体の整地面が検出されたが、顕著な硬化は確認されず、また堆積厚が 2 ～ 3mm と薄く、遺構、遺物も検出されなかった。しかし後日の調査で、本地点東側に隣接する No.3 ～ No.4 においても、同様の黒色土主体の整地面が検出され、その整地層からは江戸時代の遺物が出土し、本整地面が江戸時代の整地面であることが確認された。本層直下はローム面（地山）であり、そこでは植栽が 1 基（SK1）、東西方向にのびる細い溝が 2 基（SD2、SD3）、柱穴が 1 基（SP4）検出された。遺物は SK1 からのみ少量出土し、それらは 18 世紀後半に比定されるものである。

No.4 の南壁中央付近で地表面下約 2.5m までロームの基本層序を調査（試掘坑）し、武蔵野台地標準層位Ⅲ層以下、Ⅵ層まで確認されたが、Ⅴ層堆積厚が約 0.5m ～ 0.6m と他の層と比較して厚く、Ⅵ層途中からは水成土壌化し、ローム層が変性する状況が確認された（大成）。

(2) 浅野地区（4 図）

No.5（22 図）

4m 四方範囲の調査を実施した。地表面下約 1m 強までローム面が大きく削平されており、全域が本郷 53 工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2009）として調査された部分と重複していることが確認された（大成）。

No.6（23、24 図）

東西 5m、南北 6m の方形範囲の調査を実施した。No.6 には覆工板を設置するための範囲を外周に含み、その部分は工事掘削深度の地表面下約 0.55m までの調査にとどめた。この深度内ではローム面は確認されず、南側約 1/2 は共同溝などで大きく撹乱されている状況が確認された。撹乱されていなかった調査区北東付近にトレンチを設定し、断面調査をしたところ、地表面下約 0.45m でレンガを含む灰･炭化物主体層、その直下に黒色土層、地表面下約 0.8m で関東ローム層（武蔵台地標準層位Ⅱ～Ⅲ層）が確認された。なお黒色土層にパックされた遺構状の落ち込みからは板ガラス片が出土しており、黒色土層は近代以降の盛土である可能性が高い。表土直下の灰・炭化物主体層は、弥生地区の複数調査地点で確認されている関東大震災に伴う堆積層である可能性が高い。

前述した土層堆積状況から、マンホール設置部分の調査は地山面で実施し、柱穴 5 基、黒色土主体の溝 2 基（SD25-1、SD25-2）が検出された。いずれの柱穴からも遺物が出土せず、時期は不明である。2 基の溝はのびる方向が異なり、その間や SD25-1 の南側が大きく撹乱され、ともに一方の立ち上がりのみの確認である事から別遺構として調査した。遺物は SD25-1 から土器細片が数点出土（D6 ～ D9）したのみである。既調査地点である本郷 30 工学部風工学実験室支障ケーブル地点（以下、ケーブル地点）と照合すると、ケーブル地点 SD9 と交差する位置に SD25-2 が、ケーブル地点 SD9 の東延長線上に SD25-1 が位置する事が判明した。ケーブル地点 SD9 は、方形周溝墓の北側周溝部分であることが報告されており（東京大学埋蔵文化財調査室 2009）、SD25-1 もその一部である可能性が高い。なお SD25-2 は検出範囲も狭いことから断定は難しいが、のびる方向からケーブル地点 SD9 とは別の遺構の可能性もある（大成）。

No.5 ～ No.6（25 ～ 29 図）

幅 1.6m、長さ 24m の管路掘削に伴う範囲の調査を実施した。No.5 から東へ 2/3 付近で確認される大形撹乱までは遺構面は確認されず、地表面下約 0.6m で関東ローム（武蔵台地標準層位Ⅱ～Ⅲ層）を検出、その面で遺構確認を実施した。ローム面で確認された遺構は柱穴 8 基、土坑（植栽）が 1 基である。大半の遺構からは遺物が出土せず、帰属年代は不明である。SP7、SP9 は掘方の平面形が長方形、深さ約 0.6m を測る柱穴で、坑底には掘方より少し小さい規模の根石が検出された基礎遺構である。なお両柱穴の間で検出された SP6 も同形態、同規模の柱穴であるが、坑底の根石はなく、痕跡のみが確認された。

調査区中央から東側では地表面下約 0.3m 強までは表土、砕石層、その直下に 5 ～ 10cm 厚で暗褐色土主体の整地層が検出されたが、整地層からはレンガ、コンクリートが出土しており、近代以降の整地層と判断した。この整地層直下では大形土坑 1 基（SK18）、溝 1 基（SD20）が検出された。

SK18 は東、西、南側は撹乱され、北側は調査区外にのびる遺構であり、坑底部分のみの確認にとどまるが、坑底の凹凸が著しく、採土坑として掘削された可能性がある。また土層堆積状況で坑底付近に茶褐色細砂のラミナが確認されたことから、開口期間があったことが推測

される。出土遺物には瀬戸・美濃系磁器の矮小化した端反碗などがあり、19 世紀前半に帰属する遺構と判断される。

SD20 は No.6 西側に接続する付近から幅約 1m、長さ約 7.5m、東西方向にのびる形で検出された。SD20 の坑底付近から僅かに残る立ち上がりは緩やかな階段状を呈し、壁面には凹凸が残る。覆土は黒色土主体であるが、坑底付近の覆土はローム粗粒やブロックをやや多く含む。出土遺物は土器細片が 10 点弱出土（D1、D3 ～ D5、D10 ～ D18）したが、それらは全て上位の黒色土から出土している。なお今回の調査で SD20 の東端部は、前述したケーブル地点の SD14 として調査が行われた部分である事が確認された（大成）。

3. 調査成果と今後の課題

浅野地区の最大の成果は方形周溝墓の周溝が確認されたことであろう。既報告済みの本郷 30 工学部風工学実験室支障ケーブル地点、本郷 61 工学部武田先端知ビル地点で方形周溝墓の存在が確認され、本地点で検出された周溝は、ケーブル地点で未調査であった部分の周溝である事が確認できた。今後、出土遺物を調査する中で、ケーブル地点で検出された壺型土器の欠損部分などが含まれている事を期待したい。周溝以外にも江戸時代に帰属する遺構として大形土坑 SK18 が検出された。本地点は江戸時代、水戸藩中屋敷（駒込邸）であり、文政 9（1826）年頃の中屋敷の様子が描かれた『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』と照合すると、藩邸を南北にのびる道と殿舎との間の空閑地に該当するが、SK18 のような大形遺構が確認されたことで、19 世紀前葉頃は絵図のような空閑地であり、採土のような行為が可能な場所であった事が推測される。道に近接する場所であり、採土の搬出入にも都合のよい場所であったのだろうか。

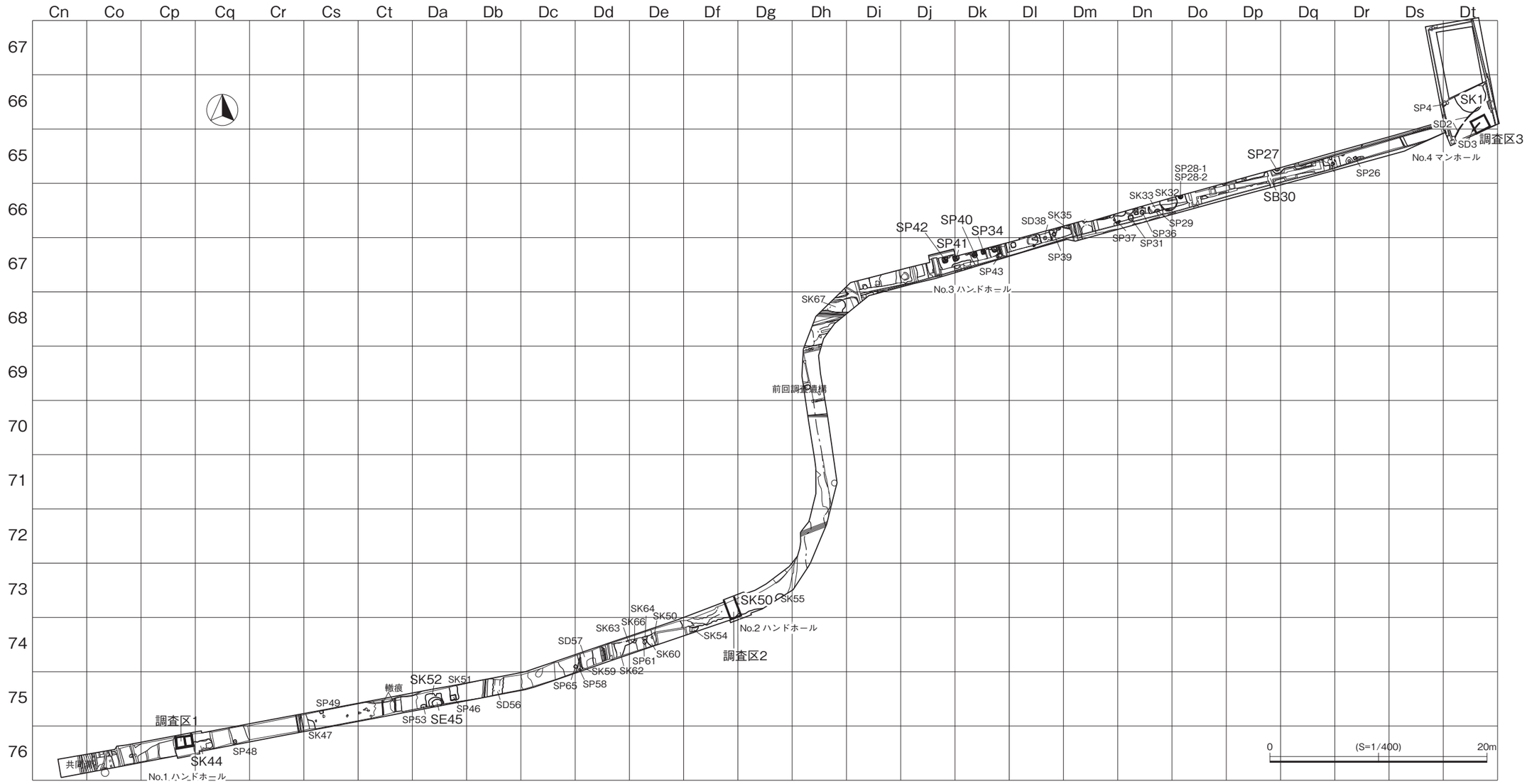
弥生地区は、近代関東大震災後に第一高等学校が、その後の昭和 8（1933）年に堀田伯爵邸が大学用地となった。No.3 ～ No.4 で確認された建築遺構は、いずれも焼土層にパックされていたことで、堀田伯爵邸に伴う遺構と推定される。これまで、本郷地区南域の本郷 20 総合研究博物館地点、本郷 24 医学部教育研究棟地点、本郷 82 懐徳門地点などから近代前田侯爵邸に伴う洋館、区画塀、社、道などが確認されている。これらの遺跡からは、近世から近代における変遷と共に象徴的な建築に対して重要な情報が得られている。当該地においても地歴も踏まえて評価を行いたい。また、大形土坑（SK50）の帰属と機能も今後の課題となろう。上記、浅野地区でも指摘しているように、水戸藩駒込邸自体が遊閑地が多く存在し、今回の調査では大形土坑が掘られている状況に加えて、立川ロームそのものを削平しているような地業も行われている。こうした大きな土の移動を伴う地業の復元についても今後の課題としておきたい（堀内・大成）。

【参考文献】

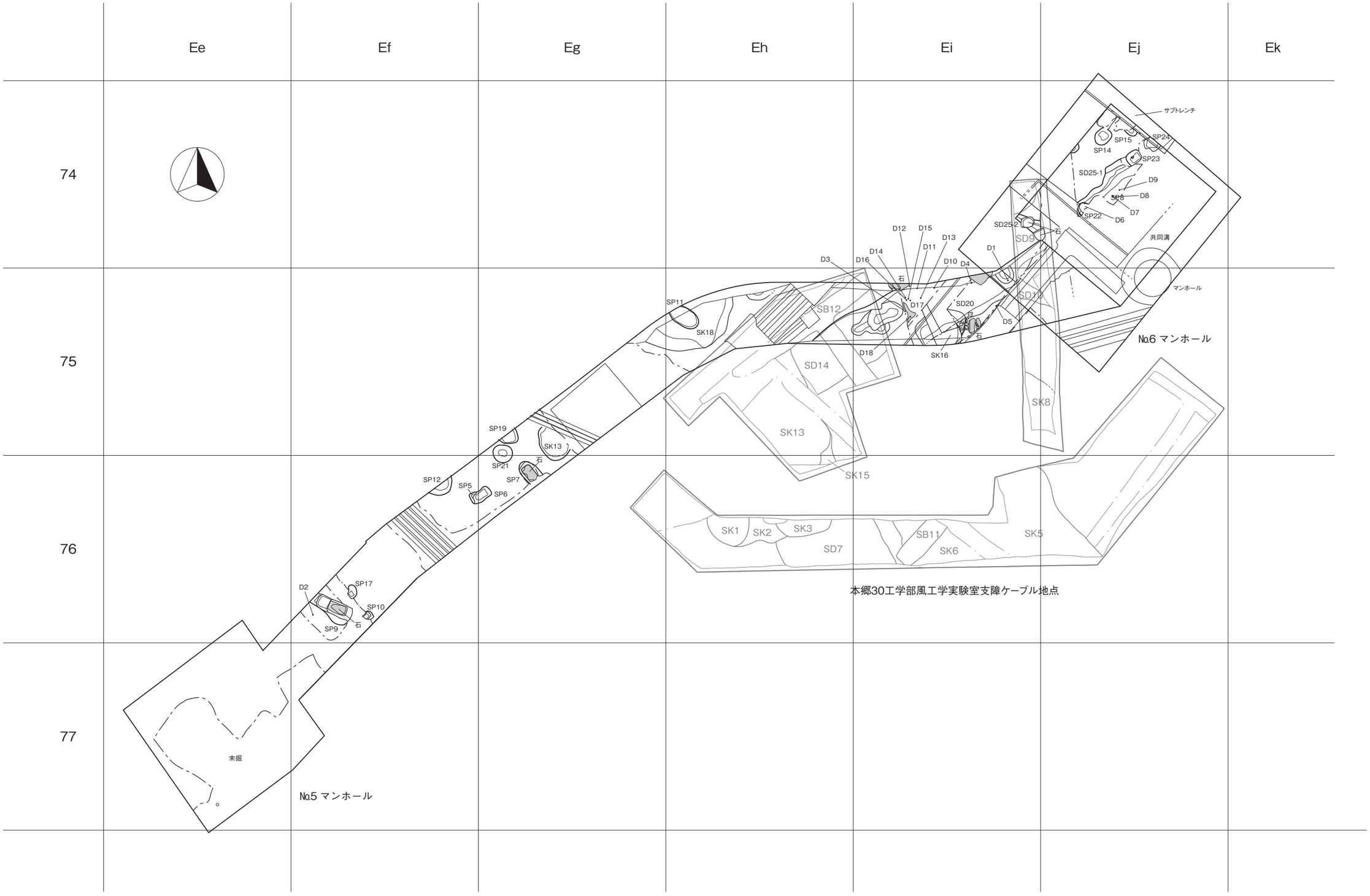
東京大学埋蔵文化財調査室　2009『東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区Ⅰ』

東京大学埋蔵文化財調査室　2012『東京大学構内遺跡調査研究年報』8

東京大学埋蔵文化財調査室　2017『東京大学構内遺跡調査研究年報』10


Cn
Co
Cp
Cq
Cr
Cs
Ct
Da
Db
Dc
Dd
De
Df
Dg
Dh
Di
Dj
Dk
Dl
Dm
Dn
Do
Dp
Dq
Dr
Ds
Dt
67
66
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
SP4
SK1
SD2
SD3
調査区3
No.4 マンホール
SP27
SP26
SP28-1
SP28-2
SB30
SK33
SK32
SP29
SP36
SP31
SP37
SD38
SK35
SP39
SP42
SP40
SP34
SP41
SP43
No.3 ハンドホール
SK67
前回調査区境
SK50
SK55
SK64
SK66
SK50
SK63
SK54
No.2 ハンドホール
SD57
SP61
SK60
調査区2
SK59
SK62
SP65
SP58
SK52
SK51
轍痕
SP49
SD56
SP46
SP53
SE45
調査区1
SK47
SP48
SK44
No.1 ハンドホール
0
(S=1/400)
20m

3図　弥生地区全体図


Ee
Ef
Eg
Eh
Ei
Ej
Ek
74
75
76
77
サブトレンチ
SP15
SP24
SP14
SP23
SD25-1
D9
D8
SP8
SP22
D7
D6
SD25-2
右
SD9
共同溝
D1
D12
D15
D13
D14
D11
D3
D16
D10
D4
SD10
マンホール
SP11
SB12
D17
SD20
D5
SK18
D18
SK16
No.6 マンホール
SD14
SK8
SK13
SK15
SP19
SK13
SP21
SP12
SP5
SP7
SP6
SK1
SK2
SK3
SB11
SK5
SD7
SK6
本郷30工学部風工学実験室支障ケーブル地点
D2
SP17
SP10
SP9
未掘
No.5 マンホール
0
(S=1/100)
4m

4図　浅野地区全体図

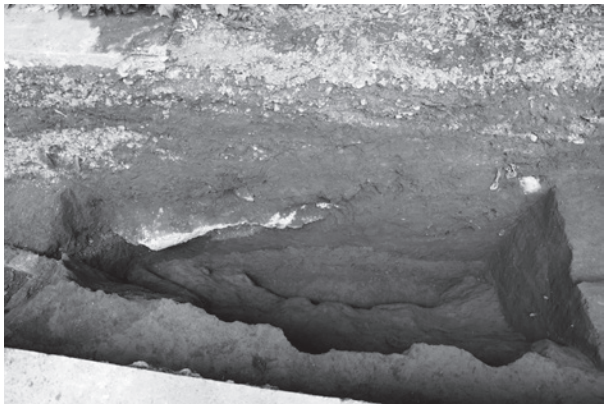
5図　No.1～No.2_北壁_土層堆積状況

6図　旧石器試掘_調査区1_北壁_土層堆積状況

7図　SK44_遺物出土状況

8図　No.2～No.3_全景_北から

9図　No.2～No.3_北壁_土層堆積状況

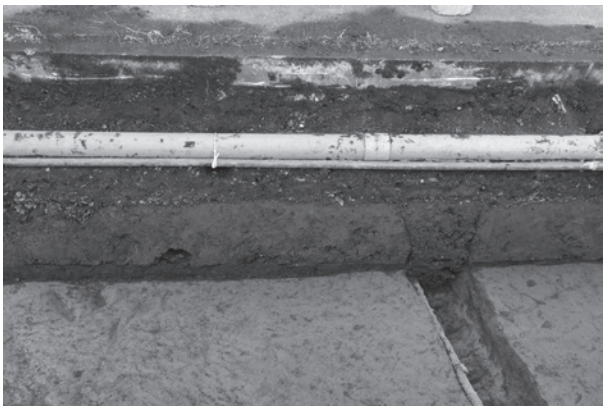


10図　SK50_北壁_土層堆積状況

11図　SK50_土層堆積状況

12図　No.3～No.4_全景_西から

13図　No.3～No.4_全景_東から

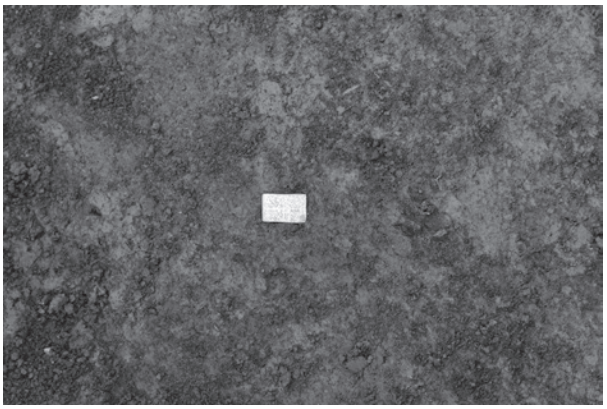


14図　No.3～No.4_北壁_土層堆積状況

15図　SP42_石検出

16図　No.3～No.4_武蔵野ローム層検出

17図　SP27_北壁_土層堆積状況



18図　No.3～No.4_一分金出土

19図　No.4_ガス切り回し全景_北から

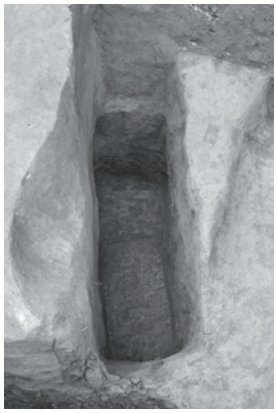
20図　No.4_ローム面全景　南から

21図　No4_南壁_土層堆積状況

22図　No.5_全景_南から

23図　SD25-1_遺物出土状況

24図　SD25-2_全景



25図　SP9_根石検出

26図　SK18_完掘_南から

27図　SD20_土層堆積状況

28図　SD20_全景_東から

29図　SD20_遺物出土状況_南から

3. 本郷 308　外灯 C-5,C-61 電源改修

所 在 地　東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学本郷構内（文京区 No.47・本郷台遺跡群）
調査期間　2021 年 3 月 12 日
調査面積　5.5 ㎡
調査担当　追川　吉生（東京大学埋蔵文化財調査室）

1. 調査の経緯と経過

東京大学本郷キャンパス内に設置されている外灯（C-15・C-61）の電源改修にともない、共同溝から電源ケーブルを引き込むための掘削工事が計画された。掘削範囲はＬ字状を呈しており、当初の計画では構内道路の縁石に沿わしたケーブル部分の掘削は現地表面から約 60 ㎝と浅かったが、共同溝へとケーブルを引き込む部分の掘削深度は 1.4m だった。

掘削予定地周辺では、経済学部棟建設（1999 年・本 54）や総合図書館前にあったクスノキの移植（2012 年・本 115）の際に事前調査を実施しているほか、医学部モニュメント移設（本 131）などを原因とした立会調査も数ヶ所で実施している（1 図）。特に医学部モニュメント移設に伴う立会調査では調査区の西壁において、現地表面から 0.9m の深さで江戸時代の礎石を確認している（この礎石は工事で破壊される恐れがなかったことからそのまま現地保存とした）。

こうした発掘調査の結果から、本地点では現地表面から 1m 未満の深さでも遺跡が遺存している可能性が高いことがうかがえた。そこで工事に先立って事前調査を実施した。

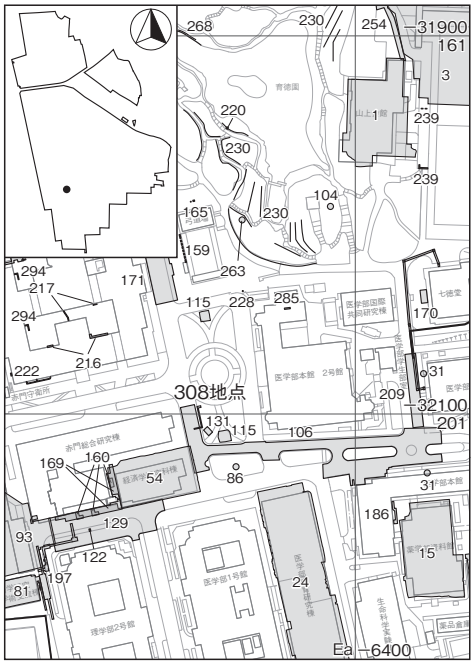
2. 調査の概要

調査は構内道路の縁石に沿った南北方向の調査区（1 区･南北 12.9m、東西 0.5m）と、縁石から共同溝のマンホールまでの東西方向の調査区（2 区･南北 0.5m、東西 4.5m）からなる（2 図）。1 区は北側で外灯 C-61 へ電源ケーブルを引き込むために東西 2m ほど掘削範囲を拡張した部分を含んでいる。

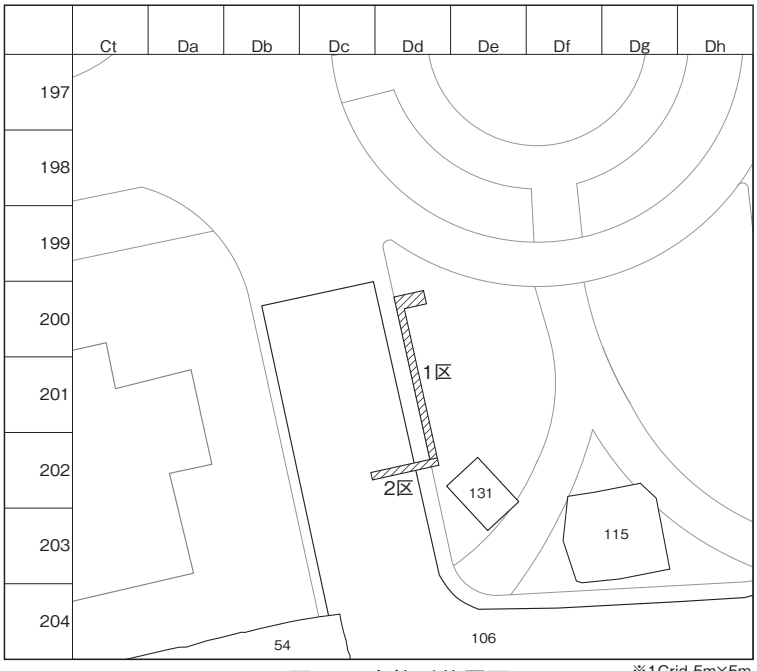
3. 調査の結果

1 区は GL-0.6m まで掘削した。掘削した最下面はローム ブロック主体の盛土層で、レンガ片を少量含む。遺構面まで到達せずに調査を終了した（3 図・4 図）。遺物はない。

2 区は施工方法を検討して、GL-0.7m までの掘削とした。掘削した最下面はレンガを含む黒褐色土の盛土層である。遺構面まで到達せずに調査を終了した（5 図 ・6 図）。表土中から瓦 2 点、鎹 1 点、石材の破片 1 点を出土した。



1図　調査地点位置図



2図　調査箇所位置図　※1Grid 5m×5m

3図　１区掘削状況

4図　１区堆積状況

5図　２区掘削状況

6図　２区堆積状況

第 2 節　本郷構内の試掘調査

1. 本郷 288　野球場北側擁壁改修

所 在 地　文京区弥生 1-1-1 （文京区 No.47 本郷台遺跡群、文京区 No.28 弥生町遺跡群）
調査期間　2020 年 1 月 9 日～ 2020 年 11 月 9 日
調査面積　386.6 ㎡
調査担当　堀内秀樹・香取祐一

1. 調査の経緯と経過

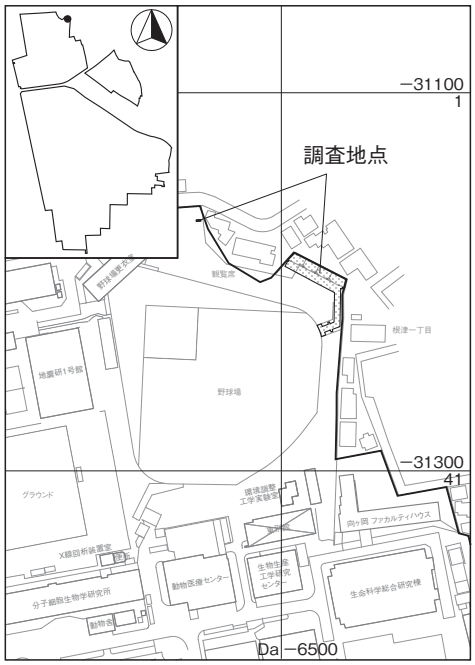
東京大学施設部は、老朽化した弥生キャンパス野球場北東側、民地との境にある擁壁の改修工事を計画している。工事地点は文京区 No.47 本郷台遺跡群、および文京区 No.28 弥生町遺跡群として、周知の遺跡に登録されている（1 図）。このことから埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要があった。

試掘調査を 2020 年 1 月 15 ～ 17 日、立会調査は 2020 年 1 月 9 日～ 11 月 9 日まで断続して行い、調査面積は 386.6 ㎡である。調査は埋蔵文化財調査室が行ない、堀内秀樹・香取祐一が担当した。

2. 調査の概要

改修工事は擁壁にかかる土圧の減少と、補修を目的とする。そのため、現在擁壁南西側の控え部分上部の盛土を、軽量盛土へ変更し、さらに長さ 14 ｍの山留め杭を幅 1 ｍ間隔で打設し、この山留め杭を、擁壁の反対方向へアースアンカーで固定する工事である。

調査対象エリアは掘削深度や調査方法により、A・B・C・D 区の 4 箇所に分かれる（2 図）。



1 図　調査地点位置図

A 区（2 図）

2 図下方、野球場の外壁からゲートを越え、南東から北へと傾斜するスロープを下り、擁壁上部に至る工事車両の動線が予定されている。スロープから擁壁上部までの不均一な地盤をフラットにするために、現地表面から T.P.13.2 ｍまでの掘削が予定される範囲である。面積は 204.0 ㎡である。

この区に 2 ｍ× 4 ｍのトレンチ 4 箇所の設定を予定していたが、試掘に先立ち、工事車両の通路として表土を T.P.14 ｍまで除去する工程に対し立会調査を行った際、一部東側で露出していた施工時期・意図も不明の通路状を呈した、コンクリートスロープが、北西側・西側の擁壁と一体であることが判明した。擁壁改修工事に際には、このコンクリートスロープを壊すことなく進めることになったため、T.P.13.2 ｍまで掘削する予定の、A-1 区を試掘調査対象に変更し、コンクリートスロープ上部の、表土除去のみを行った範囲を、A-2 区とした。

立会調査

当概区の地形は、野球場外周が盛り上がり、北西側に傾斜している。工事車両の通路として、T.P.14 ｍまでフラットな地盤を作る掘削に対し、立会調査を行った（7 ～ 10 図）。

A-1 区ではレンガ・コンクリートガラが大量に出土している。A-2 区では現況で東側に露出していたコンクリートスロープが、北西側・西側の擁壁と一体の通路であることが確認された（9、10 図）。またコンクリートスロープ北端部には、端部の形状に沿って排水溝が検出されている（10 図）。スロープ上部の覆土は、すべて近現代の盛土と思われる。

試掘調査

工事は上述コンクリートスロープを壊すこと無く進められることになったため、T.P.13.2 ｍまで掘削する必要のある範囲を A-1 区とし、トレンチを 3 箇所設置し、試掘調査を行った。

トレンチ１（3、11 ～ 15 図）

南西から北東２m、北西から南東４mの矩形を設定した。掘削深度は約 0.8 mである。GL-0.2 mで硬化面を検出した（1 面）。検出された遺構は２基でともにレンガ・コンクリートガラを含むことから、近現代の遺構と思われる。1 面下 0.3 ～ 0.4 mで土質に変化が見られたためプラン確認を行った（2 面）。南西側に約 0.4 mの円形のプランが４基検出され掘削を行った。板ガラス片などを含むしまりの弱い覆土で、円形に検出されることから、近現代の植栽痕と思われる。この２面以下を T.P.13.2 m まで掘削を行った（3 面）。南西から北東へ傾斜を持って堆積しており、現況地形の傾斜と一致する。坑底では縞状にプランが検出されたが、これは壁面の状況から覆土の傾斜を反映したものと思われる。坑底付近でもレンガ・コンクリートガラが検出されている。

トレンチ２（4、16 ～ 20 図）

南西から北東２m、北西から南東４mの矩形を設定した。掘削深度は約 0.8 mである。GL-0.2 mで灰・炭化物を含む面が検出された。土質にやや相違はあるが、トレンチ１の１面に相当すると考えられるが、それほどの硬化は見られない。また GL-0.6 ～ 0.9 mで土管を使用した排水溝が検出された。この排水溝はコンクリート枡を有し、北側へと傾斜する径 12.5 cm の土管が検出された。上記、立会調査で検出されたコンクリートスロープ端部の排水溝に接続していたと思われる（6 図）。

坑底で縞状のプランが検出されたが、これはトレンチ 1 同様に堆積土の傾斜によるものと思われる。トレンチ北東では大形コンクリートガラが検出されている。このコンクリートガラは、捨てコン様を呈している。

トレンチ３（5、21 ～ 23 図）

南西 5.4 m、北東 4.5 m、北西から南東２mの台形状のトレンチを設定した。これは北東側に立会調査で検出されたコンクリート基礎のためである。掘削深度は約 0.8 mである。

GL-0.4m で北西側に暗灰色砂層・焼土粒・炭化物を微量含む、しまりのやや強い層位が検出された。トレンチ１・２の表土下に検出される土質と類似が見られ、検出レベルも T.P.14 m前後と同レベルである。硬化の様相は一定ではないものの、A-1 区全体に面をなしていると考えられる。坑底で検出された P1 は、コンクリートスロープ基礎の掘方と思われる。P2 は堆積土の傾斜によるものと思われる。トレンチ北隅で P3 が検出されたが、坑底で検出されたコンクリートガラを含む撹乱と思われる。

B 区（2、24 ～ 26 図）

A-1 区での T.P.14 mまでの立会調査、および T.P.13.2 mまでの試掘トレンチ調査の際に、多量なレンガ・コンクリートガラの出土し、山留め杭打設の支障物が予想されたた。このため予め山留め杭の打設範囲に、重機による掘削を行った範囲を B 区とした。面積は 31.8 ㎡であるが、A 区・C 区ともに重複エリアを有する。概ね GL － 2.5 mまで掘削を行った。底部付近でも大形のレンガ・コンクリートガラを含んでいた。コンクリートスロープ端部の、排水溝の続きが検出されている。

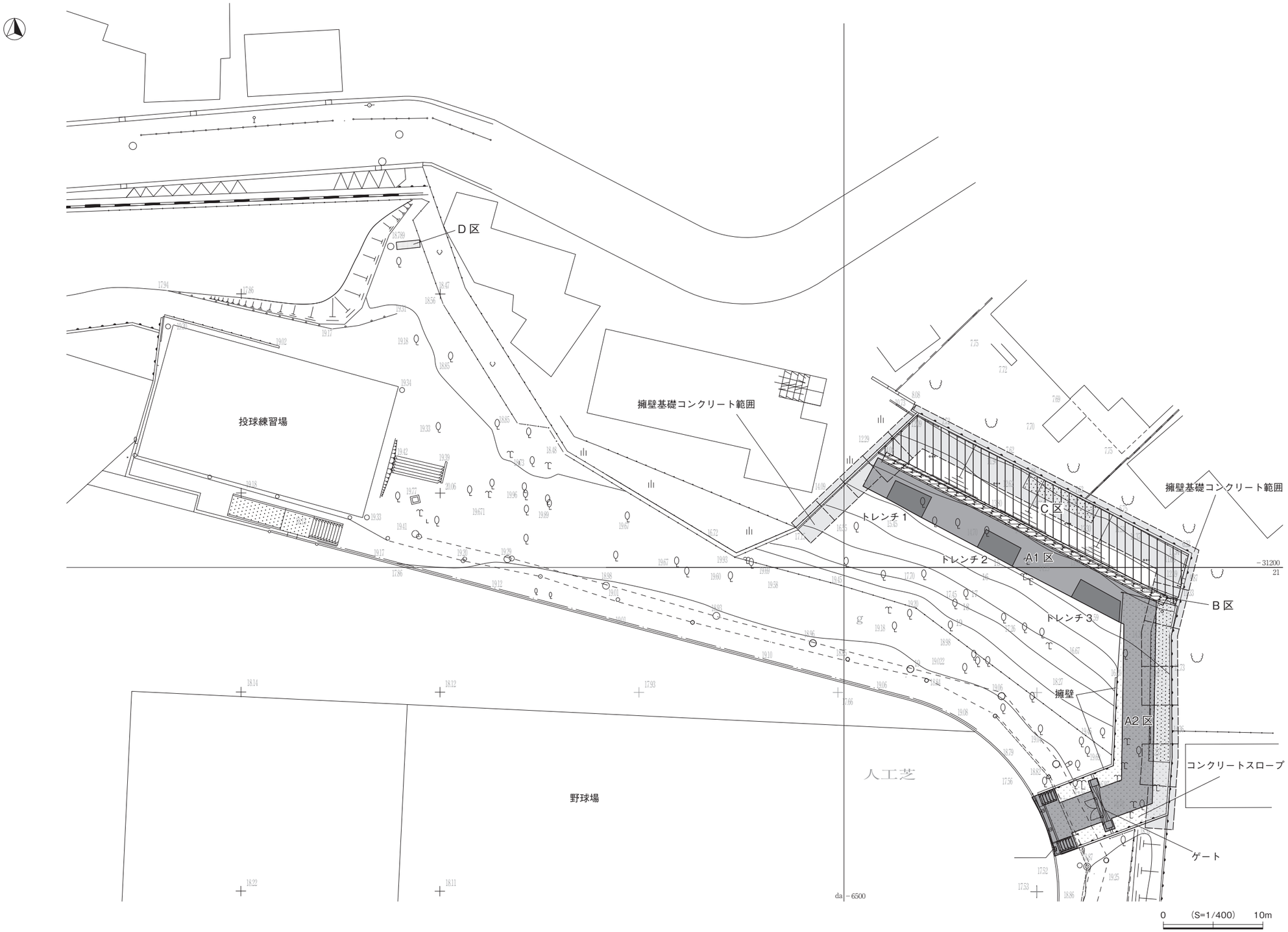
C 区（2、27 ～ 42 図）

山留め杭と北西側擁壁の間である。面積は 164.3 ㎡である（2 図）。この擁壁は昭和 11 ～ 12 年の構築されたもので、東京大学施設部に保存されている工事図面から、基礎コンクリートを有した逆 T 字上を呈し、基礎コンクリート範囲は、2 図の破線で示した範囲が考えられた。範囲内はすでに、擁壁構築時に掘削され、遺構の遺存度は低いことが予想されたため、立会調査で対応した。掘削深度は擁壁基礎コンクリート底部までで、北側 T.P.7.14 m、南側が T.P.6.42 mが予定されていた。

覆土は予想通り、擁壁の埋め立て土で形成され、コングリートガラ・レンガを多量に含む近現代の暗褐色土の盛土であった（27 ～ 34 図）。また擁壁に沿って、現況では傾斜面に 7.7 m幅でコンクリート土間が設置されていたが、全体では幅 1.6 m× 20.3 mの規模であることが判明した（6、29 図）。これは、構築時の擁壁上部を解体したものと考えられる。さらにこのコンクリート土間下部の、北側で擁壁に接した、コンクリート排水枡が検出されている（6、32 図）。規模は北東－南西約 1.1 m、北西－南東 0.9 mで、厚みは約 0.13 mである。検出標高は T.P.11.9 mである。A-1 区トレンチ 2 で検出された土管と接続していたと考えられる。

下部の覆土は、6 図 A 地点の T.P. 約 8.1 m以下に、青灰色粘土・シルトを微量含む粘性の強い、泥炭層に類似する黒色土が堆積していた（35、36 図）。黒色土上部には水付きローム、青色砂、黄色砂が不均質に堆積している。この黒色土は A 地点付近で検出標高が一番高く、北西側・南東側ともに低く検出され、予定された床付けレベルでは、上部に堆積していた暗褐色土に類似する覆土が坑底を覆っていた。

事前のボーリング調査の結果から、床付けレベルでは砂層が堆積し、雨水は自然浸透による排水が想定されていたが、この泥炭層に類似する黒色土は、浸透を阻害すると考えられたため、設計の変更が検討された。そこで


D 区
投球練習場
擁壁基礎コンクリート範囲
トレンチ１
トレンチ２
トレンチ３
A1 区
A2 区
C 区
B 区
擁壁
擁壁基礎コンクリート範囲
コンクリートスロープ
ゲート
人工芝
野球場
0 (S=1/400) 10m

2図　調査区配置図

黒色土の堆積厚を調べるために試掘を行った結果、黒色土の堆積は1.1 mで下部に砂層の堆積が確認された（38図）。予定された床付けレベルからさらに1.1 mレベルを下げることは、設計上無理があったため、浸透桝とポンプによる強制排水設備の設置へと変更され、これにともなう掘削範囲、北西－南東7.6 m、北東－南西1.7 m（6図　浸透桝設置部分）を、床付けレベルから1.1 m掘削を行った結果、坑底では北西側は黄橙色シルト・砂層、中央部は青灰色粘土・シルト層、南東部は上部と同じ、泥炭層に類似した黒色土であった。

D区

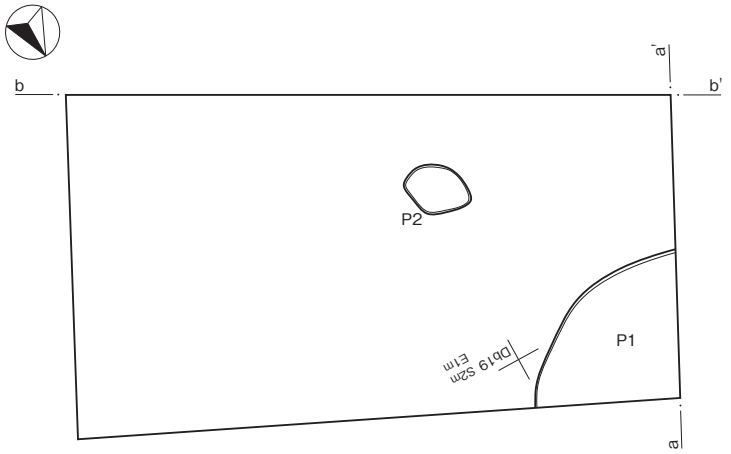
上述、C区での設計変更にともない、排水施設が必要となったため、C区から投球練習場北のD区で、既存の人孔に接続することとなった（2図）。

掘削範囲は接続桝および人孔へ接続する埋設管のための掘削範囲で、東西2.3 m、南北0.7 m、深さ0.65 mである。掘削土はすべて表土中であった（43図）。

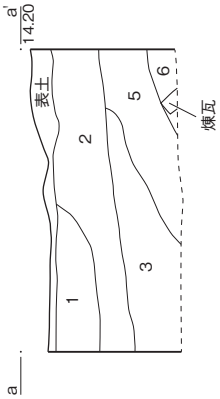
3. まとめ

今回の調査では、近世以前に遡る遺構、またそれにともなう遺物は検出されていないが、近現代に行われた大がかりな土木工事の一片を、うかがうことができた。

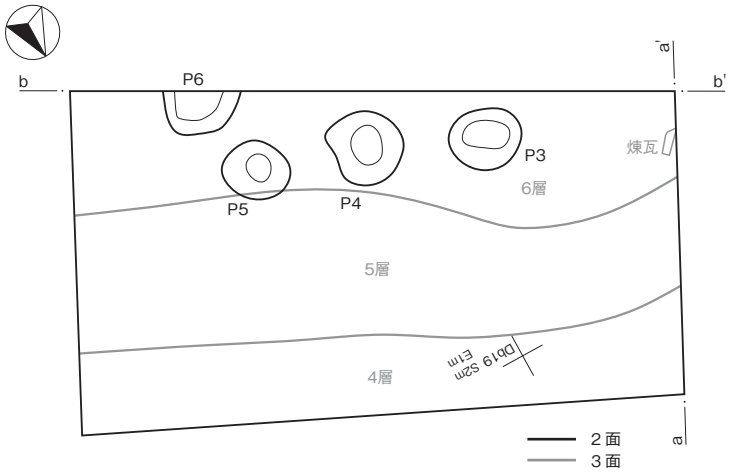
また、C区の最下部で検出された、泥炭層に類似する黒色土の帰属時期については、遺物が出土しなかったことから不明である。



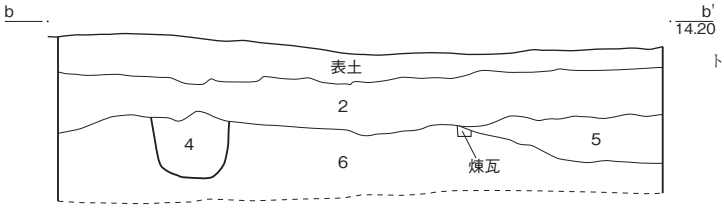
1面平面図



西壁土層図



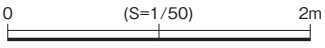
2･3面平面図



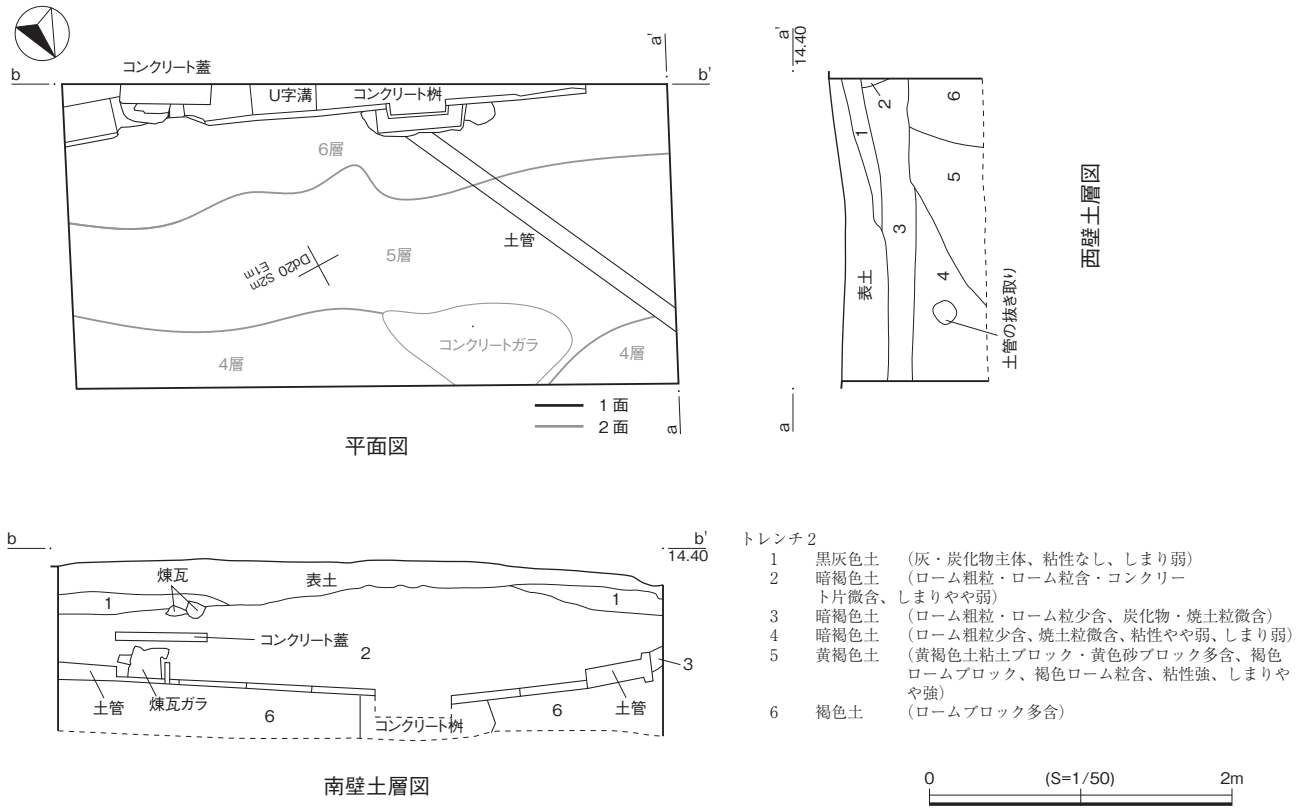
南壁土層図

トレンチ1

1	暗褐色土	(P1、ローム粗粒微量含、炭化物・焼土粒極微量含、粘性弱、しまりやや弱)
2	暗褐色土	(炭化物・焼土粒・ローム粗粒微量含、土部が硬化)
3	暗褐色土	(ロームブロック・ローム粒少量含、しまりやや弱)
4	暗褐色土	(P6、板ガラス含、炭化物微量含、根穴、しまり弱)
5	黒褐色土	(ロームブロック・ローム粒微量含、しまりやや弱)
6	黄褐色土	(ロームブロック主体、しまり弱)



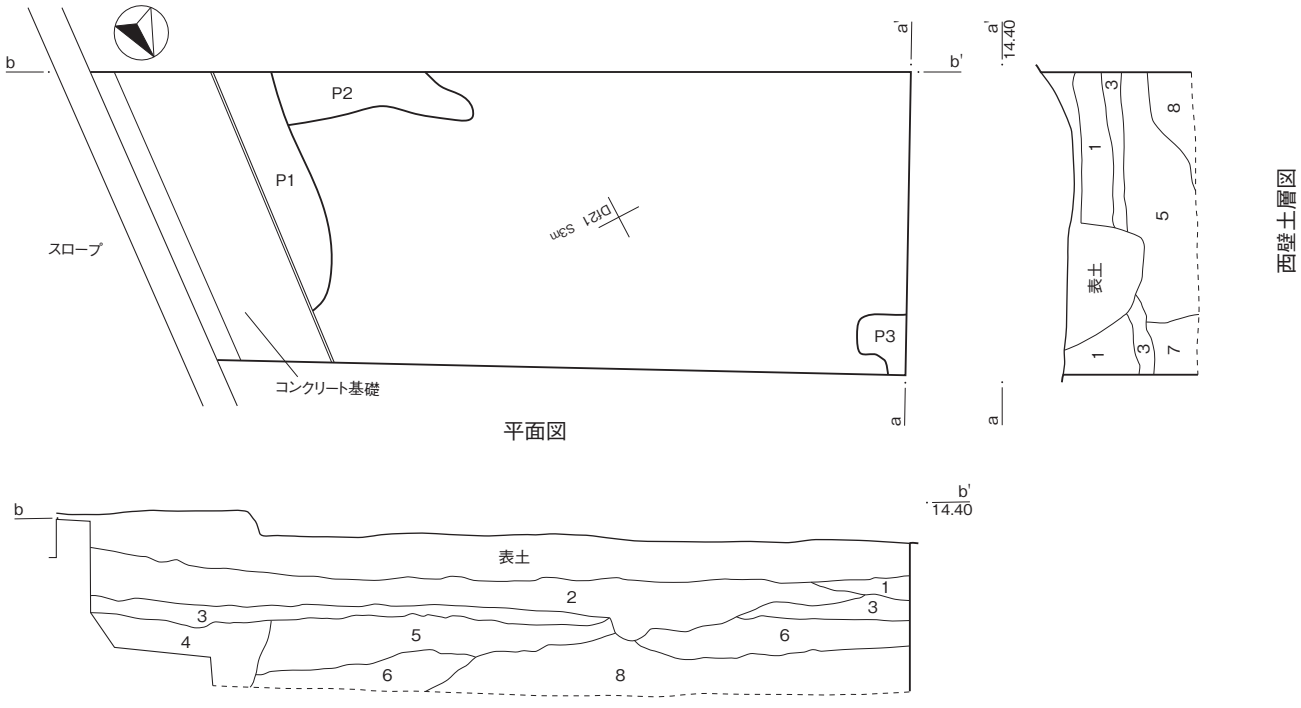
3図　トレンチ1　1面平面図



トレンチ2

1	黒灰色土	（灰・炭化物主体、粘性なし、しまり弱）
2	暗褐色土	（ローム粗粒・ローム粒含・コンクリート片微含、しまりやや弱）
3	暗褐色土	（ローム粗粒・ローム粒少含、炭化物・焼土粒微含）
4	暗褐色土	（ローム粗粒少含、焼土粒微含、粘性やや弱、しまり弱）
5	黄褐色土	（黄褐色土粘土ブロック・黄色砂ブロック多含、褐色ロームブロック、褐色ローム粒含、粘性強、しまりやや強）
6	褐色土	（ロームブロック多含）

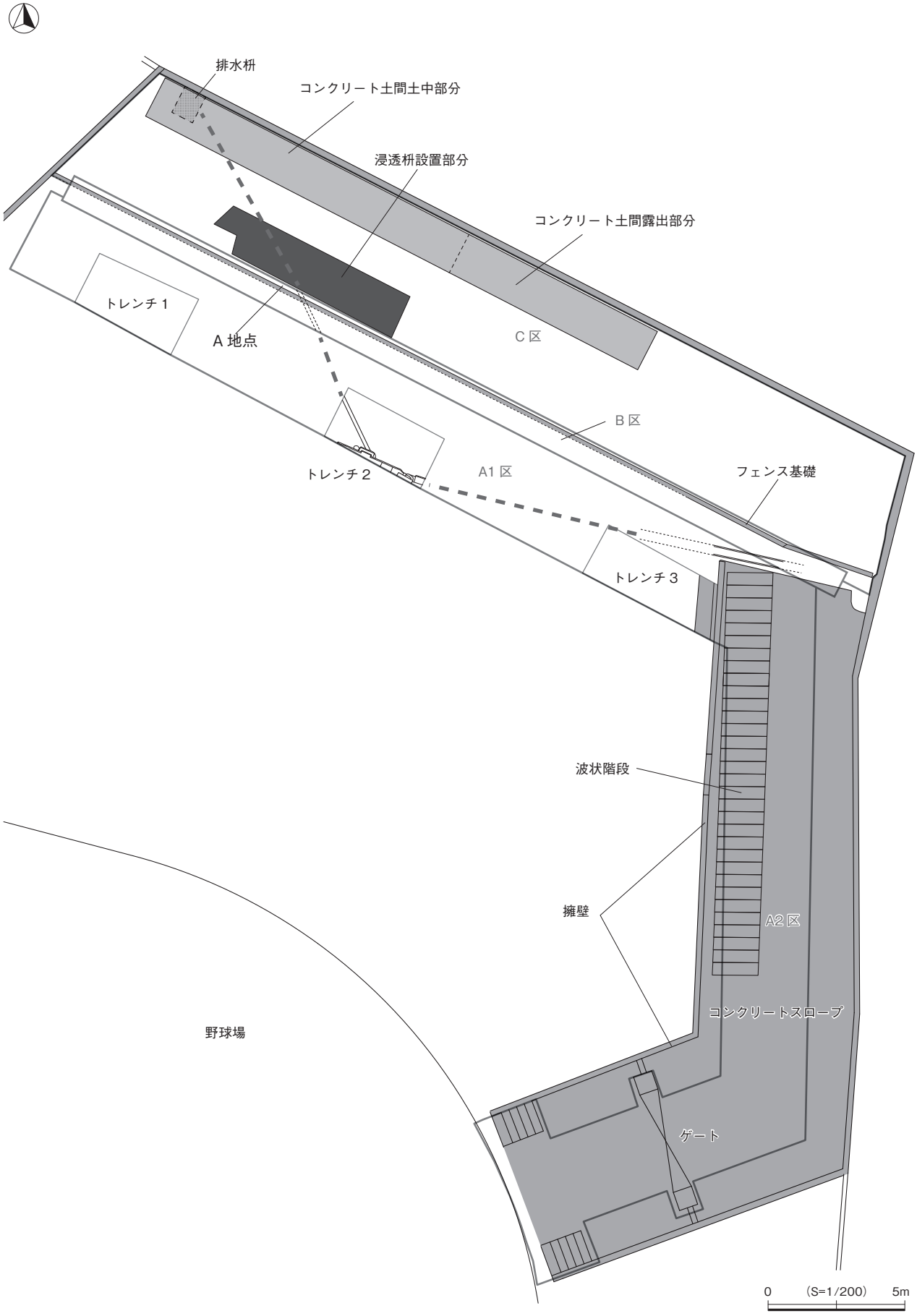
4図　トレンチ2



トレンチ3

1	暗灰褐色土	（暗灰色砂層・焼土粒・炭化物微量含、しまりやや強）
2	暗褐色土	（ローム粗粒微量含）
3	褐色土	（ロームブロック多量含、炭化物・焼土粒微量含、しまりやや強）
4	暗褐色土	（擁壁掘方、ロームブロック・ローム粗粒少量含、しまり弱）
5	暗褐色土	（ロームブロック・ローム粗粒・炭化物微量含）
6	暗褐色土	（炭化物・黄褐色土砂ブロック含、黄褐色粘土粒少量含）
7	褐色土	（ローム粒含、しまりやや弱、トレンチ底面柄部分の遺構掘方）
8	暗褐色土	（ローム粒含、ローム粗粒少量含、ロームブロック・炭化物・焼土粒微量含、しまりやや弱）

5図　トレンチ3



6図　検出された近現代の遺構

7図　A－1区掘削前状況（南東から）

8図　A－1区立会状況状況（北西から）

9図　A－2区立会状況状況（北東から）

10図　A－2区立会状況状況（北から）

11図　A－1区トレンチ1面検出状況（北西から）

12図　A－1区トレンチ1　2面検出状況（北西から）

13図　A－1区トレンチ1　3面検出状況（北西から）

14図　A－1区トレンチ1南西壁堆積状況（北東から）

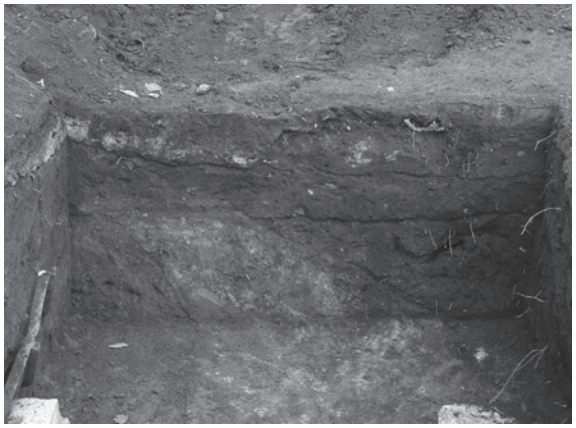
15図　A－1区トレンチ1北東壁堆積状況（南西から）

16図　A－1区トレンチ2排水溝検出状況（北西から）

17図　A－1区トレンチ2土管検出状況（北西から）

18図　A－1区トレンチ2北西壁堆積状況（南東から）

19図　A－1区トレンチ2検出状況（南西から）


20図　A－1区トレンチ2北西壁堆積状況（南東から）

21図　A－1区トレンチ3検出状況（南東から）

22図　A－1区トレンチ3南西壁堆積状況（北東から）

23図　A－1区トレンチ3北東壁堆積状況（南西から）

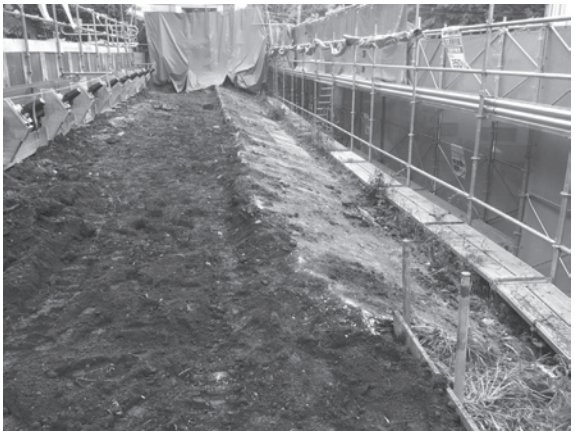
24図　B区掘削状況1（北西から）

25図　B区掘削状況2（北東から）

26図　B区掘削状況3（北東から）

27図　C区掘削状況1（南東から）

28図　C区掘削状況2（北西から）


29図　C区コンクリート土間検出状況（南東から）

30図　C区掘削状況3（北西から）

31図　C区掘削状況4（南から）

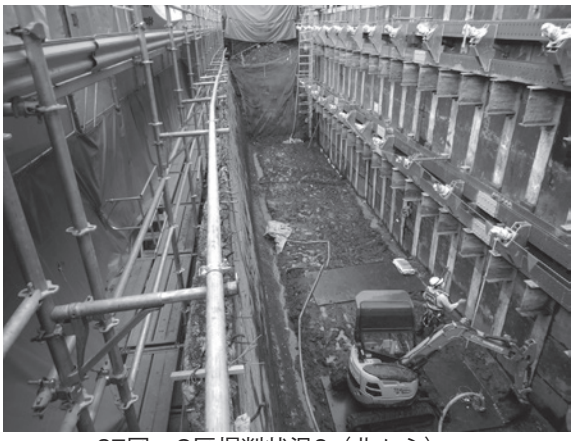
32図　C区排水枡検出状況（南東から）

33図　C区擁壁上部検出状況（北から）

34図　C区掘削状況5（北西から）

35図　C区A地点南西壁堆積状況（北東から）

36図　C区南西壁堆積状況（北東から）



37図　C区掘削状況6（北から）

38図　C区浸透枡設置部分試掘抗（北東から）

39図　C区浸透枡設置部分掘削状況（北から）

40図　C区浸透枡設置部分擁壁基礎コンクリート検出状況

41図　B区浸透枡設置部分南西壁堆積状況（北東から）

42図　B区浸透枡設置部分掘削状況（北西から）

43図　D区排水枡接続部壁堆積状況北から

44図　トレンチ1出土遺物

45図　トレンチ2出土遺物

46図　トレンチ3出土遺物

2. 本郷 298　農学部 1 号館機械設備

所 在 地　東京都文京区弥生 1-1-1（文京区 N0.47 本郷台遺跡群内）
調査期間　2020 年 6 月 8 日～ 16 日
調査面積　148 ㎡
調査担当　堀内　秀樹

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、農学部 1 号館ドライエリア内および南西側の 2 箇所に排水管の整備を計画している（1 ～ 2 図）。整備計画位置は、「文京区 No.47 本郷台遺跡群」として周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されており、工事を行うにあたって埋蔵文化財の状況を確認する必要があった。計画位置は、農学部 1 号館建築時に平坦化したことによって建築前の GL から 3m程度削平を行っていると判断された。しかし、江戸時代の当該地は水戸藩邸内であり、削平が行われたとしても地下室や井戸、深度の大きな遺構が遺存している可能性がある。こうしたことから、工事に先立って埋蔵文化財の有無を確認するための試掘を行うこととなった。

試掘調査は、2020 年 6 月 8 日～ 16 日に行い、調査面積は 148 ㎡である。調査は埋蔵文化財調査室が行ない、同室員堀内秀樹が担当した。

2. 調査の概要

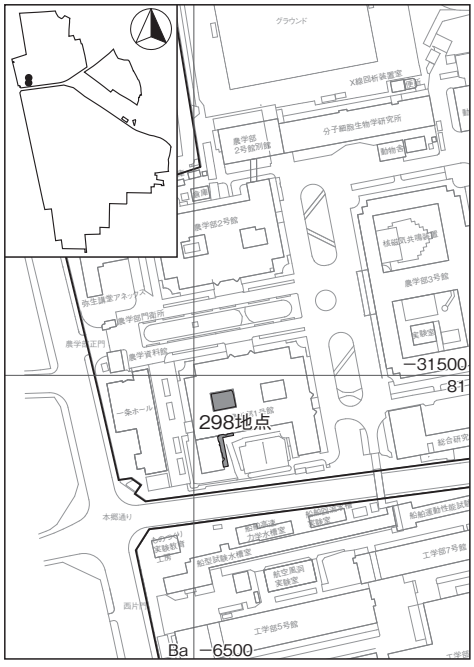
調査は、工程によって 6 月 8 日～ 12 日まで A 区（農学部 1 号館南側）、15 日～ 16 日に B 区（農学部 1 号館中庭）の順で、表土を重機によって掘削した後、埋蔵文化財の状況について確認を行った。以下、各区ごとに説明する。

（1）A 区（3、5 ～ 8 図）

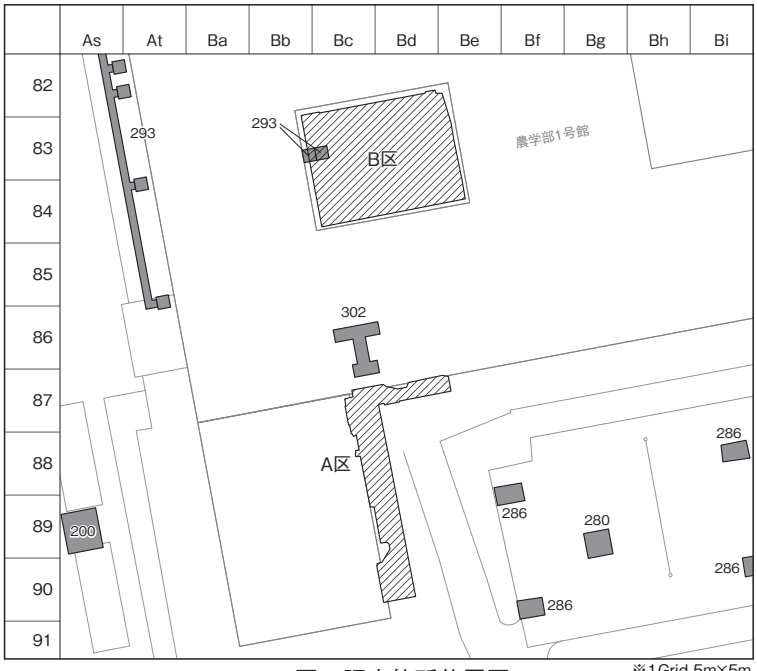
調査区は、3 図のように配管埋設計画に沿って設定されたが、北側で東に折れる矩形を呈しており、規模は、南北部分が南北 16m、幅 2.5m、東西部分が東西 8 m、幅 1.5 mを計測する。調査では、調査区全体に西側にある 1 号館のフーチングが張り出していることが確認され、南北部分の西側は建物から 1.5m付近まで撹乱されていた。東側も 1 号館に伴う下水管（土管）と桝で壊されており、関東ローム面が確認されたのは、全体図一点破線で示した東側の一部に過ぎなかった。また、東西部分は全域にフーチングによって撹乱されていた。このフーチングの埋土からは、比較的多くの近世の遺物が出土しており、近世の遺構を壊した土で埋め戻されたと推定される（8 図）。

調査区南側で遺存していた自然堆積層は、立川ローム層Ⅸ層から確認され、18.8m付近で赤色パミスが多く含まれるⅩ層下部、18.4m以下には水性土壌化したロームであった。

以上、A 区は、大部分が建物基礎によって壊されて



1 図　調査地点位置図



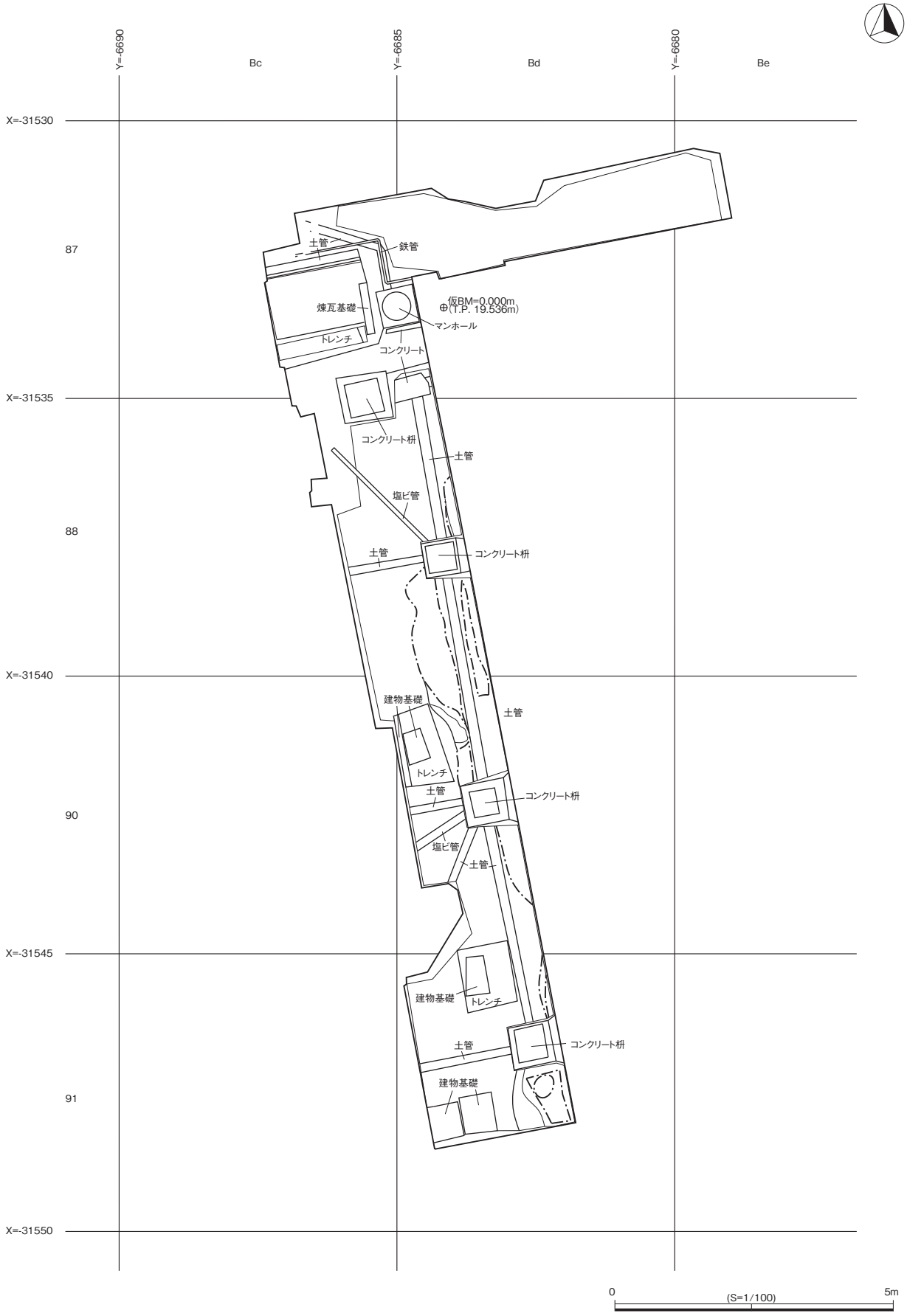
2 図　調査箇所位置図
※1Grid 5m×5m

おり、近世以前に遡る遺物は近代以降撹乱の埋土から出土しているもの、遺構は確認できなかった。

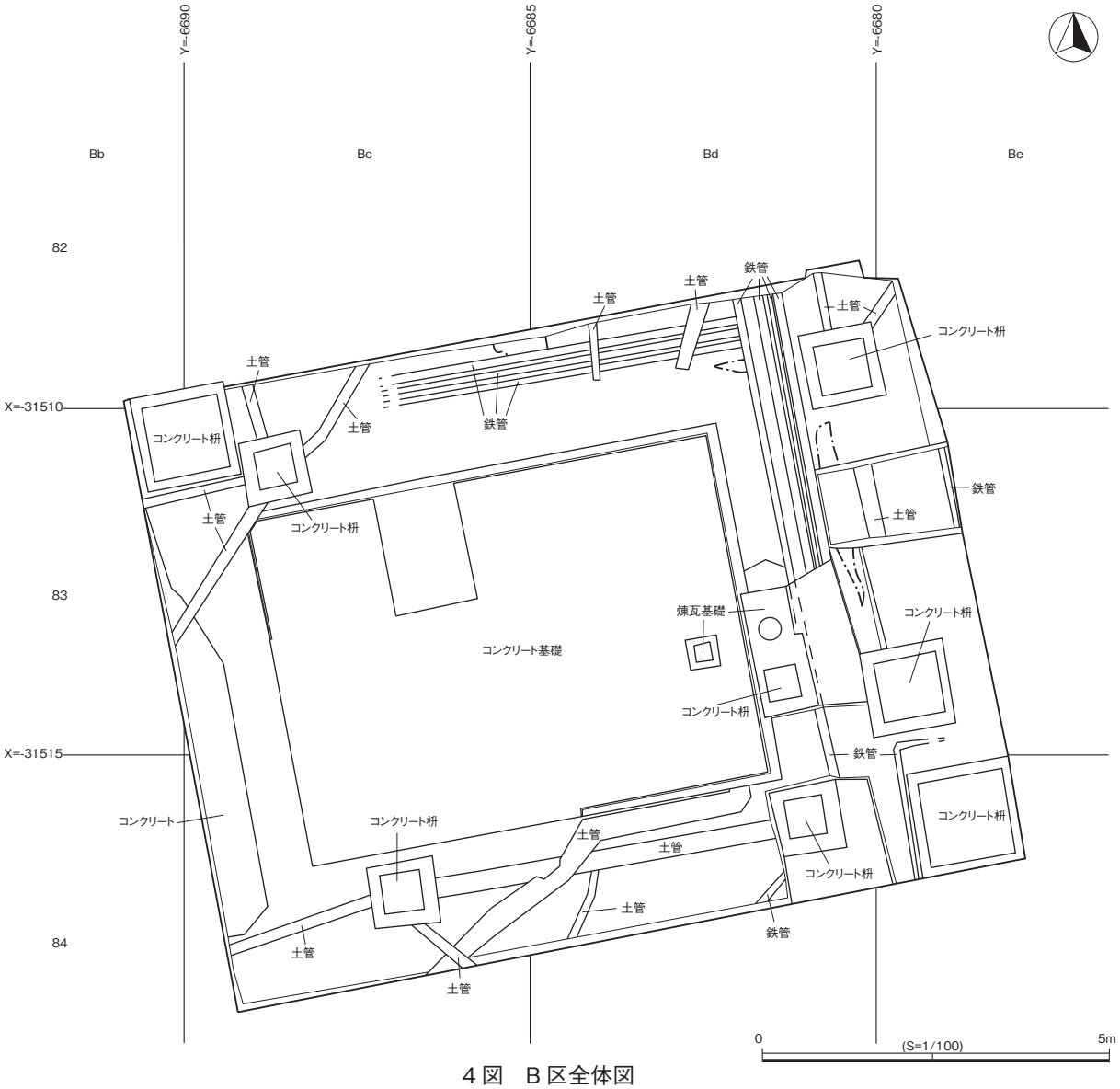
(2) B区（4、9～11図）

調査区は、農学部1号館の西側中庭全域である。東西11.5m、南北9mの方形を呈する（4図）。調査以前から多くの地下埋設物の存在が図面などによって知られたが、表土を剥がしたところ、ほぼ全域が農学部1号館に関連する施設によって削平されていた。中央には東西7m、南北5mのコンクリート製の基礎とその周囲には基礎を避けるように配管やそれに伴う桝がほぼ隙間なく埋設されていた。自然堆積層（ローム層）が確認されたレベルで遺構確認を行ったが、ロームが確認できたエリアは、全体図一点破線で示したごく一部であった。こうした埋設施設の埋土の中からは、近世の遺物が少量確認されている（11図）。

以上、B区は、大部分が建物に付帯する施設によって壊されており、近世に遡る遺物は近代以降の撹乱の埋土から少量出土しているものの、遺構は確認できなかった。


Y=-6690
Bc
Y=-6685
Bd
Y=-6680
Be
X=-31530
X=-31535
X=-31540
X=-31545
X=-31550
87
88
90
91
土管
鉄管
煉瓦基礎
仮BM=0.000m
(T.P. 19.536m)
マンホール
トレンチ
コンクリート
コンクリート枡
塩ビ管
建物基礎
0
(S=1/100)
5m

3図　A区全体図



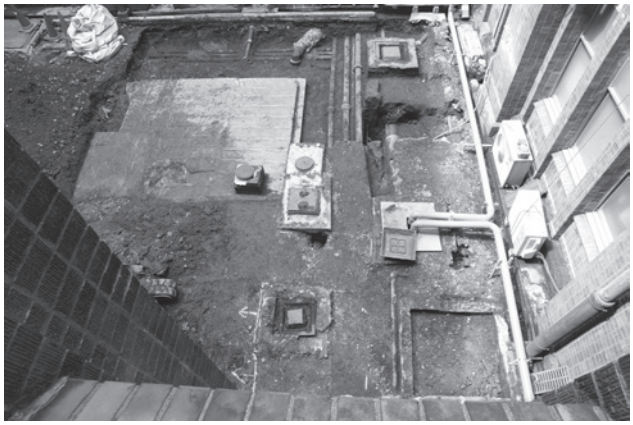
4図　B区全体図

5図　A区南北部分（北から）

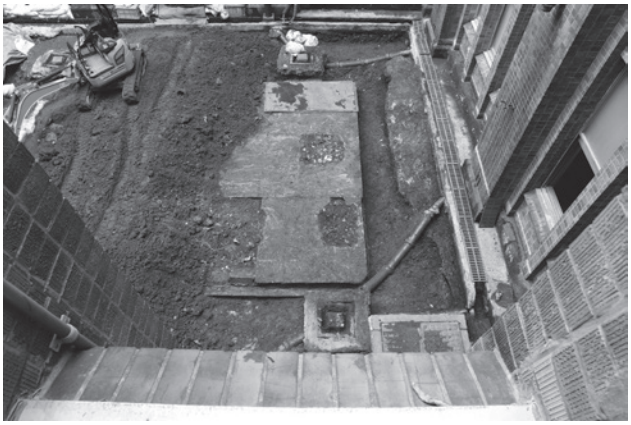
6図　A区南壁フーチング埋設状況

7図　A区東西部分（東から）

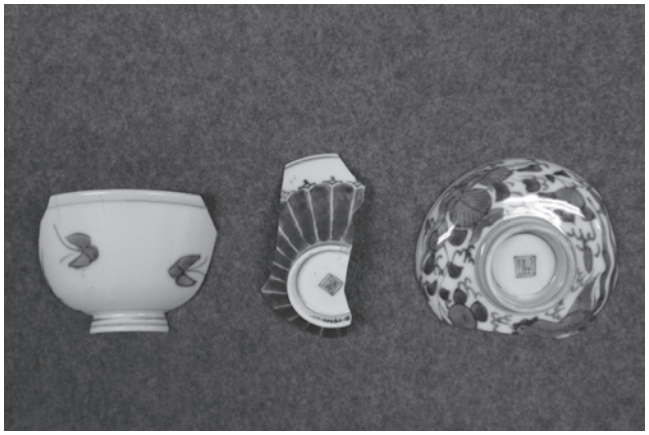
8図　A区出土遺物



9図　B区東側（南から）



10図　B区西側（北から）



11図　B区出土遺物

第Ⅱ章　調査資料の整理・研究および公開・活用

第１節　調査資料の整理

１．整理事業概要

本年度は、発掘調査報告書刊行へ向けて以下のような整理作業を行った。

・本郷 19（HN）看護職員等宿舎１号棟・本郷 21（MRI）臨床試験棟・本郷 48（HN Ⅱ）看護職員等宿舎３号棟報告書執筆、編集、刊行。

・本郷 15（YS）薬学部南館・本郷 28（FPS）薬学部資料館　報告書執筆、編集、刊行。

・本郷 25（HND）　医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場　遺構デジタルトレース。

・本郷 54（HES99）　総合研究棟（文・経・教・社研）遺構写真リネーム。遺物実測。

・本郷 60（HWK6）　医学部附属病院基幹整備外構施設等　遺構図版作成。

・本郷 65（LS03）　法学系総合研究棟　遺構実測図スキャン・補正、土層注記デジタル化。

・本郷 66（YGS02）　薬学系総合研究棟１期　遺物実測、写真撮影。

・本郷 68（INC）　インキュベーション施設　遺構実測図スキャン・補正、土層注記デジタル化。遺物デジタルトレース、写真合成、図版作成。

・本郷 71（HEQ04）　地震研究所総合研究棟　遺構実測図スキャン・補正、土層注記デジタル化。

・本郷 74（HHN308）　医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期遺構実測図スキャン・補正、土層注記デジタル化。

・本郷 76（HVP06）　ベンチャープラザ　遺構実測図スキャン・補正、土層注記デジタル化。

・本郷 78（HJF06）　情報学環・福武ホール　遺物写真撮影。

・本郷 81（HEA07）　経済学研究科学術交流棟　遺物デジタルトレース、写真合成。

・本郷 87（HTG08）　東京都下水道　遺物分類、実測。

・本郷 93（H7I09）　伊藤国際学術研究センター　遺物分類、接合、抽出。

・本郷 169（HEK14）　文系総合研究棟　遺物実測。

・本郷 266（HKD18）　基幹環境整備（言問通り横断管路）電気管路　遺構個別図版作成。報告書執筆。

２．外部委託

・本郷 28（FPS）　薬学部資料館　石器実測。

・本郷 54（HES99）　総合研究棟（文・経・教・社研）遺構個別図、全体図作成。

・本郷 245（HCRB17）　クリニカルリサーチセンターＢ棟　遺物基礎整理、実測、写真撮影、デジタル図版作成。

・本郷 266（HKD18）　基幹環境整備（言問通り横断管路）電気管路　遺物デジタルトレース、図版作成。

第２節　調査・研究成果の公開・活用

１．報告書・年報

・東京大学埋蔵文化財調査室 2020『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 15　東京大学本郷構内の遺跡　看護職員等宿舎１号棟　臨床試験棟　看護職員等宿舎３号棟地点（1）』

・東京大学埋蔵文化財調査室 2020『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 16　東京大学本郷構内の遺跡　薬学部南館地点　薬学部資料館地点』

・東京大学埋蔵文化財調査室 2020『東京大学構内遺跡調査研究年報 13（2019 年度）』

２．広報活動

ホームページ

『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 14 東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点　研究編』PDF 版掲載。

３．教育・普及

・調査研究プロジェクト６『18・19 世紀の福建・広東諸窯の貿易陶磁』３月刊行。

4. 資料の提供・貸出

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料
東京国立博物館	展示	平成館考古展示室常設展	1.色絵大皿片（伊万里・古九谷様式）/HW/包含層 2.色絵亀甲文皿片（伊万里・古九谷様式）/HW/C2層 3.染付吹墨鷺図皿片（伊万里）/HHC/L32－1 4.色絵花卉文大皿片（伊万里・柿右衛門様式）/HGS/391号 5.染付八宝文大皿片（景徳鎮窯）/HGS/包含層 6.白釉鉄絵人物草花文壷片（磁州窯）/HGS/包含層、U/包含層 7.色絵福字鉢片（呉須赤絵）/HGS/包含層 8.織部脚付平向付片（美濃）/HGS/46、532号 9.織部筒向付片（美濃）/HGS/包含層 10.染付脚付向付片（景徳鎮窯）/HGS/包含層 11.染付八角瓢形徳利片（景徳鎮窯・祥瑞）/HGS/678号 12.染付水注蓋片（景徳鎮窯）/HGS/包含層 13.色絵皿片（景徳鎮窯）/HGS/496、185号 14.黄地縁彩鉢片（大明嘉靖年製）/HW/C2層 15.色絵壺片/HW/C2層、包含層　HGS/617号 16.色絵大皿片（呉須赤絵）/HGS/678号 17.黒釉兎毫斑碗片（建窯）/HN/SK299 18.染付小杯（五良大甫呉祥瑞造）（景徳鎮窯）/HGS/包含層 19.魚屋茶碗片/HN/SK299 20.青磁袴腰形香炉片（龍泉窯）/HN/SK299 21.青磁獅子紐香炉蓋片（龍泉窯）/HN/SK299 22.青磁算木文瓶片（龍泉窯）/HN/SK299 23.イズニク陶器皿片/HW/C2層、SD422 24.塩釉水注片（ドイツ）/HN/SK299 25.デルフト陶器片/HGS/包含層　U/包含層
国立 歴史民俗博物館	展示	総合展示「都市の時代」資料展示	1.灰和碗（呉器手）/HW/D面焼土 2.灰紬鉄絵碗（京焼風）/HW/D面焼土 3.青緑粕輪剥皿（内野山窯）/HW/D面焼土 4.染付皿（草花文）/HW/D面焼土 5.染付皿（菊文）/HW/D面焼土 6.輪剥皿/HW/D面焼土 7.三島手鉢/HW/D面焼土 8.染付大皿（網干文）/HGS/618号 9.染付大皿（海浜文）/HGS/678号 10.染付瓶（草花文）/HGS/537号 11.染付組皿（草花文）/HGS/537号 12.かわらけ/HHC/池 13.木製品（折敷）/HHC/池 14.木製品（はし）/HHC/池 15.金泥かわらけ/HIKN/SK4516
JPタワー学術文化 総合ミュージアム	展示	インターメディアテク　COLONNADE3 常設展	1.文久永寶/HJF06/SK10　1点 2～7.碗、皿、小坏「双葉葵文」/HJF06/SK10 8～10.碗、小坏「鏡文」./HJF06/SK10 11～13.九谷焼小坏/HJF06/SK1014～25.染付碗./HJF06/SK10 26～27.染付皿/HJF06/SK10 28.染付変形皿/HJF06/SK10 29.染付蓮華/HJF06/SK10 30.褐釉水注/HJF06/SK1031～36.上絵薄手坏/HJF06/SK10 37.染付仏飯器/HJF06/SK10 38.染付御神酒徳利/HJF06/SK10 39.染付筆立/HJF06/SK10 40.灰釉鳥餌水入/HJF06/SK10 41.硯/HJF06/SK10

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料
JPタワー学術文化総合ミュージアム	展示	インターメディアテク　COLONNADE3 常設展	42.ミニチュア刀柄/HJF06/SK10 43、44.キセル/HJF06/SK10 45.ミニチュア鉢/HJF06/SK10 46、47泥面子/HJF06/SK10 48～57碁石状土製品/HJF06/SK10 58.色絵紅坏/HJF06/SK10 59.染付蓋物/HJF06/SK10 60.色絵角形段重/HJF06/SK10 61.染付油壺/HJF06/SK10 62.鉄絵鬢水入/HJF06/SK10 63～72.装身具/HJF06/SK10 73.鏡/HJF06/SK10 74～78.簪/HJF06/SK10 79.襟留/HJF06/SK10 80～96.寛永通宝四文銭/HJF06/SK10
石川県立歴史博物館	撮影 借用 掲載	特別展『加賀藩江戸屋敷 －本郷邸の儀礼とくらし』 2020年10月10日～11月8日 資料展示、図録掲載、動画放映	御殿下記念館地点、医学部附属病院地点、医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点、医学部附属病院入院棟A地点、情報学環・福武ホール地点出土 考古資料：164点
（公財）瀬戸市文化振興財団	借用 掲載	企画展『時期生産の成立と展開 －江戸後期の瀬戸窯と美濃窯』 2020年10月17日～12月6日	医科学研究所附属病院診療棟、総合研究棟地点出土　考古資料：90点 同写真資料：2点 医学部附属病院　給水設備棟建設地点出土　考古資料：7点
（株）ミネルヴァ書房	掲載	『猫と東大－猫を愛し、猫に学ぶ』 東京大学広報室編 ミネルヴァ書房　2020年11月10日発行	工学部14号館地点、医学部附属病院入院棟A地点出土　猫の土人形写真　2点
両角　まり	掲載	大東文化大学オープンカレッジ秋期講座 「”一目瞭然”「見て」学ぶ歴史学」 配付資料 2020年10月16日講演	東京大学構内遺跡出土　土製品写真：33点
岩浪　雛子	調査/研究	修士論文執筆のための調査	東京大学構内遺跡出土　紅皿
（独法）奈良文化財研究所	掲載	第23回古代官衙・集落研究会報告 『灯明皿と官衙・集落・寺院』 奈良文化財研究所編 クバプロ　2020年12月11日発行	医学部附属病院地点出土　灯明皿写真：23点
江戸東京博物館	調査/研究	地域展『発掘された日本列島2021』 展示のための調査研究	東京大学構内遺跡出土　金箔瓦
ベネッセ	掲載	雑誌『ねこのきもち』 ベネッセ　2021年3月10日発行	工学部14号館地点、医学部附属病院入院棟A地点出土　猫の土人形写真　2点
木簡学会	掲載	『木簡研究』第42号 木簡学会編　2021年2月26日発行 インターネット公開	医学部附属病院地点出土　木簡図版、写真

1　調査地点名

HGS：御殿下記念館、HHC：医学部附属病院中央診療棟（病中）・設備管理棟（エネセン）・給水設備棟（給水）・共同溝（共同溝）、HIKN：医学部教育研究棟、HJF06：情報学環・福武ホール、HN：医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟、HW：医学部附属病院入院棟A、U：山上会館

附　埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成 22 年 3 月 25 日東大規則第 133 号）（抜粋）

（略）

（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）

第 17 条　東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年 7 月 11 日制定）

埋蔵文化財調査室規則

平成元年 7 月 11 日
評議会可決

（設置）

第 1 条　キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業務）

第 2 条　調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

(1)　遺跡調査に対する総括的指導助言
(2)　文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
(3)　遺物等の保管及び管理
(4)　遺跡調査の方法に関する調査研究
(5)　前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

（室長）

第 3 条　調査室に室長を置く。

2　室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。

3　室長は、調査室の業務を総括する。

（室員）

第 4 条　調査室に室員若干名を置く。

2　室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

（庶務）

第 5 条　調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。

附　則

この規則は、平成 8 年 5 月 21 日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成 8 年 5 月 11 日から適用する。

附　則　　この規則は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	佐藤　宏之
室員（キャンパス計画室准教授）	堀内　秀樹
室員（キャンパス計画室助教）	成瀬　晃司
室員（人文社会系研究科特任助教）	増田　晴夫（～ 2021 年 3 月）
室員（キャンパス計画室助手）	大成　可乃
室員（キャンパス計画室助手）	追川　吉生

教務補佐員	小川　祐司
教務補佐員	香取　祐一
事務補佐員	青山　正昭
事務補佐員	今井　雅子
事務補佐員	大貫　浩子
事務補佐員	小林　照子
事務補佐員	杉浦　あかね
事務補佐員	渡邊　法彦

報　告　編

東京大学構内遺跡発掘調査報告

東京大学本郷構内の遺跡

東京都下水道地点発掘調査報告

D 区　SI1

D 区　SI1 出土土器

例　　言

1. 本報告は、東京都下水道局北部第一下水道事務所が、本郷構内で実施した下水道再構築に伴う埋蔵文化財発掘報告である。
2. 本地点の略称は「HTG08」とする。但し出土遺物への注記は、調査年度を反映して2008年度「HTG08」、2009年度「HTG09」と記載している。また2008年度調査時には、各区名称に工事名称を引用したため、A区が1、B区が2、C区が3と付されている。
3. 調査地点は東京都文京区本郷7丁目3番1号、東京大学本郷構内に所在している。
4. 調査面積は46.16㎡（A区15.6㎡、B・C区9㎡、D区12.56㎡）であった。
5. 本地点は文京区№47「本郷台遺跡群」内に位置している。
6. 本地点の試掘調査・事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、試掘調査は成瀬晃司、事前調査は原　祐一が担当した。
7. 調査期間は、以下の通りである。

   A～C区

   試掘調査　2008年9月11、12日

   事前調査　2008年12月7日～25日

   基礎整理作業　2021年3月9日～10日

   報告書編集　2021年4月13日～6月11日

   D区

   事前調査　2009年11月27日～12月8日

   基礎整理作業　2016年8月9日～9月15日、10月7日～26日、11月4日

   報告書編集　2021年4月13日～6月11日
8. 本報告の編集は成瀬が行った。
9. 執筆分担は以下の通りである。

   第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第1節、第Ⅳ章第1節　成瀬晃司

   第Ⅰ章第3節、第Ⅲ章第2節、第Ⅳ章　山下優介
10. 遺構写真は原が、遺物写真は青山正昭が撮影した。
11. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、東京大学柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）内にて保管、運用している。
12. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して敬意を表する。（敬称略、五十音順）

    植木雅博　小林　嵩　轟　直行　平石冬馬　加藤建設株式会社　清水建設株式会社　東京大学施設部　東京都下水道局　文京区教育委員会

発掘調査参加者

加藤建設株式会社

整理作業参加者

相川美香子　青山正昭　今井雅子　清水　香　杉浦あかね（埋蔵文化財調査室）　柴原聡一郎　増子義彬（考古学研究室大学院生）

凡　　例

1. 遺構番号は 1 から通し番号を付した。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。
   SB：建築遺構　SD: 溝　SK：土坑　SI：竪穴住居　SP：ピット　SU 地下室
2. 本文中に記載した遺構番号は、各区ごとに 1 から番号を付した。
3. 遺構実測図の縮尺は、1/50 である。
4. 遺物実測図は縮尺は、1/3 である。
5. 遺構断面図に記載された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、基標番号「郷（3)」弥生一丁目 1　弥生町交番前（T.P.：20.6682 m）から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお「郷（3)」の値は、平成 20 年 7 月東京都土木技術センター（現：東京都土木技術支援・人材育成センター）刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。
6. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
   ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
   ・＼――／は、口唇部の口銹を表している。
   ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
   ・－ －は、断面を表している。
   ・擂鉢の↓――↓は、体部擂目の範囲を表している。
   ・口唇部の＼←→／は、敲打痕を表している。
7. 本文中に記載した陶磁器・土器類は、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（いわゆる東大分類）の最新バージョンである『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類（東京大学埋蔵文化財調査室 2016)、および「東京大学構内遺跡出土土人形・玩具の分類」（安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012）に準拠している。
8. 本地点の調査では、調査区の形状に適した任意点を設定して測量を行ったが、その後に作成した東京大学本郷構内遺跡グリッド（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）を用いて表記した。なお東京大学本郷構内遺跡グリッドの方眼北は、真北より 2 分 20 秒西偏している。

○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

○生産地

A－輸入陶磁器

- A1　景徳鎮窯系
- A2　漳州窯系
- A3　徳化窯系
- A4　龍泉窯系
- A5　宜興窯系
- A6　朝鮮
- A7　ベトナム
- A8　ヨーロッパ
- A9　福建・広東系
- A10 西アジア

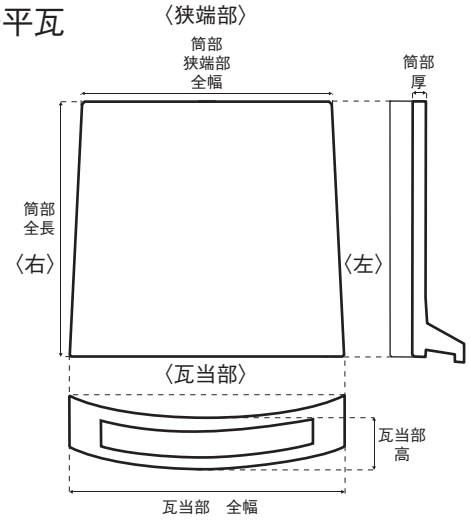
B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
Ⅰ－万古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－薩摩系
R－三田系
S－飯能系
Z－不明

○器種

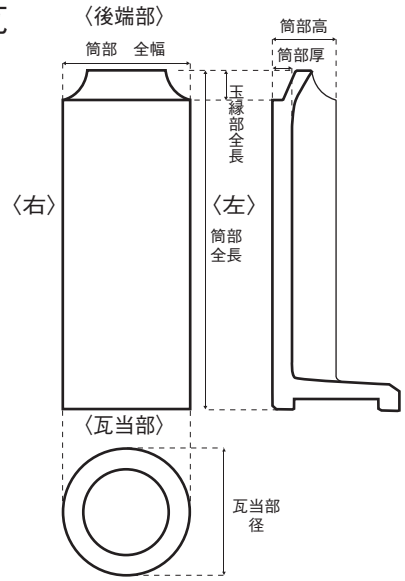
1. 碗	2. 皿･平鉢	3. 大皿･大皿鉢	4. 燗徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉･火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺･甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 漫瓶	29. 擂鉢	30. 餌入れ
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	
63. あんか	64. 煙硝擂鉢	65. 乳棒	66. 硯屏	67. 釜

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類

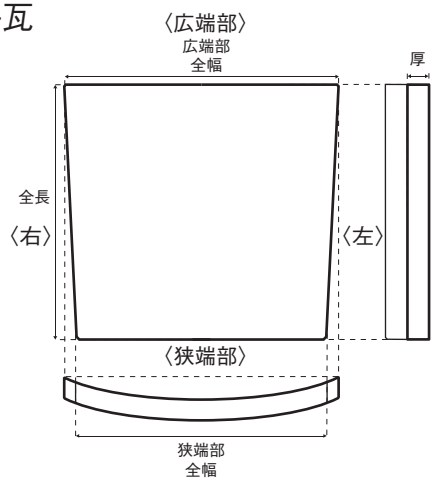
軒平瓦



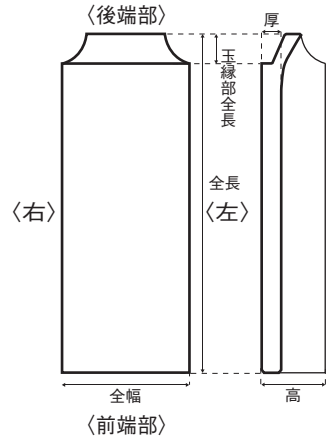
軒丸瓦



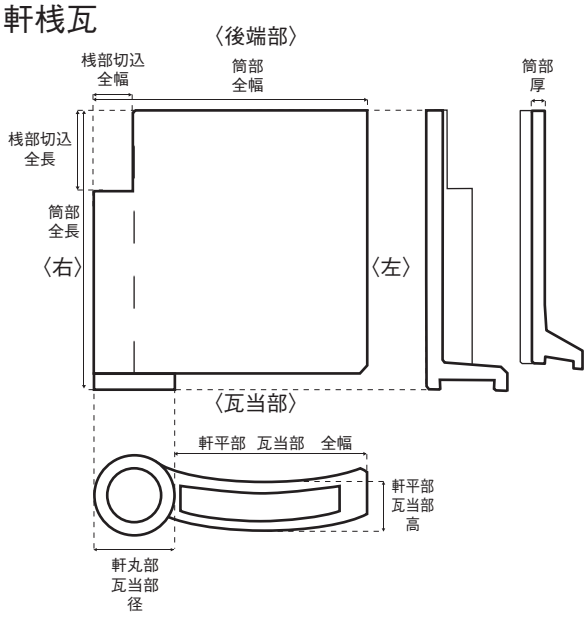
平瓦



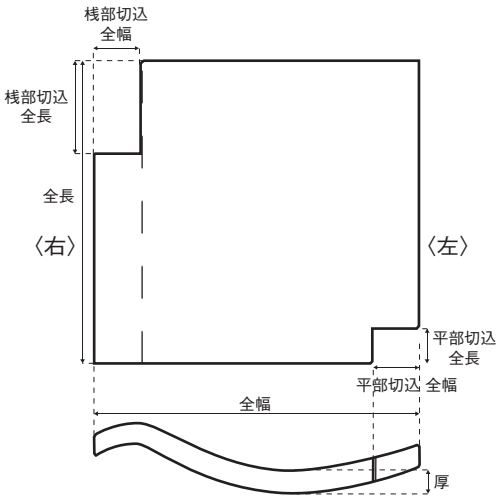
丸瓦



軒桟瓦

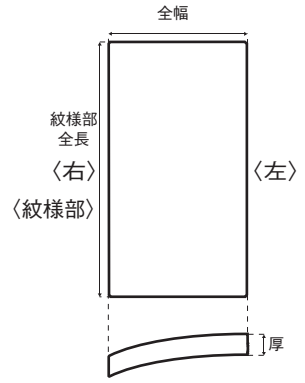


桟瓦

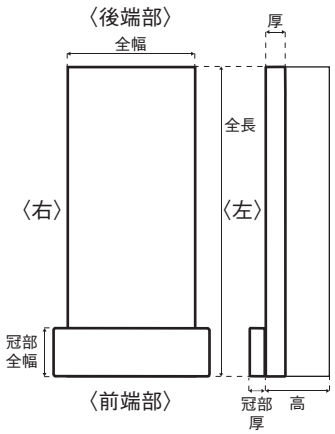


瓦凡例(1)　軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、軒桟瓦、桟瓦

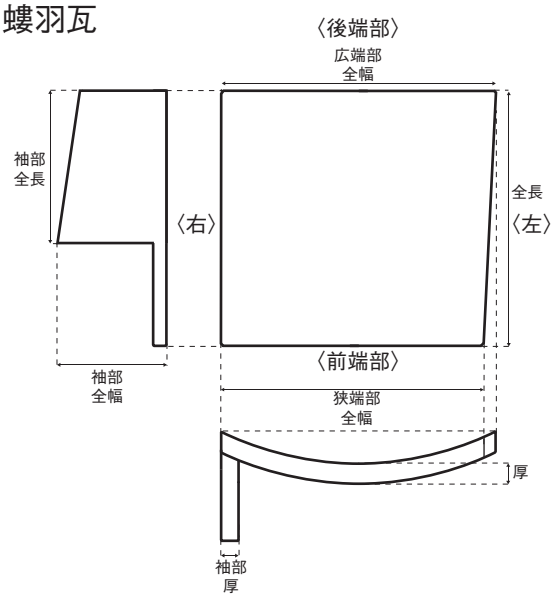
熨斗瓦



冠瓦



螻羽瓦



瓦凡例(2)　熨斗瓦、冠瓦、螻羽(けらば)瓦

東京大学本郷構内の遺跡

東京都下水道地点発掘調査報告

目　　次

例　言
凡　例
目　次

第Ⅰ章　調査の経緯と概要 …… 79
　第１節　調査に至る経緯 …… 79
　第２節　調査の方法と経過 …… 79
　第３節　調査の地理的・歴史的環境 …… 79

第Ⅱ章　Ａ～Ｃ区（2008 年度調査地点）の成果
　第１節　Ａ区 …… 81
　第２節　Ｂ区 …… 81
　第３節　Ｃ区 …… 81

第Ⅲ章　Ｄ区（2009 年度調査地点）の成果
　第１節　江戸時代の遺構と遺物 …… 83
　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 88

第Ⅳ章　まとめ
　第１節　調査の成果 …… 91
　第２節　中谷治宇二郎報告の石斧出土地点の検討 …… 92

参考文献
報告書抄録

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に到る経緯

東京都下水道局北部第一下水道事務所は、東京大学構内、台東区池之端一、二丁目付近の下水道再構築工事を計画した。そのうち大学構内は、文京区 No.47「本郷台遺跡群」の範囲内にあたる。下水道本管工事は地下推進工法を取るが、本管挿入部及び管線屈曲部は地上からの掘削工事になるため、該当箇所の遺構・遺物遺存状況確認の必要が生じた。また本工事の原因者は東京都下水道局であるが、大学構内で実施されることから、東京都下水道局、文京区、本学施設部、埋蔵文化財調査室（以下、調査室）で協議をした結果、調査室が、調査を担当することとなった。これを受けて 2008 年 9 月 11、12 日に 3 箇所の立坑部を対象に試掘調査を実施した。その結果、A、B 区で江戸時代と考えられる盛土層が確認され、概期の遺構・遺物が遺存している可能性があることから、該当者間で今後の対応について協議を行い、2008 年度工事分立坑（A 区：15.6 ㎡、B 区：9 ㎡、C 区：9 ㎡）、2009 年度工事分立坑（D 区：12.56 ㎡）を対象に事前調査を行うことで合意した（1 図）。

第２節　調査の方法と経過

発掘調査は、工事の進捗に合わせ、立坑 A ～ C 区を 2008 年度、D 区を 2009 年度に実施した。下水本管は、低地部の池之端一、二丁目に接続するため、台地上に位置する大学構内では、ライナープレートによる山留めを行う大深度工法が取られた。本調査は工事工程に合わせて、A ～ C 区は、2008 年 12 月 7 日 ～ 25 日、D 区は、2009 年 11 月 27 日～ 12 月 8 日に実施した。

第３節　調査地点の地理的・歴史的環境

調査地点は、既述したように、文京区 No.47「本郷台遺跡群」内に含まれ、A 区では江戸時代と推定される遺構、D 区では江戸時代の遺構・遺物と、弥生時代中期の竪穴住居址と遺物が確認された。以下、各時代の環境を列記する。

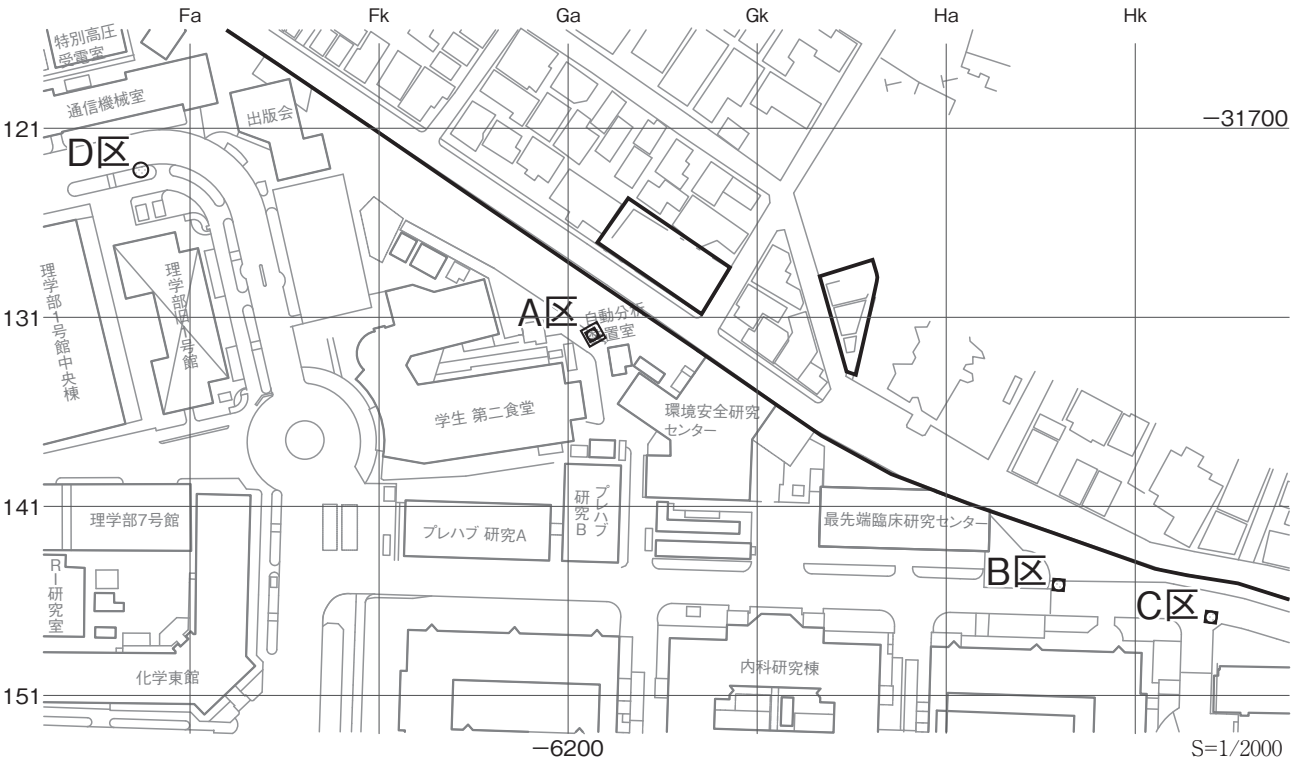
江戸時代の土地利用状況に比定させるために、調査室ではこれまでの報告書、展示会図録などで、江戸時代屋敷割図を参謀本部陸軍部測量局が作成した「五千分一東京図測量原図」（明治 16 年）を介して現況図との対比を行ってきた（堀内・西秋編 2011 など）。その成果に基づくと本地点のうち、A、D 区が加賀藩邸、B、C 区が富山藩邸に比定される。

加賀藩邸に比定される A、D 区はともに藩邸北東縁辺部に該当し、上屋敷移行後（1683 ～ 1868）は、下級勤番武士居住区（御歩町壱～四番町と名付けられた貸長屋）の一角に位置する。富山藩邸に比定される B、C 区は、藩邸北西部にあたる。富山藩邸全体を描いた絵図は、現状で 19 世紀代の資料しか確認されていない。それに対比させると B 区は空閑地、C 区は低地部への法面付近に位置する。C 区の調査で 3m を越える近代以降の盛土が確認されたこともそれを傍証する。

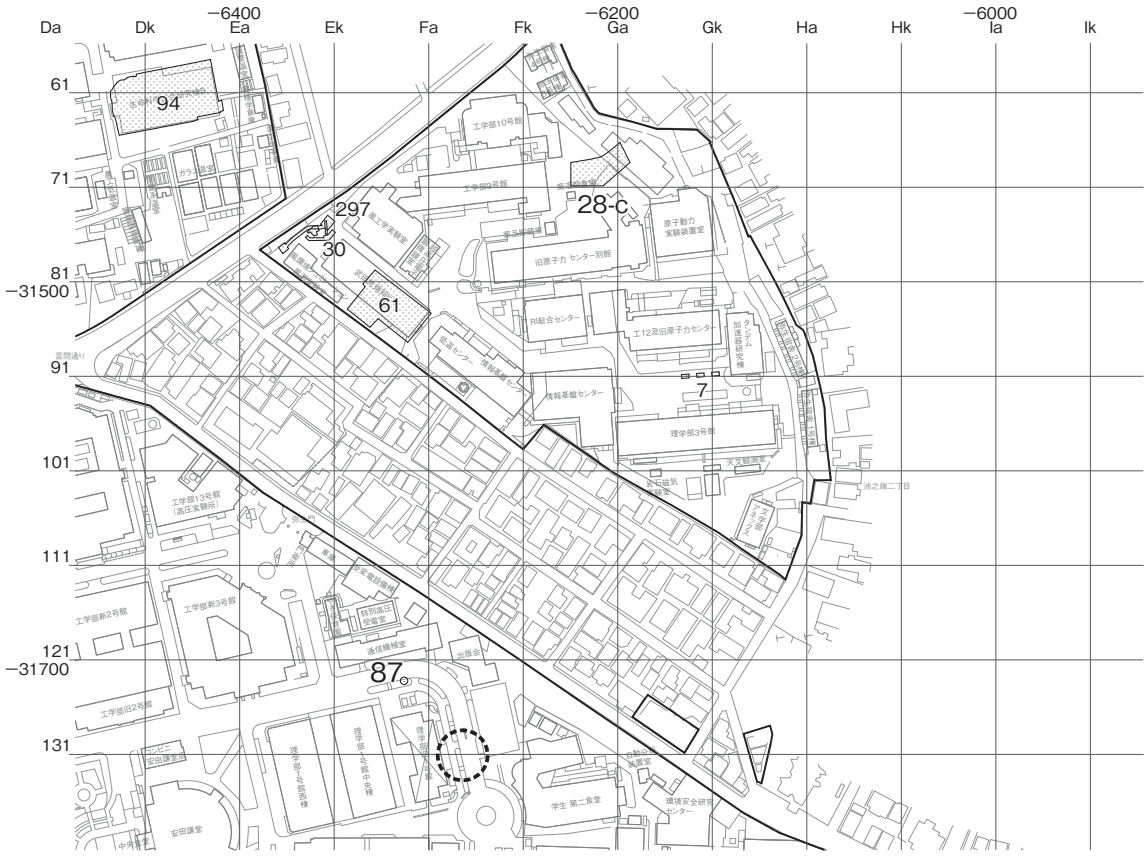
弥生時代の遺物や遺構に関して、本調査地点（2 図 87）の周辺は、理学部 1 号館（調査室 2019）や理学部 7 号館（東京大学理学部遺跡調査室 1989）、工学部新 3 号館（調査室 2015）の施設整備等に際して発掘調査が実施されてきたが、理学部 7 号館地点で弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出土したほかに目立った成果はみられない。ただし、本調査地点の南西には、扁平片刃石斧と有角石斧が出土したとされる地点（中谷 1924）が存在すると考えられ、本地点付近の状況を示す貴重な資料といえる。近接した地点がそのような状況であるのに対して、本地点の北側に位置する浅野地区や弥生地区の発掘調査では、複数の調査地点において弥生時代の人々の生活痕跡が確認されてきた（2 図）。

「弥生式土器」という名称の由来となった壺の出土地点の推定をめぐって学史的に重要な意義をもつ、28-c 向ヶ岡貝塚の調査では、環濠と理解される弥生時代後期後半の溝が 2 条検出された（東京大学文学部考古学研究室編 1979）。同じく浅野地区の 30 工学部風工学実験室支障ケーブル地点や 61 工学部武田先端知ビル地点では、後期後半の方形周溝墓計 3 基が検出され（調査室 2009）、297 基幹・環境整備（言問通り横断管路）Ⅱ期でも方形周溝墓の一部が確認された。また、7 新タンデム棟地点の試掘調査では弥生時代終末～古墳時代初頭の住居址 1 軒が報告されている（調査室 2011）。

弥生地区に位置する 94 分生研・農学部総合研究棟地点でも方形周溝墓が検出され、方形周溝墓の分布は南側の谷筋に沿って弥生地区から浅野地区まで広がることが確認されている（調査室 2012）。このように弥生時代には、本地点から小支谷を挟んで北側に位置する舌状台地上に後期の集落が展開する一方、本地点周辺における活動の痕跡は明瞭ではない。



1 図 各調査地点の位置
（A ～ C 区は 2008 年度、D 区は 2009 年度調査）



2 図 周辺の弥生時代調査地点（1/4000）

87 本地点 D 区（弥･中）、28-c 向ヶ岡貝塚（史跡 弥生二丁目遺跡内）（弥･後）
7 新タンデム棟試掘（古･前）、30 工学部風工学実験室支障ケーブル（弥･後）、61 工学部武田先端知ビル（弥･後）、94 分生研・農学部総合研究棟（弥･後）、297 基幹・環境整備（言問通り横断管路）Ⅱ期（弥･後）、◌ 石斧出土推定地

第Ⅱ章　A ～ C 区（2008 年度調査地点）の成果

第 1 節　A 区

本地点では、試掘坑北側の一角で江戸時代の盛土が確認されたが、ライナープレート内の本調査では、ローム層まで撹乱が及び、撹乱の浅い北東部でわずかに遺構を確認することができた（3 図 A 区）。SK1 は SP2 の東側で僅かに立ち上がりが確認されたことから遺構と判断される。約 1m 埋積した覆土（A 区南壁 4 層）からは、19 世紀代の瀬戸・美濃産陶磁器類などが僅かに出土した。SP2、SP3 は、SK1 坑底で検出された。SP2 の覆土はしまりが強く柱痕も確認された。出土遺物はなく年代は不明である。

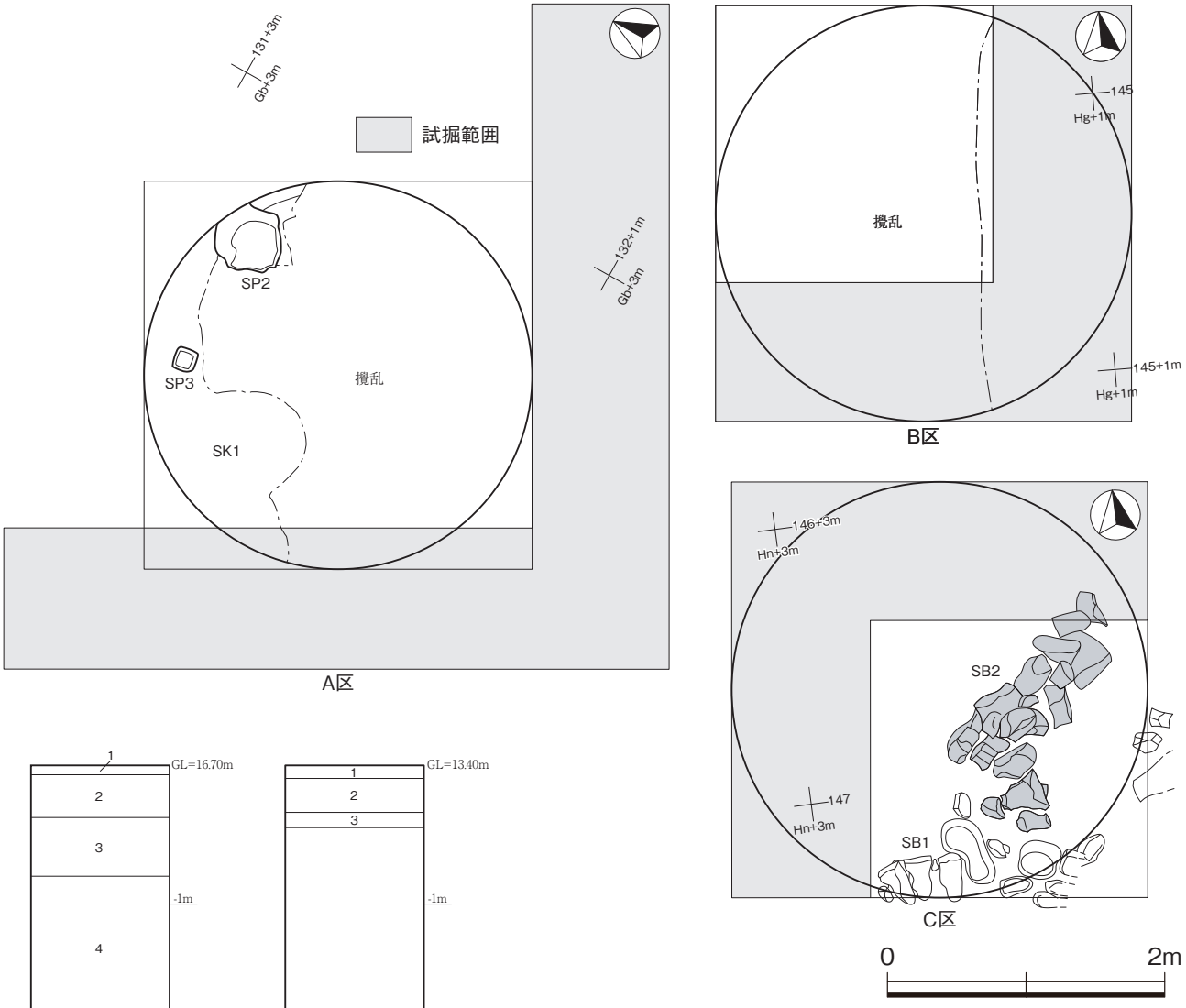
第 2 節　B 区

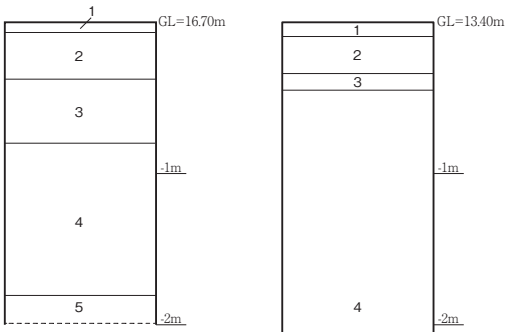
本地点では、試掘坑東側において地表下約 50cm で江戸時代の盛土、60cm でローム層を確認したが、ライナープレート内本調査部は撹乱が深く入り、遺構、遺物ともに確認されなかった（3 図 B 区）。

第 3 節　C 区

本地点では、地表下約 4m で不規則に配置された石列状遺構 SB1，SB2 が検出された（3 図 C 区）。SB1 は SB2 の約 50cm 上方に位置する。SB1 には人頭大玉石の他、間知石も使用されていたが、間知石前面の盛土にコンクリート片が含まれていたことから近代以降の所産と考えられる。SB2 上層の覆土にもコンクリート片が含まれていた。この石列状遺構は、施設部所蔵「池之端七軒町通り裏門附属門衛所及構内土留擁壁其他新営工事」図面から、擁壁基礎の栗石と標高がほぼ一致することから、擁壁工事に使用された石材と判断される。

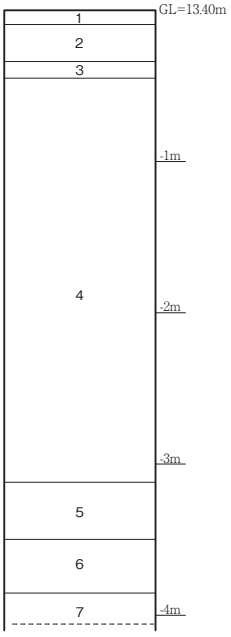
SB2 からは「医科大学病院　つばはき」と書かれた瀬戸・美濃産磁器痰壺（4 図）のほか近代遺物が出土している。「医科大学」から、部局名称が学部に改称された大正 8（1919）年以前の製品であることが判る。



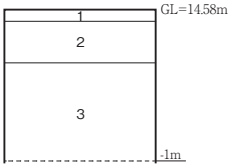


1 舗装
2 砂利・砕石
3 現代盛土
4 暗褐色土(SK1 覆土)
5 ローム

A区 南壁



C区 東壁

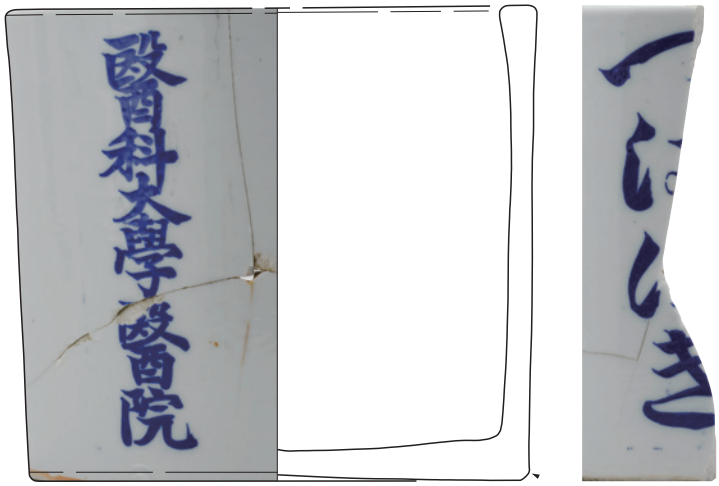


1 舗装
2 砂利・砕石
3 茶褐色土
(ローム主体、煉瓦含)

B区 南壁

1 舗装
2 コンクリート片
3 砂利・砕石
4 茶褐色土
5 暗褐色土 (ロームブロック・黒色土含)
6 暗黄褐色土 (ローム粒・砂粒含、自然堆積層)
7 暗黄褐色土 (砂層、自然堆積層)

3図 A～C区遺構配置図・基本土層模式図



4図 C区 SB2 出土遺物

第Ⅲ章　D区（2009年度調査地点）の成果

第1節　江戸時代の遺構と遺物

(1) 遺構

本地点には近世の盛土は認められず、全てローム面で確認された。検出された遺構数は14基で、内訳は土坑10基、小穴1基、地下室3基である（5図）。地下室は、弥生時代竪穴住居と重複しているため、竪坑を確認した後、ライナープレート設置工事と並行して掘り下げつつ調査を進めた。しかし本地点南東部を通る下水管推進溝で撹乱され、坑底を確認することはできなかった。また推進溝東壁と調査区壁のわずかな残存部より地下室と考えられる遺構が検出された。その様相から竪坑は調査区外南東に位置すると推定される。

SK2（6図）

不整形を呈する土坑で、南側は調査区外へ伸びる。調査区内での規模は東西250cm、南北300cm、確認面からの深さ30cmを測る。重複するSK5、SK10、SK11より新しい。

覆土中より、18世紀後半の陶磁器類や、動物遺体がコンテナ1箱出土した。

SU9（7図）

長方形を呈する地下室で、確認面での規模は長辺150cm、短辺120cmを測る。南東部でSU15と重複し、それより古い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面下75cmで、奥行き10cmのテラス状一段が四辺に施される。北西及び南西角には一辺10cmを測る長方形ピットが確認された。壁は更に垂直に伸び確認面下165cmで坑底に達する。規模は長辺120cm、短辺80cmを測り、ほぼ平坦に整形されている。また四隅には方形状の杭痕が認められる。壁面、坑底共に平滑で、丁寧に整形されている。

覆土中より18世紀前半の陶磁器類がコンテナ1箱出土した。出土陶磁器の一部に被熱痕が認められ、覆土中に焼土が含まれていることから火災後の後片付けの可能性もある。

SU15（7図）

隅丸方形を呈する地下室で、確認面での規模は南北120cm、東西115cmを測る。西側に重複するSU9より新しい。確認面下約80cmで、東側へ開く天井部が検出された。東壁までの奥行きは約40cmを測る。ライナープレート設置工事と並行して掘り下げ、調査を進めたところ、確認面下約145cmで竪坑坑底と北壁北東部に拡がる室部坑底が検出された。北壁室部坑底の奥行きは約35cmで、竪坑調査時に確認された東側地下室に繋がる可能性がある。しかしそれ以外の坑底は、下水推進溝の地下撹乱によって遺存していなかった。

遺物は、18世紀前半の陶磁器類、動物遺体がコンテナ3箱出土した。

SU18（8図）

下水地下推進溝とライナープレート設置面間の最大幅約20cmで検出された地下室で、形態、規模ともに詳細は不明である。室部と考えられる壁面が調査区外東側へハの字状に拡がっていることから、竪坑を含む主体部は調査区外に位置すると推定される。調査区壁面の観察から坑底レベルは標高11.75mで、SU9（13.1m）、SU15（13.4m）と比較して1m以上深い位置にある。

遺物は18世紀後半の陶磁器類がコンテナ1箱出土した。

(2) 遺物

SK2（9図）

1は瀬戸・美濃産染付端反碗で、JC-1-dである。外面に帆船、千鳥などが描かれている。2は柿釉鍋で、TZ-33-aである。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。見込みには4箇所の目跡が認められる。底部に二次火熱の痕跡が認められる。3、4は瀬戸・美濃産灰釉瓶で、TC-10-eである。3は肩部に数条の条線が巡り、底部の釉は拭き取られている。体部には「∧に本」の点刻が施されている。4も底部の釉が拭き取られている。体部には点刻が施されているが、詳細は不明である。

SU9（9図）

1は肥前産染付丸碗の蓋である。端部には口錆が施されている。外面には草花などを描いた丸文が巡っている。2はかわらけで、DZ-2-bである。底部には右回転の回転糸切り痕が認められる。口唇部の一部に灯心痕が付着している。

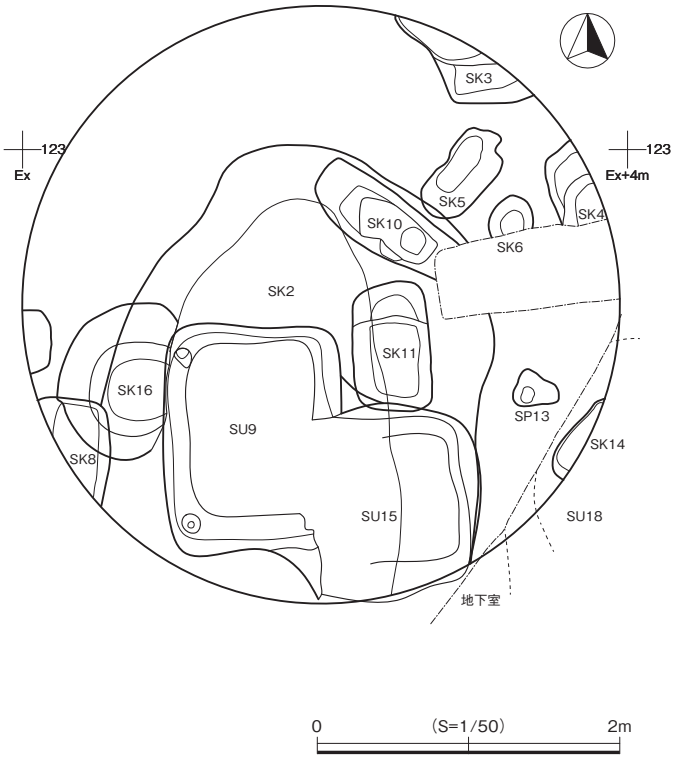
SU15（9、10図）

1は瀬戸・美濃産灰釉平鉢で、TC-5-fである。ロクロ

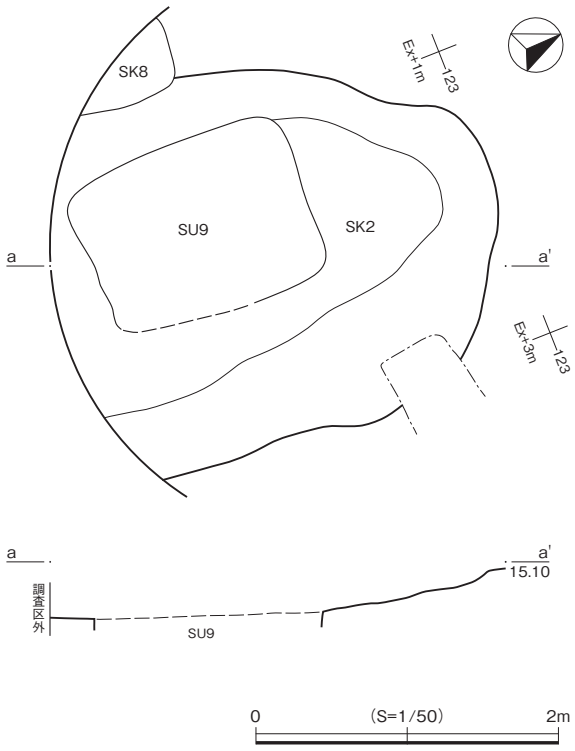
成形後に体上部を方形状に変形させている。底部は碁笥底を呈し、体上部に数条の沈線が巡る。見込みには1辺約7cmの三角形状に目跡が認められる。2は瀬戸・美濃産灰釉仏飯器で、TC-8である。釉には全体的に貫入が入り、底部は無釉である。3は京都・信楽の柿釉柄杓形製品で、TD-32である。内体部中位に1条の沈線が巡る。底部は無釉で、畳付外側は面取りされている。4は灰釉土瓶で、TZ-43-gである。注口は所謂鉄砲口で、4箇所の茶漉し溜まりが施されている。底部は2次火熱によって黒色を呈し、特に釉際付近ではタール状付着物が認められる。5は志戸呂産の油受け皿で、TF-40である。受け部には1箇所の凸レンズ状穿孔が認められる。6はかわらけで、DZ-2-bである。胎土には金雲母が少量含まれている。底部には右回転の回転糸切り痕が認められる。7は土師質丸火鉢で、DZ-31-aである。底部には縮緬状整形痕が認められる。口唇部には著しい敲打痕が認められ、内体部上部にはスス状の黒色付着物が認められる。8、9は土師質丸底形ほうろくで、DZ-47-aである。8の胎土には金雲母が少量含まれる。内体部に橋状の吊り手が貼り付けられ、貫通部は棒状工具で整形されている。9の胎土には金雲母が微量含まれる。口縁部はくの字状に屈曲し、屈曲部下約1.5cmはナデ整形によって縮緬状痕を消している。10は軒丸瓦の瓦当片である。瓦当部には剣付梅鉢文が施されている。また筒部との接続面を含む裏側縁辺部は丁寧に研磨されており、何らかに二次利用されたことが窺われる。

SU18（10図）

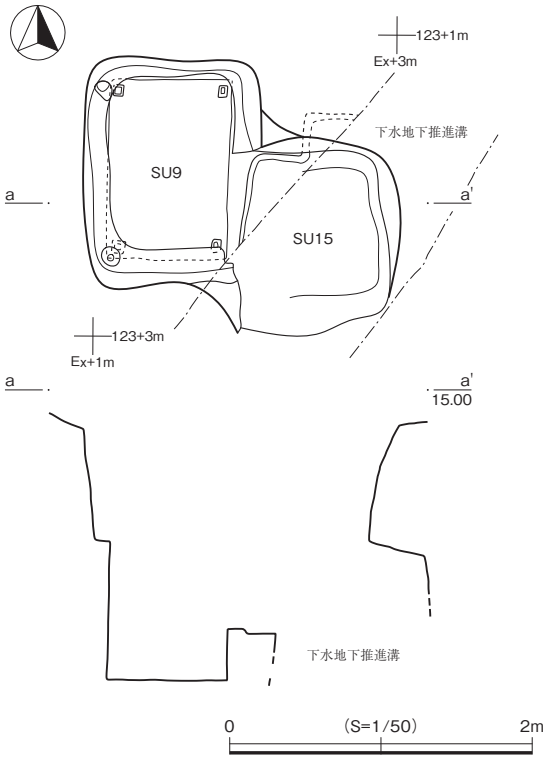
1は灰釉端反形碗で、TZ-1である。胎土は明茶褐色を呈し白色微砂粒を含む。右回転のロクロ成形によって成形されている。高台はややハの字状に開き、畳付外側は面取りされている。体上部には数条の沈線が巡る。釉は底部から体下部を除き流し掛けされている。2は瀬戸･美濃産灰釉火入れ・香炉で、TC-9-aである。体部は筒形を呈し、ほぼ全面にらせん状沈線が巡る。釉は口唇部際から体部下位屈曲部まで施されている。3は瀬戸・美濃産灰釉瓶で、TC-1-eである。口縁部は縁帯状に肥厚している。肩部には数条の沈線が巡る。体部には列点による「－△」が施されている。4は桟瓦片で、平部切り込みが残存する。



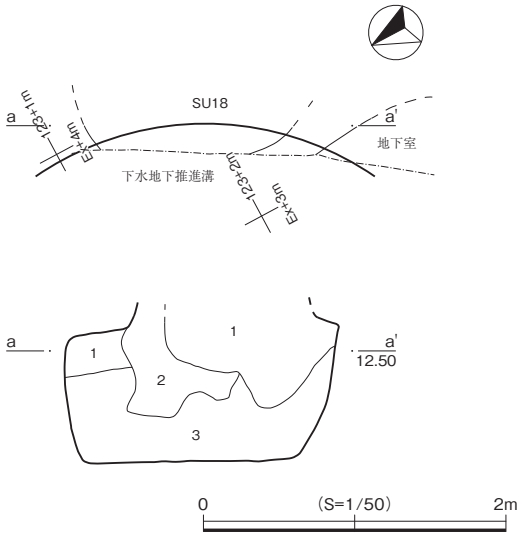
5図　D区近世遺構配置図



6図 SK2



7図 SU9・SU15

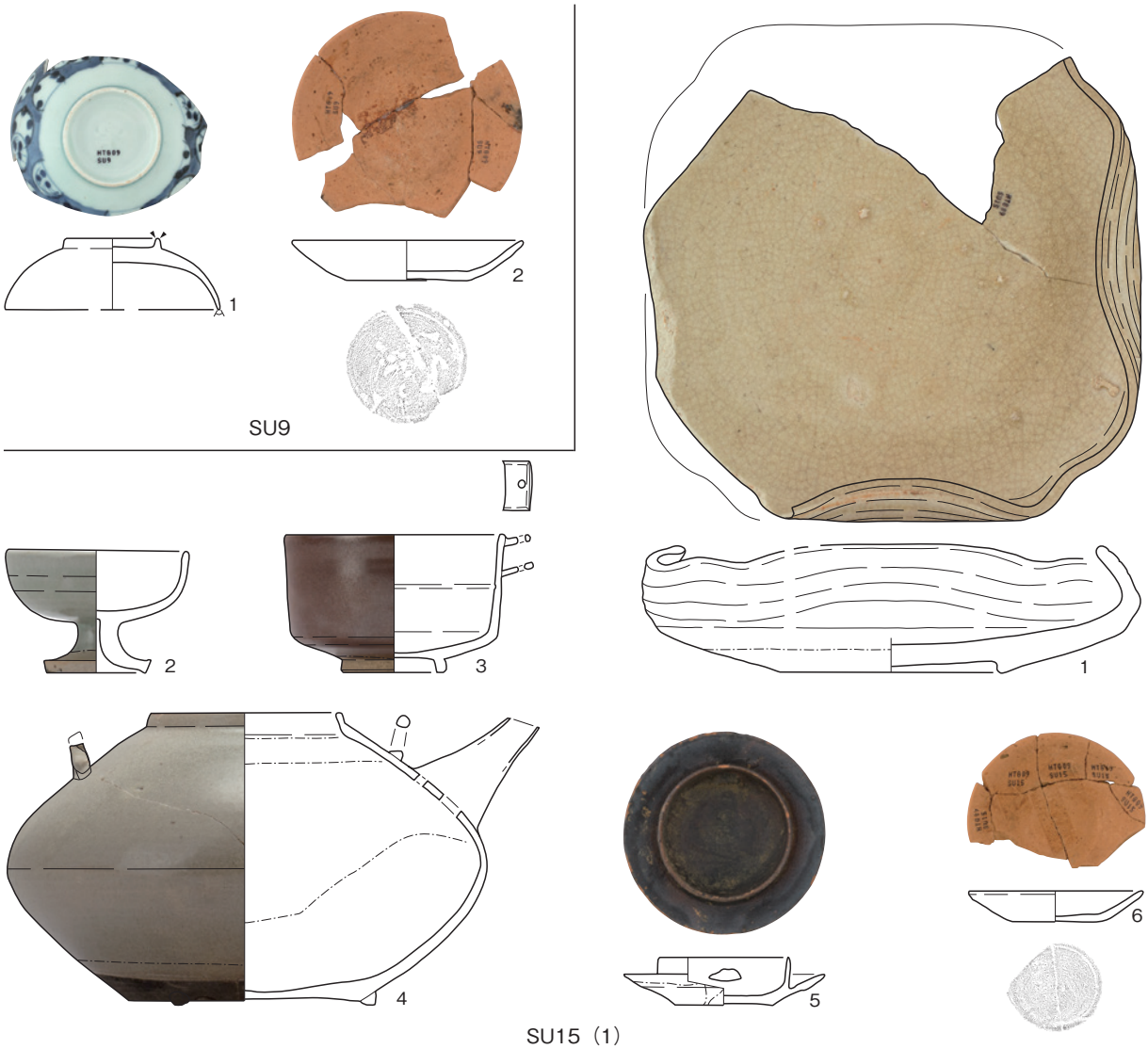


1 暗褐色土（SK2の覆土）
2 ロームブロック、天井崩落土
3 暗褐色土（黒ボク土・ローム粒・炭化物・焼土粒含）

8図 SU18

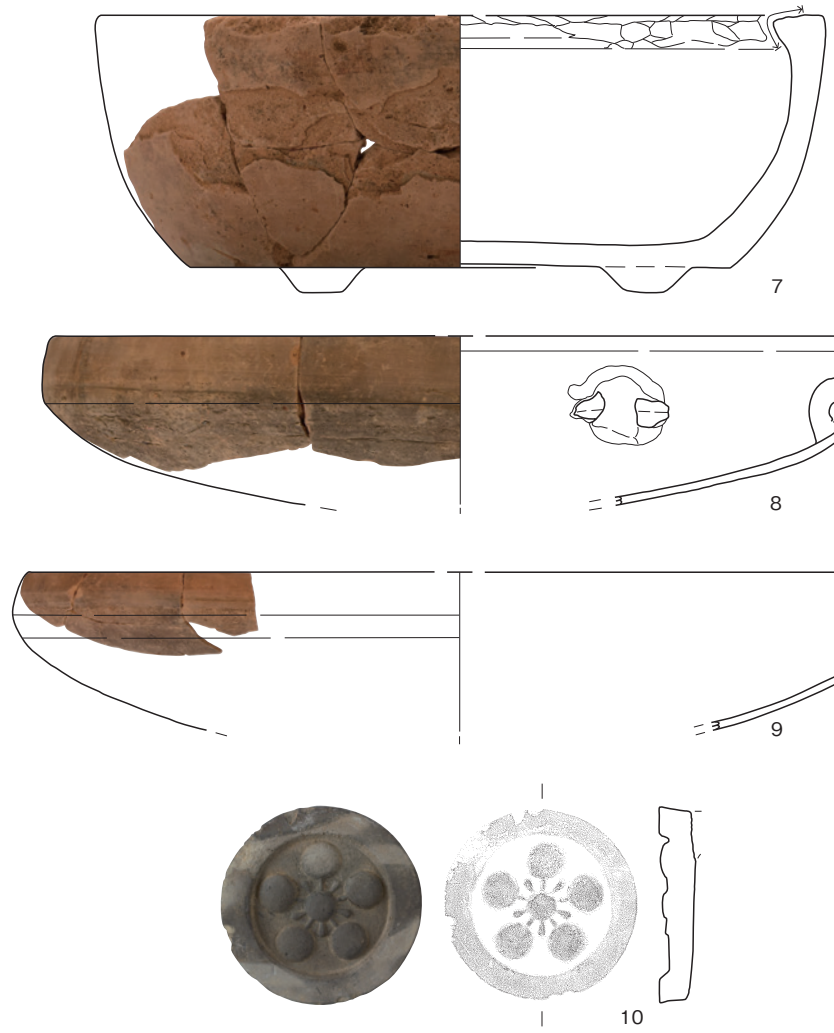
SK2

SU9



SU15（1）

9図　SK2・SU9・SU15（1）出土遺物



10図　SU15（2）・SU18出土遺物

第２節　弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺構

調査区の西側で竪穴住居址１軒を検出した。

SI1（11 ～ 13 図）

本遺構は、長辺 2.7m 以上、短辺 2m 以上の規模をもつ方形の竪穴住居址と考えられる。遺構南辺付近は近世の土坑や地下室により失われていた。検出面から床面までの深さは、北側が最も深く約 50cm である。

床面には、最も厚い箇所で 8cm 程度の貼床が存在し、広い範囲にわたって火を受けた痕跡が確認された。床面からは灰とともに複数点の炭化材が出土した。住居址の壁側では幅 15cm 程度の壁溝と、小ピットを検出した。

SI1 からは約 230 点の土器片が出土した。図化した壺の下半部２点（14 図－１・２）は、住居址の南東角、壁溝の内側のへりにのるような状態で出土した。SI1 は、弥生時代中期後葉、宮ノ台式期の遺構と考えられる。

(2) 遺物

本調査区から出土した土器のうち、比較的良好に残存している壺２点と、土器の全形を判断しうる特徴をもつ破片８点を図示した。１の壺および６の甕は SI1 床面直上、２の壺は SI1 下層の床面付近より出土した。10 の壺は SI1 を切り込む近世の土坑 SK16 より出土した。SI1 からは縄文土器が数点出土したが、小片のため図示していない。

SI1（14 図１～９）

１は胴部の上半以上を欠く無文の壺である。胴部最大径をやや高い位置にもつ器形を呈し、幅が 5cm 程度の粘土を積み上げて成形されている。底部底面にケズリによる整形の痕跡を部分的に観察でき、その際にはみ出た粘土が底部外面にみられる。胴部外面は縦方向のミガキが３～ 4cm 程度の短い単位で施される。胴部内面は全体的にナデが施され、部分的に工具の端部と考えられる痕跡が認められる。

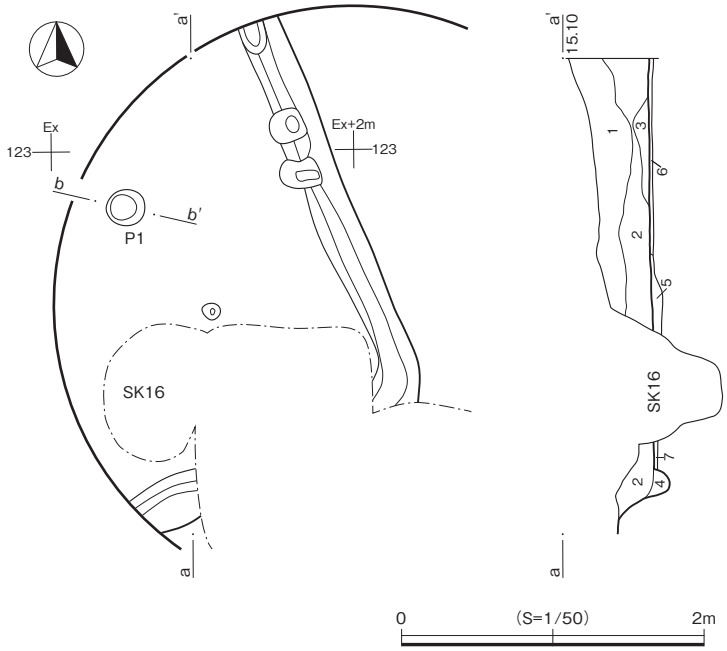
２は頸部以上および底部を欠く無文の壺である。幅 5cm 程度の粘土を積み上げて成形され、器壁がやや波打つようないびつな無花果形を呈する。外面全体に施されるミガキは、肩部から頸部付近にかけてはわずかに傾斜した縦方向、胴部最大径周辺では横、そして胴部下半で斜め方向である。内面は器表面が全体的に剥離しているために観察できない。

３は幅 1.5cm 程度の薄い粘土紐を貼り付けた複合口縁の壺である。明瞭に面取りがおこなわれた口縁端部上面や、側面には単節縄文 LR が施文される。４は、外方へ開く形状の口縁をもつやや小形の壺と考えられる。外面には多条の沈線が施され、内面には部分的に赤彩の痕跡が残る。５は、４段以上の S 字状自縄結節文が施された壺の肩部である。外面にミガキが施され、頸部側でより明瞭に観察できる。６～８は、口縁端部に表裏から交互に指頭による押捺が施された甕である。９は、口縁部を欠くミニチュア土器である。底部底面には複数方向から

１表　出土遺物観察表

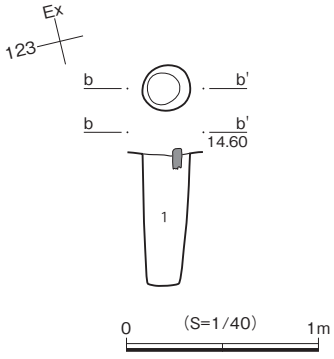
図版番号	器　種	部位	法量(cm) 口径 底経 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土遺構層位	備考・残存
1	壺形土器	胴下半部	— (7.6) 〔20.8〕	外面：約3～4cm単位の縦方向のミガキ 内面：全体的にナデ、わずかに工具痕	直径5mm以下の礫を少量含む	良好	赤褐～明赤褐	SI1 床面	底部～胴部最大径が残存
2	壺形土器	胴部	— — 〔32.9〕	外面：肩部上～頸部に縦方向、胴部最大径付近に横方向、胴部下半に斜め方向のミガキ 内面：剥離によって確認できない	直径2mm以下の雲母片・礫を少量含む	良	にぶい黄橙	SI1 下層	外面に黒斑 頸部以上・底部を欠く
3	壺形土器	口縁部	— — 〔2.7〕	外面：口縁端部上面および側面に単節縄文LR 内面：磨滅によって不明瞭	直径2mm以下の雲母片・礫を少量含む	良	橙	SI1 下層	
4	壺形土器	口縁部	— — 〔3.5〕	外面：多条沈線 内面：磨滅によって不明瞭	直径2mm以下の雲母片・礫を少量含む	良	にぶい黄橙	SI1	内面赤彩
5	壺形土器	肩部	— — 〔4.8〕	外面：S字状自縄結節文4段以上、縦方向のミガキ 内面：ナデ	直径3mm以下の雲母片・礫を少量含む	良	橙～にぶい黄橙	SI1	
6	甕形土器	口縁部	— — 〔1.5〕	外面に斜方向、内面に横方向のナデ	直径0.5mm以下の雲母片・砂粒を少量含む	良	暗灰黄	SI1 床面	
7	甕形土器	口縁部	— — 〔3.0〕	外面：横・斜方向のハケメ 内面：横方向のハケメがわずかに認められる	直径3～5mm程度のスコリアや直径0.5mm以下の雲母片を少量含む	良	にぶい黄褐	SI1	
8	甕形土器	口縁部	— — 〔1.8〕	外面：横方向のハケメ 内面：横方向のナデ	直径1～5mm程度の石英や直径1mm以下の砂粒を少量含む	良	にぶい褐	SI1	
9	ミニチュア土器	底部	— (2.8) 〔2.6〕	外面：縦方向のハケメ 内面：強いナデ	直径2mm以下の雲母片・礫を少量含む	良好	にぶい褐	SI1	外面に黒斑 口縁を欠く
10	壺形土器	肩部	— — 〔3.8〕	外面：上部に無節縄文L、下部にヘラ状工具による波状文、もしくは粗雑な山形文2条以上 内面：ナデ	直径4mm以下の雲母片・礫を少量含む	良	外面：にぶい黄 内面：橙	SK16	

※法量の（ ）は復元値、〔 〕は現存値



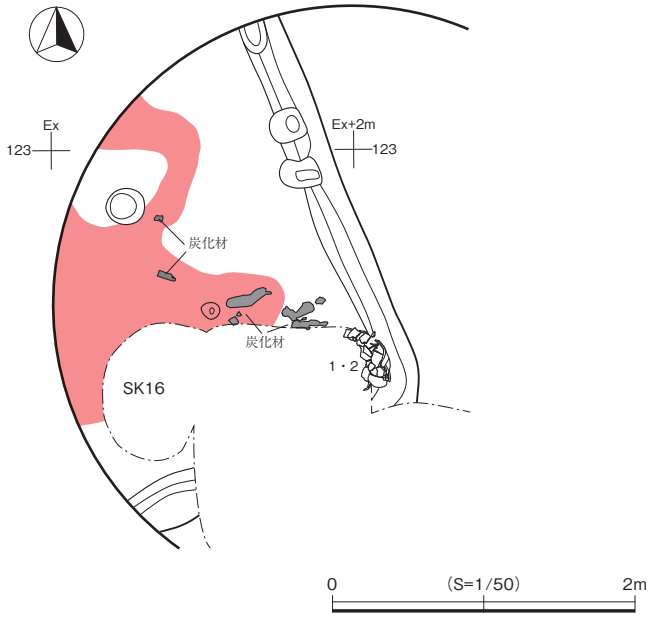
1　黒褐色土　（黒色土主体、ローム粒は含まない）
2　暗褐色土　（黒色土･ローム粒･約5cm径ロームブロック少量が混在、焼土･炭化物含、底面に灰）
3　赤褐色土　（黒色土含、焼土多含）
4　黄褐色土　（ローム主体、黒色土は含まない、やや硬質）
5　赤褐色土　（焼土･炭化物多含）
6　褐色土　　（黒色土･約5cm径ロームブロック含）
7　暗褐色土　（黒色土少含）

11 図 SI1 平面図・断面図



1　黒褐色土　（炭化材が残る）

12 図 SI1 ピット 1（P1）

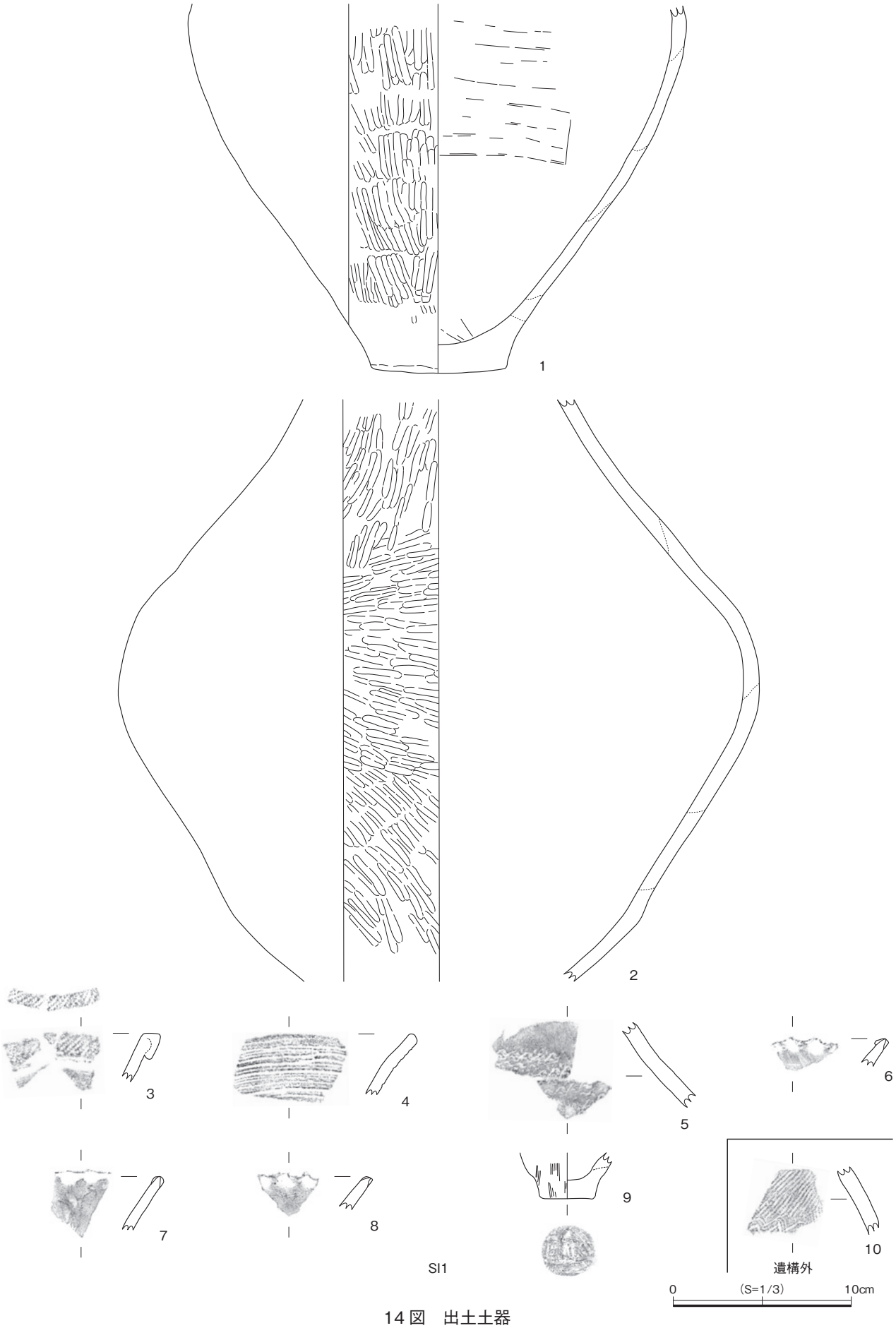


13 図 SI1 遺物・焼土・炭化材出土状況

のケズリによる整形の痕跡がみられ、外面に部分的に縦方向のハケメが残る。

遺構外（14 図 10）

10 は、壺形土器の肩部である。無節縄文 L による地文の上にヘラ状工具を用いた 2 条以上の波状文、もしくは粗雑な山形文が描かれていたと考えられる。



14図　出土土器

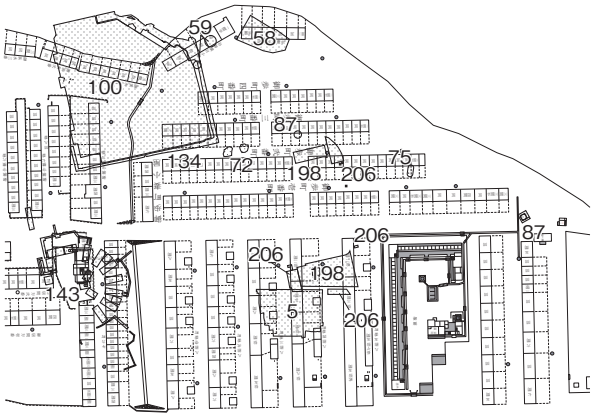
第Ⅳ章　まとめ

第１節　調査の成果

Ａ～Ｃ区は、調査区大半が近代以降の削平を受け、近世以前の遺構はＡ区で小穴が確認されたにすぎない。その背景には擁壁建築に伴う削平もしくは擁壁裏込めとして新に築かれた盛土面であったことが考えられる。それに対しＤ区はほぼ台地縁辺上に位置したことで、弥生、近世の遺構・遺物を確認することができた。以下、Ｄ区の成果を簡単ではあるが列記したい。

近世

まず本区を加賀藩邸に対比させるために以下の手続きを取る。加賀藩本郷邸絵図の中でも精度が高いと評価されている「江戸御上屋敷絵図」（1840～45頃）に対比させる。本絵図は10間四方の方眼が記載されており、10間を18.18mと換算して年報掲載の調査地点配置図（1/4000）と重ねる。しかし高精度とはいえ縦横比などに歪みはあり、全体を正確に合わせることは不可能である。そこで、5理学部7号館、198理学部1号館で検出され、絵図にも描かれた「八筋長屋」に伴う井戸を基準に対比を試みた。その結果、Ｄ区は、「御歩町（おかちまち）壱番～四番町」と名付けられた下級勤番武士居住貸長屋群の場所に比定されることが確認できる（15図）。「御歩町壱番～四番地」は若干の変更を伴いながらも、元禄元（1688）年に作成された上屋敷最古絵図「武州本郷邸図」から存在し、出土遺物の年代観より本区で検出された遺構は全て「御歩町壱番～四番地」に関する遺構と判断される。「御歩町壱番～四番地」に比定される調査は、これまでに72理学部1号館前、75工学系総合研究棟立坑、100工学部3号館、134同施設整備（下水他）、198理学部1号館、206同外構で実施された。本地点Ｄ区、工学系総合研究棟立坑、工学部1号館、同施設整備では地下室などが、理学部1号館前、理学部1号館では道路状遺構、溝などが検出され、絵図との対比から、前者が長屋付属庭に、後者が長屋間の路地に比定され、おおよその位置関係は矛盾していないといえよう。そのうち既報告は理学部1号館前のみで（調査室 2006）、今後、まとまった面積を調査した工学部3号館、理学部1号館の成果を合わせ、加賀藩下級勤番武士の生活相に繋がることを期待し、まとめにかえたい。



15図　加賀藩屋敷絵図と調査地点の対比
江戸御上屋敷絵図（金沢市立玉川図書館蔵）を部分トレース

87本地点、5理学部7号館、58医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期、59工学部基幹整備共同溝、72理学部1号館前、75工学系総合研究棟立坑、100工学部新3号館、134工学部3号館施設整備（下水他）、143講堂改修、198理学部1号館、206理学部1号館外構

弥生

弥生時代中期後葉、宮ノ台式期の竪穴住居址SI1は、調査室が過去に実施した東京大学本郷構内の遺跡調査において検出されていない弥生時代中期の遺構として注目される。しかし、後述するように本地点は、大正13年に中谷治宇二郎が報告した石斧（中谷 1924）の出土地に近く、この付近に弥生時代中期の遺跡が存在することは既に指摘されてきた（岩崎他 1967）。SI1の検出は、その指摘を補強する成果といえるだろう。

本郷台地上に立地する他の遺跡では、本地点から北に約1.2km離れた千駄木三丁目南遺跡で、宮ノ台式期の竪穴住居址4軒と環濠と推定される断面形がＶ字形や逆台形の溝が確認され（共和開発編 2005・2007）、その北側に接する団子坂上遺跡では、当該期の方形周溝墓が検出されている（CEL編 2020）。また、本地点より南に約1.2㎞離れた弓町遺跡と、その南側の本郷一丁目南遺跡でも宮ノ台式期の竪穴住居址が確認されたほか、本郷一丁目南遺跡では、当該期の環濠とみられる断面形がＶ字形の溝が検出されている（武蔵文化財研究所編 2005・加藤建設埋蔵文化財調査部編 2006）。

本地点のSI1の検出は、限られた範囲内における点的な成果ではあるが、弥生時代中期後葉の本郷台地の状況を把握するうえで新たな知見を提供した。今後は、周辺遺跡の調査成果をふまえて検討を深めるとともに、支谷を挟んで北に存在する弥生時代後期の環濠や方形周溝墓へとどのように移り変わっていったか、変遷過程を理解することが課題である。

第２節　中谷治宇二郎報告の石斧出土地点の検討

はじめに

第Ⅰ章以降、本調査地点Ｄ区に関する検討の際には、大正 13 年に中谷治宇二郎が報告した石斧の出土を重要視してきた。しかし、筆者が石斧出土地点をどのように推定したかといった方法等については十分な説明をおこなっていない。したがって、石斧出土地点の推定根拠について、文末ではあるが論じることとする。

（1）中谷治宇二郎 1924 にみる記述

まず、石斧の出土に関して報告した中谷の記述を簡潔にふりかえってみたい。報告された２点の石斧（16 図）は、関東大震災で破損した東大理学部本館を改築するための基礎工事でみつかった「土窖」を、松村瞭と中谷が検分に訪れた際、土工が持参したものとされる。石器の出土状況を伝えたこの時の土工の証言が、論中で以下のように引用される。

「石器は人類學倉庫の下、二三尺の所から單獨に出ました。それから一間程隔たつて、赤焼の土器が數個出ましたが、これはくだらなかつたから、打毀して土と一緒に、三河島へ持つて行つて了ひました。」

この土器については、中谷らが三河島まで赴いて捜索したが発見できなかったことが述べられている。中谷はこれらをふまえ、石器と土器の出土地点を以下のように述べる。

「石器を出せる地點は、人類學舊倉庫四號室の中央の地下約一米、表土と敷との境域にありしと思われ、土器を出せるは、西方二米餘の地點たりし如し、（東京帝國大學一覧の附圖を以て地点を確めんとさるゝ方は、人類學倉庫裏の小屋の中央部端より、七間の距離を以て圓を切らる可し）。」

（2）出土地点の推定

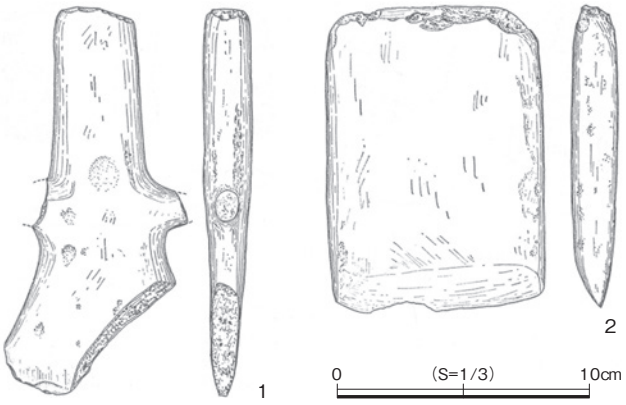
中谷の記述をもとに、石斧出土地点の推定をおこなう。言及された「人類學舊倉庫四號室」を、関東大震災以前の大正６～７（1917 ～ 1918）年の『東京帝國大學平面圖』（17 図）で探すと、図の中央「運動場」の左側に「人類学倉庫」の表記がある。また、この付近の建物の詳細について、大正元（1912）年の『東京帝國大學土地建物調』（18 図）によれば、下部に４つ並んだ「ム八」が倉庫、右端の「エ二五」が便所、左側の「チ一四一」、「チ一〇八」が「実験及実習室」、中央の「キ一」が物置であることがわかる。

以上にもとづいて、物置を中心に中谷の記述通り円を描いた図が 17 図の左上の拡大図である。この円の範囲を、石斧と土器の出土地点として理解した。なお、円の半径となる七間については 17 図のスケールを用いた。また、出土推定地を現状の建物配置図上に示したものが 19 図である。地点を定める際には現在も「化学東館」として残存している「化学教室」を基準とした。

中谷の記述にみられる「人類學舊倉庫四號室」を完全に特定することは、今回の検討からは難しいが、上述の４つ並ぶ倉庫のいずれかを指すことは確実であると考えられる。したがって、推定した範囲から石斧および土器の出土地点が大きく外れることはないととらえてよいだろう。

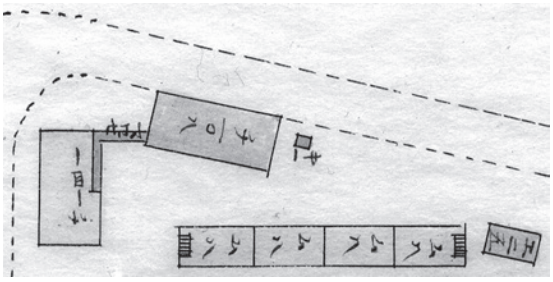
おわりに

検討の結果、中谷治宇二郎が石斧の出土地として報告した地点は、本調査地点Ｄ区から南東方向に 50m 程度離れた、理学部旧１号館の東側付近であると推定した。第Ⅰ章でふれたように、本調査地点Ｄ区周辺は過去にも調査が実施されているが、後世の改変によって弥生時代の生活面が破壊されている可能性が高く、当該期の遺構は検出されていない。しかし、中谷の報告と本調査成果を加味すれば、この付近に弥生時代中期後葉の集落が存在した蓋然性は決して低くないと考えられる。今後は、本郷構内の遺跡における弥生時代中期の集落域の存在を視野に入れた検討が求められるだろう。

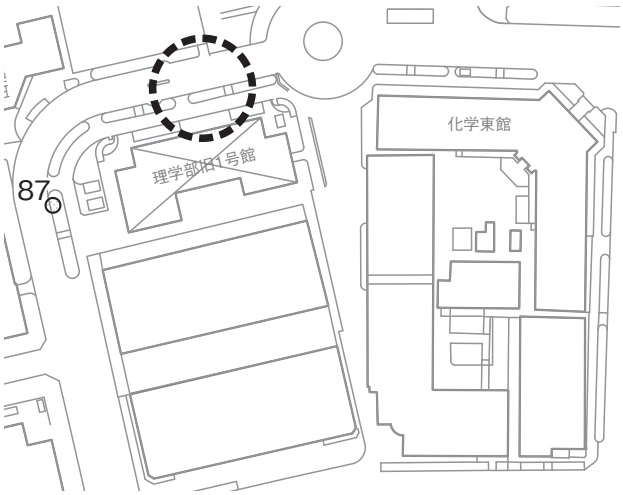


16 図 中谷報告の石斧（岩崎他 1967 を改変）

17 図 人類学倉庫の位置と中谷報告の石斧および土器出土推定地（円形破線部）
（東京大学施設部所蔵『東京帝國大學平面圖』を改変　縮尺不同）



18 図『東京帝國大學土地建物調』（東京大学施設部所蔵）
にみる人類学倉庫周辺（縮尺不同）



19 図 本地点 D 区（87）と中谷報告の石斧
および土器出土推定地（1/2000）

【参考文献】

岩崎卓也・榎本金之丞・木下正史　1967「原始時代のころ」『文京区史　巻一』文京区役所

加藤建設埋蔵文化財調査部編　2006『東京都文京区　本郷一丁目南遺跡－学校法人桜蔭学園新校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』桜蔭学園・加藤建設

共和開発編　2005『東京都文京区　千駄木三丁目南遺跡－（仮称）文京区立本郷図書館等建設用地埋蔵文化財調査報告』文京区・文京区教育委員会・共和開発

共和開発編　2007『東京都文京区　千駄木三丁目南遺跡　第2地点』東洋大学・共和開発

田中政幸　1995「加賀藩上屋敷本郷邸における長屋類型と詰人空間構成」『東京大学史紀要』第13号

東京大学文学部考古学研究室編　1979『向ヶ岡貝塚－東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告－』東京大学文学部

東京大学埋蔵文化財調査室　2006「東京大学本郷構内の遺跡　理学系研究科・理学部1号館前地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5

東京大学埋蔵文化財調査室　2008「工学系総合研究棟立坑地点（KOS05）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6

東京大学埋蔵文化財調査室　2009『東京大学本郷構内の遺跡　浅野地区Ⅰ』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9

東京大学埋蔵文化財調査室　2011「本郷7　新タンデム棟地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7

東京大学埋蔵文化財調査室　2011「東京都下水道工事地点（HTG08）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7

東京大学埋蔵文化財調査室　2012「本郷87　東京都下水道工事地点（HTG08）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8

東京大学埋蔵文化財調査室　2012「本郷94　分生研・農学部総合研究棟地点（HNS09）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8

東京大学埋蔵文化財調査室　2015「本郷100　工学部3号館地点（HK311）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9

東京大学埋蔵文化財調査室　2019「本郷198　理学部1号館地点（HR115）・本郷206　理学部1号館（Ⅲ期）外構」『東京大学構内遺跡調査研究年報』11

東京大学理学部遺跡調査室　1989『東京大学本郷構内の遺跡　理学部7号館地点』

中谷治宇二郎　1924「東大人類学倉庫跡より発見されし二個の石器に就て」『人類学雑誌』39巻　7-9号

堀内秀樹　西秋良宏編　2011『弥生誌－向岡記碑をめぐって』

宮崎勝美　1990「第2節　加賀藩本郷邸とその周辺」『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点　第3分冊　考察編』東京大学埋蔵文化財調査室

武蔵文化財研究所編　2005『東京都文京区　弓町遺跡第4地点－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』住友不動産・武蔵文化財研究所

CEL編　2020『東京都文京区　団子坂上遺跡－（仮称）千駄木一丁目計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』野村不動産・CEL

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぽう
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報
副書名	
巻次	14
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	成瀬晃司（編）、山下優介
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904　東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内　　03-5452-5103
発行年月日	2021年9月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
とうきょうだいがくほんごうこうないいせき 東京大学本郷構内の遺跡 （ほんごうだいいせきぐん本郷台遺跡群） とうきょうとげすいどうちてん 東京都下水道地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 ほんごうななちょうめ 本郷七丁目 ばんごう 3番1号	13105	47	35° 42′ 49″	139° 45′ 54″	20081207～ 20081225 20091127～ 20091209	46,16㎡	東京都下水道局北部第一下水事務所管轄下水再構築に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
とうきょうだいがくほんごうこうないいせき 東京大学本郷構内の遺跡 （ほんごうだいいせきぐん本郷台遺跡群） とうきょうとげすいどうちてん 東京都下水道地点	包蔵地、集落、大名屋敷	弥生中期 近世	【A区】 近世：小穴2、土坑1 【B区】 遺構なし 【C区】 近代石組2 【D区】 弥生中期：竪穴住居址1 近世：地下室3、土坑11、小穴1	【A区】 近世：陶磁器、瓦、銭、金属 【B区】 なし 【C区】 近代：陶磁器、金属、ガラス 【D区】 弥生中期：土器 近世：磁器、陶器、土器、瓦、金属、石製品	

要約	弥生時代中期後葉の竪穴住居址1軒を検出。 近世では、加賀藩上屋敷以降（1683～1868）の下級勤番武士貸し長屋「御歩町壱～四番地」に比定される場所で、地下室3基を検出した。

東京大学本郷構内の遺跡

基幹環境整備（言問通り横断管路）
電気管路地点発掘調査報告

例　　言

1. 本書は、東京大学基幹環境整備（言問通り横断管路）電気管路新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査地点の略称は HKD18 である。
3. 調査地点は、東京都文京区本郷７丁目３－１に所在する。
4. 調査地点は、東京都遺跡地図「文京区 No.47　本郷台遺跡群」内に位置している。
5. 調査地点の調査面積は 57.4 ㎡である。
6. 調査・整理期間は下記の通りである。

   本 調 査：2018 年 12 月 18 ～ 21 日、2019 年 1 月 28 日～ 2 月 5 日

   整理作業：2019 年 2 月 6 日～ 2 月 28 日（遺物基礎整理）

   2020 年 10 月 16 日～ 3 月 3 日（遺物図デジタル化・図版作成）

   2019 年 2 月 6 日～ 3 月 5 日、2021 年 3 月 12 日～ 3 月 18 日（遺構図デジタル・図版作成）

   2021 年 3 月 19 日～ 5 月 31 日（事実記載）

   編　　集：2021 年 6 月 1 日～ 2021 年 6 月 30 日
7. 発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、大成可乃が担当した。
8. 本報告の編集は大成が行った。
9. 調査時の遺構写真は調査担当者が撮影した。
10. 執筆分担は、第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅴ章は大成が、第Ⅳ章は阿部が担当した。
11. 動物遺体の同定及び分析は阿部常樹氏（國學院大學学術資料センター）に依頼し、原稿を賜った。
12. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場Ⅱ構内（東京都目黒区駒場４－６－１)、同工学系研究科柿岡教育研究施設内（茨城県石岡市柿岡 414）において、管理・保管・運用している。
13. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する（敬称略、五十音順）

    東京都教育委員会、文京区教育委員会

発掘調査参加者（所属は調査時）

大成可乃（埋蔵文化財調査室)、加藤建設（株）

整理作業（所属は参加時）

青山正昭（埋蔵文化財調査室)、加藤建設（株）

凡　　例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。
   SK：土坑　SP：ピット
2. 遺構図版の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に 1/3 であるが、その他の縮尺は各図版に記した。
3. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
   ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
   ・－ －は、断面を表している。
   ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
   ・＼――／は、口唇部の口銹を表している。
   ・擂鉢の↓――↓は、体部擂目の範囲を表している。
   ・口唇部の＼←→／は、敲打痕を表している。
4. 本文中に記載した陶磁器･土器類は、「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類」（いわゆる東大分類）の最新バージョンである『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類 Ver.4（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）、人形・玩具類は「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」（安芸・小林・堀内 2012）、瓦類は「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」（加藤・金子 1990）に準拠している。
5. 遺物観察表は、全て添付の CD-ROM に xlsx ファイルにて、保存・記録している。
6. 調査時はグリッド設定は行わなかったが、報告書作成時に東京大学本郷構内グリッドを設定した。詳細は各地点第Ⅱ章第 2 節を参照されたい。
7. 遺構断面図などに記された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準と、基標番号「郷（2）」本郷七丁目 3 東大赤門前から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお各地点の値は、調査前年度に刊行された東京都土木技術研究所『水準基標測量成果表』に基づいている。
8. 遺構平面図に記載された方位記号は、平面直角座標系による方眼北を示し、真北より 2 分 30 秒西偏している

○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

○生産地

A－輸入陶磁器

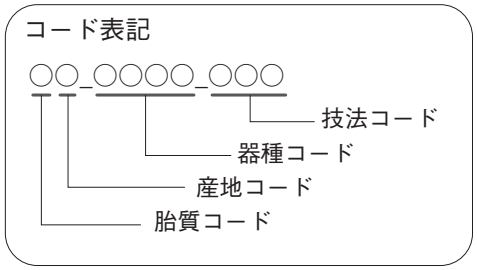
- A1　景徳鎮窯系
- A2　漳州窯系
- A3　徳化窯系
- A4　龍泉窯系
- A5　宜興窯系
- A6　朝鮮
- A7　ベトナム
- A8　ヨーロッパ
- A9　福建・広東系
- A10 西アジア

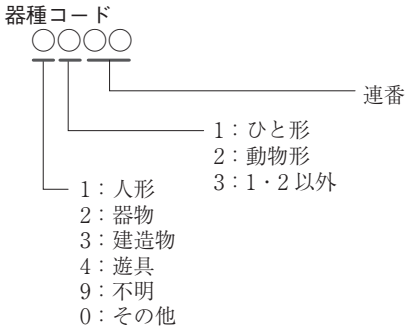
B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－万古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－薩摩系
R－三田系
S－飯能系
Z－不明

○器種

1.碗	2.皿･平鉢	3.大皿･大皿鉢	4.燗徳利	5.鉢
6.坏	7.猪口	8.仏飯器	9.香炉･火入れ	10.瓶
11.御神酒徳利	12.油壺	13.蓋物	14.筆立て	15.壺･甕
16.急須	17.燗鍋	18.合子	19.水滴	20.蓮華
21.植木鉢	22.花生	23.片口鉢	24.灰落し	25.鬢水入れ
26.茶入れ	27.水注	28.漱瓶	29.擂鉢	30.餌入れ
31.火鉢	32.柄杓	33.鍋	34.土瓶	35.戸車
36.ちろり	37.薬研	38.手焙り	39.おろし皿	40.油受け皿
41.油徳利	42.行平鍋	43.十能	44.ひょうそく	45.瓦燈
46.カンテラ	47.ほうろく	48.七輪	49.涼炉	50.五徳
51.塩壺	52.燭台	53.蒸し器	54.懐炉	
63.あんか	64.煙硝擂鉢	65.乳棒	66.硯屏	67.釜

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類



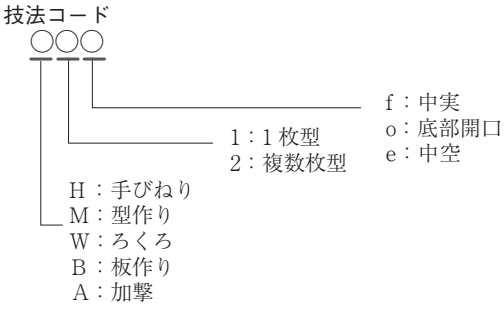


胎質コード

J：磁器（磁質）
T：陶器（陶質）
D：土器（土師質）
R：瓦　（瓦質）

産地コード

A：輸入陶磁
B：肥前系
C：瀬戸･美濃系
D：京都･信楽系
E：備前系
Q：江戸在地系
Z：不明



器種コード (詳細）

1000	人形								
1100	ひと形								
1101	天神	1102	恵比寿	1103	大黒	1104	福禄寿・寿老人	1105	布袋
1106	不動明王	1107	地蔵菩薩	1108	猩々	1109	西行	1110	衿人形
1111	力士	1112	朝鮮通信使	1113	蹴鞠人形	1114	坊主人形	1115	虚無僧
1116	猟師	1117	猿曳き	1118	福助	1119	笛吹き	1120	若衆
1121	姉様	1122	太夫（花魁）	1123	お多福	1124	三味線弾き	1125	裸婦
1126	おぼこ・禿	1127	唐子	1128	ぶら人形	1129	這子	1130	狆抱き童子
1131	亀乗り童子	1132	狆乗り童子	1133	面持ち童子	1134	金太郎	1135	桃持ち童子
1136	獅子舞	1137	鯛抱き童子						
1200	動物形								
1201	狛犬	1202	獅子	1203	猿	1204	犬	1205	馬
1206	狐	1207	牛	1208	猫	1209	兎	1210	鼠
1211	狸	1212	虎	1213	象	1214	鳩	1215	鶏
1216	鴛鴦	1217	木菟	1218	亀	1219	蛙	1220	鯉
1221	鯛・鯛車	1222	金魚	1223	蝉				
1300	その他（1100･1200以外）								
1301	達磨	1302	首人形	1303	獅子頭	1304	面	1305	陽物
2000	器物								
2001	碗	2002	皿	2003	鉢	2004	銚子	2005	瓶
2006	壺	2007	片口鉢	2008	急須	2009	土瓶	2010	鍋
2011	釜･茶釜	2012	擂鉢	2013	蓋	2014	七厘・焜炉	2015	石臼
2016	竈	2017	器台	2018	硯	2019	水滴	2020	銭貨
2021	五鈷鈴	2022	柚でんぼ	2023	香炉・風炉				
3000	建造物								
3001	祠	3002	塔	3003	城郭	3004	橋	3005	塀・袖垣・石段
3006	民家・庵	3007	灯籠	3008	鳥居	3009	御輿	3010	舟
3011	庭園・背景	3012	仕切り盤						
4000	遊具								
4001	土鈴	4002	独楽	4003	笛	4004	碁石状製品	4005	面模
4006	泥面子・芥子面	4007	土玉	4008	円盤状製品	4009	車輪状製品		
9000	不明								
0000	その他								

人形・玩具分類コード

東京大学本郷構内の遺跡

基幹環境整備（言問通り横断管路）電気管路地点
発掘調査報告

目　　次

例　　言
凡　　例
目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置 …… 105
第２節　地理的・歴史的環境 …… 105

第Ⅱ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯と経過 …… 111
第２節　調査の方法と概要 …… 111

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構 …… 115
第２節　遺物 …… 115
第３節　動物遺体 …… 123
SK5 出土陶磁器土器類組成表

第Ⅳ章　成果と課題 － SK5 出土遺物の検討 － …… 135

参考文献
報告書抄録

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

調査地点は、東京都文京区本郷 7-3-1、東京大学本郷構内工学部 4 号館と 13 号館間の植樹帯部分に位置している（Ⅰ-1 図）。東京大学本郷構内は、全域を「文京区 No.47 本郷台遺跡群」、一部を「文京区 No.28 弥生町遺跡群」として周知の遺跡に登録されている。東京大学埋蔵文化財調査室では 1983 年以降、事前調査、試掘調査、立会調査を継続的に行っているが、本地点周辺は調査が実施された地点はあまり多くはない。事前調査では、12 農学部図書館（『東京大学構内遺跡調査研究年報』4）、18 教育学部総合研究棟、41 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー（『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 10　教育学部総合研究棟地点・IML 地点』）、58 医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期（『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 12　医学部附属病院受変電設備棟地点』）、59 工学部基幹整備共同溝（『東京大学構内遺跡調査研究年報』8）、100 工学部新 3 号館（『東京大学構内遺跡調査研究年報』9）、134 工学部 3 号館施設整備（下水他）（『東京大学構内遺跡調査研究年報』10）、244 基幹環境整備（言問い通り横断管路）（以下、横断管路地点。『東京大学構内遺跡調査研究年報』11）などが行われている。

最も大きな面積を調査した工学部新 3 号館地点では江戸時代の建物跡、下水道、井戸、地下室、土取坑、廃棄土坑、段切りなど約 600 基の遺構が確認されたほか、中世の溝状遺構、平安時代の竪穴式住居などが検出されている。本地点に隣接する横断管路地点は、開削される立坑部分のみの限られた面積の調査であった事もあり、いずれの立坑も近代以降に地山まで削閉され、遺構、遺物は検出されなかったが、本地点北側に位置する立坑 3･4 では、表土直下に立川ロームⅢ層が確認（現地表面下約 60cm で確認）されたが、現地表面下 80cm からは白色粘土粒や砂粒をやや多く含む明黄褐色土、地表面下約 130cm で粘性の強い暗褐色土、地表面下 200cm 以下はさらに粘性の強い黄白色粘土ブロックや暗黄褐色の粗い砂礫を多く含む明黄褐～黄褐色土層が確認されるなど、立川ロームⅢ層以下が標準層序とは異なる土層堆積状況である事が確認された（Ⅰ-2 図）。

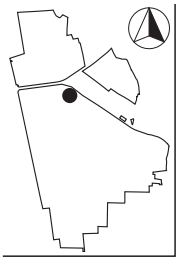
第２節　地理的・歴史的環境

本郷構内の地理的環境については理学部 7 号館地点（鈴木 1989）、東京大学史紀要（阪口 1990）、浅野地区Ⅰ（パリノ 2016）などに詳細に述べられており、それらを参照されたい。

調査地点の概況を述べると、地形的には武蔵野台地東端の M2 面に対比される本郷台上の東端に立地する。調査地点の標高は約 16.6m で概ね平坦であるが、周辺状況をみると北から南へ緩やかに傾斜し、さらに南東方向へも傾斜している。このような地形の状況は、明治 16（1883）年測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図」（以下、明治 16 年測量原図）と調査地点付近を合成したものでも確認できるが、明治 16 年測量原図で確認できる標高は約 17m で、現況はわずかに低くなっている（Ⅰ-3 図）。本地点南側を調査した本郷 59 工学部共同溝地点では埋没谷が検出され、その堆積層の出土遺物の年代観から、この埋没谷は明治 16 年の測量図が作成されるまでには埋められたのではないかと推察されている（原・香取 2012）。また本地点西側、工学部 4 号館改修に伴う試掘調査でも埋没谷の存在が確認されていることから（東京大学埋蔵文化財調査室 2014）、本地点周辺には未確認の谷筋があることも想定された。

歴史的環境をみると本地点は、江戸時代を通して水戸藩駒込邸であった場所であり、その分析については文献調査成果と考古学的調査成果とを合わせ原が詳細に行っている（東京大学埋蔵文化財調査室 2011、原 2016）。水戸藩駒込邸は、元和 8（1622）年に下屋敷として 54,200 坪を拝領、元禄 6（1693）年に本所小梅屋敷を新たに得たことを契機に駒込邸は中屋敷､小梅邸は下屋敷となり、以後、明治 2（1869）年明治政府に収公されるまで存続していた。現在唯一確認されている水戸藩中屋敷を描いた絵図面『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』(1)　と照合すると、藩邸南端付近の道（灰色部分）で囲まれた空閑地に該当する場所であることが判る（Ⅰ-4 図）。

江戸時代以降の調査地点の様子を東京大学施設部所蔵本郷団地変遷図で確認すると、明治 19（1886）年頃の調査地点は明治 16 年測量原図と同じく斜面地に該当し、建物などは見当たらない。1898 ～ 1899 年頃から調査地点周辺に建物が確認されるようになり、周辺地形の改変も認められるようになる。1903 ～ 1904 年頃からは調査地点にも建物が確認されるようになる。なお 1912 年頃の図面では確認できないが、1918 ～ 1919 年頃の図面では調査地点付近南側には、まだ斜面地の表現が確認できる。図面上に斜面地の表現がなくなるのは 1923 ～ 1924



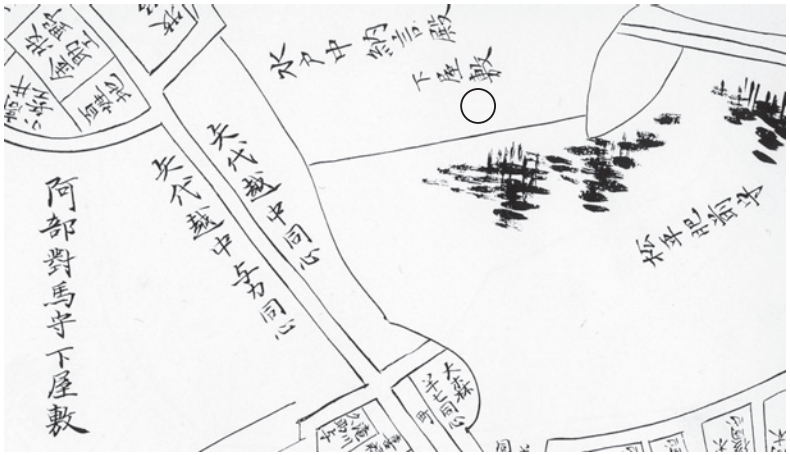
12 農学部図書館、18 教育学部総合研究棟、41 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー、58 医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期、59 工学部基幹整備共同溝、100 工学部新 3 号館、134 工学部 3 号館施設整備（下水他）、244 基幹・環境整備（言問い通り横断管路）

I-1図　調査地点と周辺調査(1/2000)

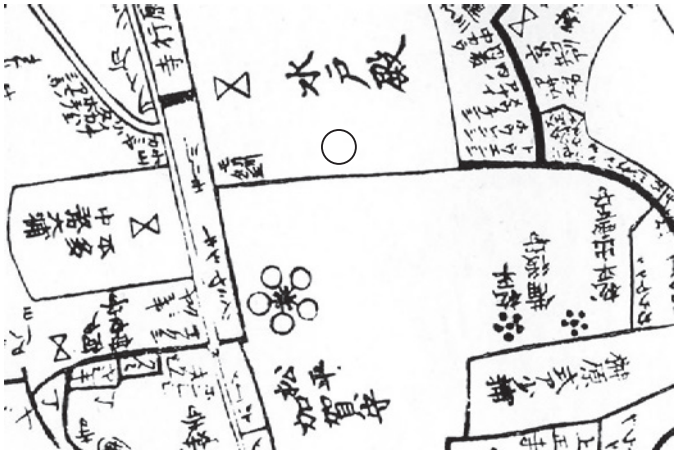
年頃からであり、1923 年の関東大震災によって構内が大きく損壊するまでは調査地点南側には傾斜地が残り、積極的な土地利用は難しい場所であった事が推察される。調査地点東側に隣接する工学部 13 号館の建物が確認されるのは 1930 年からであり、これ以降、調査地点は道ないし植栽としての利用が続く（Ⅰ- 5 図）。

Ⅰ -2 図　立坑 4 ローム層堆積状況

I-3図　明治16年の調査地点
（明治16年測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図」に加筆。白字は標高）



正保元(1644)年・正保年間江戸絵図

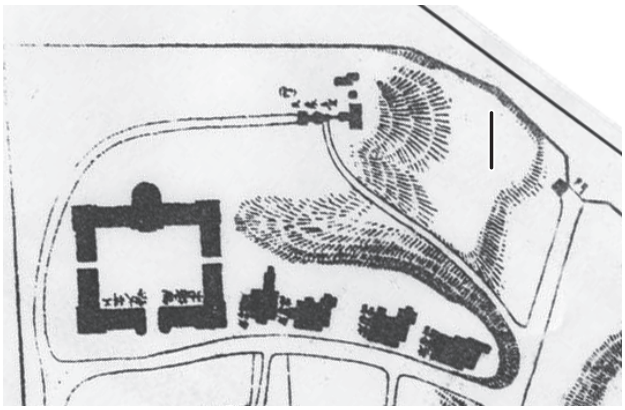


宝暦7(1757)年・分間宝暦江戸大絵図

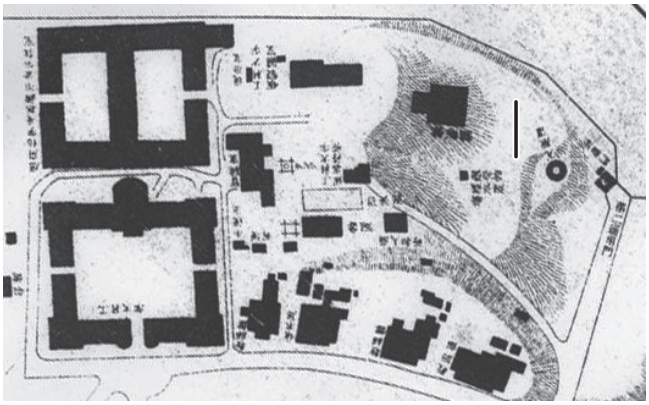
嘉永2(1849)年・谷中本郷駒込小石川辺絵図

文政9(1826)年・向陵彌生町舊水戸邸繪図面(筆者加筆)

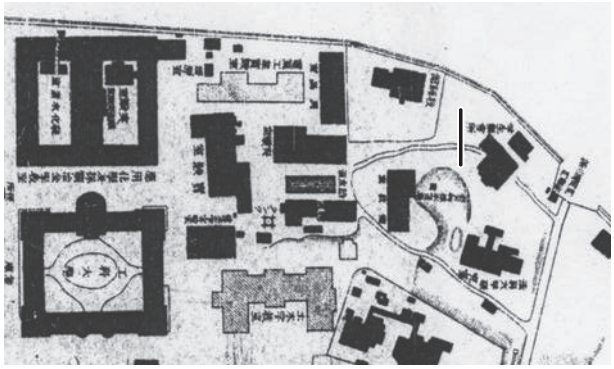
I-4図　江戸時代の調査地点(○が調査地点)



1886



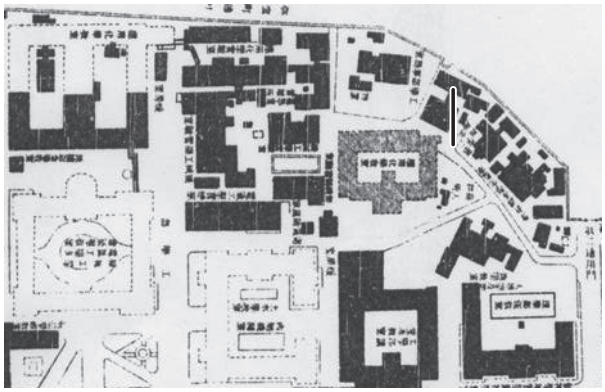
1898-1899



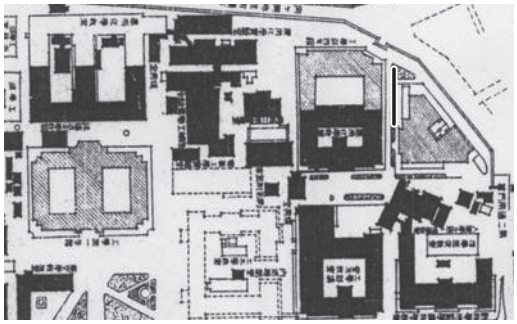
1903-1904

1912-1913

1918-1919

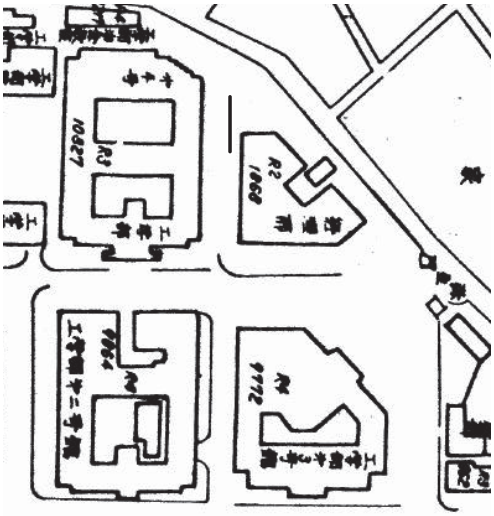


1923-1924



1930

調査地点



1988

I-5図　江戸時代以降の調査地点

第Ⅱ章　調査の経緯と概要

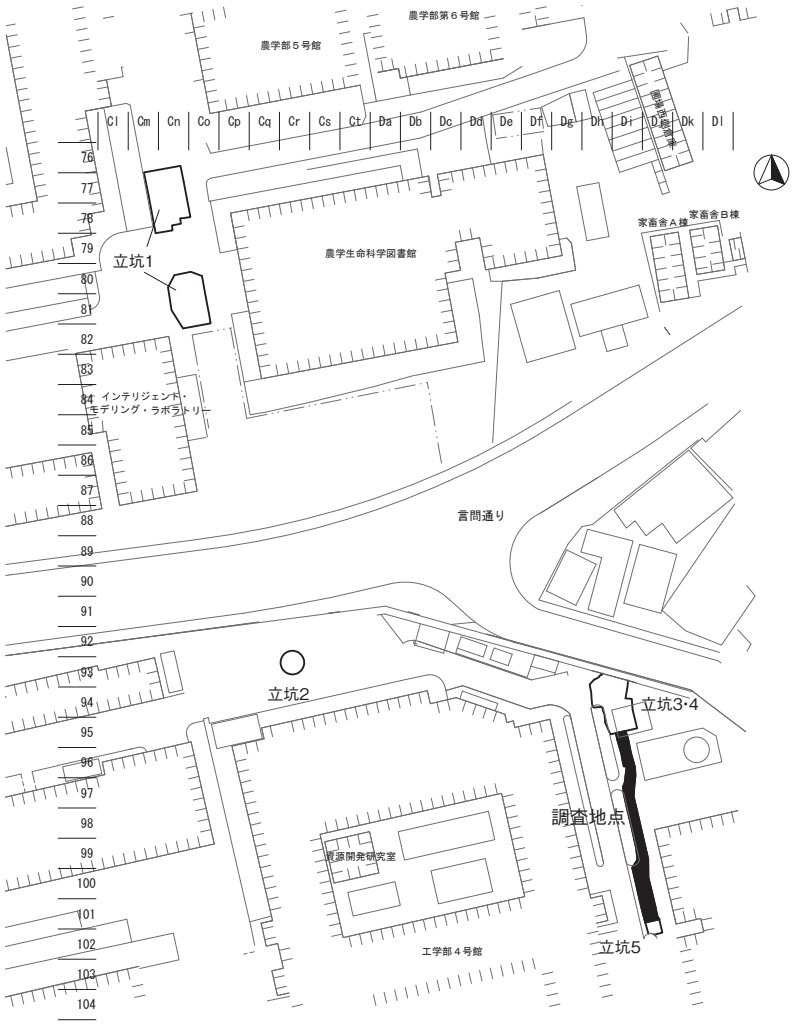
第１節　調査に至る経緯と経過

東京大学では本郷構内農学生命科学図書館付近から工学部４号館付近までのびる基幹環境整備（言問通り横断管路）を計画、それに伴い５箇所の立坑（立坑１～立坑5）の掘削と、工学部４号館と13号館の間の植栽部分に電気管路の設置が計画された（Ⅱ-1図）。

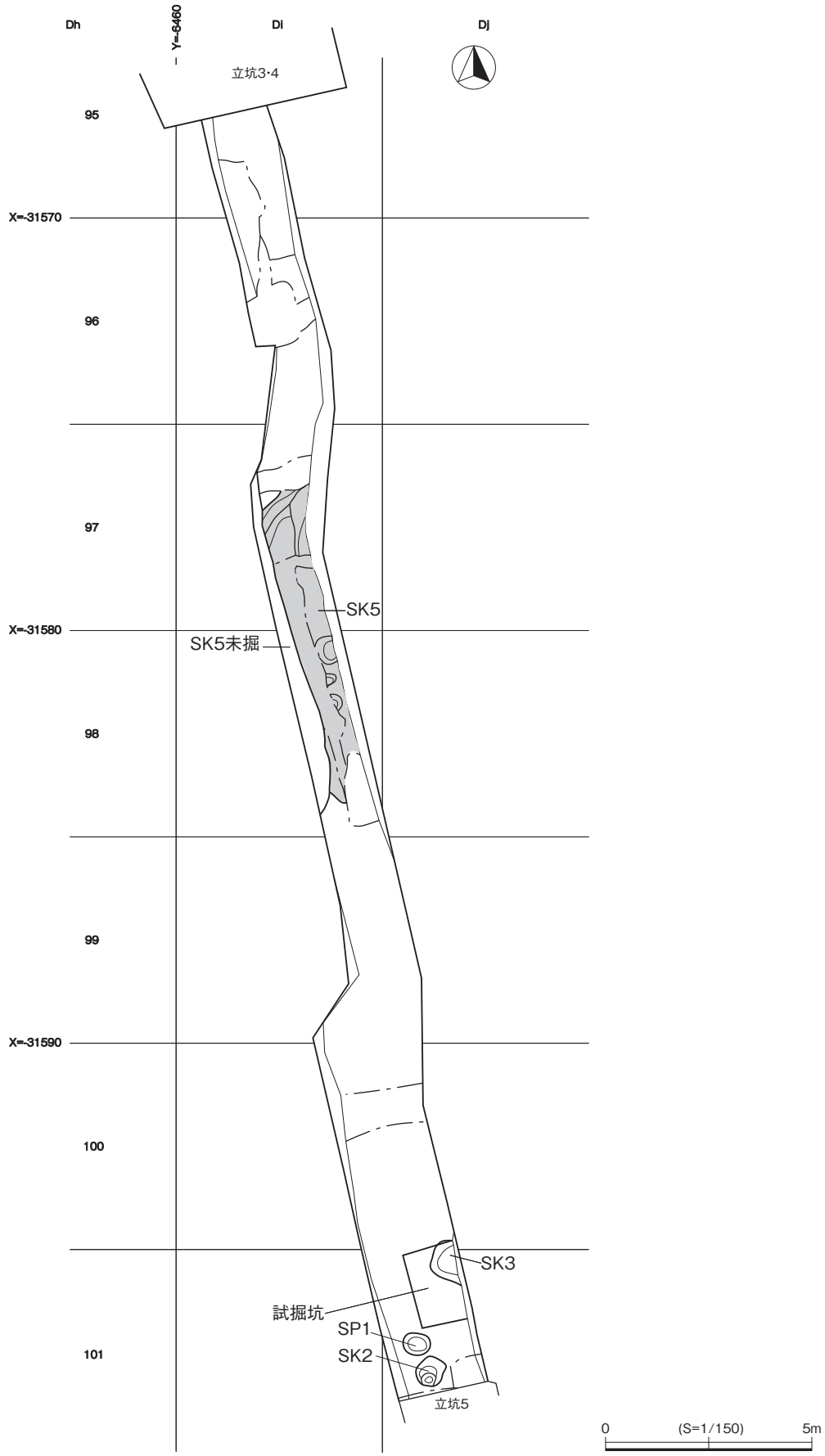
東京大学施設部より依頼を受けた東京大学埋蔵文化財調査室では、2018年３月30日～４月２日、５日に立坑3･4を、４月12日、16日、５月16日、17日に立坑１を、５月10日に立坑２を、12月17日に立坑５の調査をそれぞれ実施したが、立坑１～立坑５はいずれの地点も近代以降に削閉あるいは既設埋設物により撹乱され、遺構、遺物は確認されなかった（東京大学埋蔵文化財調査室2019）。その後、立坑３・４の南側、電気管路地点の発掘調査を実施した。調査は既設埋設管や植栽帯を避け、東西150～220cm、南北約31m、調査対象面積57.4平米の範囲で実施した。2018年12月18～21日に重機により表土掘削を実施したところ、概ね調査区全体が地山まで削閉されている事が確認され、地山面での遺構調査を実施することになったが、後述するSK5が大形遺構であることが想定されたのでSK5以外の調査を先行して終了させ、残土搬出方法の検討、教職員の安全通路の確保などを行った後、2019年１月28日～２月５日にSK5の調査を実施した。

第２節　調査の方法と概要

調査面積が狭くグリッド設定は行わなかったが、報告書刊行に際し東京大学本郷構内グリッド（以下、東大グリッド）[(2)]と照合したところ、東大グリッドDh95区



Ⅱ-1図　電気管路地点（調査地点）と横断管路地点（立坑1～5）

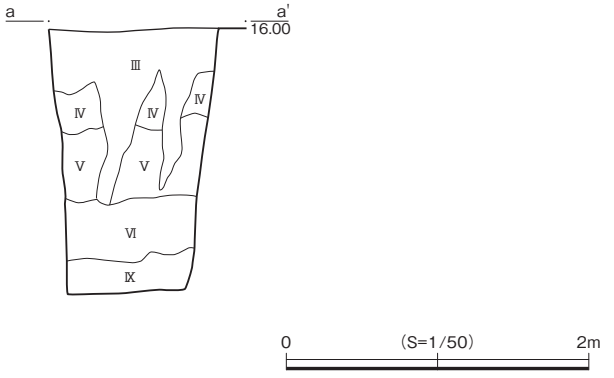


Ⅱ-2図　電気管路地点全体図

から Dj101 区に位置している（Ⅱ-2 図）。北側では地表面下 40 ～ 50cm で、中央付近では地表面下約 30cm で、南側では地表面下 50 ～ 70cm で地山が確認された。なお南側では、局所的に地表面下約 30cm で暗褐色土が地山直上に堆積している状況が確認された。調査区東壁面でこの暗褐色土の堆積状況を調査したところ、地山まで漸移的に変化しており、自然堆積土あるいは植栽などに伴う土の可能性が高い。本層からは 1 点ではあるが須恵器坏破片が出土している。

遺構はいずれも地山で検出され、ピット 1 基、土坑 3 基が確認された。

第Ⅰ章第 2 節でも触れたが、本地点西側に隣接する工学部 4 号館改修に伴う試掘調査で埋没谷の存在が確認されていたことから、本調査地点の南側 1 箇所にローム層の堆積状況を確認する試掘坑を設定したが埋没谷は確認されず、武蔵野標準層位Ⅲ層～Ⅵ層、Ⅸ層が確認された（Ⅱ-3 図）。ただ本地点北側の表土直下のローム層や、SK5 北側立ち上がり壁面で確認されたローム層は、白色シルト質粘土粒やブロックを多く含み、立川ローム層の標準層とは異なるローム層が確認されており、同様のローム層が横断管路地点立坑 3・4 でも確認されていることから、本地点北側付近に言問通りに向かって埋没谷のような旧地形が存在していた事も推察されるが、その判断については周辺調査地点の地山ローム層の堆積状況や標高なども合わせて検討する必要があり、今後の課題としたい。



1　黄褐色ローム層　（黒色スコリア粒少含、粘性・しまりやや弱、武蔵野標準層位Ⅲ層）
2　明黄褐色ローム層　（黒色スコリア粒・赤色スコリア粒・赤色スコリア粗粒少含、粘性・しまり強、武蔵野標準層位Ⅳ層）
3　暗黄褐色ローム層　（黒色スコリア粒多含、黒色スコリア粗粒少含、赤色スコリア粒微含、粘性・しまり強、武蔵野標準層位Ⅴ層）
4　暗黄褐色ローム層　（黒色スコリア粒やや多含、赤色スコリア粒少含、炭化物微含、粘性強、しまり極強、武蔵野標準層位Ⅵ層）
5　暗褐色ローム層　（黒色スコリア粗粒微含、粘性・しまり強、武蔵野標準層位Ⅸ層）

Ⅱ-3図　ローム層基本層序

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構

SP1（Ⅲ-1 図）

東大グリッド Dj101 に位置する。平面形が楕円形、掘り方断面形は逆台形を呈す柱穴であり、規模は長軸 66cm、短軸 53cm、確認面からの深さ 46cm を測る。坑底、壁面ともに比較的平坦である。覆土断面には柱痕が確認できるが、その形状は漏斗状を呈す。

出土遺物は検出されなかった。

SK2（Ⅲ-1 図）

東大グリッド Dj101 に位置する。平面形は不整形、掘り方断面形は浅い皿形を呈し、規模は長軸 74cm、短軸 66cm、確認面からの深さは 14cm を測る。壁、坑底には凹凸が確認される。覆土はしまりのない暗褐色土主体であり、掘り方の状況を合わせて考えると植栽痕と推測される。

出土遺物は検出されなかった。

SK3（Ⅲ-1 図）

東大グリッド Dj100 ～ Dj101 に位置し、東側立ち上がりは調査区外にのびる。確認された平面形は不整方形、掘り方断面形は U 字形を呈し、規模は長軸 80cm 以上、短軸 94cm、確認面からの深さは 30cm を測る。壁、坑底は比較的平坦である。

出土遺物は検出されなかった。

SK5（Ⅲ-2 図）

東大グリッド Di97 ～ Di98 に位置し、南北は撹乱、東西は調査区外までのび、遺構全体の形状や規模は未確認の遺構である。確認された規模は長軸（南北）約 770cm、短軸（東西）110cm 以上、深さは一定しておらず、60cm ～ 156cm を測る。北側立ち上がりは西半分が緩やかな階段状、東半分が円形に掘り込まれている。南側立ち上がりは確認面以下 50cm ほどまではほぼ垂直に、それ以下は南側へ大きく傾斜するようにオーバーハングし、確認面以下 100cm から坑底まではほぼ垂直に立ち上がる。坑底および局所的に確認された壁面は凹凸が顕著であり、坑底中央付近から南側は第Ⅱ黒色帯で、北側はローム土層中に黄白色粘土粗粒やブロックが多く認められローム土の変質が確認されたレベルで掘削を中止していることから、精良なローム土を確保する採土坑として掘削された可能性が高い。

覆土は 5 層からなり、上位 1、2 層は遺物を多く含む明灰褐色土層、下位の 3 ～ 5 層は遺物をほぼ含まないローム粒やロームブロックなどを多く含む暗褐色土層であり、堆積状況からは本遺構掘削後、一時に埋め戻された後、その窪地を芥を多く含む客土で埋めたと推察される。

SK5 からは陶磁器・土器類、金属製品、貝骨などの動物遺体などを含め遺物収納箱 11 箱分の遺物が出土した。陶磁器・土器類は 18 世紀末葉から 19 世紀前葉に比定されるものであり、貝にはサザエやアワビなどの大形のものも含む。

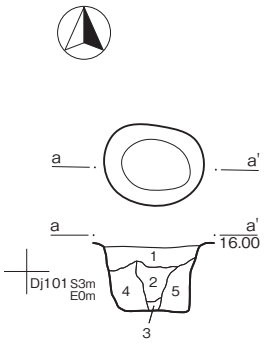
第２節　遺物（Ⅲ-3 ～ 5 図）

本節中で使用している陶磁器・土器類の分類基準は『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類』(1)（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）に対して、一部分類の見直しを行った分類 Ver.4（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）に、人形・玩具の分類基準は、「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」（安芸・小林・堀内 2012）に準拠した。陶磁器・土器類の数量分析をする際は基本的に以下の基準で行った。①底部糸切り痕跡の中心の数②底部が 1/2 以上残存するものの数③注口の数など、各個体毎に 1 箇所しかない部位を、重複してカウント対象とならないよう配慮し実施した。

SK5（Ⅲ-3 ～ 5 図）

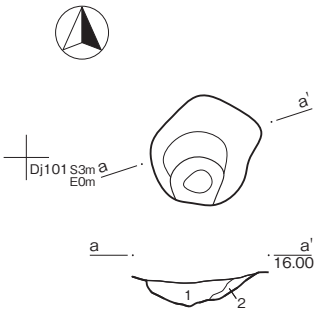
遺構の事実記載でも触れたように SK5 からは遺物収納箱 11 箱分の遺物が出土しており、陶磁器・土器類、貝類、金属製品、瓦、ガラス製品などが確認できる。最も多く出土したのは陶磁器・土器類であるが、貝類もハマグリなどの 2 枚貝を中心に遺物収納箱 1 箱弱出土（遺存状況の良好なもののみを採取）しており、その中には掌にあまるサイズの大形のアワビやサザエも含まれている。

陶磁器・土器類は推定個体数 192 点を数え、部分的な調査であったが 1 遺構からの出土量としては比較的多い。磁器碗には瀬戸・美濃系端反碗と肥前系広東碗、端反碗などが中心に認められ、また油受け皿や油皿がほぼ施釉されているものが中心となっている事から、18 世紀末葉から 19 世紀前葉に比定される遺構一括資料と考えられる。1 ～ 13 は磁器、14 ～ 28 は陶器、29 ～ 40 は土器である。1 は景徳鎮窯系青花で JA1-1 に分類される。端反形碗で、外面、見込みには呉須の筆描きで草花文が施される。体部には鉛ガラスによる焼継痕がみられる。2、3 は肥前系染付のいわゆる広東碗で、JB-1-m に



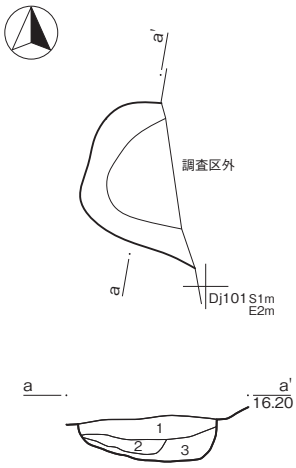
1　黒褐色土　（黒色土粗粒・ローム粗粒少含、粘性・しまりなし）
2　黒褐色土　（1より明、ローム粗粒少含、ローム粒微含、粘性なし、しまりやや弱）
3　暗黄褐色土　（ローム主体、黒色土粗粒少含、粘性なし、しまりやや強）
4　暗褐色土　（ローム粒微含、粘性・しまりなし）
5　暗黄褐色土　（ローム粒粗粒やや多含、黒色土粗粒少含、粘性・しまりやや弱）

SP1



1　暗褐色土　（ローム粒粗粒・炭化物粒微含、粘性・しまりなし）
2　黄褐色土　（ローム粒多含、黒色土粗粒少含、粘性なし、しまりやや弱）

SK2

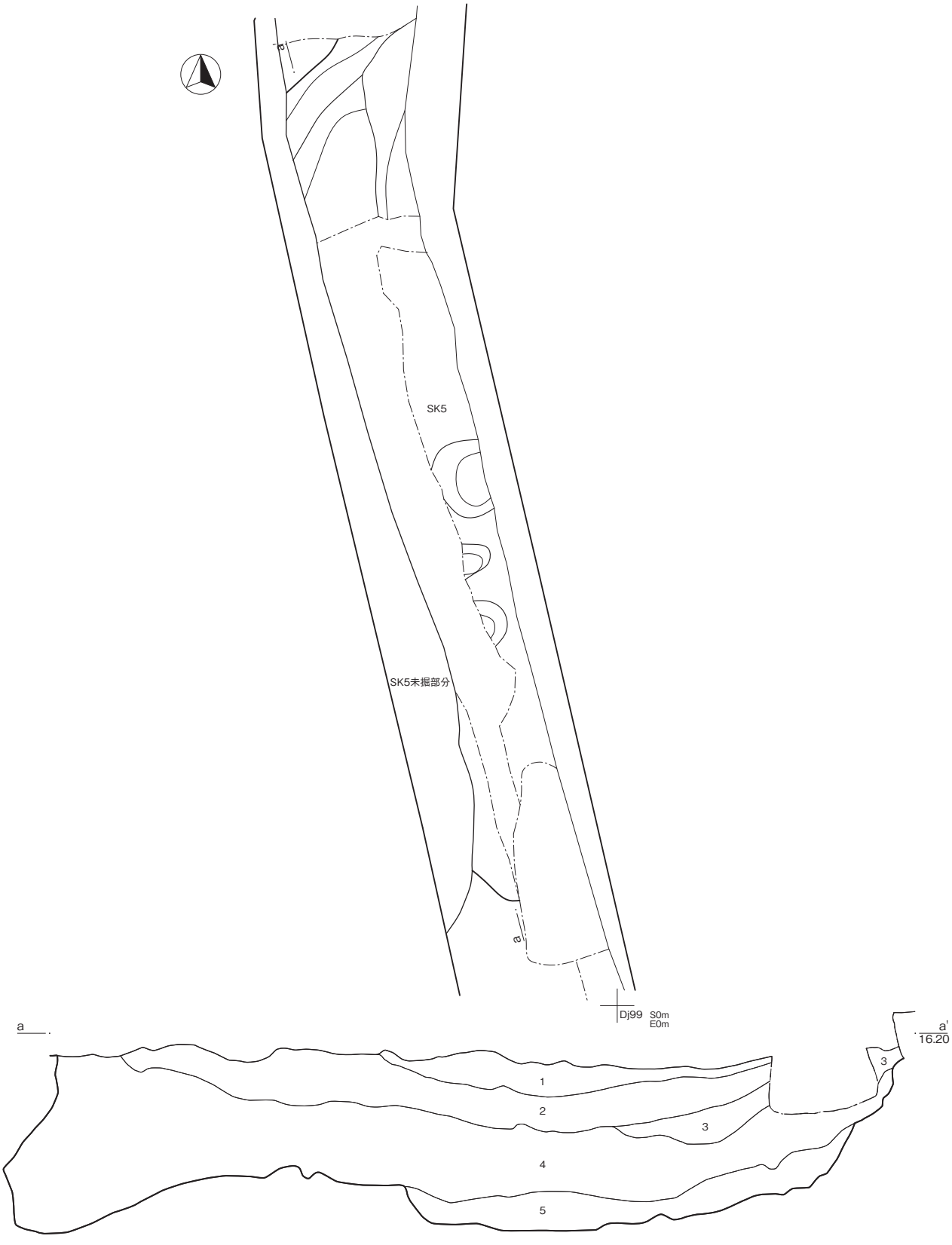


1　暗褐色土　（ローム粗粒少含、黒色土粗粒微含、粘性・しまりなし）
2　明黄褐色土　（ローム主体、黒色土粗粒少含、粘性・しまりやや強）
3　暗黄褐色土　（黒色土粗粒・ローム粗粒やや多含、ローム粒少含、粘性なし、しまりやや弱）

SK3

0　（S=1/50）　2m

Ⅲ-1図　SP1、SK2、SK3

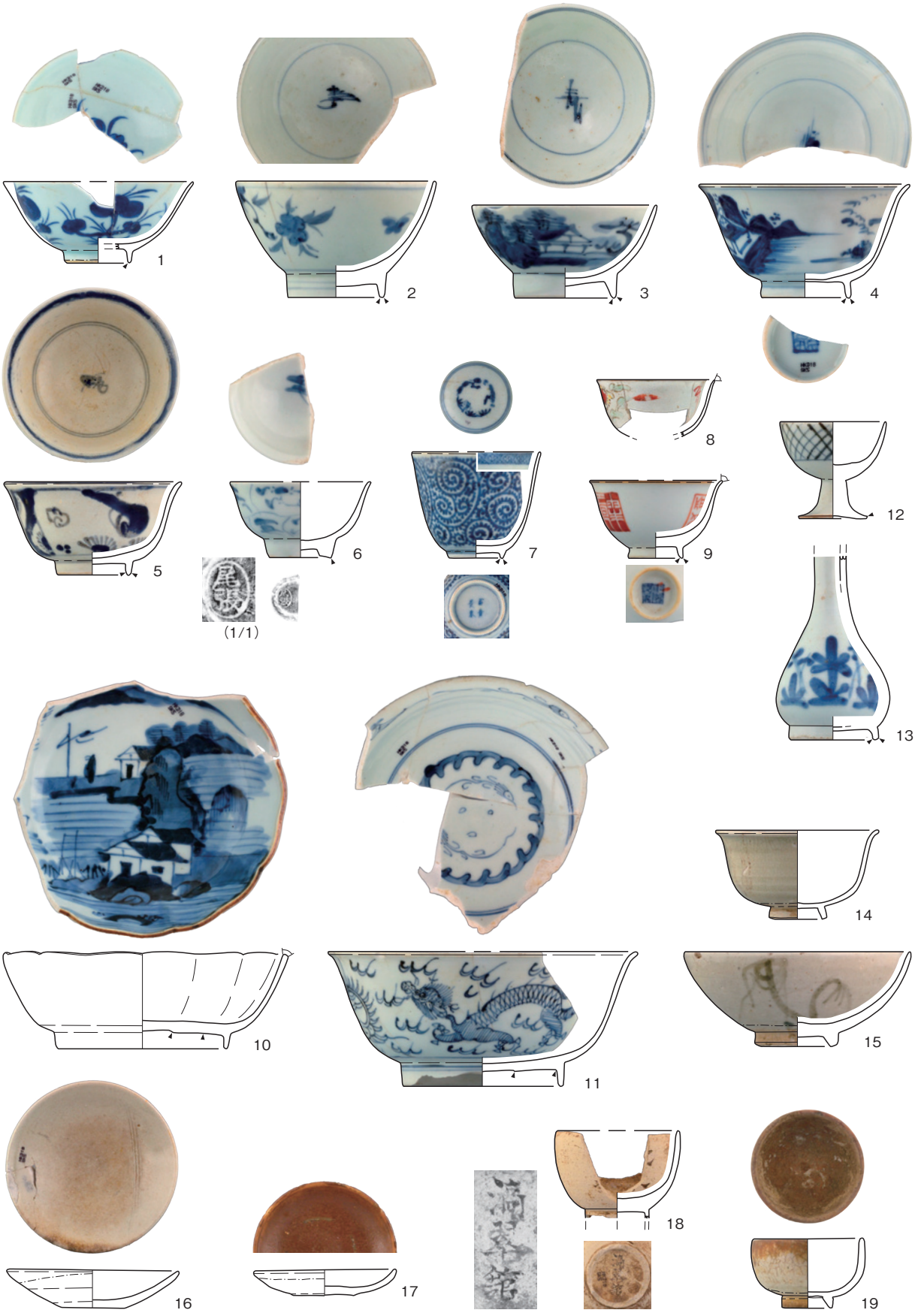


1　明灰褐色土　（炭化物粗粒少含、ローム粗粒微含、粘性やや弱、しまりやや強）
2　明灰褐色土　（炭化物粗粒・遺物やや多含、ローム粗粒少含、粘性・しまりやや弱）
3　明褐色土　（黄白色シルト質粘土ブロック少含、炭化物微含、粘性・しまりやや弱）
4　暗褐色土　（ローム粒主体、ローム粗粒・ロームブロック少含、炭化物微含、粘性・しまりなし）
5　暗黄褐色土　（ロームブロック・暗黄褐色土ブロックやや多含、黄白色シルト質粘土粗粒少含、粘性・しまりやや強）

Ⅲ-2図　SK5

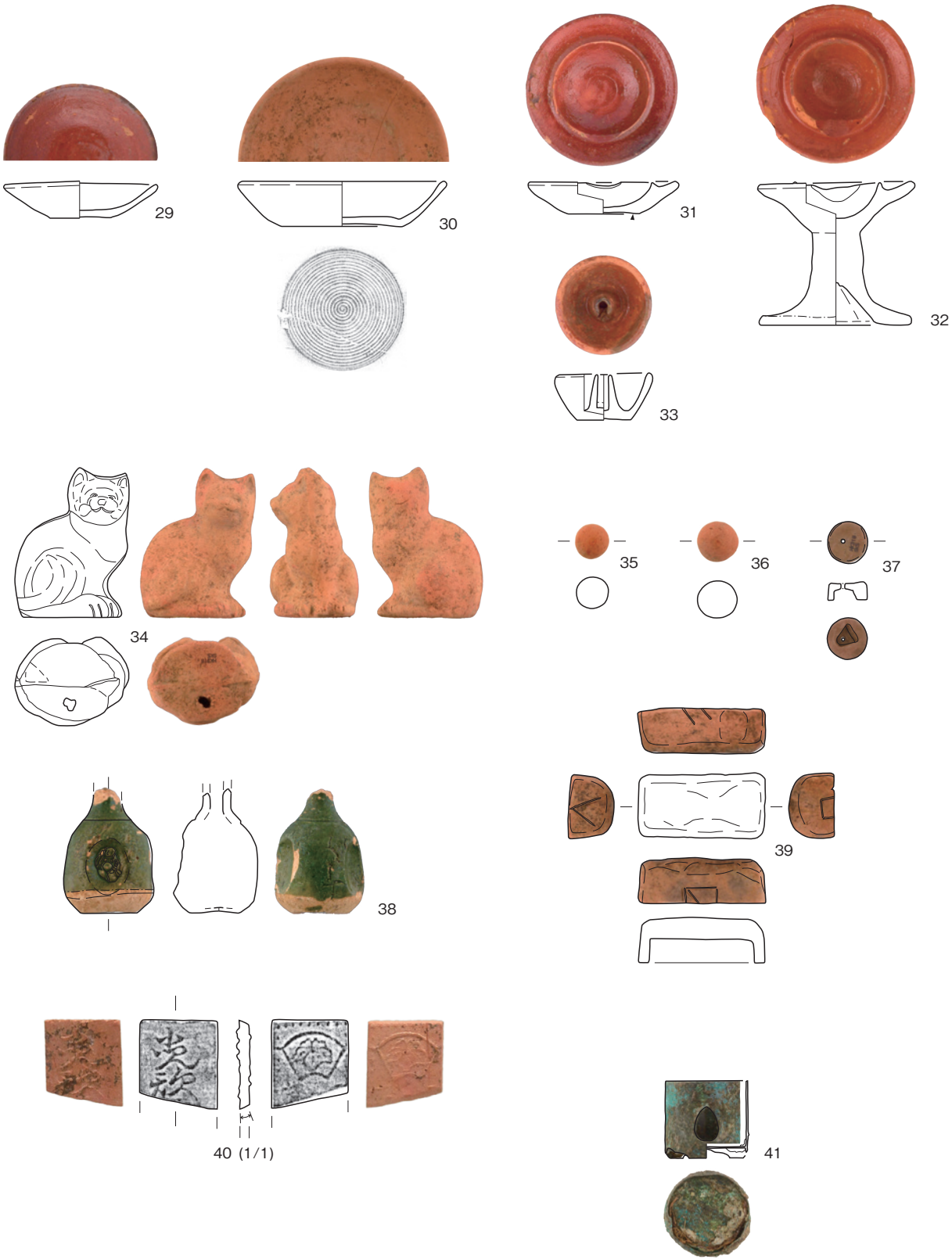
分類される。ともに器高が低い、広東碗でも後出的なタイプの特徴を有す。4、5 は瀬戸・美濃系磁器の端反形碗で JC-1-d に分類される。4 のみに高台内に角枠銘が確認される。6 ～ 9 は坏である。6 は瀬戸・美濃系染付坏で JC-6 に分類される。畳付けから高台内は無釉で、高台内には楕円に「尾張」の刻印がある。7 は肥前系染付坏で JB-6 に分類される。口縁部が僅かに外反する。高台内には「富貴長春」銘がある。8 は徳化窯色絵坏で JA3-6 に分類される。胎土は薄い灰色を呈し、口縁部が僅かに外反する。体部外面には草花文を黒で線書きし、その中を赤、黄、緑で塗り埋め、文字のようなものが赤で描かれている。口唇部も口銹状に赤色で塗られている。9 は景徳鎮窯系色絵坏で JA1-6 に分類される。口縁部は小さく外反し、口銹が確認される。高台内には呉須で「乾隆年製」角枠銘を有す。赤で「二」の記号？があるが、本体の割れ口には焼継が剥離したような痕跡が確認される事から焼継印か。10 は蛇の目凹型高台を有す肥前系染付皿・平鉢で、JB-2-i に分類される。口銹を有し、高台内の釉剥ぎ部分にチャツ痕が確認される。11 は肥前系染付鉢で JB-5 に分類される。蛇の目凹型高台を有し、口縁部が外反する。絵付は線書きされている。12 は肥前系染付仏飯器で JB-8-b に分類される。呉須はやや黒ずむ。13 は瀬戸・美濃系染付御神酒徳利で JC-11-b に分類される。14、15 は陶器碗。14 は京都・信楽系の貫入が多く認められる碗で TD-1-g に分類される。口縁部は強く外反し、高台脇は面取りが施される。15 は瀬戸・美濃系灰釉鉄絵碗で TC-1-g に分類される。高台脇は面取りされる。鉄絵はかなり崩れた柳文と思われる。16、17、20 は陶器皿・平鉢である。16 は見込みに櫛目のある京都・信楽系灰釉皿で TD-2-a に分類される。17、20 は瀬戸・美濃系で、17 は鉄釉が施釉されたもので TC-2-o、20 は灰釉輪禿皿で TC-2-m に分類される。17 の見込みには直重ね痕が、20 の見込み、高台付近にタール状のススが確認される。18、19 は坏である。18 は京都・信楽系の軟質施釉陶器で TD-6 に分類される。釉は剥落しているが、体部外面に鉄絵（文字か？）と、高台内に鉄で「滴翠館」銘が認められる。19 は瀬戸・美濃系灰釉坏で TC-6。口縁部から内面全体に赤色付着物が確認される。ベンガラか。21、22 は瀬戸・美濃系灰釉瓶で、21 は容量が二合半のもので TC-10-c、22 は一升で TC-10-d に分類される。ともに胴部に「高サキ」の点刻の釘書きが施される。23 は瀬戸・美濃系灰釉植木鉢で TC-21 に分類される。24 は瀬戸・美濃系鉄釉擂鉢で TC-29 に分類される。直径 16cm ほどの小さなもので、ムラがあるが総釉掛けされている。内面の擂目は 1 単位 5 条で、隣り合う擂目が細長い三角形になるような意匠的に入れられている。底部には右回転の糸切り痕が確認される。25 は産地不明の灰釉土瓶で TZ-34-g。直径 7mm ほどの漉し孔 3 個を有す。26 ～ 28 は油受け皿で、26、27 は瀬戸・美濃系、28 は京都・信楽系のものである。26 は錆釉が施釉されたもので TC-40-c に分類される。底部には受け部と同径の輪状の熔着痕が確認される。27 は高い受けを有すもので TC-40-e に分類される。底部はごく浅く削り込まれる。口縁部から内面全体に灰釉が施釉され、無釉の底部には半月状の熔着痕と墨書が確認できる。28 は底部以外に灰釉が施釉される脚付きのもので TD-40-a に分類される。29、30 は土器皿である。29 は内外面施釉されたもので DZ-2-h に分類され、底部には左回転糸切り痕が確認される。口唇部の所々に灯芯痕が付着する。30 は底裏に渦巻き状の糸切り痕が認められるもので DZ-2-c。見込みは底体間よりやや大きく盛り上がる。31、32 は透明釉が施釉された油受け皿で、31 は DZ-40-b、32 は DZ-40-a に分類される。ともに受け部が口縁部より低い後出的な様相を呈す。31 は口縁部 1 箇所に灯芯痕が確認される。32 の無釉の底部には時計回りに削り込まれた痕跡が確認できる。33 は透明釉が施釉された無脚のひょうそくで DZ-44-b に分類される。U 字状に削り込まれた灯芯部と、それと相対する口縁部には灯芯痕が確認される。34 ～ 38、40 は人形・玩具である。34 は江戸在地系の猫をモチーフとしたもので DQ-1208 に分類される。型作りで側面、底部にはナデが確認される。底部には焼成前穿孔が 1 箇所ある。35、36 は江戸在地系土玉で DQ-4007 に分類される。手捻りで、表面は比較的丁寧にナデ調整されている。なお土玉は 35 とほぼ同サイズが 3 点（小）、36 とほぼ同サイズが 3 点（大）の計 6 点が確認されている。37、39 は江戸在地系の器種不明のもので DQ-9000 に分類される。37 の胎土は緻密で、にぶい褐色を呈す。円盤状に手捻り成形後、一方の面に何かを押し込んだような隅丸三角形の凹みと、押し込んだものを取り外す際に竹櫛のようなものを指した小さな穿孔が看取される。小さな面模か。39 は平面形が隅丸長方形を呈す被せ蓋のようなものである。蓋と推定したのは、4 側面を合わせる目安となるような線彫り記号のようなものが認められるためである。胎土は 37 とよく似るが、本品の方が色見がやや明るい。手捻り成形で、カマボコ形に凹ませるために半筒形のものを押し込んだような縮れが看取される。38 は京都・信楽系瓶で DD-2005。型作り、中空の製品で、底裏中央は平坦に、底部脇は丸味を帯びるようにケズリ調整されている。胴部 3 方は凹まされ、うち 1 つの凹み

には布袋の浮文が看取される。40 は江戸在地系の銭貨をモチーフとしたもので DQ-2020 に分類される。板作で、表裏に雲母と陽刻が確認される。一分金を模したものと思われるが、中程で切断され、切断面は平坦に調整されている。本製品と同じものがもう 1 点出土しているが、それも本製品と同じく、中程付近から切断されている。41 は筒形金属製品である。薄い板状の金属の 1 箇所を縦位に繋ぎ、筒形に成形し、一方の端部が 3 脚を有すように雲形に 3 箇所凹まされている。胴部 1 箇所は水滴形の穿孔を有す。内側と底裏付近には白色の付着物が認められる。



Ⅲ-3図　SK5(1)

Ⅲ-4図　SK5(2)



Ⅲ-5図　SK5(3)

第３節　動物遺体

はじめに

本地点より出土した動物遺体は、すべて現場にて調査者が目視で確認できたものを任意で取り上げてきたものである。それらすべてSK5より出土している。なお、SK5は、18世紀末から19世紀前葉の水戸藩中屋敷敷地内に属する遺構とされている。

同定の結果、14種の動物遺体が含まれている。内訳は、貝類が13種、哺乳類が1種である（Ⅲ-1表）。以下、上記のカテゴリーごとに詳細を述べる。

1. 貝類

1-1. 貝種組成（Ⅲ-2表）

13種169個体が出土している。最も多いのはハマグリで95個体出土し全体の56.2％を占める。次いで、ヤマトシジミが多く31個体出土し18.3％を占める。さらに、アサリ（15個体・8.9％）とサザエ（12個体・7.1％）が比較的多い。それ以外は5個体未満であり、バイ（4個体・2.4％）、マダカアワビ、アカニシ、サルボウガイ、イタヤガイ（2個体・各1.2％）、アカガイ、ホタテガイ、マガキ、シオフキガイ（各1個体・0.6％）が出土している。その内、イタヤガイとホタテガイは食物残滓ではなく、道具やその部品として加工されたもの、容器等に用いられたものと考えられる。詳細は後述する。また、サルボウガイ、シオフキガイ、マガキの3種の中小型二枚貝類は2個体以下と極めて少ないことから、生息域がほぼ同じであるハマグリやアサリを採集した際に混獲されたものと推測される。特にシオフキガイに関しては、『本朝食鑑』（元禄8年）に「江東の漁艇が浅利（アサリ）と相雑えて伝送してくるので、合烹して食べている。」（以上、現代語訳は島田（1981）による。丸括弧内、報告者加筆）と記されている。

1-2. サイズ

サイズの計測定義は阿部（2006）に基づく。なお、ハマグリに関しては、殻長よりも計測サンプル数の多い外靭帯溝長より殻長の推定をおこない、以下の分析に用いた。具体的に回帰相関分析によって推定式の導出をおこなった。その回帰相関分析の結果はⅢ-3表に示す。

(1) ハマグリ（Ⅲ-4表）

出土した右殻95点の内86点について外靭帯溝長より殻長を推定することができた。平均値は34.8mm、中央値は33.3mmであった。ヒストグラムは単峰型で、30mm以上35mm未満がピークである。なお、30mm以上35mm未満が34.9％、次いで25mm以上30mm未満が27.9％と多く、25mm以上35mm未満に全体の62.8％が集中する。さらに、35mm以上40mm未満と40mm以上45mm未満が共に14.0％で45mm以上はそれぞれ5％に満たない。つまり、35mm未満に分布が集中している。このような小型のもので構成される傾向は、19世紀代の江戸遺跡全般に見られる。

(2) アサリ（Ⅲ-5表）

出土した右殻15点の内11点について殻長を計測できた。平均値は29.6mm、中央値は29.1mmであった。また、11点中8点が30mm未満と小型のもので構成されている。この傾向は、ハマグリと同様に19世紀代の江戸遺跡全般に見られる。

(3) ヤマトシジミ（Ⅲ-6表）

出土した右殻31点の内25点について殻長を計測できた。平均値・中央値ともに23.1mmである。

(4) その他の計測結果

・マダカアワビ　2点出土しており、共にほぼ完存である。1点は殻長（長径）179.6mm、殻径（短径）153.6mm、もう1点は殻長（長径）138.5mm、殻径（短径）104.1mmである。

・アカガイ　左殻が殻長80mm程、右殻が殻長90ｍｍ程である。

・サルボウガイ　左殻2点右殻1点出土している。左殻の殻長は38.3mmと25.5mmであり、右殻は25.5mmのものと合弁する。ハマグリやアサリと同様に小型である。

・シオフキガイ　右殻のみ1点出土している。サイズは殻長27mm程でハマグリやアサリと同様に小型である。

1-3. 貝殻に見られる人為的痕跡（Ⅲ-7図）

主要二枚貝類であるハマグリ、アサリ、ヤマトシジミには、腹縁部分に人為的と推定される破損（小剥離）と内面に先の尖った鉄器によって引っ掻いたような複数の傷をもつものがある。これらの欠損は、剥き身作業の際についたものと推測される。腹縁の小剥離は、最初に剥き身用の刃物を左右殻の合わさっている部分に差し込んだ際と最後に殻をこじ開けた際についたものと推測される。内面の複数の横位の傷は、殻から身の部分を外すために外套膜や閉殻筋を切った際についたものと推測される。

1-4. 道具として使われた貝殻

(1) イタヤガイ（Ⅲ-6図　写真1-1）

右殻のみ2点が出土している。これらは貝杓子であったと考えられる。

まず、完存であった資料の観察所見を記す。殻の前側

に直径 2mm程の穴が 1 個所穿かれている。殻の外側の方の穴の縁のみに破損がみられることから、穴は内側から穿かれたものと考えられる。この穴は柄を取り付けるためのものと考えられる。また、その穴に近い殻の前縁部分外側の表層が剥がれるように欠損している。これは柄をつけたことによるものと推測される。具体的に、柄の部分は 2 本の棒で構成され、殻を挟みこむようにして取り付けられていた。そして、2 本の棒と殻それぞれに穿かれた穴に金具通して柄を装着している。また、腹縁は後側がやや顕著にすり減っているが、柄のついている部分の反対側であることから使用時に鍋底などを引っ掻いた際の痕跡と推測される。サイズは、殻長 66.3mm、殻高 62.7mm、殻厚 18.9mmである。

もう一点は、殻の前側から中央の腹縁寄りの部分が欠損している。前側の割れ口には、人為的に穿かれた穴の痕跡が見られる。つまり、柄の装着していた部分が欠損していることから、使用時に壊れたものかもしれない。サイズは殻高 83.0mm、殻厚 22.4mm。また、目測ではあるが殻長 90mm程と推測される。

(2) ホタテガイ（Ⅲ-6 図　写真 2-6）

右殻が 1 点出土している。サイズは殻長で約 185mmである。ホタテガイの生息域は、東北地方から北、オホーツク海まで広がっており、当時、それらの地域から江戸まで生きた状態のまま運ばれたとも考えにくい。なお、日本において一般的にホタテガイが食されるようになったのは、養殖技術が発達した第 2 次世界大戦以降とされており、一方で近世江戸において珍味など特別な食材として扱われたような記載もないとされている（望月 2005）。

資料を観察すると、殻頂部の左右に位置する前耳と後耳部分にそれぞれ幅 2mm程、深さ 5mm程の人為的なものと推定される凹みが見られる。さらに、腹縁にその前･後耳の欠損に対応するように 2 個所欠損が見られる。腹縁の欠損が廃棄後のものの可能性も否定できないが、前・後耳の欠損と関係のあるものであった場合、左殻もしくは蓋状のものを本資料に固定するために紐などを掛けた跡である可能性も想起される。本資料は、左殻よりも膨らみの強い右殻である。そのことからも、なにかしらの容器に用いたものであることが想定される。また、秋田地方では「しょっつる鍋」に用いる例もある（望月 2005）。

2. 哺乳類（Ⅲ-7 表）

イヌのみ 1 種 6 点が出土している。1 点が右下顎骨であるほかは、前肢部分のものである。おそらく、すべて同一の個体由来のものと推測される。

【参考文献】

阿部常樹 2006「貝類遺体のサイズに関する計測方法」『東京大学本郷構内の遺跡　工学部 14 号館地点』東京大学埋蔵文化財発掘調査室

島田勇雄訳注 1981『本朝食鑑 5』（人見必大著）平凡社

望月賢二監修・魚類文化研究会編　2005『図説魚と貝の辞典』柏書房

Ⅲ-1表　基幹環境整備（言問通り横断管路）電気管路地点　出土動物遺体種名表

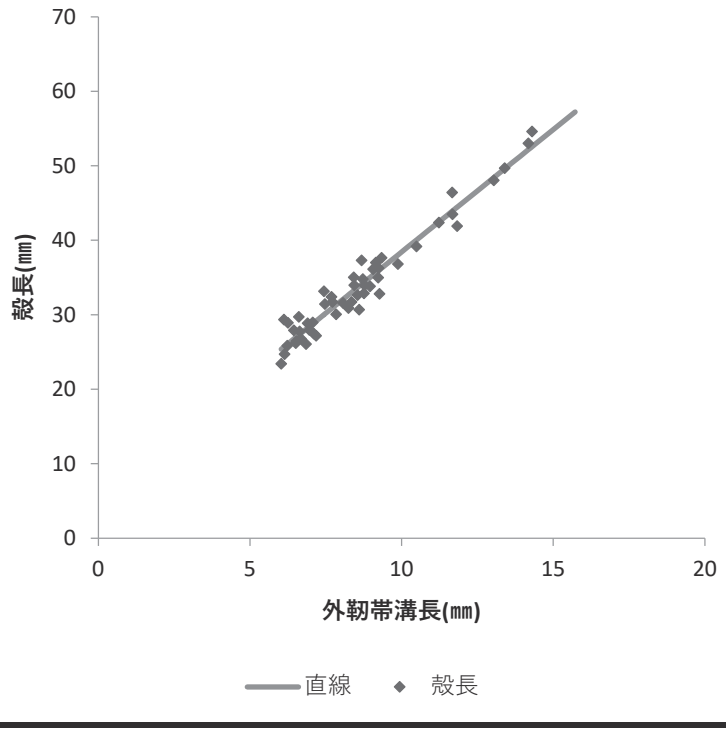
軟体動物門　Phylum MOLLUSCA
- 腹足綱 Class Gastropoda
  - 古腹足目 Order Vetigastropda
    - ミミガイ科 Family Haliotidae
      - マダカアワビ　*Haliotis (Nordotis) madaka*
    - サザエ科 Family Turbinidae
      - サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*
  - 新腹足目 Order Neogastropoda
    - アクキガイ科 Family Muricidae
      - アカニシ *Rapana venosa*
    - エゾバイ科 Family Buccinidae
      - バイ *Babyronia japonica*
- 二枚貝綱 Class Bivalvia
  - フネガイ目 Order Arcoida
    - フネガイ科 Family Arcidae
      - アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*
      - サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*
  - イタヤガイ目　Order Pectinoida
    - イタヤガイ科　Family　Pectinidae
      - イタヤガイ　*Pecten　albicans*
      - ホタテガイ　*Patinopecten yessoensis*
  - カキ目 Order Ostreoida
    - イタボガキ科 Family Ostreidae
      - マガキ *Crassostrea gigas*
  - マルスダレガイ目 Order Veneroida
    - バカガイ科 Family Mactridae
      - シオフキガイ *Mactra veneriformis*
    - シジミ科 Family Cobicalidae
      - ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*
    - マルスダレガイ科 Family Veneridae
      - アサリ *Ruditapes philippinarum*
      - ハマグリ　*Meretrix lusoria*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA
- 哺乳綱　Class　Mammalia
  - 食肉目　Order　Carnivora
    - イヌ科　Family　Canidae
      - イヌ　*Canis　familiaris*

Ⅲ-2表　基幹環境整備（言問通り横断管路）電気管路地点　出土貝類遺体組成表

		マダカアワビ	サザエ		アカニシ	バイ	アカガイ		サルボウガイ		イタヤガイ	ホタテガイ	マガキ	シオフキガイ	ヤマトシジミ		アサリ		ハマグリ		合計（最小）
			殻	蓋			左	右	左	右	右	右	右	右	左	右	左	右	左	右	
SK05	点数	2	12	2	2	4	1	1	2	1	2	1	1	1	23	31	15	15	94	95	
19c前	最小個体数	2	12		2	4	1		2		2	1	1	1	31		15		95		169
(18c末～)	出土率	1.2%	7.1%		1.2%	2.4%	0.6%		1.2%		1.2%	0.6%	0.6%	0.6%	18.3%		8.9%		56.2%		

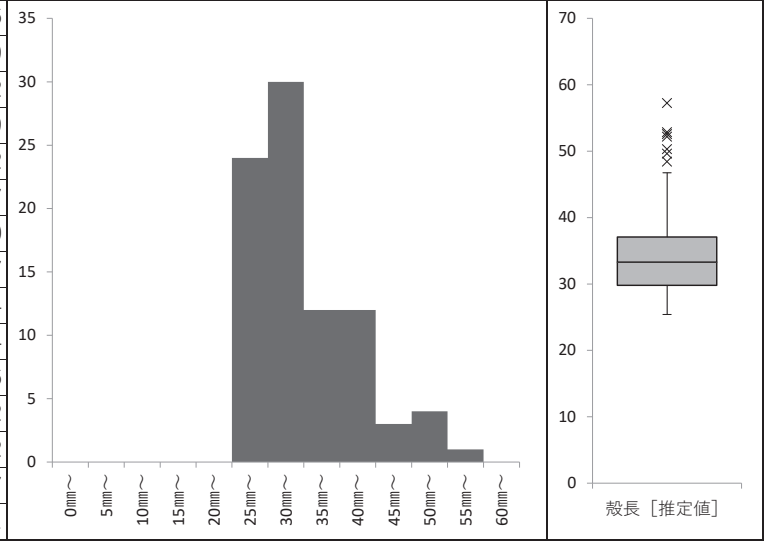
Ⅲ-3表　ハマグリの外靭帯溝長と殻長に関する回帰相関分析の結果



関数式　　y=3.3x+5.6　［x：外靭帯溝長，y：殻長］		
精度		
決定係数　0.95	相関係数　0.97	ﾀﾞｰﾋﾞﾝﾜﾄｿﾝ比　1.36
分散分析の結果　**　(**:1%有意 *:5%有意)		

Ⅲ-4表　ハマグリのサイズに関する記述統計量

	殻長		殻高	外靭帯溝長	ヒストグラム	箱ひげ図
	計測値	推定値			(横軸：殻長［推定値］，縦軸：サンプル数)	縦軸：単位＝㎜
n	50	86	61	86		
平　均	33.8	34.8	28.8	8.9		
標準偏差	7.2	7.3	6.2	2.2		
不偏分散	52.4	53.0	38.5	4.9		
標準誤差	1.0	0.8	0.8	0.2		
範　囲	31.2	31.8	29.7	9.7		
最小値	23.4	25.4	19.9	6.0		
最大値	54.6	57.2	49.6	15.7		
中央値	32.5	33.3	28.0	8.4		
第1四分位数	28.9	29.8	24.1	7.4		
第3四分位数	36.7	37.1	31.0	9.6		
四分位範囲	7.8	7.3	6.9	2.2		
変動係数	0.2	0.2	0.2	0.2		
尖　度	1.1	0.7	1.5	0.7		
歪　度	1.2	1.1	1.2	1.1		



値単位：㎜

Ⅲ-5表　アサリのサイズに関する記述統計量

変　数	殻長	殻高
n	11	13
平　均	29.6	22.3
標準偏差	2.9	2.7
不偏分散	8.7	7.5
標準誤差	0.9	0.8
範　囲	11.0	9.0
最小値	26.5	19.5
最大値	37.4	28.5
中央値	29.1	21.5
第1四分位数	28.1	20.2
第3四分位数	30.0	23.5
四分位範囲	1.9	3.3
変動係数	0.1	0.1
尖　度	5.3	1.2
歪　度	2.0	1.4

値単位：㎜

Ⅲ-6表　ヤマトシジミのサイズに関する記述統計量

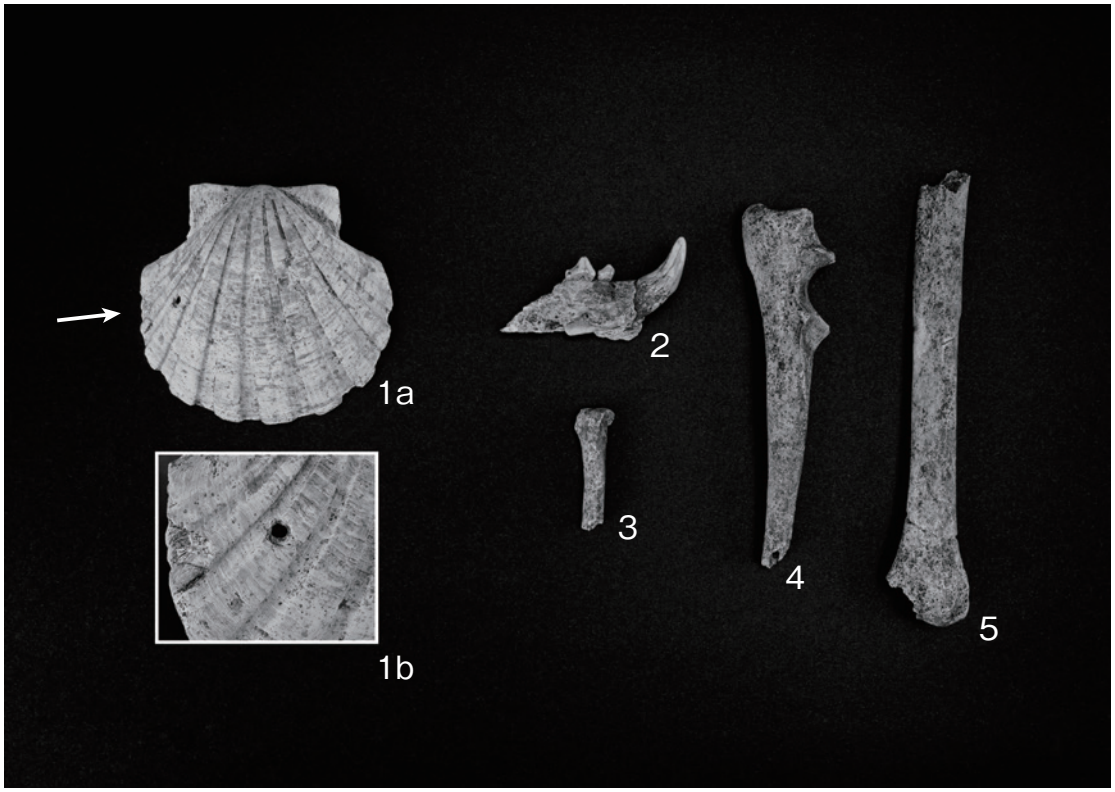
変　数	殻長	殻高
n	25	26
平　均	23.1	21.2
標準偏差	3.2	2.6
不偏分散	10.0	6.8
標準誤差	0.6	0.5
範　囲	13.3	10.1
最小値	15.6	16.1
最大値	28.9	26.2
中央値	23.1	20.9
第1四分位数	21.4	19.2
第3四分位数	24.9	22.6
四分位範囲	3.5	3.4
変動係数	0.1	0.1
尖　度	0.1	-0.5
歪　度	-0.4	0.3

値単位：㎜

Ⅲ-7表　基幹環境整備（言問通り横断管路）電気管路地点　出土脊椎動物遺体一覧

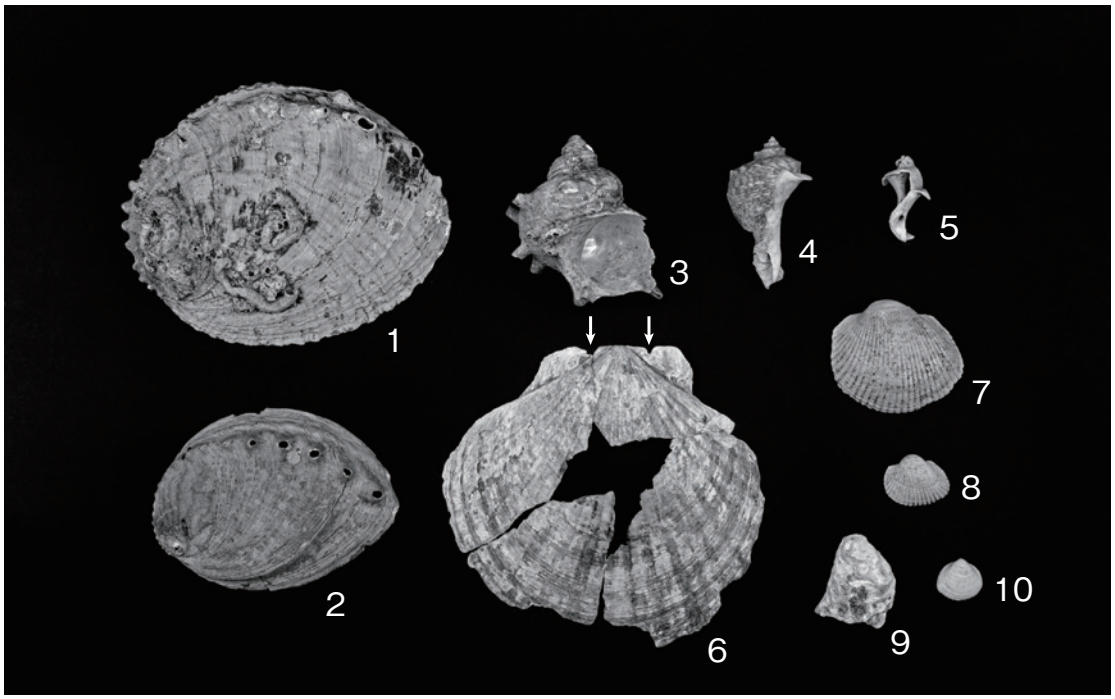
遺構	種	部位	左右	観察所見
SK05	イヌ	下顎骨	右	C～P2までの下顎体上部のみ残存。(CP12)
		尺骨	左	骨幹部分のみ残存。
		尺骨	右	骨幹中位から遠位端までが欠損。
		橈骨	左	骨幹部分のみ残存。
		橈骨	右	近位端欠損。また、遠位端において内側茎状突起も欠損。
		第５中手骨	右	骨幹中位から遠位端までが欠損。

写真１　貝杓子及びイヌ遺体



１．貝杓子［素材：イタヤガイ右殻］（a・→：装着痕跡，b：加工痕跡及び装着痕跡部分拡大）　0　5cm
２～５．イヌ（２. 右下顎骨，３. 右第５中手骨，4. 右尺骨，5. 右橈骨）

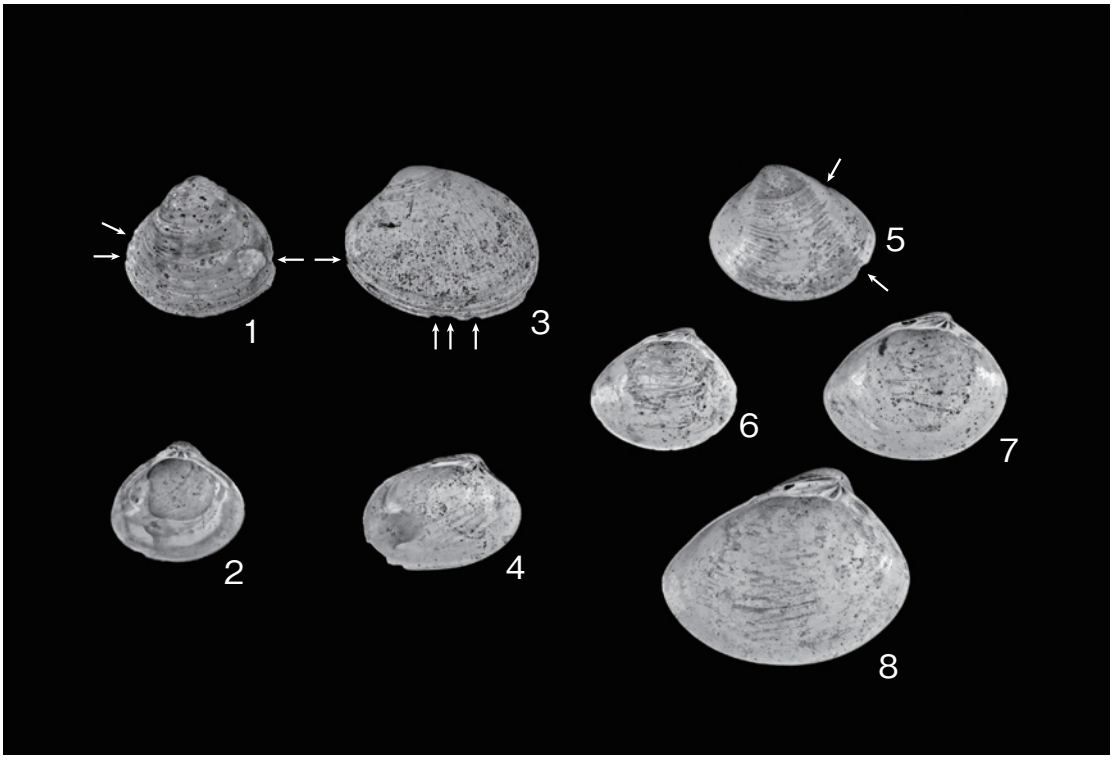
写真２　貝類遺体 (1)



1・2. マダカアワビ，3. サザエ，4. アカニシ，5. バイ，6. ホタテガイ (右) ↓：人為的欠損　0　5cm
7. アカガイ (左)，８. サルボウガイ (左)，９. マガキ (右)，10. シオフキガイ (右)

Ⅲ-6図　SK5出土動物遺体(1)

貝類遺体 (2)

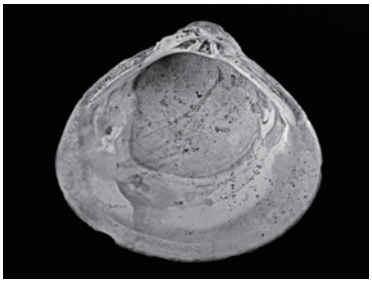


1・2. ヤマトシジミ (左), 3・4. アサリ (左), 5 ～ 8. ハマグリ (左)

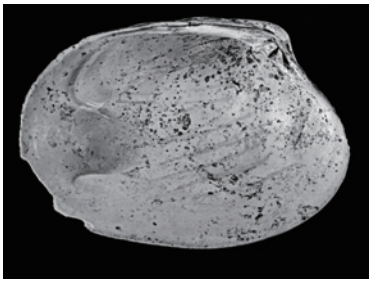
0 5cm

※2・4・6 ～ 8：殻内面に人為的な傷のあるもの。下段の個別写真と対応。

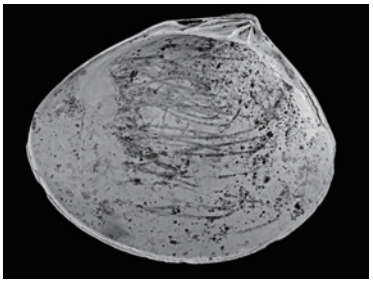
→: 人為的欠損箇所（小剥離）



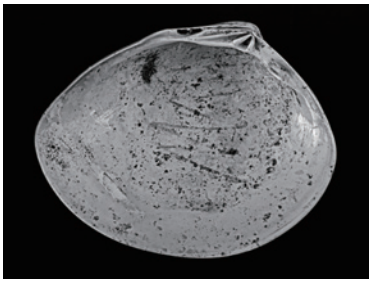
2. ヤマトシジミ拡大



4. アサリ拡大

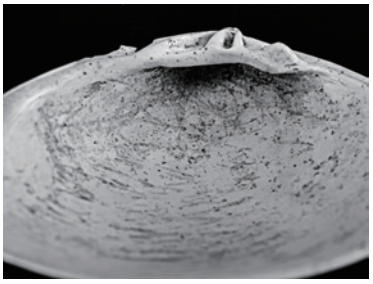


6. ハマグリ拡大



7. ハマグリ拡大

8. ハマグリ拡大



8. ハマグリ殻頂部分拡大

Ⅲ-7図　SK5出土動物遺体(2)

※カウント基準を満たす個体資料はないが、破片資料が存在しているとき「0」で示した。

遺構名	胎質・産地	JA1(景徳鎮窯系)									JA2		JA3	JA4		JA6	JA8	JA9	他	合計	JB(肥前系磁器)										
	器種	1	2	3	5	6	9	10	13	15	2	3	6	3	他			18			1(碗)										
	小分類																				a	b	c	d	e	f	g	i	j	k	l
SK5		0				1							1							2						1	1		1		3
	合計	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	3

遺構名	胎質・産地	JB(肥前系磁器)																													
	器種	1(碗)														2(皿・平鉢)															
	小分類	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p
SK5		9	3										1	2	21					2				2	0	1					
	合計	9	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	21	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	JB(肥前系磁器)																													
	器種	2(皿・平鉢)						3(大皿・大平鉢)								4	5(鉢)											6(坏)				
	小分類	q	r	s	t	他	小計	a	b	c	d	e	f	他	小計		a	b	c	d	e	f	g	h	他	小計	a	b	c	d	e
SK5			0				5		1			0			1			3		1	1					5	2	1			
	合計	0	0	0	0	0	5	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	1	1	0	0	0	0	5	2	1	0	0	0

遺構名	胎質・産地	JB(肥前系磁器)																															
	器種	6(坏)			7(猪口)				8(仏飯器)					9(香炉・火入れ)												10(瓶)				11(御神酒徳利)				
	小分類	f	他	小計	a	b	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	e	他	小計	a	b	c	他	小計
SK5		2	1	6	0	0		0		1	2		3								0	0				0		1			1
	合計	2	1	6	0	0	0	0	0	1	2	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1

遺構名	胎質・産地	JB(肥前系磁器)																														JC	
	器種	12	13(蓋物)						15	16	18(合子)				19	20	21	22	23	24	27(水注)			29	30	35	52	他	合計	1(碗)	
	小分類		a	b	c	d	他	小計			a	b	他	小計							a	他	小計							a	b
SK5		0	0	0	1			1				0		0	0								0						43		0
	合計	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	43	0	0

遺構名	胎質・産地	JC(瀬戸・美濃系磁器)																													
	器種	1(碗)							2(皿・平鉢)							4	5	6(坏)									7	8	9	10
	小分類	c	d	e	f	g	他	小計	a	b	c	d	e	f	他	小計			a	b	c	d	e	f	g	他	小計				
SK5		1	19			1	1	22					0			0			1	1		2					4				
	合計	1	19	0	0	1	1	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	4	0	0	0	0

SK5 出土陶磁器土器類組成表（1）

遺構名	胎質・産地	JC（瀬戸・美濃系磁器）																	JN(九谷系磁器)					JR(三田系磁器)					JZ (産地不明)		
	器種	11（御神酒徳利）				12	13	15	16	18	19	20	21	22	34	36	他	合計	1	2	6	他	合計	2	5	13	他	合計	1	2	6
	小分類	a	b	他	小計																										
SK5					0										0			26					0					0			
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	JC		磁器合計
	器種	他	合計	
	小分類			
SK5			0	71
	合計	0	0	71

遺構名	胎質・産地	TA5	TA6	TA7	TA8	TA9	TA10	他	合計	TB（肥前系陶器）																					
	器種				5	15	3			1（碗）												2 （皿・平鉢）									
	小分類									a	b	c	d	f	g	h	i	j	k	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	他
SK5									0											1	1	0						0				
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	TB（肥前系陶器）																													
	器種	2	3（大皿・大平鉢）						5（鉢）								6	8	9（香炉・火入れ）						10	13（蓋物）					15（壺・甕）	
	小分類	小計	a	b	c	d	他	小計	a	b	c	d	e	他	小計				a	b	c	d	他	小計		a	b	c	他	小計	a	b
SK5		0	0					0							0									0						0		
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	TB（肥前系陶器）															TC（瀬戸・美濃系陶器）															
	器種	15（壺・甕）		22	23（片口鉢）				27	29（擂鉢）				31	他	合計	1（碗）															
	小分類	他	小計		a	b	他	小計		a	b	他	小計				a	b	c	d	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p
SK5			0				0			0			0			1			0			2									
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	TC（瀬戸・美濃系陶器）																															
	器種	1（碗）																													2（皿・平鉢）				
	小分類	q	r	s	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af	ag	ah	ai	aj	ak	al	am	an	他	小計	a	b	c	e	f
SK5			0	0	0					1																3				1	
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0

SK5 出土陶磁器土器類組成表（2）

遺構名	胎質・産地	TC(瀬戸・美濃系陶器)																													
	器種	1(碗)																					3(大皿・大平鉢)							4	5(鉢)
	小分類	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	他	小計	a	b	c	d	他	小計		f
SK5		0		0				1		1													3						0		
	合計	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	TC(瀬戸・美濃系陶器)																														
	器種	5(鉢)								6	8	9(香炉・火入れ)										10(瓶)									12
	小分類	h	i	j	k	l	m	他	小計			a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	c	d	e	f	g	h	k	他	小計	
SK5						1			1	3	1	1								1	5	21	12	3		0				41	
	合計	0	0	0	0	1	0	0	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	5	21	12	3	0	0	0	0	0	41	0

遺構名	胎質・産地	TC(瀬戸・美濃系陶器)																														
	器種	13	15(壺・甕)								18	19	21	22(花生)				23(片口鉢)					24(灰落し)					25	26	27(水注)		
	小分類		a	b	c	d	e	f	他	小計				a	b	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	他	小計			a	b	c
SK5			0	0	0	0		1		1	0		1		1		1		1			1				0	1			0	
	合計	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	TC(瀬戸・美濃系陶器)																														TD(京都・信楽系陶器)		
	器種	27(水注)			28	29	30	31(火鉢)				34	38	39	40(油受け皿)						41	44(ひょうそく)			64	67	他	合計	1(碗)		
	小分類	d	他	小計				a	b	他	小計				b	c	d	e	他	小計		a	他	小計					b	c	d
SK5				0		1	2	0			0					1		1		2				0				63			1
	合計	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	63	0	0	1

遺構名	胎質・産地	TD(京都・信楽系陶器)																														
	器種	1(碗)												2(皿・平鉢)					4	5	6	9(香炉・火入れ)					10	13(蓋物)			
	小分類	e	g	h	i	j	k	l	n	o	p	他	小計	a	b	c	他	小計				a	b	c	他	小計		a	b	c	d
SK5		0	1										2	1				1	0		2			0		0		0			1
	合計	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

遺構名	胎質・産地	TD(京都・信楽系陶器)																														
	器種	13(蓋物)		14	15(壺・甕)			18(合子)				19	22	23	24	25	26	27(水注)				32	34(土瓶)				36(ちろり)				40	
	小分類	他	小計		a	他	小計	a	b	他	小計							a	d	他	小計		a	b	他	小計	a	b	他	小計	a	
SK5			1				0				0										0					0				0		
	合計	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

SK5 出土陶磁器土器類組成表（3）

遺構名	胎質・産地	TD（京都・信楽系陶器）						TE（備前系陶器）																				TF（志戸呂系陶器）			
	器種	40（油受け皿）			46	他	合計	1	2（皿・平鉢）				5	10（瓶）				12	15	22	29	37	40	41	65	他	合計	1	2	9	10
	小分類	b	他	小計					a	b	他	小計		a	b	他	小計													
SK5		1		1	0		7					0		0			0									0				0
	合計	1	0	1	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	TF（志戸呂系陶器）						TG（常滑系陶器）			TH（萩系陶器）						TI（万古系陶器）					TJ（大堀・相馬系陶器）				TK（丹波系陶器）					TL
	器種	13	15	29	40	他	合計	15	他	合計	1（碗）				他	合計	1	16	34	他	合計	1	6	他	合計	5	15	29	他	合計	29
	小分類										a	b	他	小計																	
SK5							0			0	1			1		1					0				0					0	1
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

遺構名	胎質・産地	TL（堺系陶器）		TM（笠間・益子系陶器）			TN（九谷系陶器）			TO（壺屋系陶器）				TP（淡路系陶器）					TQ（薩摩系陶器）				TS（飯能系陶器）			TZ（生産地不明）					
	器種	他	合計	29	他	合計	2	他	合計	10	15	他	合計	2	6	20	他	合計	1	34	他	合計	42	他	合計	1	2	4	5	6	9
	小分類																														
SK5			1			0			0				0					0				0			0	0			0	0	
	合計	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	TZ（生産地不明）																													
	器種	10	15	16	17	20	21（植木鉢）			22	25	27	29	31	33（鍋）				34（土瓶）												
	小分類						a	他	小計						a	b	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	i	k	l	n	他	小計
SK5			0						0						0			0	0			0	3	0	1	0					4
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	4

遺構名	胎質・産地	TZ（生産地不明）							陶器合計
	器種	42（行平鍋）					53	他	合計	
	小分類	a	c	d	他	小計				
SK5		0	0			0			4	77
	合計	0	0	0	0	0	0	0	4	77

遺構名	胎質・産地	DD（京都・信楽系土器）					DZ（生産地不明）																								
	器種	16	49	50	他	合計	2（皿・平鉢）												5（鉢）				9	15（壺・甕）			21（植木鉢）			
	小分類						a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	小計	a	d	他	小計		a	他	小計	a	b	他	小計
SK5						0	1	7	2					8					18			2	2				0	0	3		3
	合計	0	0	0	0	0	1	7	2	0	0	0	0	8	0	0	0	0	18	0	0	2	2	0	0	0	0	0	3	0	3

SK5 出土陶磁器土器類組成表（4）

遺構名	胎質・産地	DZ（生産地不明）																													
	器種	24	31（火鉢）														38	40（油受け皿）								43	44（ひようそく）					
	小分類		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	他	小計		a	b	c	d	e	他	小計		a	b	c	d	e	f
SK5			0		0	1		0		0	0	0				1		8	5	1				14			4				
	合計	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	8	5	1	0	0	0	14	0	0	4	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	DZ（生産地不明）																													
	器種	44（ひようそく）			45	46	47（ほうろく）				48（七輪）						49	51（塩壺）														
	小分類	g	他	小計			a	b	他	小計	a	b	e	他	小計			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o
SK5				4	0		0			0		0			0																
	合計	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	DZ（生産地不明）																													
	器種	51（塩壺）																							52（燭台）					54	63	00（蓋）	
	小分類	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af	ag	ah	ai	他	小計	a	b	他	小計			a	b
SK5									2														2				0				
	合計	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地	DZ（生産地不明）													土器合計	総計
	器種	00（蓋）											他	合計		
	小分類	c	d	e	f	g	j	k	l	o	他	小計				
SK5		2	1			1						4		44	44	192
	合計	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	4	0	44	44	192

SK5 出土陶磁器土器類組成表（5）

第Ⅳ章　成果と課題

－ SK5 出土遺物の検討 －

近代以降の開発などで地山まで削閉されていた上、既設管や植樹で撹乱されていた部分も多かったが、大形遺構 SK5 をはじめ遺構が数基確認され、局所的ではあるが江戸時代以前の可能性のある堆積土も確認されるなど、約 60 ㎡の調査ではあったが成果は大きなものであった。絵図面との照合や周辺調査地点の調査成果から、本地点が水戸藩邸南端の建物裏手、道路に囲まれた空閑地である事が想定されていたが、SK5 の検出により、本地点が大形遺構の掘削が可能なスペースがあり、19 世紀前葉頃にはごみ穴として利用可能な場所であったことが確認され、想定された空閑地であった可能性は高い。また SK5 以外に検出された遺構は小規模で、遺物も出土しなかったことから、江戸時代における本地点の利用頻度は希薄であったと推測される。

以下では SK5 出土遺物と他地点の同時期の遺構一括遺物との比較を行い、水戸藩邸内の廃棄状況について若干の考察を試みた。

1.SK5 出土陶磁器・土器類の様相

第Ⅲ章で述べたように、SK5 からは推定個体数 192 個体の陶磁器・土器類が出土しており、その胎質組成をみると磁器 71 個体、陶器 77 個体、土器 44 個体で、比率は磁器 37％、陶器 40％、土器 23％とわずかに陶器が多い。ただし陶器 77 個体のうち 41 個体は瀬戸・美濃系陶器瓶であり、それを除くと磁器 41％、陶器 24％、土器 29％で、磁器の割合が比較的高い傾向が看取される。磁器 71 個体のうち碗が 61％と突出して多く、次に坏が 17％で、碗と坏で磁器全体の 78％を占める。磁器碗の 44％は瀬戸・美濃系端反形碗であり、次に肥前系広東碗が 21％、肥前系筒形碗と肥前系端反形碗が各 7％を占める。陶器の 53％を瀬戸・美濃系灰釉瓶が占め、その内訳をみると二合半灰釉徳利が 63％と最多で、五合徳利が 29％とそれに続く。土器 44 個体のうち 41％は皿、32％は油受け皿、9％はひょうそくで、灯火具が多くを占める。

2. 東大編年Ⅷａ期に位置づけられる出土陶磁器土器類との比較

それぞれの報告書によると、東京大学本郷構内の遺跡工学部 1 号館地点（以下、工 1 地点。東京大学埋蔵文化財調査室 2005）SK1 出土陶磁器・土器類と、給水設備棟地点（以下、給水地点。東京大学埋蔵文化財調査室 1990）AJ35-1 出土陶磁器・土器類は、ともに東大編年Ⅷａ期（19 世紀初頭）に比定される遺構一括資料であり、時期的に本地点 SK5 と近い遺構一括資料である。そこで以下では両遺構の出土陶磁器･土器類の様相を確認し、本地点 SK5 と比較してみた。

工 1 地点 SK1 は加賀藩上屋敷北辺部で検出された大形廃棄土坑であり、掘り方形状などから本来は採土坑として掘削され、その後、廃棄坑に転用された土坑である。出土遺物の分析から、詰人空間を中心に御殿空間の廃棄物も含め、藩邸内全域のゴミが何年にもわたり廃棄されていたと推定されている。推定個体数 5202 個体の陶磁器・土器類が出土し、それらの胎質組成をみると磁器 989 個体、陶器 3153 個体、土器 1060 個体で、比率は磁器 19％、陶器 61％、土器 20％と陶器が圧倒的に多い。電気管路地点 SK5 でも同じく陶器の比率が高いが、次に多い磁器との比率差は SK1 より小さい。陶器 3153 個体のうち瓶が 34% を占め、そのうち 97% は瀬戸・美濃系灰釉瓶である。その内訳をみると二合半徳利と一升徳利がそれぞれ 38%、五合徳利が 21% と各容量が確認され、電気管路地点 SK5 で二合半灰釉徳利に偏る状況とは異なる。土器 1060 個体のうち 22% が皿、21% が火鉢が占め、電気管路地点 SK5 の灯火具の比率が高い状況とは異なる。磁器 989 個体のうち 56% を碗が占め、その内訳をみると、肥前系小丸碗が 54％、次いで肥前系筒形碗が 12％を占め、電気管路地点 SK5 で多数を占める瀬戸・美濃系端反碗は 11％であり、磁器の中で碗の比率が高い状況は共通するが、組成には違いが認められる。

給水地点の AJ35-1 は越後高田藩榊原家中屋敷の北西隅で検出された遺構であり、掘り方形状などから採土坑として構築後、埋められる過程でゴミ穴として利用されたと推定されている土坑である。AJ35-1 の周辺には遺物を多量に含む不整形廃棄土坑が複数、重複して検出されていることから、ほぼ同一場所で何回か場所を変えて、最終廃棄場所が維持されていたと推定されている（堀内 2005）。推定個体数 480 個体 [(3)] の陶磁器土器類が出土し、それらの胎質組成をみると磁器 218 個体、陶器 218 個体、土器 44 個体で、磁器と陶器が同率で 45％、土器が 9% を占める。磁器 218 点のうち碗が 66% と多くを占め、その内訳をみると、肥前系広東碗と瀬戸・美濃系端反碗がそれぞれ 30% を占め、この状況は電気管路地点 SK5 と共通する。陶器 218 点のうち 73% が瓶で最も

多く、その内訳をみると二合半徳利が 74% を占め、電気管路地点 SK5 と共通する。土器 44 個体のうち 52% が油受け皿、30% が土器皿と灯火具が占め、電気管路地点 SK5 と共通する。以上のように、陶器、磁器、土器の比率こそ異なるが、それぞれの器種組成は電気管路地点 SK5 と共通する点が多い。

3. 他遺構との比較から

電気管路地点 SK5、工 1 地点 SK1、給水地点 AJ35-1 から出土した陶磁器・土器類について概観してみた。いずれも藩邸の縁辺部付近に構築された採土坑を埋め戻した覆土から出土した陶磁器・土器類であり、概ね 19 世紀初頭頃に比定される一括資料である。またこれらの陶磁器・土器類は二次的な火熱を受けておらず、貝骨などの自然遺物も多く共伴することから、日常的な廃棄に伴う陶磁器・土器類と推察される。ただこれまで概観してきた中でも、その様相には少なからず違いがあることが明らかとなった。水戸藩中屋敷、加賀藩上屋敷、越後高田藩中屋敷と藩が異なる上、上屋敷と中屋敷という違いもあり、これらの要因が陶磁器・土器類の出土様相に違いをもたらしたであろう事は容易に想定される。

前述した堀内の論考によると、加賀藩邸においては遺構 1 立米あたりの陶磁器・土器類の含有量が大きくなる 18 世紀末～ 19 世紀初頭に、藩邸内の一定の地域から継続的に破棄される最終処分場所が成立すると推定され、工 1 地点 SK1 や給水地点 AJ35-1 は、1 遺構の陶磁器・土器類の含有量の大きさから廃棄物最終処理遺構であると分析されている（堀内 2005）。ちなみに工 1 地点 SK1 の包含率は 1 立米あたり 56 個体（5202 個体 / 推定 93 立米）、給水地点 AJ35-1 は 1 立米あたり 60 個体（480 個体 /8 立米）と高く、電気管路地点 SK5 の陶磁器・土器類包含率は 1 立米あたり 15 個体（192 個体 /12.7 立米）であり、廃棄物最終処理遺構とされる両遺構より遺物含有率がかなり小さい。電気管路地点 SK5 の調査がかなり限られた範囲であり、遺構全体の規模はもちろん、遺構のどの部分を、どのくらい調査ができたのかも不明である。従って調査対象部分の遺物が偶然少ない場所であった可能性も無くはないが、覆土下位層は遺物をほぼ含まないローム土で一時に埋め戻され、遺物を多く含む上位層は、下位層の凹みを埋める形で堆積し、その上位層を掘削したり埋め戻したりという状況が確認されなかったことから、当初 SK5 はゴミを含まない客土で丁寧に埋め戻そうとしていた可能性がある。このような覆土堆積状況からは工 1 地点 SK1 や給水地点 AJ35-1 で想定されたような「構築当初からゴミ穴として使用することを想定した上で掘削が行われ、廃棄による埋め戻しが行われた」とする状況とは考えにくく、それが遺物含有量にも反映している可能性はあろう。

陶磁器・土器類以外の遺物について注目してみると、自然遺物はいわゆる詰人空間で出土する事例が多いアサリ、ハマグリ、シジミなど二枚貝が中心に出土している一方で、御殿空間で出土する事例が多い大きなマダカアワビ、サザエも散見される。また詰人空間で多く出土する人形・玩具が比較的まとまって出土しているなど、藩邸内の御殿空間と詰人空間から廃棄されたものとが混在している感じを受ける。第Ⅰ章第 2 節で取り上げた水戸藩中屋敷を描いた絵図面『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』をみると、大きくは藩邸東側は御殿空間、本地点のある西側は役所や長屋などがある詰人空間が展開している。19 世紀初頭に廃棄場所を求めた際、藩邸内を東西にのびる道に隣接する窪地化していた本地点付近が、その導線の良さから詰人空間、御殿空間の両方からゴミが運び込まれ、SK5 出土遺物の様相に影響した可能性はある。ただし 19 世紀初頭にまとまった廃棄が行われた背景に何があったのは解明できておらず、今後の課題の 1 つである。

出土遺物の様相や遺物含有量、覆土の堆積状況から電気管路地点 SK5 は水戸藩中屋敷の最終的な廃棄処理遺構というよりは、19 世紀初頭の一時的な廃棄場所として利用された遺構である可能性が高い事が推測される。工 1 地点 SK1 や給水地点 AJ35-1 と同じく藩邸縁辺付近に構築された大形遺構であるが、最終廃棄場所として継続的な利用がなされなかったのは、第Ⅰ章で述べたような傾斜地という地形的な要因、あるいは中屋敷というスペース的な要因、他藩との屋敷境付近という位置的な要因、19 世紀前初頭頃の藩邸内の廃棄物処理事情として最終廃棄物処理場所を必要としなかったなど、様々な要因が考えられるが、これについては今後水戸藩邸全体の調査研究が進む中で検討していきたい。

【註】

(1) 文政 9（1826）年の墨書が確認される水戸藩邸を書いた絵図面。『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 9　東京大学本郷構内の遺跡　浅野地区Ⅰ』で原により絵図面の詳細な分析が行われている。

(2) 東京大学埋蔵文化財調査室では 2017 年度に本郷構内全域をカバーするグリッドの設定を行った。グリッドは Aa1 を基点とし、東方向へ 200m ごとに先頭アルファベットを B、C、D・・・と大文字で送り、末尾を 5m 単位で小文字 a ～ t を循環した 2 文字で表し、南北方向は南へ 5m 単位

で増番を付している。グリッドの Aa1 の座標は、平面直角座標系第Ⅸ系、X = − 31100.000、Y= − 6800.000 である（香取・渡邊 2017）。

(3)「東京大学構内の遺跡出土陶磁器・土器の分類 Ver.4」の分類に基づき、本調査地点や工学部 1 号館地点と同じく個体毎に 1 箇所しかない部位をカウントし直した推定個体数（大成 2016）

【参考文献】

大成可乃 2016「入院棟 A 地点から出土した陶磁器土器の様相 − 東大構内遺跡・指標遺構との比較から − 」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編

大貫浩子 2005「加賀藩邸内における陶磁器消費の諸相」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 6　東京大学本郷構内の遺跡　工学部 1 号館地点』

香取祐一・渡邊法彦 2017「第 3 節東京大学本郷構内の遺跡のグリッド設定と調査区の補正」『東京大学構内遺跡調査研究年報 10』東京大学埋蔵文化財調査室

阪口　豊 1990「東京大学の土台 − 本郷キャンパスの地形と地質 − 」『東京大学史紀要』第 8 号、東京大学史史料室

鈴木　正章 1989「第 3 章遺跡の層序と地質学的調査･分析」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1　東京大学本郷構内の遺跡　理学部 7 号館地点』

原祐一 2011「向ヶ岡弥生町の研究 − 向ヶ岡弥生町の歴史と東京大学浅野地区の発掘調査の成果」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 9　東京大学本郷構内の遺跡　浅野地区Ⅰ』

原祐一・香取祐一 2012「江戸時代から明治初期の工学部共同溝地点周辺の地形」『東京大学構内遺跡調査研究年報 10』東京大学埋蔵文化財調査室

原祐一 2016「向ヶ岡弥生町の研究 − 向ヶ岡弥生町の歴史と東京大学浅野地区の発掘調査の成果」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 9　東京大学本郷構内の遺跡　浅野地区Ⅰ』

東京大学遺跡調査室 1989『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1　東京大学本郷構内の遺跡　理学部 7 号館地点』

東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 6　東京大学本郷構内の遺跡　工学部 1 号館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2009『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 9　東京大学本郷構内の遺跡　浅野地区Ⅰ』

東京大学埋蔵文化財調査室 2011『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 10　東京大学本郷構内の遺跡　教育学部総合研究棟地点　インテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2014『東京大学構内遺跡調査研究年報』10

東京大学埋蔵文化財調査室 2016『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』第 3 分冊

東京大学埋蔵文化財調査室 2019『東京大学構内遺跡調査研究年報』12

堀内秀樹 2005「加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 6　東京大学本郷構内の遺跡　工学部 1 号館地点』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぽう
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報
副書名	
巻次	14
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大成可乃
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内　03-5452-5103
発行年月日	令和3年9月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
とうきょうだいがくほんごうこうないいせき 東京大学本郷構内の遺跡 きかんかんきょうせいびことといどおり 基幹環境整備（言問通り おうだんかんろでんきかんろちてん 横断管路）電気管路地点	とうきょうとぶんきょうく 東京都文京区 ほんごうちょうめ 本郷7丁目3-1	13105	47	35° 42′ 52″	139° 45′ 44″	20181218～21、20190128～0205	57.4㎡	東京大学基幹環境整備（言問通り横断管路）電気管路新営に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷構内の遺跡 東京大学基幹環境整備 （言問通り横断管路） 電気管路地点	大名屋敷	近世	土坑3基、柱穴1基	磁器、陶器、土器、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品、動物遺体	18世紀末～19世紀前葉の遺物を含む客土で埋め戻された大形土坑（採土坑）

要約	本地点は水戸藩が元和8（1622）年に下屋敷として拝領、その後、元禄6（1693）年に新たに本所小梅屋敷を得たことを契機に中屋敷となり、以後、明治2（1869）年明治政府に収公されるまで駒込邸が存続する。大形土坑SK5の検出により、本地点が大形遺構の掘削が可能なスペースがあり、19世紀前葉頃にはごみ穴として利用可能な場所であったことが確認され、藩邸内を描いた絵図面との照合から想定された空閑地であった可能性は高い。またSK5以外に検出された遺構は小規模で、遺物も出土せず、江戸時代を通して本地点の利用頻度は希薄であったと推測される。

紀　要　編

東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 14

東京大学構内遺跡編年修正について

堀内　秀樹・大貫　浩子

はじめに

東京大学では、学内調査組織である埋蔵文化財調査室によって1984年より校舎建て替えなどキャンパス整備に対応した埋蔵文化財発掘調査を行っている。周知のように大学の中心として機能する本郷キャンパスは、全域が周知の埋蔵文化財包蔵地である。近世には加賀藩前田家、水戸藩徳川家などの大名屋敷をはじめとして、一部に幕臣の大縄地、町地、寺院などを含むエリアであり、調査に伴って膨大な量の遺物が出土している。埋蔵文化財調査室では、調査によって構内から出土した遺構や層内一括の陶磁器についての段階設定を行い、いわゆる「東大編年」として構内遺跡の時間軸として使用している（堀内1997）。

2021年3月に刊行した『東京大学本郷構内の遺跡　薬学部南館地点　薬学部資料館地点』（以下、「薬学部地点」と略す）の報告書で、同地点から出土した陶磁器類の検討から、東京大学本郷構内遺跡編年修正の必要を指摘した（堀内2021）。検討の詳細は、これを参照されたいが、本稿では編年の修正点について提示をしたい。

1. Ⅰb期、Ⅱ期の修正点

いわゆる東大編年は、文献上確認される加賀藩本郷邸の土地利用から、加賀藩拝領（元和2～3（1616～17）年）以前の大久保氏の拝領と伝わる段階を「大久保時代」、拝領から上屋敷に唱え替えを行う契機となる天和2（1682）年の火災までを「加賀藩下屋敷時代」、唱え替えを行った天和3（1683）年以降幕末までを「加賀藩上屋敷時代」とし、それぞれを陶磁器様相による段階（近代初頭を含めてⅠ～Ⅸ期を設定）と対比して構築している。陶磁器様相による段階は、遺構一括資料に包含される磁器碗皿の器種構成をメルクマールにした年代アセンブリッジ方式である。したがって、資料量やメルクマールとして設定した器種（東大編年では「小器種」とした）の量が少ないと段階比定が難しいという方法的弱点を有している。

前述した1997年に設定した段階設定では、Ⅰ期は肥前系磁器（JB群）を含まない段階、Ⅱ期は肥前系磁器のいわゆる初期伊万里の碗・皿（東大分類JB-1-a、JB-1-b、JB-2-a、JB-2-hなど）と輸入磁器（JA群）で構成される段階として設定した。このうち当時設定した時には確認されていなかったものの、将来出土する可能性を考え、大久保氏が当該地を拝領時期をⅠa期、加賀藩が拝領後の時期をⅠbとして細分設定を行った。付け加えると大久保氏が拝領時代の藩邸遺構は、現時点（2021年3月）で確認されていない。

（1）薬学部南館地点SE67出土資料の位置づけ

東大編年Ⅰb期は、「薬学部新館地点[(1)] SE67を指標」（堀内1997）として設定したもので、肥前系磁器を含まないⅠ期のうち織部製品が確認される段階として位置づけた。前述した薬学部地点の報告書にも触れたが、提示後に、江戸時代初期の調査が千代田区内を中心に進展し、そこで行われた陶磁器様相の検討（平田2006、長佐古2008など）との対比から薬学部地点SE67出土資料の位置づけが「おおむね丸の内三丁目遺跡52号土坑より後出的で、九段南一丁目遺跡S108より前段階くらいに位置づけられると判断される」（堀内2021）に至った。前掲長佐古氏の論考では、この間に位置づけられる資料に丸の内一丁目10号遺構、丸の内一丁目遺跡12号遺構、九段南一丁目遺跡盛土、丸の内一丁目遺跡240号遺構をあげているが、これらの遺構全てから肥前磁器が出土している。一方、東大編年で段階設定時において、薬学部地点SE67から肥前系磁器が確認されなかった点[(2)]は、肥前磁器の江戸への流通初現の段階で、流通量の少なさが要因であったと考えを改めた。こうした点を勘案して同遺構をⅠb期の指標とするのは不適当と判断した。したがって、ここでの修正点は、薬学部地点SE67は、Ⅰb期ではなく、Ⅱ期の資料と修正を行いたい。

ちなみにこれらの一括資料の実年代について長佐古氏は、前述した丸の内一丁目遺跡10号遺構から丸の内一丁目遺跡240号遺構までを1610年代末から1630年代中葉に推定している。実年代については後述する。

（2）御殿下記念館地点532号遺構（Ⅱ期）との対比

東大編年Ⅱ期は、肥前系磁器のいわゆる初期伊万里の碗・皿（東大分類JB-1-a、JB-1-b、JB-2-a、JB-2-hなど）と輸入磁器（JA群）で構成される段階として設定して

いる。Ⅱ期の指標となる出土資料は、御殿下記念館地点532号遺構（以下、「御殿下532」と略す）である。

御殿下532の陶磁器群の内容であるが、明末の貿易陶磁器（3図1～6）を見ると、いわゆる齊堂銘（1）、幅広高台の製品（2）、ロクロ成形後に型打ちされていない芙蓉手（4）、いわゆる古染付風の描法（5）などは、堺環濠都市遺跡SKT263第1焼土層（堺市埋蔵文化財センター2004）、SKT230SB01（堺市教育委員会1991）など慶長20（1615）年の大坂夏の陣に関連した出土資料や元和6（1723）年の木簡が伴う大坂城下町跡AZ87-5次SK404（大阪市文化財協会2004）など中には認められないもので、御殿下532の貿易陶磁器はおおむね17世紀第2四半期以降に確認できる製品であると考えている。

また、肥前系磁器（JB群）では、高台無釉の碗（7）が一定量確認されるが、これは寛永14（1637）年の鍋島藩による有田の窯場整理統合以後に盛行する（大橋1984、野上2000など）。また、8の地文に窓絵を設ける製品は、山辺田9号窯、百間窯、猿川窯などから、10の蛇ノ目高台の製品は、猿川窯、百間窯、天神町窯、一本松窯など、この時期の生産窯から出土している（有田町1988、九州近世陶磁学会2000など）。9は糸切細工を用いた貼付高台の変形皿で、『有田町史』の中で大橋氏の設定した肥前陶磁編年Ⅲ期（17世紀後半）開窯の長吉谷窯、猿川窯、楠木谷2号窯などから出土している（有田町史編纂委員会1988、九州近世陶磁学会2000）。

11の瀬戸・美濃系の天目碗は、口縁部が長く、丸の内一丁目遺跡10号から12号遺構から出土している古い段階で確認される。12の灰釉丸皿は、腰の稜が明確であり、九段南一丁目遺跡S108と類似する新しい様相であるが、同遺構の肥前磁器には高台無釉製品が含まれておらず、御殿下532より前段階から認められるタイプと言える。14の丹波系焼締擂鉢は、口唇部の縁帯が形成されつつある段階で、先述した九段南一丁目遺跡S108から出土している製品よりやや後出的な形態である。15は、胴部に「ミなと藤左右衛門」銘を持つ長胴化した大型の塩壺であり、同印を持つ製品の中でも新しいタイプである。

（3）かわらけからみた諸相

①薬学部南館地点 SE67

薬学部地点の報告ではSE67とほぼ同時期の遺構から出土した17世紀初頭のかわらけを10種類に分類した（2図）（大貫2021）。概要を示すと①～⑧はロクロ成形、⑨⑩は手づくねである。①②③はDZ-2-a、⑥はDZ-2-k、⑨⑩はDZ-2-gに分類される。④は見込みにナデ成形が見られた。⑤は見込みからなだらかに立ち上がるかわらけである。⑥は胎土は橙色で、口径と底径の差が小さい厚手のかわらけである。小法量で、器高がやや高いものが多い。⑦⑧は周辺地域からの移入品と考えられているかわらけである。⑥⑨⑩は中世的な要素を残すものである。

この時期に多く見られるのがDZ-2-aである。①②に分類したものは、胎土は橙色で底部・器壁が薄い。口径が大きく、器高が低い。底裏に右回転糸切り痕があるものが多い。器壁はやや内湾気味立ち上がる物と外反して立ち上がるものがある。見込み立ち上がり際には1周ナデ調整がみられるものがある。底部立ち上がり際の調整がみられずやや突出しているものもある。③に分類したものは、胎土は橙色で、底部・器壁が薄い。口径と底径の差が小さい。器壁はやや内湾しているものとやや外反している両方のタイプがある。以上のように、DZ-2-aの中に様々なタイプが含まれていることがわかる。

②御殿下記念館地点 532 号遺構（4 図）

薬学部地点SE67と比較するために、東大編年Ⅱ期の指標遺構の御殿下532から出土したロクロ成形のかわらけ85個体を検討した結果、A、B、Cの3種類に分類することができた。85個体はともに胎土は橙色。底部・器壁が薄く、器高が低い。また、底裏に右回転糸切り痕があるものも少量あるが、左回転糸切り痕が多い。

Aはこの特徴に加えて、3つの要素を持っている。1、口縁部がやや内湾している。2、内面立ち上がり際の凹みをもつ。3、底部に腰折れ状痕と呼ばれる筋状の成形痕がみられる。これらの3つの要素を持つ定型化されたかわらけを「いわゆる江戸式」と呼んでいる（小林1997）。東大分類ではこれらをDZ-2-bとしている。また、A以外のものををB、Cに分類した。B、Cともに、口縁部はやや内湾し、内面立ち上がり際に凹みがみられたが凹みが強いものとやや弱いものとが確認された。一方、底部に腰折れ状痕はみられなかった。底部糸切り痕がわずかに高まりを持つものをBとし、底部から体部にかけて丸みを帯びてゆるやかに立ち上がるものや、角張って立ち上がるものをCとした。量比は、Aが52個体で全体の61％を占め、Bは7個体（8％）、Cは26個体（31％）であった（6図）。

③医学部附属病院中央診療棟地点 F34-11（5 図）

次に、東大編年Ⅳa期の指標遺構である医学部附属病院中央診療棟地点F34-11（以後「F34-11」と略す）を検討した。確認できた32個体のかわらけはA、Dの2種類に分類することができた。Aは、先述の分類と同様

の「いわゆる江戸式」である。D は、内面立ち上がり際の凹みは見ることができたが、底部に腰折れ状痕と呼ばれる成形痕はみられず、離れ糸切り痕が確認され底部から体部に丸みを帯びてゆるやかに立ち上がていた。底部の離れ糸切り痕は御殿下 532 出土のかわらけでは見られなかった。量的には A に該当するものが 28 個体で全体の 87%を占め、D に該当するものは 4 個体（13%）であった（7 図）。

④小結

薬学部地点 SE67 出土のかわらけは、中世的な要素を残すもの、様々なタイプを含む底部・器壁が薄く、底裏に右回転糸切り痕のあるもの（DZ-2-a）、周辺地域から移入してきたと考えられるものなどさまざまなかわらけが混在している。一方、御殿下 532 においては A（DZ-2-b）が 61%と主体を占める構成となり、17 世紀後半の F34-11 においてはそれが 87%に増加する。より定型化が進んできていることがわかる。御殿下 532 では「いわゆる江戸式」のかわらけの生産が一定の規模で始まったことを示しており、急速に置き換わってゆく。1680 年代の F34-11 ではより主体的になっていったことがわかる。

以上のように、かわらけの様相から見ても薬学部地点 SE67 と御殿下 532 の間には差異がみられ、同じⅡ期でも様相差を見いだすことができる。今後、東大編年Ⅱ期の細分の可能性もあると考えられる。

（4）推定される実年代

①陶磁器様相様相からの推定

これまで見てきたように薬学部地点 SE67 は、Ⅱ期の中で位置づけられるものの、同期の指標の御殿下 532 は新しい様相であり、肥前磁器初現期のⅡ期前半と言うべき段階に位置づけられる資料と判断される。また、先述のように SE67 と陶磁器様相が類似する丸の内一丁目遺跡 10 号遺構から丸の内一丁目遺跡 240 号遺構は、長佐古氏の論考では 1610 年代末から 1630 年代中葉に推定している。

一方、御殿下 532 には、寛永 14（1637）年の鍋島藩による窯場整理後の主力製品である高台無釉製品が多く確認されている点、出土している貼付高台製品は、「承応二歳」（1653）銘などの伝世品の存在から、1650 年頃に開始された新しい技法であると推定されることなどから、1650 年代初頭を含むものの、1640 年の製品が主体的であると考えられる。

②土地利用の変遷と史料からの推定

次に文献から確認される本郷邸の初期開発を取り上げてみたい。元和 2 ～ 3（1616 ～ 17）年に拝領した本郷邸に初めて「寛永三年丙寅、始て四界に木墻を環らし」（「東邸沿革図譜」）と開発の手が入ったのは寛永 3（1626）年のことである。その後、具体的な完成時期は不明確であるものの、「草ほうほうたる小笹原に谷峯も有て、所々に番人又は下々の者のミ有て、屋敷ノ内またらに茶園してそ居たりける。先四方ニ塀を懸させられ、御屋形共建させ給ひ、別而寿福院様 (3) の御屋形も立、又ハ御姫君様の御屋形、千勝様 (4)、宮松様 (5) の御屋敷も建させらる」（「三壺聞書」）とあり、藩邸の最初期に御屋形（当主御殿）をはじめ、生母、娘、後に富山藩主、大聖寺藩主となる利次と利治らの御殿が建てられたことが書かれている。また、寛永 6（1629）年には、将軍徳川家光と当時の大御所徳川秀忠の本郷邸への御成があり、おそらく本郷邸の殿舎は寛永前半頃までには一定の整備が行われたと考えられる。

次に 17 世紀において御殿空間の土地利用を大きく変更するタイミングとしては、第 1 に 3 代藩主利常が寛永 16（1639）年に隠居し、在府時には本郷邸に居住することになる時点。第 2 に史料から確認できる慶安 3（1650）年に起こった火災の 2 つが考えられる。ただこの火災は、文献では殿舎の多くが焼亡したと書かれるが、考古学的な痕跡は現在まで確認されていない。また、医学部教育研究棟地点の調査成果から、加賀藩の御殿空間であった D 面と命名した天和 2（1682）年の火災によって焼土層が形成されるほどの被害を受ける生活面とそれに伴う殿舎の造営は、慶安 3（1650）年あるいは明暦 3（1657）年に 4 代藩主前田光高が本郷邸に避難するタイミングと考えており、遅くとも金箔瓦が伴う E 面以下の遺構は、それ以前に廃絶したと考えている。

これらを勘案すると、薬学部地点 SE67 もその井戸の構造から、E 面以下の段階に整備された御殿空間内の建物に伴って鑿井されたと想定でき、一方で、廃棄資料には御成御殿に伴うと考えられる金箔瓦も含まれていることなどから、遺構の廃棄は寛永 6（1629）年以降、遅くとも慶安 3（1650）年か明暦 3（1657）年以前であることは間違えない。他方、後続する御殿下 532 の年代から勘案すると、寛永 16（1639）年までの可能性が高いと推定され、おおむね薬学部地点 SE67 が 1630 年代、御殿下 532 が 1640 年代を中心とした陶磁器様相と推定される。

2. Ⅲｂ期の修正点

東大編年で設定したⅢ期は、「肥前系磁器碗・皿等の高台の断面形が三角形を呈するもの（JB-1-c、JB-2-b、JB-2-c）で構成される段階」として設定し、このうち後

半に設定したⅢｂ期は、医学部附属病院中央診療棟地点 H32-5（以後、「H32-5」と略す）を指標としている。H32-5 をはじめとしてⅢｂ期は、天和 2（1682）年の火災によって廃棄された遺構群の陶磁器様相を基準に設定し、年代的下限を同火災とした。しかし、設定後に医学部附属病院入院棟 A 地点や医学部教育研究棟地点から出土した天和 2 年の火災の廃棄資料に、Ⅳ期の資料となる JB-2-d（いわゆる柿右衛門様式）や JB-1-d が多く含まれた一括資料（入院棟 A 地点 C2 層、同 C3 層、医学部教育研究棟地点 SD246･3100 など）が確認された。設定時Ⅲｂ期の基準とした肥前系磁器型式（JB-2-c）は、医学部附属病院中央診療棟地点 L32-1 出土資料を準拠した部分が多く、これは、後に同遺構のコレクション形成のプロセスから、資料の年代的中心は 1650 年代を中心とした時期であったと推定している（堀内 2010）。当時の研究状況は、入院棟 A 地点 C2 層で多く含まれていた南川原製品は、「南川原窯ノ辻窯は柿右衛門古窯に続く窯であり、元禄ごろに築窯され」（佐賀県立九州陶磁文化館 1986）と 1680 年代以降と推定されていた。

東大編年は、遺物の変遷による段階設定ではなく、消費地において廃棄された一括遺物群のアセンブリッジによって設定した性格から、使用や廃棄に関わるバイアスの影響を受けることがあり得る。天和 2（1682）年を年代的下限としたⅢｂ期の指標とした H32-5 の中にも少量ながらⅣ期の指標指標となる製品（JB-1-d、JB-2-d）が含まれており（肥前系磁器碗・皿 320 個体中 3 個体）、段階設定を行った「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」の中にも「一部上質の製品に、高台断面「U」字状の製品が認められる（JB-1-d、JB-2-d）」と書いている（堀内 1997）。陶磁器様相としては矛盾はないが、以上の経緯の中で天和 2 年の火災資料に次段階の資料が多く存在することが確認されたことにより、Ⅲｂ期－「肥前系磁器碗・皿等の高台の断面形が三角形を呈するもの（JB-1-c、JB-2-b、JB-2-c）で構成される段階」－の年代的下限を天和 2 年とするのは誤りであり、上記年代的考察で推定した実年代「Ⅲｂ期は･･･（中略）･･･1670 年代を中心に天和（1682）年までとする」を、「1670 年代を中心とした年代」と修正したい。

【註】

(1) その後、正式な報告で「薬学部南館地点」と改称した。

(2) その後の精査によって出土資料の中に磁器小片が確認された。

(3) 前田利家の側室千代。

(4) 前田利常の次男、前田利次。富山藩初代藩主となる。

(5) 前田利常の三男、前田利治。大聖寺藩初段藩主となる。

【引用・参考文献】

有田町史編纂委員会　1988 『有田町史　古窯編』

大阪市文化財協会　2004 『大坂城下町遺跡Ⅱ』

大貫浩子　2021 「薬学部南館地点における 17 世紀初頭のかわらけ」『東京大学本郷構内の遺跡　薬学部南館地点　薬学部資料館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

大橋康二　1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

小川　望　2008 『焼塩壺と近世の考古学』同志社

九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』

堺市教育委員会　1991 『堺環濠都市遺跡（SKT230）発掘調査概要報告』

小林謙一 1997 「江戸在地系土器成立期の土師皿の作成技術」『関西近世考古学研究』関西近世考古学研究会

堺市埋蔵文化財センター　2004 『堺環濠都市遺跡（SKT263）発掘調査概要報告』

佐賀県立九州陶磁文化館　1986 『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』

東京大学埋蔵文化財調査室　1990 『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1999 「東京大学本郷構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』2

東京大学埋蔵文化財調査室　2005 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院外来診療棟地点』

長佐古真也　2008 「江戸における慶長・元和・寛永期の陶磁器様相－千代田区内の一括資料による陶磁器編年試案－」『研究論集』ⅩⅩⅣ　東京都埋蔵文化財センター

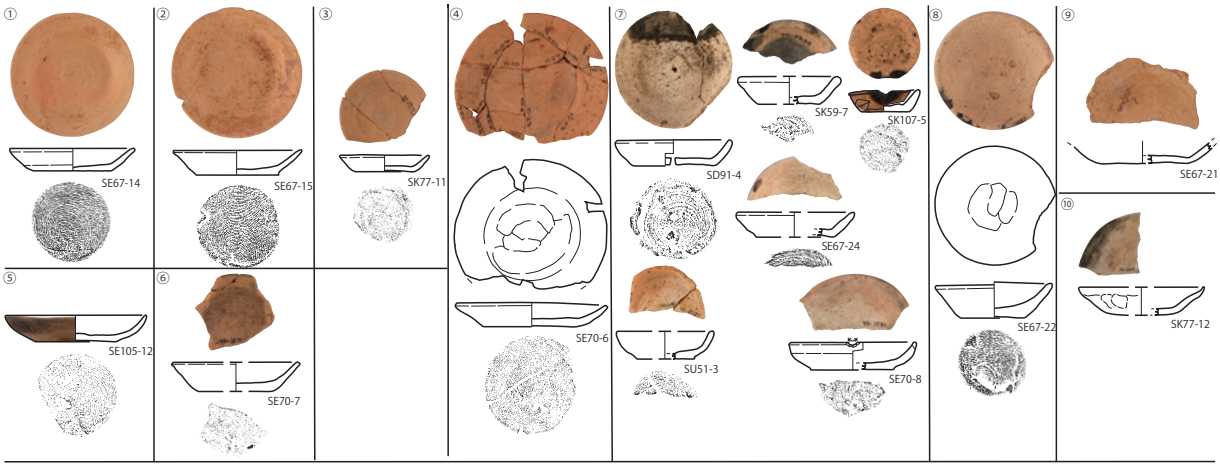
平田博之　2006 「第 2 節　出土遺物に関する考察」『東京都千代田区有楽町二丁目遺跡』武蔵文化財研究所

堀内秀樹　1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報 1』東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　2009 「宴会道具としての貿易陶磁器の再評価－大聖寺藩邸出土の貿易陶磁器 L32-1 －」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』

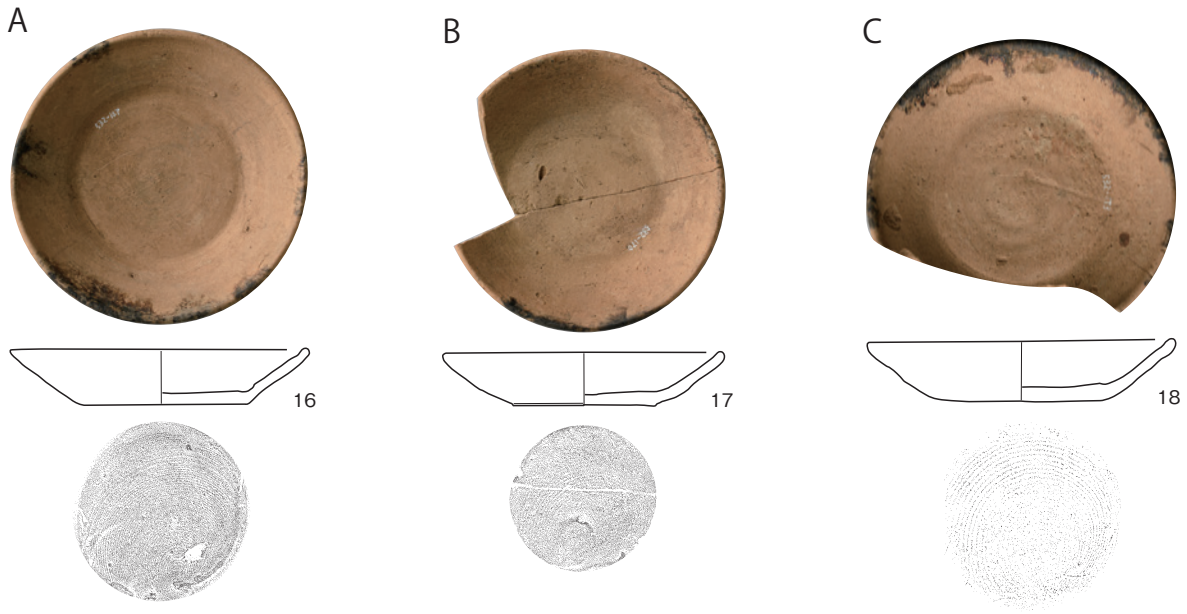
堀内秀樹　2021 「薬学部南館地点・薬学部資料館地点の成果と藩邸初期の景観」『東京大学本郷構内の遺跡　薬学部南館地点　薬学部資料館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

1図　SE67出土遺物　（S=1/3）

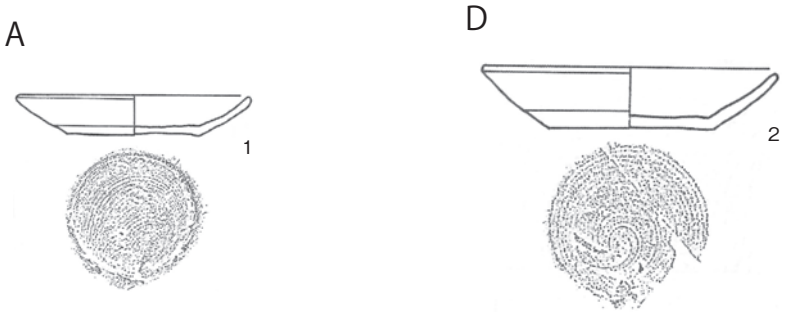


2図　薬学部新館地点出土かわらけ（S=1/6）

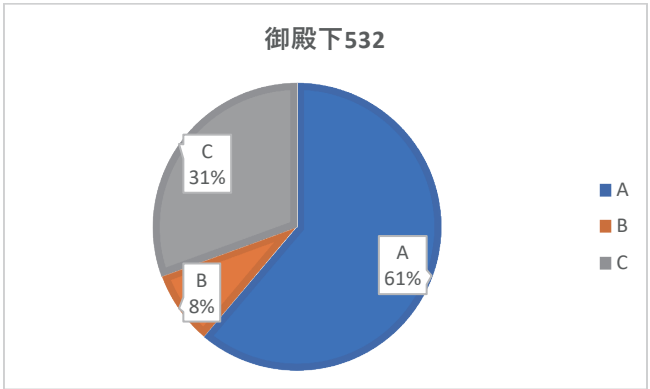
3図　御殿下記念館地点 532 号遺構出土遺物（1） (S=1/3)



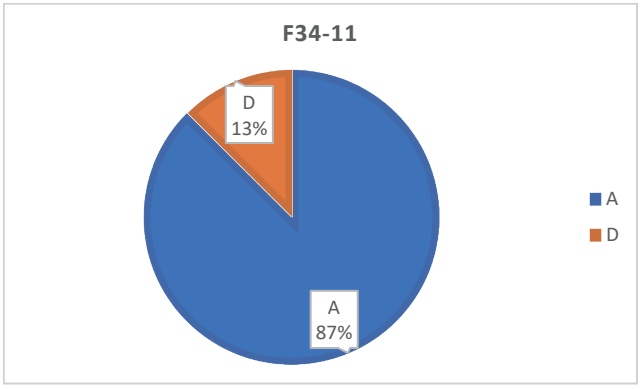
4図　御殿下記念館地点 532 号遺構出土遺物 (2)　(S=1/3)



5 図　医学部附属病院中央診療棟地点 F34-11 出土かわらけ　(S=1/3)



6図　御殿下記念館地点 532 号



7 図　医学部附属病院中央診療棟地点 F34-11

1表　東京大学本郷構内の遺跡　編年表 Ver.2

	段階	御殿下	中診･ｴﾈ･給水	法文･理学部	外来	工1・工14	入院棟A	他	陶磁器様相	推定年代（年代）
大久保	Ⅰa								JA 志野	
前田下屋敷	Ⅰb								JA 織部	
	Ⅱ	532	（池）					SE67(薬)	JB-1-a,b JB-2-a,b	1630-40 (火1650?)
	Ⅲa	270,617,678		1井(理)			D1層	SK57(小石川)	JB-1-c JB-2-c	1650-60
	Ⅲb	276,255a,391	H29-1 H32-5 L32-1				D面焼土 C2層 C3層		JB-1-c JB-2-c 型紙刷	1670
前田家上屋敷	Ⅳa		F34-11				SK3	SK168(看宿1)	JB-1-d JB-2-d コンニャク判	1680 (火1682)
	Ⅳb	537	K30-1	C7-3土(法) E8-2土(法)	SK139			SK09(家畜)	JB-1-f,u	1690-1700 (火1703)
	Ⅴa		F33-3,G20-2 D32-1,E24-1 L34-2,Z35-5		SK18				JB-1-g,v	1710-20
	Ⅴb		D33-1,E31-1 G26-1,AD35-2		SK290 SK137				JB-1-l JB-2-l 青磁染付	1730-40
	Ⅵa		L34-1		SK152 SK174				JB-1-j	1750-60
	Ⅵb		E22-1,E34-1 Y34-4						JB-1-i	1770
	Ⅶ	233 245	AE39-1	E7-3土(法) E8-5土(法)					JB-1-m JB-2-i	1780～90
	Ⅷa		AJ35-1			SK01			JB-1-n JC-1-d	1800-10
	Ⅷb		H21-1 H21-2		SK81				JB-1-o JC-1-e	1820-30
	Ⅷc		C26-1,F23-2 H21-8		SK392			SX207(医科研)	JC-2-e,f	1830-40
	Ⅷd					SU392	SK1160		JC-2-d 篆書文	1850-60 (火1868)
	Ⅸ		AL37-1						西洋コバルト	明治初頭

東京大学医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した色絵磁器色絵具の分析

＊新免歳靖・＊＊顧錦娟・＊＊＊水本和美

1．はじめに

1.1. 肥前色絵磁器に用いられた色絵具の自然科学的調査の概要

本研究では、東京大学医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した 17 年代中盤から後半の色絵磁器に用いられた色絵具の自然科学分析を行い、初期の色絵具の材質に関する知見を得ることを目的とした。あわせて、火災によって変色した色絵具について化学分析結果から本来の色調を推測することも目的とした。

1610 年代に朝鮮人陶工により肥前有田で始まった磁器生産は、1640 年代に中国から新たな技術が伝わり、製品の質が大きく向上した（大橋 2007、村上 2013）。その中国から有田に伝わった革新的な磁器製作技術の一つが色絵磁器の製法である（村上 2007・2013、大橋 2015）。色絵磁器とは、本焼きした磁器の表面に、赤色・黄色・緑色・紫色などの絵具で文様や絵を描き、低火度で焼き付けた多彩色の焼き物である。

筆者らは、江戸城跡汐見多聞木鲁台石垣地点（東京都千代田区）から出土した明暦の大火（1657 年）で廃棄された色絵磁器や染付磁器について胎土や釉薬、色絵具などの自然科学的な分析を行った（新免ら 2013-1）。その詳細については未報告ではあるが、色絵磁器に用いられた上絵用の材質（本稿では色絵具とする）について蛍光 X 線分析による調査を行い、赤色とその他の色の絵具では材質が異なる点や中国・景徳鎮窯の色絵磁器と肥前色絵磁器の類似性を明らかにした（新免ら 2013-2）。この江戸城跡汐見多聞木鲁台石垣地点の色絵磁器の研究を契機にして、有田における色絵磁器の始まりと展開について色絵磁器の製作技術の面から調査研究を進めている（水本 2018）。

色絵磁器研究において色絵具材質の化学的・物理的な特性を把握することは、その起源や技術の伝播や変遷など明らかにする上で必要不可欠である。肥前の色絵磁器では、色絵具の赤色・緑色・黄色などの色調が製作時期よって変化することが捉えられている（佐賀県立九州陶磁文化館 2004・2006）。色絵具の色調の変化は、第一に材質の変化、つまり原料やその調合の変化に起因する。この原料調合の変化は、原料の品質、施描の方法（糊材や筆など）、釉薬との関係（釉薬材質や膨張率など）、焼成方法（窯構造や焼成温度）など色絵磁器の製作面からの影響も考えられる。さらには当時の原料流通や入手方法（自家で製造や製品の購入など）、価格等といった間接的な影響も考えられる。

肥前色絵磁器に用いられた色絵具については、有田では赤色が重視されたためか、赤色絵具に関する自然科学的な調査研究が行われてきた（朴ら 2006、勝木ら 2007 など）。ただし、赤色絵具の発色要因の解明といった研究が多く、肥前の色絵磁器において近世期を通して色絵具の色調と材質がどのように変化しているのかといった体系的な自然科学的調査･研究はほぼ行なわれていない。筆者らが行った江戸城跡汐見多聞木鲁台石垣地点の色絵磁器の分析調査においても、色絵具の調査は非破壊分析が主体であり、被災によって変質した資料の分析といった制約があったため、得られたデータに不明確な部分が残った。

有田の初期色絵磁器研究を進めるためには、生産年代や生産地が明確な肥前色絵磁器資料を用い、その誕生期（17 世紀中頃）から近世を通して、色絵具の材質的な特徴と変遷に関する新たな知見を蓄積することが必要となる。そこで、東京大学埋蔵文化財調査室に構内遺跡から出土した色絵磁器についての共同研究を依頼し、肥前色絵磁器の色絵具の自然科学的調査を実施することとなった。

1.2. 被災色絵磁器の色絵具の復元

筆者らのグループでは色絵具の材質変遷に関する研究を実施するために、出自および年代が明確な遺跡出土資料を用いている。江戸などの近世都市遺跡においては、火災の情報が文献等に残ることが多く、さらに遺構や遺物にもその痕跡が残るため、両者を照合することで、遺構や遺物の廃絶などの年代を明らかにすることができる。したがって、年代が明確な出土遺物の調査を行う場合、必然的に被災資料を用いることが多くなる。

ただし、被災した出土遺物を見ると、火災などの影響で資料の外観が変化している場合が多い。年代情報という重要な情報を保持している一方で、資料自体の研究を行う場合には、被災による変化を加味した上で本来の状

＊所属　東京学芸大学　＊＊所属　東京学芸大学卒業生　＊＊＊所属　東京芸術大学

態を推測する必要が出てくる。色絵磁器の場合は、火災によって色調や質感の変化、土砂の付着などが起こり、その影響によって色絵具の化学組成が変化して本来の組成情報を得ることが困難である。前述した江戸城跡汐見多聞木魯台石垣地点出土の色絵磁器の研究においても、資料の被熱や劣化の影響などの点から色絵具の正確な化学組成が得られていない。

そこで、分析資料として江戸遺跡といった消費地遺跡の資料を用いる場合は、火災によって被災した色絵磁器にどのような変化が起きているかを把握する必要がある。本研究では、火災等で被災して色調が変化した肥前色絵磁器について、色絵具の化学分析によって含有元素を明らかにし、その元素情報から当初の色調の復元を行なうことを目的とした。

1.3. 分析目的の整理

本研究では、分析資料として東京大学構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した肥前有田および中国景徳鎮の色絵磁器資料を用いた。同地点からは、火災によって廃棄されたと考えられる初期の色絵磁器資料が多数出土している。

上記のような問題意識から本研究にあたっては、肥前色絵磁器に用いられた色絵具の材質的な特徴と変遷に関する新たな知見の収集と焼成によって変色した色絵具の本来の色の復元が大きな目的となる。前者については、これまでの自然科学的な調査が行われておらず、詳細が明らかとなっていなかった一部の色絵具の材質の解明も課題となる。特に青色・紫色・黒色絵具に用いられた着色元素等の特定が重要な課題となる。青色・紫色・黒色などの色絵具については、今日的な陶磁科学やガラス科学の基本知識から発色に寄与している着色元素の種類を推定することは可能である（内藤 1969、加藤 2007）。しかし、近世有田などにおいて、どのような着色材が用いられたかについては不明確な部分が多いため、今回の課題とした。また、赤色・黄色・緑色といった代表的な色絵具についても分析結果の蓄積と従来の結果との比較を目的として分析を行った。

2．分析資料

2.1. 肥前色絵磁器に用いられた色絵具について

色絵磁器とは、磁器の釉面に赤や黄、緑などの色絵具で描画され、800℃程度の低火度で焼成された磁器を指す。色絵磁器の製作技術には大きく色絵具を製造する技術、色絵具で磁器に彩色する上絵付の技術、色絵具が施された磁器を焼成する技術の 3 種類に分けられる。肥前磁器における色絵磁器製作の技術は、1640 年代に中国景徳鎮から伝わったとされるが、その具体的な様相は不明な部分が多い。

色絵磁器を構造的に見ると、胎をなす素地層がガラス質の釉薬に覆われ、その上にガラス質の色絵具による上絵付け層がある。その色絵具とは、陶磁器の上絵付けに用いられる絵具である。上絵具とも呼ばれ、描画する行為は上絵付けといわれる。

色絵具の調査では、主に 2 種の材質構成要素が調査対象となる。ガラスの基質とガラスに色をつける着色材である。ガラス基質については鉛ガラスか否か、鉛やアルカリ物質の含有量が問題となる。また、着色材ではどのような遷移金属元素によって着色されているかが重要である。それらによって色絵技術の系譜や変化を検討する重要なデータを得ることができる。

着色材では、一般的なガラスの色と元素の関係は明らかとなっているが、微妙な色調の差違（例えば濃緑と黄緑など）については、微量元素やガラス基質がどのように発色に影響するか、肥前の色絵磁器についての体系的な研究は行なわれていない。

日本の色絵具は、近世以来の伝統的な色絵具の和絵具と明治以降に西洋から伝わった洋絵具に分類される。洋絵具についてはここでは割愛し、和絵具に関する概要を整理する。

和絵具の材質は、基本的に第一遷移金属元素で着色された鉛ガラスである。代表的な着色元素は Mn・Fe・Co・Cu などで、これらの元素がガラス中に溶け込みイオンとなって着色に寄与する。マンガン着色による紫色、鉄着色による黄色、銅着色による緑色、コバルト着色による青色などが代表例である。また、同じ元素であっても、アルカリガラスや鉛ガラス、アルカリ鉛ガラスなど基質となるガラスの材質によっても色調が変化することが知られている。具体例としては、銅着色の場合、鉛ガラスでは緑色に発色するが、カリウム鉛ガラスの場合は水色（浅黄色）に発色する。また、複数の元素の混合による発色も可能であるが、水彩画の絵具の混色のようには単純にはいかない。元素によって着色力が異なるため、厳密に配合量を計算し、混合する必要があり、近世では単色が基本であったと考えられる。

赤色絵具については、ガラス中にベンガラと呼ばれる酸化第二鉄の粒子が分散し、その粒子の色によって発色する。ベンガラの粒子が細かいほど鮮やかな赤色を呈すると言われている。

このように近世の色絵具は、赤絵具とその他の絵具で発色の原理が根本的に異なる。これらの色絵具は見た目

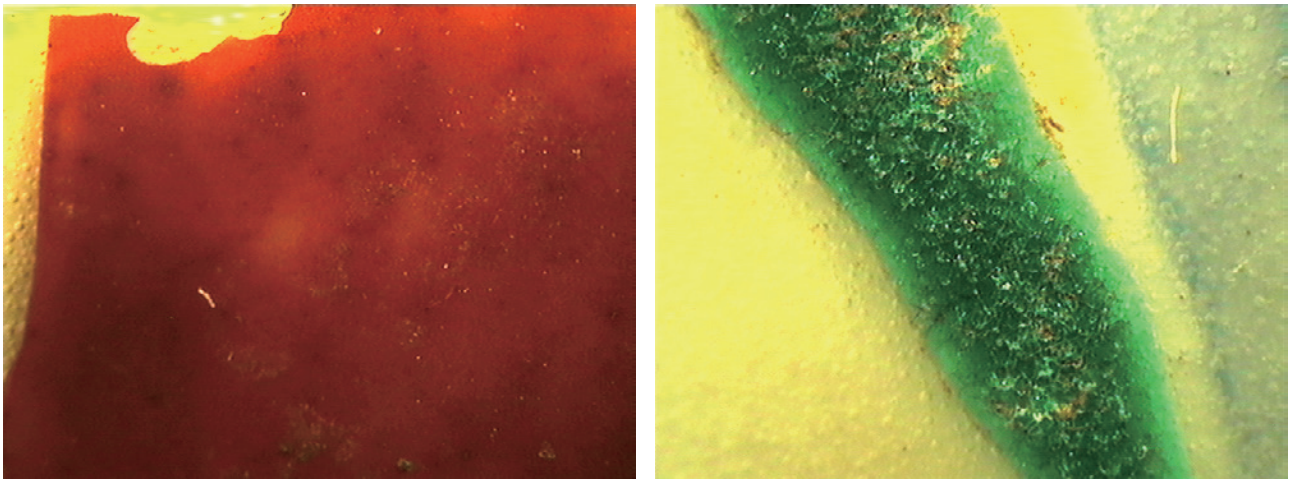


写真1　江戸城跡汐見多聞木魯台石垣地点から出土した色絵磁器（CEU019）の赤色絵具（左）と緑色絵具（右）

が大きく異なり、赤色絵具が不透明な薄膜状であるのに対し、その他の色は厚く盛り上がったガラス質で盛絵具と呼ばれる。例として、江戸城跡汐見多聞木魯台石垣地点から出土した色絵磁器の赤色絵具と緑色絵具の写真を示す（写真 1）。

2.2. 本研究で用いた分析資料について

本研究の分析対象は、肥前磁器の色絵磁器（肥前色絵磁器）の上絵付けに用いられた絵具である。本研究では、この絵具に対して「色絵具」の呼称を用いる。肥前色絵磁器には、白色素地上の透明釉薬に色絵具で部分的に描画されたものと、素地全体に直接、色絵具が塗られたものがある。特に後者には「色釉薬」の語が用いられる場合もあり、色絵具と色釉薬の用語の明確な区別がなされていない。そこで、本研究ではすべて「色絵具」の語で統一することとする。

分析資料には、東京大学構内の遺跡医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した色絵磁器を用いた。医学部附属病院入棟 A 地点は、東京大学本郷キャンパスの東域にあたる医学部附属病院南東部に位置する。本地点の変遷について成瀬晃司氏の報告から引用すると、「本調査区は講安寺寺域に属する東縁の一画を除き、大半が加賀藩邸に比定される。加賀藩は大阪の陣後の元和 2・3（1616･17）年に本郷邸を拝領する。その後寛永 16（1639）年に附属病院地区の大半が分家した富山藩、大聖寺藩の上屋敷として宗家から貸与された。本調査区は文献、絵図資料と石組溝､塀列などの境界関連遺構との比較から、天和 2 年 12 月の火災（八百屋お七の火事）までは、支藩上屋敷が建設された結果、飛び地となった加賀藩黒多門邸に、天和 3 年 3 月以降幕末までは、火災後の復旧に伴い敷地区画が大きく変更された大聖寺藩邸に比定される」。とある（成瀬 2018）。筆者らによる色絵磁器研究では、初期の色絵磁器における製作技術の解明を主目的の一つとしてきたため、本研究においても天和 3 年の火災で被災した遺物を主体とした 17 世紀中頃から後半に製作された肥前色絵磁器を対象とした。

分析には、遺跡発掘報告書『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点　報告編』（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）（以下、報告書）に実測図が掲載されている色絵磁器から、資料の遺存状態や出土遺構の年代、推定生産地などを考慮して、17 世紀中頃から後半の色絵磁器を選択し、「分析資料」とした。分析資料には、報告書中において磁器資料につけられた「遺物 No.」を「分析資料 No. 」として付した。分析資料とした色絵磁器は No.4、No.5、No.23、No.631、No.688b、No.689a･b、No.690b、No.824 の 7 点である。図 1 に各資料の実測図を報告書から転載した。No.689 は、底部の No.689a と口縁部の No.689b の 2 点の実測図が分けて掲載されているが、1 資料として扱う。各資料の詳細は表 1 に記した。

本研究では、当初、電子顕微鏡観察のため色絵具サンプルの採取を想定して、採取可能な資料、具体的には報告書の実測図が掲載されている資料（以下、掲載資料）と同一の種類または同一個体であって、実測図に使用されなかった資料（以下、非掲載資料）を用いることとした。ただし、非掲載資料が存在しない資料については掲載資料を用いた。そのため、分析資料によっては実測図とは異なる資料もあり、さらに 1 資料に複数点を含む資料もあったため、資料の識別に混乱が生じる恐れがあった。そこで、実際に分析する個々の遺物を「分析試料」と別途呼称することとした。分析試料には、「分析試料 No.」として「TDIA」の後に番号を付した。分析試料は TDIA01 ～ 06、11 ～ 19、21、23 の 17 点である。分析資料 No. と分析試料 No. の対応関係は、No.4 が

TDIA01、No.5 が TDIA02、No.23 が TDIA03、No.631 が TDIA04 ～ 06 の 3 点、No.688b が TDIA11･12 の 2 点、No.689 は No.689a が TDIA13、No.689b が TDIA14 の 2 点、No.690b が TDIA15・16 の 2 点、No.824 が TDIA17 ～ 19・21・23 の 5 点である。図 2 に分析試料の写真を掲載した。分析試料には欠番があるが、これは比較用として加えていた染付磁器（TDIA07 ～ 10）や色絵具の状態が類似した試料（TDIA20･22）を除外したためである。

分析資料の主体は肥前色絵磁器の 6 点（分析試料は 16 点）であり、残る 1 点は景徳鎮磁器である（分析試料は 1 点）。以下、各資料の概要について報告書の記載を引用し、色絵具に関する記載には下線を引いた（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）。

（1）肥前色絵磁器

分析資料とした肥前色絵磁器は、D 面焼土、C2 層、C 面焼土の 3 遺構から出土した遺物である。

No.4、No.5 は D 面焼土層から出土した磁器製の丸碗で、東京大学の陶磁器・土器分類の JB-1-c に分類されている。D 面焼土は含まれる遺物の年代観から、加賀藩本郷邸が全焼した天和 2（1682）年 12 月の「八百屋お七の火事」に伴う焼土層に比定されている（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）。その出土遺物については、報告書に「D 面焼土は、D1 面直上に堆積した焼土層で、D1 面に帰属し、天和 2（1682）年の火災によって焼失した黒多門邸内勤番武士長屋建物に起因する焼土整理層である。よって本焼土層より出土した遺物群は、天和 2 年 12 月 28 日の火災発生時点で、ここに居住した勤番武士の日常生活道具類と位置付けられる。」とある。よって、No.4 と No.5 の 2 点は天和 2 年（1682）の火災による被災物であり、1682 年以前に製作された色絵磁器となる。

No.4 は掲載資料で、分析試料は TDIA01 である（図 2-1）。報告書には「色絵碗で、器面の色調はやや白濁している。外面に赤、黒、青、黄絵の具を用い、梅、鳥文を描いている。被熱している。」とある。

No.5 は掲載資料で、分析試料は TDIA02 である（図 2-2）。報告書には「色絵碗で、器面はやや灰色を帯びている。外面に赤、青、緑絵の具を用い、梅文を描いている。被熱している。」とある。

No.631、No.688b、No.689a・b、No.690b は C2 層から出土した色絵磁器である。C2 層の出土遺物については、報告書には「C2 層出土遺物は、天和 2（1682）年の火災後に盛土造成された、ロームブロック主体造成土中に瓦礫廃棄処理された焼土層出土遺物群を示す。（中略）また本焼土層出土遺物と、加賀藩邸御殿空間内に位置する医学部教育研究棟地点での同火災廃棄資料との間に十数例の接合資料が確認されたことにより、本資料は火災後の屋敷内再開発に伴い、造成土に乗じて瓦礫処理されたことが明らかになり、加賀藩御殿空間内で使用されていた食器類として評価される一群である。」とある。加賀藩邸は慶安 3（1650）年に全焼したとされているため、これらの遺物は 1650 年から 1682 年の火災までに揃えられた品となる。

No.631 は色絵 6 寸皿で、JB-2-c に分類されている。No.631 の分析試料は 3 点であるが、掲載資料が 1 点（TDIA04）、非掲載が 2 点（TDIA05・06）である（図 2-4）。報告書には「器面の色調はわずかに灰色を帯びる。高台断面は三角形を呈し、内傾する。高台内にハリ支え痕が認められる。型打ち成形によって口縁部は内曲し、8 単位の輪花を形成する。見込み文様は染付で岩、鳥、竹を描き、黒、緑、黄、赤、茶絵の具を用いて枝、花、葉、鳥を彩色している。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数 4 個体。」とある。本資料と同タイプの伝世品『色絵梅竹鳥文輪花皿』（1670 年～ 1680 年代）が九州陶磁文化館の柴田夫妻コレクションに存在している。『色絵梅竹鳥文輪花皿』を見ると色絵具の種類は報告書の記載と同じである。本資料は有田町南川原窯の製品（南川原山様式）に比定されている（高島 2018）。製作年代は 1670 年代～ 1682 年とされる。

No.688 ～ 690 は色絵大皿で、JB-3-f に分類されている。なお、No.689 と No.690 に熔着資料があることから、これらの大皿は重ねて収蔵されていたと推定されている。

No.688b の分析試料は TDIA11・12 の 2 点であるが、いずれも非掲載資料である（図 2-5）。報告書には「688 の素地は灰白色を呈する。高台断面は台形を呈し、内傾する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。被熱のため文様の詳細は不明であるが、内外面共に黄絵の具による帯文の窓絵を配したいわゆる百花手と推定される。高台脇内外ともに染付圏線が描かれている。被熱している。」とある。このように報告書には黄色絵具のみが言及されている。初期色絵（古九谷様式）の百花手の色絵具は、黒色線で輪郭を描き、黄色、緑色、紫色、青色などの色絵具で地の文様が塗られたものが一般的である。製作年代は 1640 ～ 1650 年代とされる。

No.689 には、同一種類の No.689a と No.689b がある。No.689a の分析試料が TDIA13 で掲載資料、No.689b の分析試料が TDIA14 で非掲載資料ある（図 2-6）。報告書には「689 の素地は灰白色を呈する。高台断面は台形を呈し、やや内傾する。口縁部内外に一重線、高台に二

重線、高台内際に一重圏線、高台内に二重圏線が描かれている。被熱のため詳細は不明であるが、見込み、裏文様共に草花文が描かれていると推定される。いわゆる五彩手である。また高台畳付に緑絵の具が塗られている。被熱している。」とある。報告書には、高台畳付の緑絵具の記載のみで、その他の色絵具に関する記載はない。初期色絵（古九谷様式）の五彩手であり、黒色線で輪郭を描き、赤色、黄色、緑色、紫色、青色の 5 色の絵具で地の文様が塗られたものが一般的である。製作年代は 1640 ～ 1650 年代とされる。

No.690b の分析試料は TDIA15・16 の 2 点であるが、いずれも非掲載資料である（図 2-7）。報告書には「690 の素地は灰白色を呈する。高台断面は台形を呈し、やや内傾する。被熱のため詳細は不明であるが、見込みは色絵亀甲文で埋められ、裏文様には染付による折枝松葉文？が描かれている。いわゆる五彩手である。被熱している。」とある。報告書には色絵具に関する記載はない。これらも初期色絵（古九谷様式）の五彩手である。製作年代は 1640 ～ 1650 年代とされる。

No.824 は C 面焼土から出土した色絵磁器である。C 面焼土出土遺物については、報告書には「C 面焼土出土遺物は、C 面上に構築された SK3 埋没後の整地層 CR1 面直上に堆積し、A 層にパックされている焼土層出土遺物群を指す。本焼土層は天和 2 年の火災以降に生じた火災による瓦礫廃棄層である。また A 面上に構築された SD236 の溝底には宝永 4（1707）年の富士山噴火によって降灰した火山灰が敷き詰められていたことから、A 面造成はそれ以前と位置付けられる。よって本焼土層の発生年代は 1683 ～ 1707 年に絞られ、その間の文献記録から、本郷邸が全焼した水戸様火事（元禄 16〔1703〕年）に要因を求めることができる。」とある。

No.824 の分析試料は TDIA17 ～ 19・21・23 の 5 点であるが、いずれも非掲載資料である（図 2-8）。「824 は色絵碗で、JB-1-d に分類される。高台高は 8mm と高い。口唇部には口錆が施されている。外面には染付と色絵を併用して菊と牡丹が描かれ、ダミで描かれた岩の稜線には墨弾きが用いられている。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込み中央と内側面上半に染付と色絵を併用した七宝文が描かれている。色絵の具は黄、赤、緑が使用されている。推定残存個体数 12 個体。被熱している。」とある。本資料は、No.631 と同様に有田町南川原窯の製品に比定され（南川原山様式）、製作年代は 1670 年代～ 1682 年である。

(2) 景徳鎮色絵磁器

肥前磁器の比較用として景徳鎮磁器 1 点を選択した。分析資料とした景徳鎮色絵磁器は No.23 である。No.23 は E 面上層から出土した景徳鎮窯系の皿で、JA1-2 に分類されている。E 面上層については、報告書中には「D 層のうち、D3、D4、E 面上層は、SD803 以北の特に谷筋で認められるスポット的な盛土層であり、それらが認められないエリアは同一段階で E 面が機能していたことになる。」とある。本調査地点においては、江戸時代の生活面は A ～ E 面に大別され、D 面はさらに D1 ～ D4 面に細分されている。天和 2 年の被災瓦礫層である D 面焼土（D1 面上）を境に、A ～ C 面は大聖寺藩邸期、D1 面以下は加賀藩邸（黒多門邸）期に大別される。したがって、E 面上層の遺物群は天和 2 年以前の遺物となる。

No.23 は掲載資料で、分析試料は TDIA03 である（図 2-3）。報告書には「呉須に赤、緑、黄色の上絵付が施される。高台内には呉須で二重圏線に「天啓年製」銘が書かれている。」とある。本資料は、非常に状態が良い資料であり、生産地の違いはあれど劣化した色絵具の材質を検討する上で基準となる資料である。いわゆる「天啓赤絵」である（1620 年代の製作か？）。

(3) 分析資料の年代

このように分析資料としては、肥前磁器のグループが、初期色絵が 2 点（No.4・5）、初期色絵の中のいわゆる古九谷様式（百花手、五彩手）が 3 点（No.688b・689・690b）、南川原窯（南川原山様式）の色絵磁器が 2 点（No.631・824）で、景徳鎮磁器が天啓赤絵の 1 点（No.23）である。今回の資料をおおよその年代で見ると、肥前磁器は 1640 ～ 60 年代までの初期色絵と 1670 ～ 80 年代の南川原窯色絵に分けられる。天啓赤絵はおよそ 1620 年代と肥前色絵磁器に比べるとやや古い資料となる。有田に色絵磁器の技術が伝わったのが 1640 年代であるため、最初期の色絵技術を検討する上でも重要な資料である。

3．分析方法

3.1. 色絵具の観察

今回の分析資料の大半が火災時の被熱によって色絵具が本来の状態から変化したと考えられる資料である。あわせて、資料中の一部分ではあるが、埋蔵中の土壌や水分等からの影響によって劣化したと考えられる箇所も存在した。発掘調査によって出土した色絵磁器の色絵具の色調を復元するためには、現在の状態を把握し、本来の状態を保持しているかどのような要因によって変化したのかなどを判断し、その上で絵具の色と材質の関係を科

表1　分析資料

資料No.（磁器遺物No.）	分析資料No.	報告書への掲載	遺構名	遺構の年代	推定生産地・窯	材質	器種	技法	様式・種類	被熱の有無	報告書記載の色絵具の色(染付色)	推定製作年代	備考
4	TDIA01	掲載資料	D面焼土	1682年下限	肥前	磁器	丸碗	色絵	−	有	赤、黄、青、黒	1640～1660年代	
5	TDIA02	掲載資料	D面焼土	1682年下限	肥前	磁器	丸碗	色絵	−	有	赤、緑、青	1640～1660年代	
23	TDIA03	掲載資料	E面上層	天和2年以前	景徳鎮	磁器	皿	色絵染付	天啓赤絵	無	赤、黄、緑、(青)	1620年代	底裏銘「天啓年製」、虫喰い
631	TDIA04	掲載資料	C2層	天和2年(1682)の火災後	肥前南川原	磁器	六寸皿	色絵染付	南川原山様式	有	赤、黄、緑、黒、茶、(青)	1670-1680年代	
	TDIA05	非掲載資料（掲載同等資料）											
	TDIA06	非掲載資料（掲載同等資料）											
688b	TDIA11	非掲載資料（掲載同等資料）	C2層	天和2年(1682)の火災後	肥前山辺田	磁器	大皿	色絵	古九谷様式百花手	有	黄、その他は未記載	1640～1650年代	
	TDIA12	非掲載資料（掲載同等資料）											
689a	TDIA13	掲載資料	C2層	天和2年(1682)の火災後	肥前山辺田	磁器	大皿	色絵	古九谷様式五彩手	有	高台畳付に緑、その他は未記載	1640～1650年代	染付高台内二重圏線、高台付け根に圏線
689b	TDIA14	非掲載資料（掲載同等資料）											
690b	TDIA15	非掲載資料（掲載同等資料）	C2層	天和2年(1682)の火災後	肥前山辺田	磁器	大皿	色絵	古九谷様式五彩手	有	未記載	1650年代	内:亀甲文
	TDIA16	非掲載資料（掲載同等資料）											内:亀甲文
824	TDIA17	非掲載資料（掲載同等資料）	C面焼土	1703年下限	肥前南川原	磁器	碗	色絵染付	南川原山様式	有	赤、黄、緑、(青)	1670-1680年代	
	TDIA18	非掲載資料（掲載同等資料）											内:七宝文
	TDIA19	非掲載資料（掲載同等資料）											内:七宝文
	TDIA21	非掲載資料（掲載同等資料）											内:七宝文
	TDIA23	非掲載資料（掲載同等資料）											内:七宝文

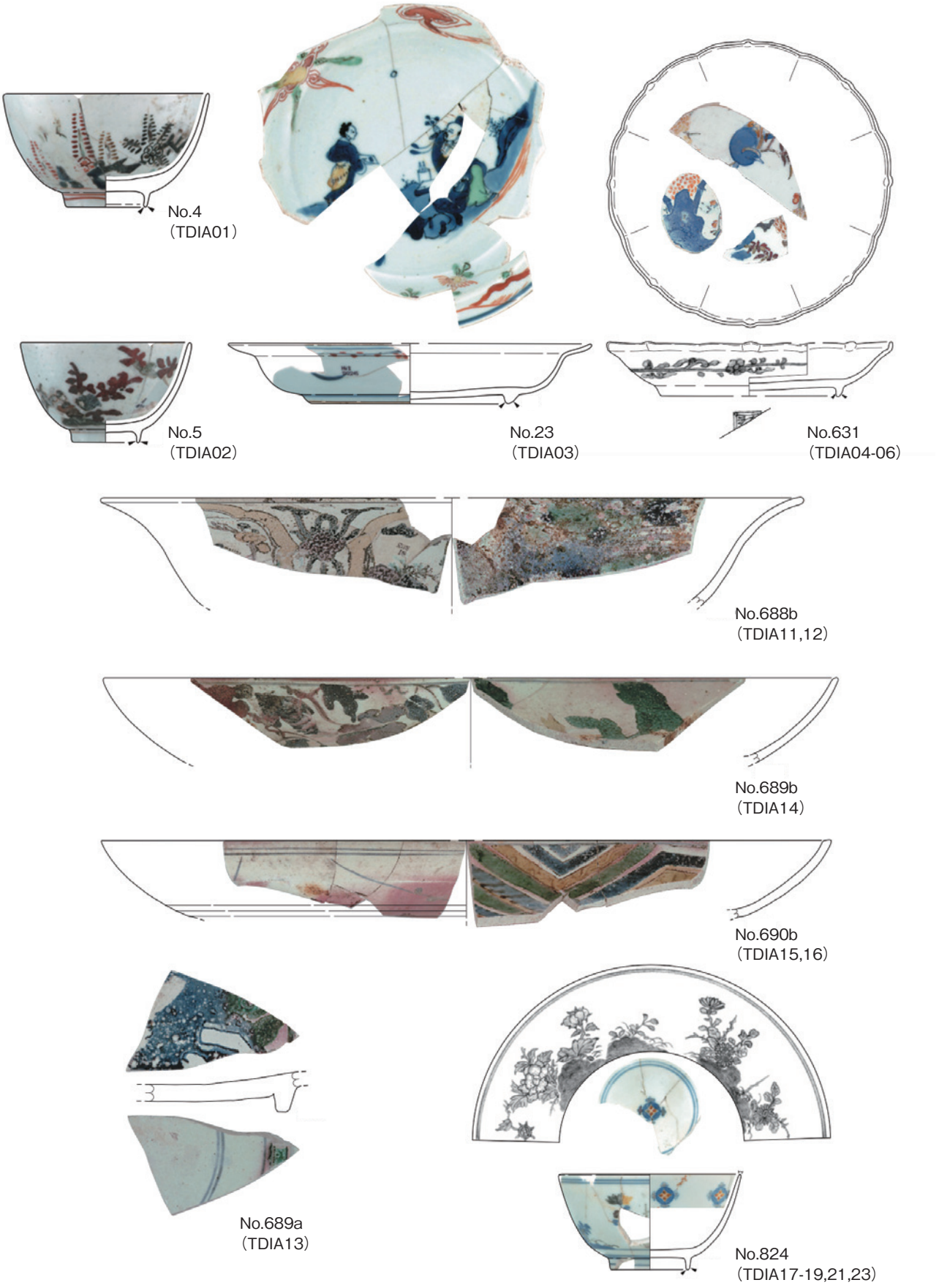


図1　分析資料の実測図（東京大学埋蔵文化財調査室 2016より転載）

図 2-1 No.4 の分析試料写真と分析箇所

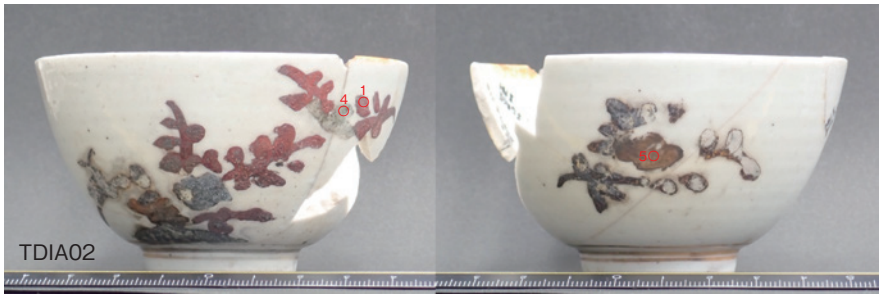


図 2-2 No.5 の分析試料写真と分析箇所

図 2-3　No.23 の分析試料写真と分析箇所

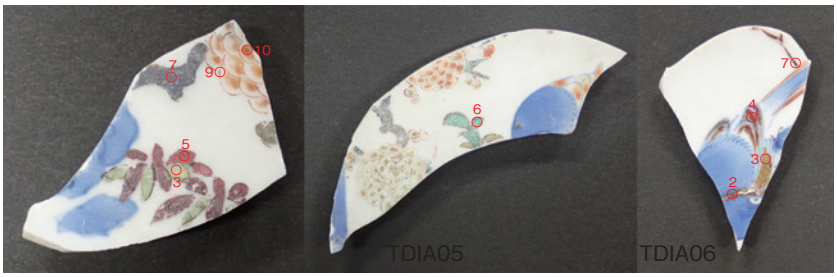


図 2-4　No.631 の分析試料写真と分析箇所

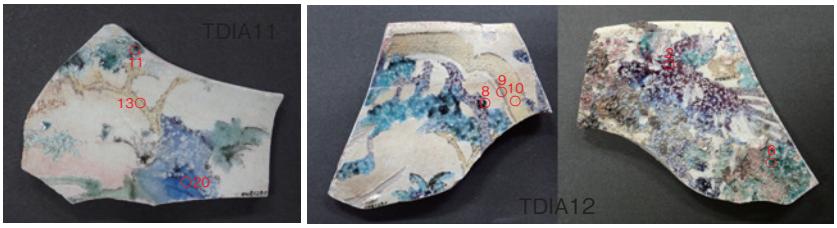
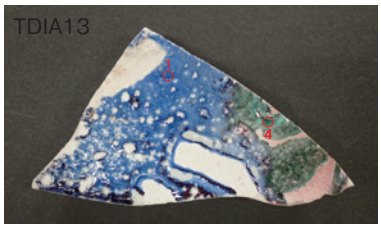


図 2-5　No.688b の分析試料写真と分析箇所



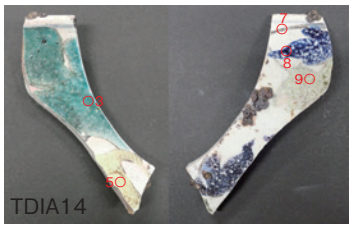


図 2-6　No.689a（左）・689b（右）の分析試料写真と分析箇所

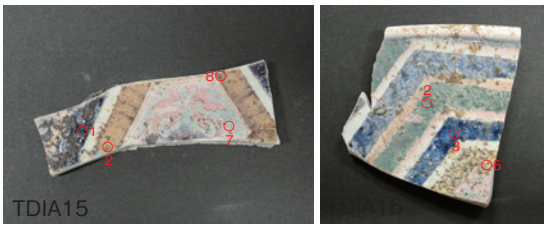


図 2-7　No.690b の分析試料写真と分析箇所

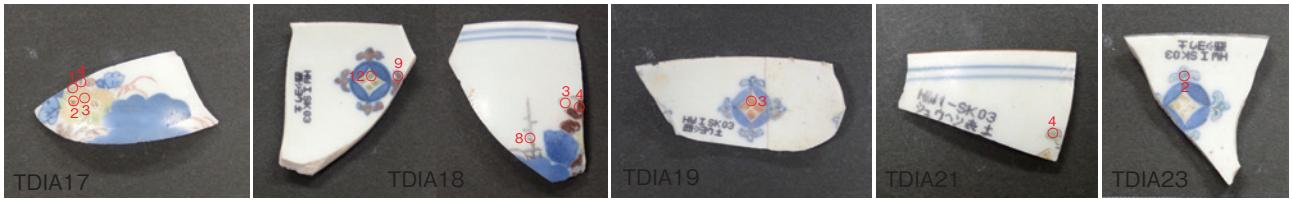


図 2-8　No.824 の分析試料写真と分析箇所

図2　分析試料写真と分析箇所

学分析結果から検討する必要がある。

蛍光 X 線分析によって色絵具の材質分析を実施するあたり、各分析資料の現状での色絵具の状態や色調を把握するため、色絵具の観察を行った。報告書中の色絵具の記載を参考にして、肉眼観察とデジタルカメラによる接写画像の観察を行った。その観察結果をもとに蛍光 X 線分析を行う箇所を決定した。

これまで文化財資料の観察にはデジタル顕微鏡を用いてきた。しかし、磁器資料の場合、資料が絵画などのように平らなではなく湾曲している資料もあり、デジタル顕微鏡の観察箇所のセッティング、位置決めに時間がかかった。また、デジタル顕微鏡では 100 ～ 200 倍程度で観察することが多いが、色絵磁器の場合はそこまで高倍率は必要なく、20 ～ 50 倍程度の方が箇所全体の観察ができて適切であった。そのため、本研究では、デジタル顕微鏡は用いず、コンパクトデジタルカメラの接写撮影を行うこととした。それによって手早く撮影することが可能となった。撮影箇所の観察については、撮影画像をデスクトップ PC に移し、PC ディスプレイの画面上で行った。色絵具の撮影には OLYMPUS Tough TG-5 を用い、顕微鏡モードで撮影した。本モードでは、1cm の距離まで接近が可能であり、光学ズームで 7 倍、デジタルズームを合わせると最大 28 倍での撮影が可能である。

3.2. 蛍光 X 線分析による色絵具の定性分析

蛍光X線分析法（XRF：X-ray Fluorescence analysis）は、X 線を物質に照射し発生する固有 X 線（蛍光 X 線）から、物質を構成する元素の種類や濃度を求める方法である。埋蔵中に表面が劣化した出土遺物では、ごく表面部分の劣化層の分析に留まるため、資料本来の化学組成を求めることが難しい。その場合には、劣化層を除去し、新鮮面を分析することで資料本来の情報を得ることができる。ただし、色絵具のように薄い層の場合は、劣化層のみを除去することは困難である場合が多く、また層全体が劣化している場合もあり、出土遺物の色絵磁器の分析には注意が必要である。

本研究では、被熱や埋蔵環境による色絵具層の変質を検討することが目的の一つであることから、完全な非破壊で分析を行った。そのため、今回の色絵具の分析データには、何らかの劣化の影響を受けていることをあらかじめ断っておく。

蛍光 X 線分析では、各資料の色絵具の顕微鏡観察によって決められた箇所について、その部分の材質情報（含有元素）の種類を明らかにすることを目的として、定性分析を行った。検出元素の中で、特に色絵具の主成分をなす鉛（Pb）の含有と絵具に色を着ける着色元素の種類の検討が主な課題となる。近世色絵磁器の色絵具の材質は「鉛ガラス」であり、基本的な色調と着色元素の関係は前述したように明らかとなっている。そのため、色絵具の色調から主な着色元素の種類を同定することが可能である。しかし、火災によって変色した資料や埋蔵中に劣化した資料の場合はまだ基本的なデータがないため、色調と検出元素の比較から本来の大まかな色調を推定することを目的とした。

分析には、微小部エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日立ハイテク・サイエンス社製 SEA5120S）を用いた。分析条件は、管電圧 50 ｋＶ、管電流 8 ～ 216 μ A、コリメーター径 φ 0.1mm、試料室雰囲気大気、測定時間 180 秒である。定性分析では、着色元素（遷移金属元素）と鉛の分析が主目的であるため、大気雰囲気での分析を行った。本条件下では、カルシウム（Ca）よりも原子番号が低い元素の分析には不適であり、色絵具や釉薬の主成分であるケイ素やアルミニウムなどはほぼ検出できない。また、本分析では、微細な文様などを分析するため、コリメーター径（X 線があたる範囲）が φ 0.1mm で分析を行った。

4. 分析結果

4.1. 色絵具の観察結果

色絵磁器の観察結果について資料ごとに報告する。色絵具の観察では、主に全体的な色絵具の種類、描画技法、被熱の有無、各色の特徴について項目ごとに整理し、蛍光 X 線分析を行う色絵具を決定した。

描画技法については、「線描き」と「ダミ（濃み）」の 2 種類がある。金・銀彩は 1690 年以降に用いられるため今回は対象外である。線描きは、絵の輪郭線に用いられ、上絵の場合は赤色線や黒色線、下絵の染付が用いられる場合もある。ダミは画像の面を塗るのに用いられる。赤色ダミの場合は赤色線とセットが一般的である（写真 2-1）。赤線の輪郭線の中に収まりつつ、きれいな濃淡を作るのがうまいダミとのことである。一方、盛絵具の場合は黒色線が多いが（写真 2-2）、赤色も用いられることもある。盛絵具では、線の上にダミを施し、線を保護すると言われている。

被熱の有無については、色調や透明感の有無、表面の状態などを考慮した。黄色や緑色絵具などの盛絵具の場合は、当初のものは、比較的明確な色調を示し、透明感があり、厚みのある滑らかなガラス質を呈している。しかし、色絵具が失透し、表面に細かい凹凸や穴が存在し、

写真2-1　赤色絵具による線描きとダミ

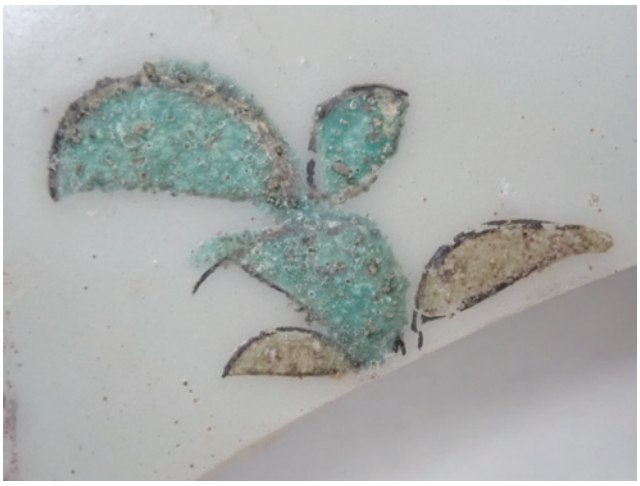


写真2-2　緑色･黄色絵具のダミと黒色絵具の線描き

不明確な色調の場合は、被熱によって変質したものと判断した。また、埋蔵中の劣化については、被熱した資料が埋蔵中にさらに劣化した可能性もあり、その正確な判別は難しかった。そのため、本研究では埋蔵中の劣化については取り上げないこととした。

伝世した類似品や色彩のパターンなども色の変化を判別する上での参考とした。

分析を行う色絵具の分析箇所を図 2 に示す。写真中の番号は、各資料中の色絵具を分析した際の「分析 No.」である。例えば、図 2-1 の No.4 においては、左写真の中央部やや上の梅文(赤色絵具)に〇印と番号 12 がある。この〇印が分析箇所で、この番号がそれぞれの分析試料中の分析箇所に固有の「分析 No.」であり､「TDIA01-12」というように示す。なお、各分析箇所の拡大写真については、図 3-001 ～ 060 に掲載した。本図の色表示は観察と分析によって復元した色の表記となっているおり、括弧内の色名が現状の色を示している。

(1) 肥前色絵磁器

・No.4（TDIA01）

本資料の色絵具については、報告書では赤色、黄色、青色､黒色絵具の使用が記載されていたが､本観察によって赤色、灰緑色、白緑色、紺色、黒色の色絵具が観察された。

描画は太めの線描きでなされており、基本的に線描きとダミの使い分けはなされていない。一部、黒色の細い線描きが認められた。

被熱により、色絵具が変色、特に黒色化している箇所が多く、観察からは当初の状態の推定が難しい資料であった。ただし、部分的に変色していない箇所も存在した。

梅文には、赤色（図 3-003）・灰緑色（図 3-002）・黒色（図 3-001）が認められ、いずれも薄塗りだが、各色が混在するわけではなく、部位ごとに各色の梅文がまとまっている。これは、本来はすべて赤色であったのが、被熱によって黒色や灰緑色に変化したものと考えられる。ただし、灰緑色や黒色といった色の違いは、同じ赤色絵具の焼成度合いの差異によって生じたものなのか、もともと濃淡が異なる赤色があり、その色調を反映しているものなかは不明である。白緑色（図 3-004）は赤色の花弁の幹（枝？）に用いられおり、やや厚塗りである。不透明で光沢感のない白緑色であるため、当初は緑色系の色絵具（黄緑色、薄緑色）であったものが、何らかの要因で変化した可能性が高い。その要因が火災か埋蔵中の劣化によるかは不明である。また、この白緑色の幹上に黒色の細い線描きが認められた。紺色（図 3-005）は厚塗りで、鳥と梅の幹で認められた。梅の幹は紺色絵具も部位によっては黒色に変色している。

これらの観察の結果から、No.4 では、赤色（TDIA01-12)、灰緑色（TDIA01-10)、白緑色（TDIA01-17)、紺色（TDIA01-05)､黒色（TDIA01-01)､黒色線（TDIA01-20)と比較としての透明釉薬（TDIA01-21）を加えた 7 箇所を分析箇所とした（図 2-1)。

・No.5（TDIA02）

本資料の色絵具については、報告書では赤色、緑色、青色絵具の使用が記載されているが､観察によって赤色、灰緑色、青色（紺色に近い)、黒色が観察された。

本資料の描画では、厚塗りの絵具は太めの線で描かれている。薄塗りの絵具は線描きとダミの使い分けはなされている可能性もあるが、劣化が大きく判然としない。

こちらも本資料は、全体的に被熱を受けており、それによって色絵具が変色（特に赤色化または黒色化）していると考えられ、当初の状態の推定が難しい資料であっ

た。剥落している部分もある。

赤色の色絵具には、大きく 2 種類の赤色が観察された。1 種類は不透明で光沢のある厚塗りの赤色（図 3-010）で、葉や枝に用いられている。表面が発泡した痕跡（粒々感がある）があり、被熱によって変色した可能性が高い。もう 1 種類は薄塗りの赤茶色（図 3-008）で、被熱の影響か、非常に微細な粒子感のある鉄の赤さびのような状態である。灰緑色（図 3-009）はやや透明の厚塗りの絵具で、多少ガラス感が残っているが、これも被熱によって変質した可能性が高い。青色は、厚塗りの黒に近い青色で、被熱によって不透明化したと考えられる。

これらの観察の結果から、No.5 では、厚塗りの変色した赤色（TDIA02-01）、薄塗りの赤色（TDIA02-05）、灰緑色（TDIA02-04）の 3 箇所を分析箇所とした（図 2-2）。青色絵具については、本資料が完形に近い資料だったため、適切な分析箇所を設定できず、分析を行えなかった。

・No.631（TDIA04 ～ 06）

本資料の色絵具については、報告書では赤色、黄色、緑色、茶色、黒色絵具の使用が記載されているが、観察によって赤色、黄色、青緑色、白緑色、黒色、黒色線の色絵具が観察された。報告書の実測図には 3 点の資料が掲載されているが、今回分析したのはそのうちの 1 点のみであるため、未観察の掲載資料に用いられている絵具の詳細については不明である。茶色絵具については分析試料中には認められなかった。

描画については、線描きとダミの使い分けがなされている。赤色では、花文において赤色線に赤色ダミが用いられている。同様のモチーフの花文には黄色のものもあり、そこでは黄色線に黄色ダミが用いられている。また、赤色のダミに黒色の輪郭線が認められた箇所がある。この部分の赤色は厚塗りで不透明であるため、変色した可能性が高い。青緑色と白緑色のダミの部分でも黒色の輪郭線が認められた。また、染付（下絵付）によって輪郭線が描かれている箇所では、赤色、黄色のダミが用いられている。

本資料は、被熱によって失透し、変色したような絵具の試料（TDIA04・05）もあれば、比較的被熱の程度が低い試料（TDIA06）もある。揃いで 4 個体あったと推定されているため、個体によって被熱の程度に違いがあったと考えられる。

赤色の色絵具には、大きく 2 種類の赤色が観察された。1 種類はほぼ変色していない赤色である。その中で細分され、薄塗りの線描きとダミによって描かれた花文（図 3-017・018）に用いられている。やや朱色である。鳥の尾にも薄塗りの赤色ダミ（図 3-019）がある。線描きは染付で、色がやや濃い赤色である。部分的に黒色化している箇所も認められた。もう 1 種類は被熱によって変色した可能性が高い赤色である。こちらも細分され、不透明な厚塗りの赤色（図 3-022）が葉に用いられている。表面が発泡した痕跡（粒々感がある）がある。もう一つは光沢のある薄い皮膜状の赤色（図 3-024）で、こちらは緑色絵具の上に認められるため、緑色絵具が変化したものと考えられる。黄色（図 3-021）は、ややガラス感がある透明厚塗りの絵具である。緑色の色絵具には、色調が異なる青緑色と白緑色が認められた。青緑色（図 3-023）は不透明な厚塗りで葉に用いられ、表面に発泡した痕跡がある。白色の付着物らしきものも多い。白緑色（図 3-020）は不透明なやや厚塗りで葉に用いられ、表面に発泡した痕跡がある。黒色（図 3-025）は不透明な厚塗りで幹に用いられている。やや青味がある黒である。被熱によって発砲し、表面に凹凸が生じている。黒色線（図 3-026）は、薄塗りで不透明なやや茶色味のある黒色である。

これらの観察の結果から、No.631 では、赤色ダミ（TDIA04-10）・（TDIA06-04）、赤色線（TDIA04-09）、厚塗りの変色した赤色（TDIA04-05）、緑色絵具上の変色した赤色（TDIA06-02）、黄色（TDIA06-03）、青緑色（TDIA05-06）、白緑色（TDIA04-03）、黒色（TDIA04-07）、黒色線（TDIA06-07）の 10 箇所を分析箇所とした（図 2-4）。

・No.688b（TDIA11・12）

本資料の色絵具については、報告書では黄色絵具の使用のみが記載されていたが、本観察によって黄色、緑色、青色、紫色、黒色線の色絵具が観察された。

描画はダミ塗りのみで描かれている箇所が多く、部分的に線描きとダミの使い分けがなされている箇所がある。黄色絵具のダミの部分には黒色の線描きが認められた。

全体的に被熱により、色絵具が熔融・剥落しており、文様の詳細は判然としない。熔融して表面がただれている箇所や色の具が混ざっている箇所、土砂が表面に付着している箇所などもある。また、色絵具の表面を観察すると細かいピット状の痕跡が認められた。これは埋蔵中の劣化の可能性もある。ただし、各色の色絵具自体は失透していても大きくは変色しておらず、透明なガラス感が比較的良好に残存している箇所も存在する。

黄色絵具は厚塗りでやや失透した薄い黄色（図

3-027・028）である。緑色絵具は厚塗りでやや透明の濃い緑色（図 3-029・030）である。青色絵具は厚塗りで透明感の強い青色（図 3-031）である。紫色絵具は厚塗りでやや透明の濃い紫色（図 3-032・033）である。黄色絵具の輪郭には黒色線が用いられている。薄塗りで部分的に焦げ茶色に見える箇所もある。

これらの観察の結果から、No.688b では、黄色（TDIA11-13）・（TDIA12-10）、 緑色（TDIA11-11）・（TDIA12-06）、青色（TDIA11-20）、紫色（TDIA12-02）・（TDIA12-08）、黒色線（TDIA12-09）の 8 箇所を分析箇所とした（図 2-5）。

・No.689a（TDIA13）、No.689b（TDIA14）

本資料の色絵具については、報告書では高台畳付の緑色絵具の記載のみだが、本観察によって黄色、緑色、青緑色、青色、紺色、黒色線の色絵具が観察された。

描画は、線描きとダミの使い分けがなされている箇所とダミのみの箇所がある。線描きには、黒色線が用いられている。

全体的に被熱を受けているが、変色しておらず、透明なガラス感が良好に残っている。一部、緑色と青色絵具が接している箇所で絵具が混ざっている箇所があるが、その他は比較的状態が良い。ただし、表面を観察すると細かいピット状の痕跡が認められ、色絵具の剥落も認められた。

黄色絵具は厚塗りでやや失透した薄い黄色（図 3-035・036）である。緑色絵具は厚塗りでやや透明の緑色（図 3-037）とやや青味の強い緑色（青緑色）（図 3-038）がある。青色絵具は厚塗りで透明感の強い青色（図 3-039）と紺色（図 3-040）がある。黄色絵具や緑色絵具の輪郭には薄塗りの黒色線（図 3-041）が用いられている。

これらの観察の結果から、No.689a・b では、黄色（TDIA14-05）・（TDIA14-09）、 緑 色（TDIA13-04）、青 緑 色（TDIA14-03）、 青 色（TDIA13-01）、 紺 色（TDIA14-08）、黒色線（TDIA14-07）の 7 箇所を分析箇所とした（図 2-6）。

・No.690b（TDIA15・16）

本資料の色絵具については、報告書では記載がないが、本観察によって黄色、緑色、青色、紺色、黒色線？の色絵具が観察された。一部、青色と紫色の識別が難しい箇所があったが、状態が良い個体から青色絵具と判断した。

描画は、ダミのみで描かれている箇所が大半である。亀甲文の黄色絵具のダミのみ黒色線らしき痕跡が認められた。被熱によって黒色線が絵具に溶け込んだ可能性もある。亀甲文が描かれた伝世品の五彩手では、色絵具の輪郭線だけでなく、内部にも黒色線で文様が描かれるが、本試料では確認できない。

全体的に被熱により、色絵具が熔融して、表面がただれている箇所や土砂が表面に付着している箇所などがある。各色の色絵具自体は失透していても大きくは変色していない。

黄色絵具は厚塗りで失透したやや褐色の黄色（図 3-027・028）である。緑色絵具は厚塗りで失透した薄い緑色（図 3-029・030）である。青色絵具は厚塗りで透明感の強い青色（図 3-031）と紺色（図 3-040）がある。黄色絵具の輪郭には黒色線らしきものの痕跡が残っている。薄塗りで部分的に焦げ茶色に見える箇所もある。

これらの観察の結果から、No.690b では、黄色（TDIA15-02）・（TDIA16-05）、緑色（TDIA15-07）・（TDIA16-02）、青色（TDIA16-03）、紺色（TDIA15-01）、黒色線？（TDIA15-08）の 7 箇所を分析箇所とした（図 2-7）。

・No.824（TDIA17-23）

本資料の色絵具については、報告書では赤色、黄色、緑色絵具の使用が記載されていたが、本観察によって赤色、黄色、緑色、灰緑色、薄緑色、黒色線の色絵具が観察された。

描画は、基本的に線描きとダミの使い分けがなされている。薄塗りの赤色と灰緑色の絵具は、同色絵具の輪郭線とダミが用いられている。盛絵具（黄色、緑色、赤色）では黒色の細い線描きが認められた。黄色と緑色の盛絵具には下絵の染付によって輪郭線が描かれている箇所もある。

被熱により、色絵具が変色している箇所がある。ただし、試料によっては被熱の程度が低いのか変色していない個体も存在した。

七宝文には、赤色（図 3-052）と灰緑色（図 3-051）が認められた。いずれも薄塗りだが、部位よって各色がまとまっている。この薄塗り赤色は、被熱の影響か、鉄の赤さびのような状態になっている。薄塗り灰緑色は、菊や牡丹の文様にも認められた（ダミ：図 3-049、線描き：図 3-050）。灰緑色は薄塗りのため、被熱によって赤色が変化したものと考えられる。赤色には被熱によって変色したと考えられる赤色（図 3-055・056・057）も認められた。いずれ厚塗りで失透している。

薄緑色は、やや薄塗りの透明感が強いもの（図 3-053）と、厚塗りの透明感が強いもの（図 3-059）がある。緑色（図 3-058）はや厚めでやや失透している。黒色線（図

3-060）は、薄塗りで透明感がない。部分的に茶色味が強い箇所もある。

これらの観察の結果から、No.824 では、赤色（TDIA19-03）、変色赤色（TDIA17-04）・（TDIA18-04）・（TDIA18-09）、黄色（TDIA17-02）・（TDIA18-03）、緑色（TDIA21-04）・(TDIA23-02)、灰緑色ダミ（TDIA17-03）・（TDIA18-12）、灰緑色線（TDIA17-01）、黒色線（TDIA18-08）の 12 箇所を分析箇所とした（図 2-8）。

(2) 景徳鎮色絵磁器

・No.23（TDIA03）

本資料の色絵具については、報告書では赤色、黄色、緑色絵具の使用が記載されているが、観察によって赤色、黄色、緑色の 3 色に加え、黒色線の色絵具が観察された。

描画は、太めの赤線とやや太めの黒色線による線描きと赤色・緑色・黄色絵具によるダミの使い分けはなされている。線描きの上にダミが施されているが、線の太さは一定ではなく、ダミが輪郭線からはみ出るなど、上絵の描画は荒い。また、一部の線描き部分ではダミの絵具の中に溶け込んでいる箇所も認められた。緑色絵具のダミには黒色線が用いられ、赤色と黄色絵具のダミには赤線が用いられている。また、見込部の染付の人物像の衣服に黄色と緑色絵具が用いられている。

本資料は、被熱は受けておらず、埋蔵中の劣化の影響もほぼ認められない。非常に色絵具の状態の良い資料である。

赤色は濃赤色と薄赤色の 2 種類が認められた。濃赤色（図 3-011）は薄塗りで、不透明である。薄赤色（図 3-012）は濃赤色よりもさらに薄塗りで、下地の白色素地の影響かやや朱色に見える。黄色絵具（図 3-013）はやや厚塗りで、透明である。緑色絵具（図 3-014）もやや厚塗りで、透明な薄い緑色である。黒色線の絵具（図 3-015）は、薄塗りで、ムラがあり、下地が透けている。

これらの観察の結果から、No.23 では、濃赤色（TDIA03-10）、薄赤色（TDIA03-05）、黄色（TDIA03-01）、緑色（TDIA03-06）、黒色線（TDIA03-07）と比較としての透明釉薬（TDIA03-02）を加えた 6 箇所を分析箇所とした（図 2-3）。

(3) 整理表

以上の各資料の色絵具の分析箇所を整理したのが表 2 である。本表では、ダミと線描きに分け、さらに変色しているか否かによって分類した。

4.2. 蛍光 X 線分析結果および考察

蛍光 X 線分析法による分析結果を図 3-001 ～ 055 に掲載した。本図では、分析箇所の拡大写真と XRF スペクトルを示した。XRF スペクトルは、全体像を示した図（中央）と、着色元素の部分を拡大した図（右図）の 2 種類を掲載した。本図に示した色名は、分析箇所の観察と蛍光 X 線分析結果から推定した色名である。現状の観察で認識できる色名を示していない。前述した観察時に記載した色名から変化した色絵具には下線を引いた。

色絵具の XRF スペクトルから主に確認することができた元素を定性分析結果を表 3 に示した。ただし、本表には XRF スペクトルにおいて検出された元素を全て記載したわけではない。XRF スペクトルでは、拡大することで微量な元素も識別することができるが、煩雑になる。色の発色や基本的な材質である鉛を中心に記載した。また、表には「観察による色調」と「分析結果から推定された色調」を記載した。なお、「分析結果から推定された色調」については、「赤色」・「黄色」・「緑色」・「青色」・「紫色」・「黒色」など単色名とした。各色については、色によって色調にバリエーションがある場合もあるが、細かい色調の推定は今回の分析では困難であったため、今回は単色のみの記載に留めた。

ここでは、資料の状態が良く、本来の色調を留めていると考えられる景徳鎮色絵磁器の No.23 から分析結果を見ていくこととする。

(1) 景徳鎮色絵磁器

・No.23（TDIA03）（図 3-011 ～ 016）

分析箇所は TDIA03-10（濃赤色）、TDIA03-05（薄赤色）、TDIA03-01（黄色）、TDIA03-06（緑色）、TDIA03-07（黒色線）、TDIA03-02（透明釉薬）の 6 箇所である（図 2-2）。

赤色の TDIA03-10（図 3-011）・TDIA03-05（図 3-012）からは Fe と Pb が検出されたため、いずれも Fe 着色による鉛ガラス製絵具である。濃赤色 TDIA03-10 と薄赤色 TDIA03-05 のスペクトルを比較すると、赤色が濃い TDIA03-10 の方が Fe、Pb ともに X 線強度が強く検出された。赤絵具の濃淡が配合の異なる絵具の種類を示しているのか、それとも絵具を塗る際の希釈の違いによるかは判別できない。この点は、Fe と Pb の X 線強度の比率によって原料調合割合を比較することもできる。ただし、今回の分析では、薄赤色 TDIA03-05 の絵具層が薄いため、下層の透明釉薬の Fe があわせて検出されている可能性が高く（Rb が検出されている点から判断できる）、Fe と Pb の X 線強度比による絵具原料調合の比較は行えなかった。こういった比較は絵具層が厚い資料

表2 各資料の分析対象とした色絵具と分析試料No.

資料No.	ダミ	観察によって変色したと推測したダミ	線描き	観察によって変色したと推測した線描き	その他
4 （TDIA01）	赤色（TDIA01-12） 紺色（TDIA01-05）	灰緑色（TDIA01-10） 白緑色（TDIA01-17） 黒色（TDIA01-01）	黒色（TDIA01-20）		透明釉薬（TDIA01-21）
5 （TDIA02）	赤色（TDIA02-05）	赤色（TDIA02-01） 灰緑色（TDIA02-04）			
23 （TDIA03）	濃赤色（TDIA03-10） 薄赤色（TDIA03-05） 黄色（TDIA03-01） 緑色（TDIA03-06）		黒色（TDIA03-07）		透明釉薬（TDIA03-02）
631 （TDIA04～06）	赤色（TDIA04-10） 赤色（TDIA06-04） 黄色（TDIA06-03） 青緑色（TDIA05-06）	赤色（TDIA04-05） 赤色（TDIA06-02） 白緑色（TDIA04-03） 黒色（TDIA04-07）	赤色（TDIA04-09） 黒色（TDIA06-07）		
688b （TDIA11・12）	黄色（TDIA11-13） 黄色（TDIA12-10） 緑色（TDIA11-11） 緑色（TDIA12-06） 青色（TDIA11-20） 紫色（TDIA12-02） 紫色（TDIA12-08）		黒色（TDIA12-09）		
689a・b （TDIA13・14）	黄色（TDIA14-05） 黄色（TDIA14-09） 緑色（TDIA13-04） 青緑色（TDIA14-03） 青色（TDIA13-01） 紺色（TDIA14-08）		黒色（TDIA14-07）		
690b （TDIA15・16）	黄色（TDIA15-02） 黄色（TDIA16-05） 緑色（TDIA15-07） 緑色（TDIA16-02） 青色（TDIA16-03） 紺色（TDIA15-01）		黒色？（TDIA15-08）		
824 （TDIA17～19・21・23）	赤色（TDIA19-03） 黄色（TDIA17-02） 黄色（TDIA18-03） 緑色（TDIA21-04） 緑色（TDIA23-02）	赤色（TDIA17-04） 赤色（TDIA18-04） 赤色（TDIA18-09） 灰緑色（TDIA17-03） 灰緑色（TDIA18-12）	黒色（TDIA18-08）	灰緑色（TDIA17-01）	

に限られるため、例えば断面試料を作製し、電子顕微鏡によって観察や分析することで比較できる場合がある。今後の検討課題としたい。

黄色 TDIA03-01（図 3-013）からは、主に Fe、Cu、Pb が検出され、特に Fe と Pb の X 線強度が強いため、Fe 着色の鉛ガラス製黄色絵具である。同じ Fe 着色である赤色絵具と比べると、黄色絵具は Pb 強度が非常に高く、Fe 強度は低い点が特徴である。

緑色 TDIA03-06（図 3-014）からは、主に Fe、Ni、Cu、Pb が検出され、特に Cu と Pb の強度が強いため、Cu 着色の鉛ガラス製緑色絵具である。また、緑色絵具からわずかではあるが Ni が検出された点が特異的であり、中国景徳鎮窯の特徴を示している可能性もある。

黒色線 TDIA03-07（図 3-015）からは、主に Mn、Fe、Co、Cu、Zn、Pb が検出され、特に Mn、Fe、Co が検出されたため（Cu も検出されているが、付近の緑色絵具の影響と考えられる）、Mn 着色の鉛ガラス製黒色絵具である。この 3 元素の中で特に Mn 強度が強い点から、黒色の着色材料として呉須の使用が考えられる。呉須は asbolite というマンガン鉱物の一種であり、染付磁器の下絵付け絵具として用いられる材料である。本試料の Pb 強度は他のダミ用色絵具に比べると低い。一般に、線描き用の色絵具は、鉛濃度が低いとされる。これは焼成時にダミに溶け込むのを防ぐためといわれており、本分析結果もこの見解と整合性のある結果となった。

透明釉薬 TDIA03-02（図 3-016）からは、K、Ca、Fe、Rb、Sr が検出された。色絵具層が薄い場合、下層の透明釉薬にも X 線が照射され、釉薬の含有元素も検出される。特に Ca、Sr は透明釉薬に特徴的な元素であるため、これらの元素が検出された場合は、下層の釉薬の影響と考えられる。K、Fe、Rb については絵具層と釉薬層の両者に含まれる可能性があるため、注意が必要である。先行研究から景徳鎮磁器の釉薬では、Rb 濃度が高く、Sr 濃度が低いことが明らかとなっている（新免 2013-1）。本資料では Rb が強く検出されたため、先

表3 蛍光X線分析結果と推定した色絵具の色調

分析資料No.	分析No.	観察された色絵具の色調	分析によって推定された色絵具の色調	被熱・劣化等による変色	主な検出元素（下線の元素はその中でも主要なもの、括弧は含有が不明確なもの）
4	TDIA01-01	黒色	赤色	有	Mn Fe Pb
	TDIA01-10	灰緑色	赤色	有	Mn Fe Pb
	TDIA01-12	赤色	赤色		Mn Fe Pb
	TDIA01-17	白緑色	緑色	有	Fe Cu Pb
	TDIA01-05	紺色	青色	有？	Fe Co Ni Pb
	TDIA01-20	黒色（線）	黒色（線）		Mn Fe (Co) Cu Pb
	TDIA01-21	（透明釉薬）	（透明釉薬）		Mn Fe
5	TDIA02-05	赤色	赤色		Mn Fe Pb
	TDIA02-04	灰緑色	黄色	有	Fe Pb
	TDIA02-01	赤色	緑色	有	Fe Cu Zn Pb
23	TDIA03-10	濃赤色	赤色		Fe Pb
	TDIA03-05	薄赤色	赤色		Fe Pb
	TDIA03-01	黄色	黄色		Fe Cu Pb
	TDIA03-06	緑色	緑色		Fe Ni Cu Pb
	TDIA03-07	黒色（線）	黒色（線）		Mn Fe Co Cu Zn Pb
	TDIA03-02	（透明釉薬）	（透明釉薬）		Fe
631	TDIA04-09	赤色（線）	赤色（線）		Fe Pb
	TDIA04-10	赤色	赤色		Fe Pb
	TDIA06-04	赤色	赤色		Fe Pb
	TDIA04-03	白緑色	黄色	有	Fe Cu Pb
	TDIA06-03	黄色	黄色		Fe Pb
	TDIA04-05	赤色	緑色	有	Mn Fe Cu Pb
	TDIA05-06	青緑色	緑色	（失透）	Cu Pb
	TDIA06-02	赤色	緑色	有	Cu Pb
	TDIA04-07	黒色	茶色？	有	Mn Fe Co Cu Pb
	TDIA06-07	黒色（線）	黒色（線）		Mn Fe Co Cu Zn Pb
688b	TDIA11-13	黄色	黄色	（失透）	Fe Cu Pb
	TDIA12-10	黄色	黄色	（失透）	Fe Cu Zn Pb
	TDIA11-11	緑色	緑色		Mn Fe Cu Zn Pb
	TDIA12-06	緑色	緑色		Mn Fe Cu Zn Pb
	TDIA11-20	青色	青色		Mn Fe Co Ni Cu Pb
	TDIA12-02	紫色	紫色		Mn Fe Co Zn Pb
	TDIA12-08	紫色	紫色		Mn Fe Co Zn Pb
	TDIA12-09	黒色(線)	黒色(線)		Mn Fe Co Pb
689a・b	TDIA14-05	黄色	黄色		Mn Fe Cu Zn Pb
	TDIA14-09	黄色	黄色		Mn Fe Cu Pb
	TDIA13-04	緑色	緑色		Fe Cu Pb
	TDIA14-03	青緑色	緑色	有？	Fe Cu Pb
	TDIA13-01	青色	青色		Mn Fe Co (Ni) Cu Pb
	TDIA14-08	紺色	青色	有？	Fe Co Ni Cu Zn Pb
	TDIA14-07	黒色(線)	黒色(線)		Mn Fe (Co) Cu Pb
690b	TDIA15-02	黄色	黄色		Mn Fe Cu Zn Pb
	TDIA16-05	黄色	黄色	（失透）	Mn Fe Cu Pb
	TDIA15-07	緑色	緑色		Mn Fe Cu Zn Pb
	TDIA16-02	緑色	緑色		Mn Fe Cu Zn Pb
	TDIA15-01	紺色	青色	有？	(Mn) Fe Co Ni Cu Zn Pb
	TDIA16-03	青色	青色		Mn Fe Co Ni Cu Zn Pb
	TDIA15-08	黒色?(線)	茶色?(線)		Mn Fe Cu Zn Pb
824	TDIA17-01	灰緑色(線)	赤色(線)	有	Fe Pb
	TDIA17-03	灰緑色	赤色	有	Fe Pb
	TDIA18-12	灰緑色	赤色	有	Fe Pb
	TDIA19-03	赤色	赤色	有	Fe Pb
	TDIA17-02	黄色	黄色		Fe Cu Pb
	TDIA18-03	黄色	黄色		Fe Cu Pb
	TDIA17-04	赤色	緑色	有	Fe Cu Zn Pb
	TDIA18-04	赤色	緑色	有	Fe Cu Pb
	TDIA18-09	赤色	緑色	有	Fe Cu Pb
	TDIA21-04	緑色	緑色		Fe Cu Pb
	TDIA23-02	緑色	緑色		Mn Fe Cu Pb
	TDIA18-08	黒色(線)	黒色(線)		Mn Fe (Co) Cu Pb

行研究と整合性のある結果となった。ちなみに、肥前磁器はこの逆で、Rb 濃度が低く、Sr 濃度が高いため、透明釉薬の両元素の X 線強度や濃度を検討することで、景徳鎮磁器と肥前磁器の大まかな判別が可能である。

(2) 肥前色絵磁器

・No.4（TDIA01）（図 3-001 ～ 007）

分析箇所は、TDIA01-12（赤色）、TDIA01-10（灰緑色）、TDIA01-17（白緑色）、TDIA01-01（黒色）、TDIA-05（紺色）、TDIA01-20（黒色線）、TDIA01-21（透明釉薬）の 7 箇所である（図 2-1）。

黒色 TDIA01-01（図 3-001）、灰緑色 TDIA01-10（図 3-002）、赤色 TDIA01-12（図 3-003）からは主に Fe と Pb が検出された。いずれも薄塗りの梅文であることから、Fe 着色された鉛ガラス製赤色絵具である。黒色の TDIA01-01 と灰緑色の TDIA01-10 については被熱によって変色したものと判断できる。赤色絵具の黒色化については、その詳細な原理については明らかとなっていない。また、赤色絵具の XRF スペクトルを見ると、三者間で Fe と Pb の最大強度の比率が異なる。これについては、前述した景徳鎮磁器の No.23 でも厚塗りと薄塗りで差異が認められており、厚塗りの色絵具の Pb ピークが強い傾向にある。これが赤色絵具の種類を示すのか、描画時の絵具の希釈といった行為の結果を示すのかはより詳細な分析を行って比較する必要がある。

白緑色 TDIA01-17（図 3-004）からは、主に Fe、Cu、Pb が検出され、特に Cu と Pb の強度が強いため、Cu 着色の鉛ガラス製緑色絵具である。この緑色絵具は、劣化して白緑色化したと推測されたが、鉛ガラスに白色の風化生成物層が析出する例はよく見られるため、埋蔵中に劣化した可能性が高い。

紺色 TDIA-05（図 3-005）からは、主に Fe、Co、Ni、Pb が検出されたため、Co 着色の鉛ガラス製青色絵具である。本部位は透明感がない黒味が強い紺色を呈しているが、被熱によって変色（失透）し、本来はより透明感の強い青色を呈していたと考えられる。また、Co と Ni（Fe）が検出されており、Mn はほぼ検出されていないため、青色絵具として呉須は使用されておらず、「スマルト」などのコバルト絵具が使用されている可能性が高い。

黒色線 TDIA01-20（図 3-006）からは、主に Mn、Fe、Cu、Pb が検出されたため（Cu も検出されているが、下層の絵具の影響である）、Mn 着色の鉛ガラス製黒色絵具である。本試料も Mn 強度が強い点から黒色の着色材料として呉須の使用が考えられる。

透明釉薬 TDIA01-21（図 3-007）からは、Ca、Mn、Fe、Sr、Rb が検出された。特に Ca、Sr の強度が強く、肥前磁器の透明釉薬の特徴を示している。

・No.5（TDIA02）（図 3-008 ～ 010）

分析箇所は、赤色（TDIA02-05）、赤色（TDIA02-01）、灰緑色（TDIA02-04）の 3 箇所である（図 2-3）。

赤色 TDIA02-05（図 3-008）からは主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色された鉛ガラス製赤色絵具である。絵具層が薄く、下層の透明釉薬の成分（Ca、K、Mn、Rb、Sr など）が検出されたと考えられる。本試料はやや光沢感のない茶色味を帯びた赤色絵具であるが、被熱によって色味や質感が変化した可能性が高い。

赤色 TDIA02-01（図 3-010）からは主に Cu と Pb が検出されたため、Cu 着色された鉛ガラス製緑色絵具である。本試料は、本来は緑色であったが、被熱によって赤色に変色したと考えられる。

灰緑色 TDIA02-04（図 3-009）からは主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色された鉛ガラス製黄色絵具である。本試料は、本来は黄色であったが、被熱によって灰緑色に変色したと考えられる。

・No.631（TDIA04 ～ 06）（図 3-017 ～ 026）

分析箇所は、赤色（TDIA04-10）、赤色（TDIA06-04）、赤色線（TDIA04-09）、赤色（TDIA04-05）、赤色（TDIA06-02）、黄色（TDIA06-03）、青緑色（TDIA05-06）、白緑色（TDIA04-03）、黒色（TDIA04-07）、黒色線（TDIA06-07）の 10 箇所を分析箇所である（図 2-4）。

赤色線 TDIA04-09（図 3-017）、赤色 TDIA04-10（図 3-018）・TDIA06-04（図 3-019）からは、主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色された鉛ガラス製赤色絵具である。絵具層が薄く、下層の透明釉薬の成分（Ca、K、Mn、Rb、Sr など）が検出されたと考えられる。

白緑色 TDIA04-03（図 3-020）からは主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色された鉛ガラス製黄色絵具である。Cu もわずかに検出されており、色味の調整のために加えられていた可能性もある。本試料は、本来は黄色系の色調であったが、被熱によって白緑色に変色したと考えられる。

黄色 TDIA06-03（図 3-021）からは Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色された鉛ガラス製黄色絵具である。やや鈍い色調の黄色である。

赤色 TDIA04-05（図 3-022）からは主に Cu と Pb が検出されたため、Cu 着色された鉛ガラス製緑色絵具で

ある。本試料は、本来は緑色であったが、被熱によって赤色に変色したと考えられる。

青緑色 TDIA05-06（図 3-023）からは Cu と Pb が検出されたため、Cu 着色された鉛ガラス製緑色絵具である。本試料は上記の TDIA04-05 と同じく Cu 着色の緑色顔料と推測されたが、両者は Cu と Pb の強度やその割合に差異が認められる。そのため、異なる色調の緑色絵具の可能性もある。

赤色 TDIA06-02（図 3-024）からは Cu と Pb が検出されたため、Cu 着色された鉛ガラス製緑色絵具である。本試料は、本来は緑色であったが、被熱によって赤色に変色したと考えられる。また、Cu と Pb のスペクトルの形状が TDIA05-06 に類似しており、同一の緑色絵具の可能性もある。

黒色 TDIA04-07（図 3-025）からは Mn、Fe、Co、Cu、Pb が検出されたため、複数の着色元素によって着色された鉛ガラス製絵具である。着色元素から、Mn 系（呉須？）、Co 系、Cu 系の 3 種類の絵具が調合されていると推測される。呉須にも Co は含まれるが、呉須の使用を推測した TDIA01-20 と比べると Co 強度は強く、別途加えられていると判断した。本試料の本来の色調は不明だが、被熱によって黒色に変色したと考えられ、伝世品との比較から茶色絵具の可能性がある。また、Pb に対して着色元素の強度が低い点も特徴的である。

黒色線 TDIA06-07（図 3-026）からは主に Mn、Fe、Co、Cu、Pb が検出されたためが、特に Mn の強度が強く、Mn 着色の鉛ガラス製黒色絵具と考えられる。本試料も Mn 強度が強い点から黒色の着色材料として呉須の使用が考えられるが、Co や Cu が比較的強く検出されている点は黒色 TDIA04-07 に類似している。本線の色調はやや茶色味が強く、TDIA04-07 と類似した調合の黒色絵具の可能性もある。

・No.688b（TDIA11・12）（図 3-027 ～ 034）

分析箇所は、黄色（TDIA11-13）・（TDIA12-10）、緑色（TDIA11-11）・（TDIA12-06）、青色（TDIA11-20）、紫色（TDIA12-02）・（TDIA12-08）、黒色線（TDIA12-09）の 8 箇所である（図 2-5）。

黄色 TDIA11-13（図 3-027）・TDIA12-10（図 3-028）からは主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色された鉛ガラス製黄色絵具である。被熱の影響か透明感はないが、やや明るい色調の黄色である。

緑色 TDIA11-11（図 3-029）・TDIA12-06（図 3-30）からは主に Cu と Pb が検出されたため、Cu 着色された鉛ガラス製緑色絵具である。Mn と Fe がわずかに検出されており、少量加えられた可能性もある。

青色 TDIA11-20（図 3-031）からは Mn、Fe、Co、Ni、Cu、Pb が検出されたが、特に Co と Ni（Fe）の強度が強いため、Co 着色された鉛ガラス製青色絵具である。Mn と Cu がわずかに検出されており、少量加えられた可能性もある

紫色 TDIA12-02（図 3-032）・TDIA12-08（図 3-033）からは主に Mn、Fe、Co、Cu、Zn、Pb が検出されたが、特に Mn 強度が強いため、Mn 着色された鉛ガラス製紫色絵具である。こちらも呉須の使用が推測されるが、Co については呉須由来、Cu は添加された可能性もある。

黒色線 TDIA12-09（図 3-034）からは主に Mn、Fe、Co、Cu、Pb が検出されたが、特に Mn 強度が強いため、Mn 着色された鉛ガラス製黒色絵具である。こちらも呉須の使用が推測される。

・No.689a（TDIA13）（図 3-037・039）、No.689b（TDIA14）（図 3-035・036・038・040・041）

分析箇所は、黄色（TDIA14-05）、黄色（TDIA14-09）、緑色（TDIA13-04）、青緑色（TDIA14-03）、青色（TDIA13-01）、紺色（TDIA14-08）、黒色線（TDIA14-07）の 7 箇所である（図 2 － 6）。

黄色 TDIA14-05（図 3-035）・TDIA14-09（図 3-036）からは主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色された鉛ガラス製黄色絵具である。いずれもやや失透した明るい色調の黄色で大きな差異はないが、TDIA14-05 は Pb 強度がやや強く、TDIA14-09 の Pb 強度が弱いという違いがある。この点は絵具材質の違いというよりも被熱や劣化の影響によって部分的に鉛がなくなった箇所の可能性が考えられる。

緑色 TDIA13-04（図 3-037）と青緑色 TDIA14-03（図 3-038）からは主に Cu と Pb が検出されたため、Cu 着色された鉛ガラス製緑色絵具である。両者の色調の違いは被熱や劣化の影響か、絵具の塗りの厚さによるものと考えられる。

青色 TDIA13-01（図 3-039）からは Mn、Fe、Co、Ni、Cu、Pb が検出されたが、特に Co と Ni が検出されたため、Co 着色された鉛ガラス製青色絵具と考えられる。これらの元素に加え Mn と Cu が検出されており、No.688b の青色（TDIA11-20）とスペクトルが類似している。同種の青色絵具が使用されている可能性もある。

紺色 TDIA14-08（図 3-040）からは Fe、Co、Ni、Cu、Zn、Pb が検出されたが、特に Co と Ni が検出されたため、Co 着色された鉛ガラス製青色絵具である。ただし、Mn はほとんど含まれておらず、青色の色調も濃いため、青

色 TDIA13-01 とは異なる青色顔料と考えられる。被熱による変色ではなく、もともと色の濃い青色（紺色または紫色？）であった可能性もある。

黒色線 TDIA14-07（図 3-041）からは主に Mn、Fe、Co、Cu、Pb が検出されたが、特に Mn 強度が強いため、Mn 着色された鉛ガラス製黒色絵具である。こちらも呉須の使用が推測される。

・No.690b（TDIA15・16）（図 3-042 ～ 048）

分析箇所は、黄色（TDIA15-02）、黄色（TDIA16-05）、緑色（TDIA15-07）、緑色（TDIA16-02）、青色（TDIA16-03）、紺色（TDIA15-01）、黒色線？（TDIA15-08）の 7 箇所である（図 2-7）。

黄色 TDIA15-02（図 3-042）・TDIA16-05（図 3-043）からは主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色された鉛ガラス製黄色絵具である。いずれもやや失透した鈍い色調の黄色であり、No.689b の黄色 TDIA14-05 とスペクトルが類似している。

緑色 TDIA15-07（図 3-044）・TDIA16-02（図 3-045）からは主に Fe、Cu、Zn、Pb が検出され、特に Cu 強度が強いため、Cu 着色された鉛ガラス製緑色絵具である。いずれも被熱によって失透している。他の緑色絵具と比較すると Fe と Zn が検出されている点が特徴的である。

青色 TDIA16-03（図 3-047）、紺色 TDIA15-01（図 3-046）からは主に Mn、Fe、Co、Ni、Cu、Zn、Pb が検出されたが、特に Co と Ni が検出されたため、Co 着色された鉛ガラス製青色絵具と考えられる。青色 TDIA16-03 と紺色 TDIA15-01 は、色調は後者の色が濃いが、両者のスペクトルはほぼ一致しており、同一の青色絵具と考えられる。文様構成的にも同一であるため、同じ顔料で矛盾はない。おそらく被熱の影響で後者の色調が濃くなった可能性が高い。本試料は No.688b の青色（TDIA11-20）や No.689a の青色（TDIA13-01）とスペクトルが類似しているが、Mn 強度がやや低く、完全に一致するわけではない。

黒色線？ TDIA15-08（図 3-048）からは主に Mn、Fe、Co、Cu、Zn、Pb が検出された。特に Fe が強く検出されているが、下層の黄色絵具に由来する元素である。本試料も Mn、Co、Cu の強度が強いため、複数の着色元素で着色された鉛ガラス製絵具と考えられる。こちらも茶色絵具であった可能性もある。

・No.824（TDIA17-23）（図 3-049 ～ 060）

分析箇所は、赤色（TDIA19-03）、赤色（TDIA17-04）、赤色（TDIA18-04）、赤色（TDIA18-09）、黄色（TDIA17-02）、黄色（TDIA18-03）、緑色（TDIA21-04）、緑色（TDIA23-02）、灰緑色（TDIA17-03）、灰緑色（TDIA18-12）、灰緑色線（TDIA17-01）、黒色線（TDIA18-08）の 12 箇所である（図 2-8）。

赤色 TDIA19-03（図 3-052）、灰緑色 TDIA17-03（図 3-050）・TDIA18-12（図 3-051）、灰緑色線 TDIA17-01（図 3-049）からは主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色による鉛ガラス製赤色絵具である。灰緑色の 3 点は被熱によって変色したと考えられる。また、赤色 TDIA19-03 も光沢感がなく、ザラザラした質感のため埋蔵中の劣化によって変質している可能性もある。いずれも、Fe 強度に比べて Pb 強度が低い点が特徴的である。

黄色 TDIA17-02・TDIA18-03 からは主に Fe と Pb が検出されたため、Fe 着色による鉛ガラス製黄色絵具である。

緑色 TDIA21-04（図 3-058）・TDIA23-02（図 3-059）、赤色 TDIA17-04（図 3-055）・TDIA18-04（図 3-056）・TDIA18-09（図 3-057）からは主に Cu と Pb が検出されたため、Cu 着色による鉛ガラス製緑色絵具である。赤色の 3 点は被熱によって赤色化したものと考えられる。ただし、TDIA17-04 については絵具層が薄いのか、下層の透明釉薬由来の元素が認められる。また、緑色の 2 点については、Cu と Pb の強度比が異なるため、異なる色調の緑色の可能性もある。

黒色線 TDIA18-08（図 3-060）からは主に Mn、Fe、Co、Cu、Pb が検出され、特に Mn、Fe、が検出されたため Mn 着色の鉛ガラス製黒色絵具で、黒色の着色材料として呉須の使用が考えられる。また、透明釉薬由来の元素も検出されている。

4.3. 分析結果の整理

以下の節では、東京大学医学部附属病院入院棟 A 地点から出土した 17 年代中盤から後半の色絵磁器に用いられた色絵具の蛍光 X 線分析結果を整理する。

(1) 被災した色絵具の復元

観察の結果、被熱の影響が大きく、当初の状態を保っていないと推測される資料が多く存在した。その中でも、赤色絵具が黒色化や灰緑色化しているもの、緑色絵具が赤色化しているものが複数認められた。ベンガラ着色による赤色絵具の黒色化や灰緑色化については詳細な研究事例がなく、変質の機構は不明である。また、色の系統は変化しないが、赤色絵具が光沢感を失い、鉄サビのような質感になったものもあり、赤色絵具の劣化については今後の課題である。Cu 着色の緑色絵具が赤色化した

事例については、鉛ガラス中の Cu イオンが還元焼成を受けることによって金属 Cu コロイドになり、赤色に変色したと考えられる。いわゆる「銅赤」と言われる赤色ガラスが偶発的に生じたものと言える。また、1 点だけだが、黄色絵具が灰緑色に変色したと推測される事例があった（TDIA02-04）。本試料はやや透明の厚塗りの絵具で多少ガラス感が残っていた（図 3-009）。内部に黒色の粒子が認められたが、この粒子は還元焼成によって析出した金属鉛粒子の可能性がある。この鉛の析出によって色調が変化したと考えられる興味深い事例である。また、青色絵具が被熱によって黒色化（濃色化）していると考えられる事例もあり、今後の検討事例である。

以上の結果から着色元素の種類から当初の色絵具の大まかな色調の復元は可能であった。これは近世の肥前色絵磁器が比較的単純に着色されていたためである。ただし、複数の着色元素が検出されている試料もあり、複数の着色原料を混合したのか、もともとの原料中に含まれていたものなのか、釉薬や他の色絵具からの影響などかなど、判然としないもののあった。これらについては、元素間の含有比率を出すことで混合か単一原料由来かなどを明らかにできる可能性もあり、オリジナルの状態を保っている伝世品の色絵磁器の色絵具を分析し、比較することが必要である。

(2) 色絵具の材質

今回の分析資料は、当初の色調が赤色・黄色・緑色・青色・紫色・黒色の色絵具を中心に分析を行った。資料としては、肥前磁器は初期色絵磁器が中心で、古九谷様式とやや時代が下る南川原山様式、景徳鎮磁器は 1 点（天啓赤絵）を分析した。有田の色絵磁器では、様式や窯によって、使用される色絵具の種類が異なることはすでに明らかとなっている（佐賀県立九州陶磁文化館 1998、大橋 2007 など）。今回の資料でも、例えば古九谷様式の磁器には赤色絵具は認められない点などが挙げられるが、本稿ではそういった様式間での検討を主目的に置かなかったため、ここでは割愛する。ただし、巨視的な視点では、景徳鎮窯と肥前有田の諸窯は同一の技術系譜にあると考えられるものの、色調に差異も認められるため、詳細な比較については別稿で行いたい。

今回の課題であった、紫色絵具と黒色絵具（線）の着色については Mn 着色であり、ともに呉須の使用が推測される結果となった。その一方で黒色線は盛絵具のように厚く塗られておらず、赤色の線描きと同じく薄く塗られていた。

青色絵具は、透明化の強い青色と濃い色調の青色に大きく分けられたが、いずれも Co による着色が主体であった。Co の着色材については、イスラーム系コバルト顔料として「回青」や「回回青」、「蘇麻離青」といった名称の青色顔料が知られているが、その実態は不明である。近世のコバルト顔料として確実なものは「スマルト」である。スマルトは、ヨーロッパやイスラーム地域などで製造されたガラス製コバルト顔料であり、日本にも輸入され絵画などに用いられている。ただし、このスマルトが陶磁器の青色顔料に使用されたかの確証はない。今回の分析では、Co とあわせて Ni が検出されているが、Ni はコバルト鉱石に共伴する元素であり、コバルト原料の特徴を示しているといえる。また、Co 鉱石にはヒ素（As）が共伴する種類もあるが、今回の分析では Pb と As のピークが重なるため、As の含有を明らかにすることはできなかった。また、透明な青色顔料は Mn や Cu を含んでいるのに対し、濃い青色は Mn を含まない傾向が認められた。これが青色顔料の種類を示すかはより分析結果を蓄積して検討する必要がある。少なくとも青色顔料で明確にコバルト顔料の使用が認められた点は成果である。

今回の分析で、依然として不明だったのは茶色絵具である。今回は確実に茶色絵具と同定された絵具はなく、伝世品との比較などから推測された試料にとどまった。茶色絵具とした試料の特徴は Mn、Co、Cu などの複数の着色元素が検出された点であり、現時点では黒色を呈している。単一の元素で茶色を表現することはできないため、必然的に複数の着色材を混合する必要があり、その結果を反映していると考えられる。

赤色、黄色、緑色絵具については従来の成果と整合性のある結果となった。ただし、赤色絵具については、線描きとダミに用いられるベンガラやフリット（唐石）の粒度や調合が異なることが知られている。肥前色絵磁器において、そういった材料の使い分けがどの時点から行われていたのかを探っていく必要がある。また、緑色絵具について Cu 以外の元素を含む試料もあり、色調にバリエーションがあると予想されるため、元素の定量値などの比較を行い、着色材の混合と緑の色調の違いを明らかにする必要がある。

5．おわりに

今回は、蛍光 X 線分析法を用いた定性分析結果を中心に報告した。あわせて定性分析によって明らかになった色絵具の含有元素について、その化学組成（元素組成）を求める定量分析も行ったが、定量方法の課題や紙面の都合もあり、本稿ではその報告は行わず、稿をあらため

て報告したい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP16K01177「肥前色絵磁器に用いられた上絵具の化学的特性と材質変遷に関する研究」の助成を受けたものです。

【参考文献】

大橋康二 2007『将軍と鍋島・柿右衛門』雄山閣

大橋康二 2015「肥前色絵磁器の始まり」『江戸前期における日本磁器の始まりと色絵の始まり』近世陶磁研究会

加藤悦三 2007『釉調合の基本』陶工房鳴海

勝木宏昭・白石敦則・吉田秀治 2007「有田焼磁器の顔料 (酸化鉄) の XAFS 分析」『佐賀県窯業技術センター平成 18 年度研究報告書』

佐賀県立九州陶磁文化館 1998『寄贈記念柴田コレクション (Ⅵ) －江戸の技術と装飾技法－』

佐賀県立九州陶磁文化館 2004『古伊万里の見方シリーズ 1 種類』

佐賀県立九州陶磁文化館 2006『古伊万里の見方シリーズ 3 装飾』

新免歳靖・水本和美・二宮修治 2013-1「徳川将軍家の器－江戸城から出土した有田磁器と景徳鎮磁器の科学分析－」日本文化財科学会第 30 回大会要旨集

新免歳靖・二宮修治 2013-2「「松ヶ谷手」に用いられた色絵具」『徳川将軍家の器－江戸城跡からの最新の発掘成果を美術品とともに－』日比谷図書文化館

高島裕之 2018「C2 層出土資料にみる有田南川原窯産高品質製品の製作技術」『医学部附属病院入院棟 A 地点の成果－ 17 世紀後葉の陶磁器から－』東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室 2016『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13 東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点　報告編』

東京大学埋蔵文化財調査室 2017『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13 東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点　研究編』

内藤匡 1969『新訂古陶磁の科学』雄山閣

朴泰成ら 2006「初期柿右衛門様式磁器における有田泉山ロウハからの赤絵具と色絵磁器の試作」『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』第 2 号

水本和美 2018『17 世紀の肥前色絵磁器の意匠と技術の躍進事情」平成 27 - 29 年度科研費（基盤 C）「江戸遺跡と窯資料による肥前色絵磁器の躍進事情の意匠・技術的解明と罹災文化財の復元」成果報告』

村上伸之 2013「初期伊万里から古九谷へ　高級磁器生産の技術基盤と生産制度の確立について」『徳川将軍家の器－江戸城跡からの最新の発掘成果を美術品とともに－』日比谷図書文化館

成瀬晃司 2018「天和 2 年火災廃棄資料の 2 側面」『医学部附属病院入院棟 A 地点の成果－ 17 世紀後葉の陶磁器から－』東京大学埋蔵文化財調査室

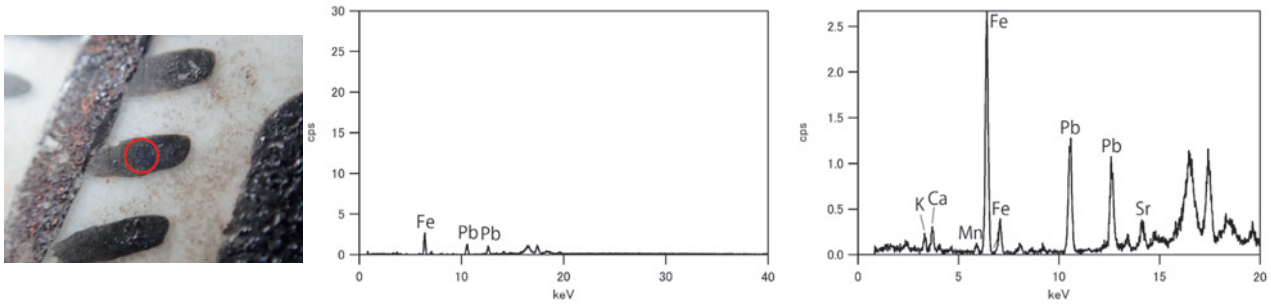


図 3-001　No.4 赤色 (黒色) TDIA01-01 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

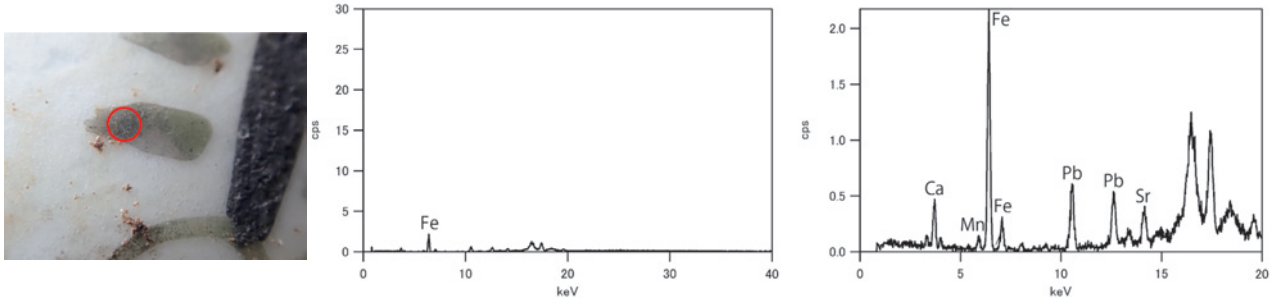


図 3-002　No.4 赤色 (灰緑色) TDIA01-10 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

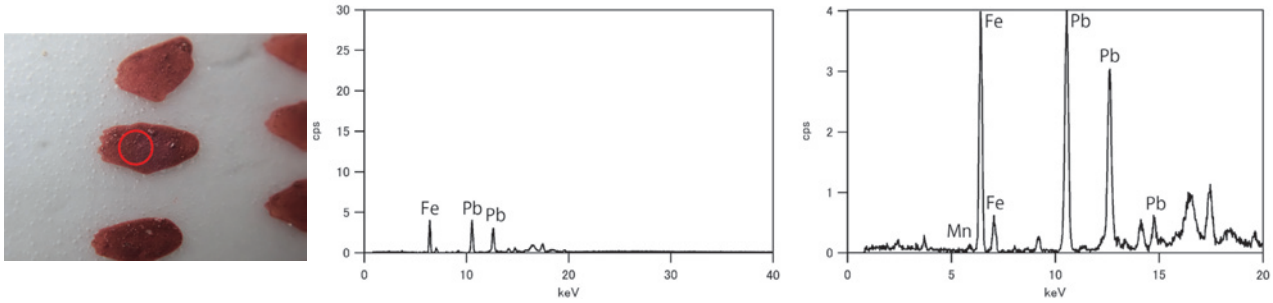


図 3-003　No.4 赤色　TDIA01-12 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

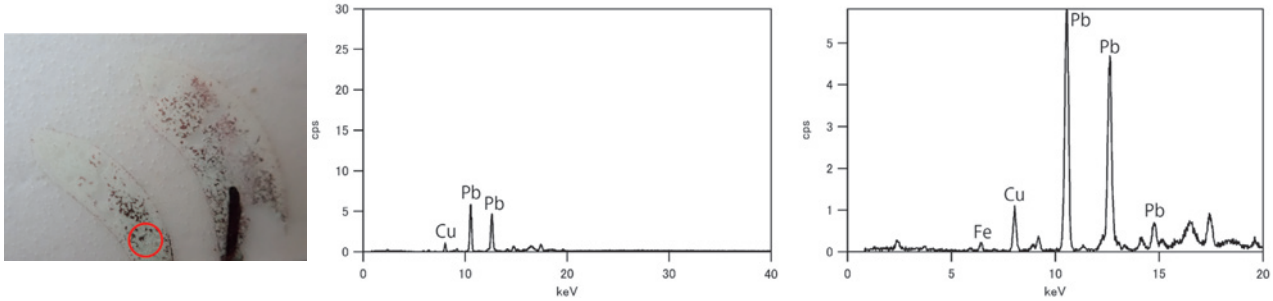


図 3-004　No.4 緑色（白緑色） TDIA01-17 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

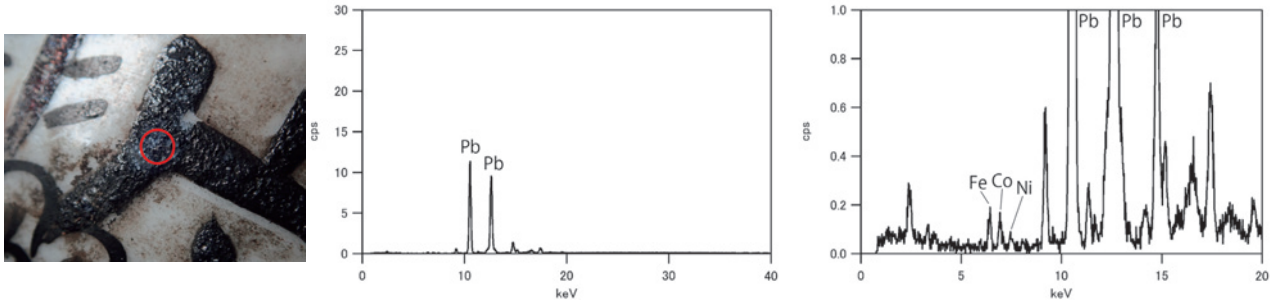


図 3-005　No.4 青色 (紺色) TDIA01-05 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

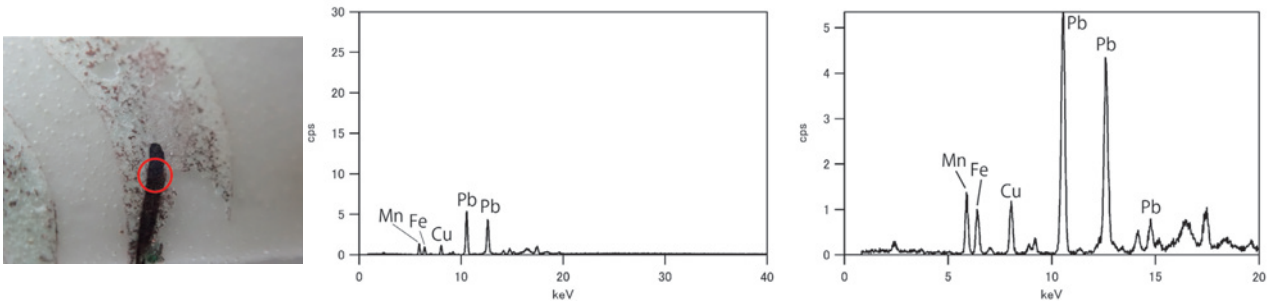


図 3-006　No.4 黒色線　TDIA01-20 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

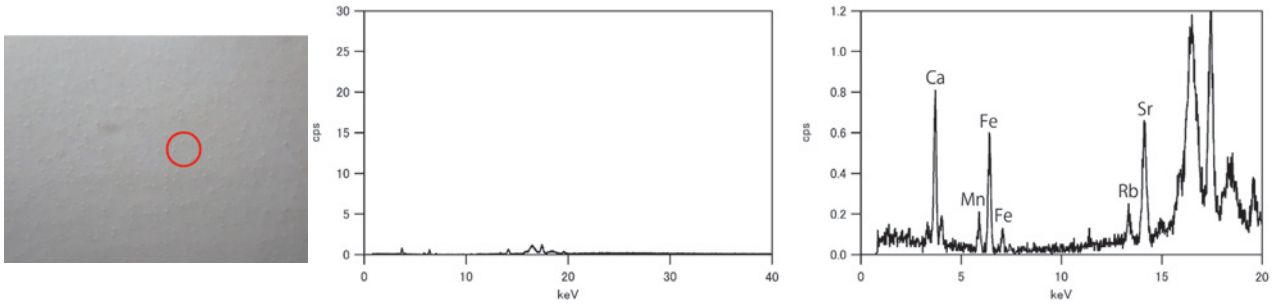


図 3-007　No.4 透明釉薬　TDIA01-21 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

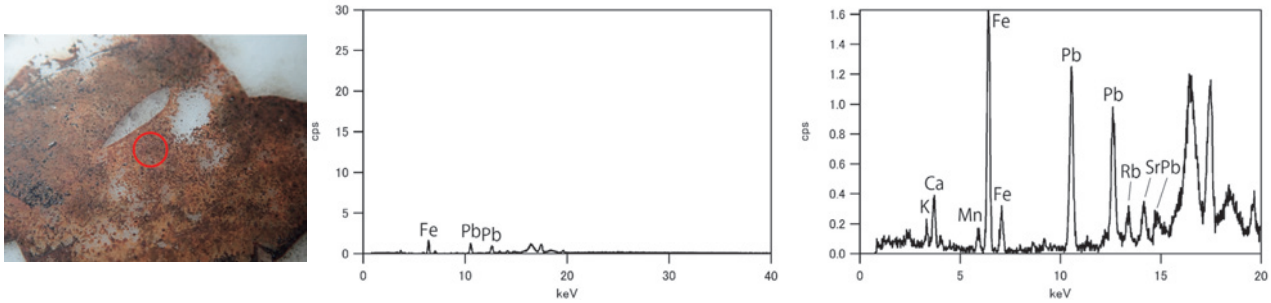


図 3-008　No.5 赤色　TDIA02-05 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

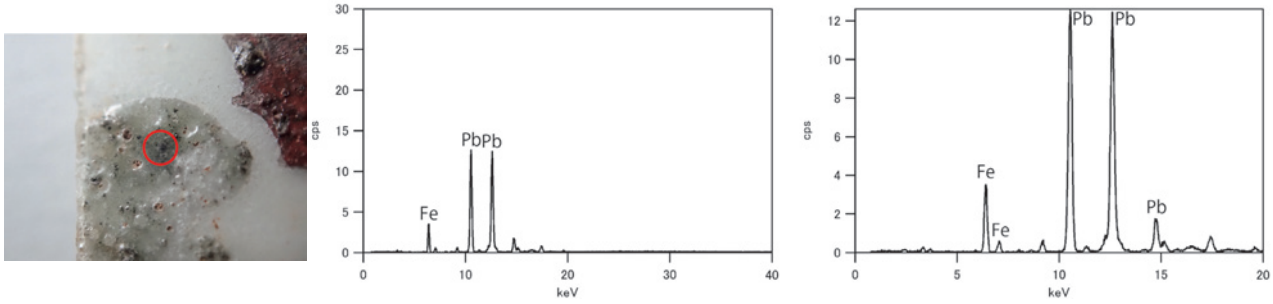


図 3-009　No.5 黄色（灰緑色）　TDIA02-04 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

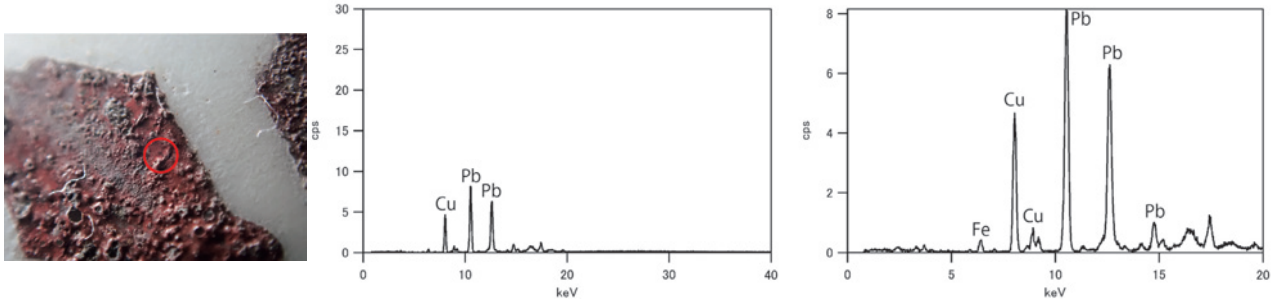


図 3-010　No.5 緑色（赤色）　TDIA02-01 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

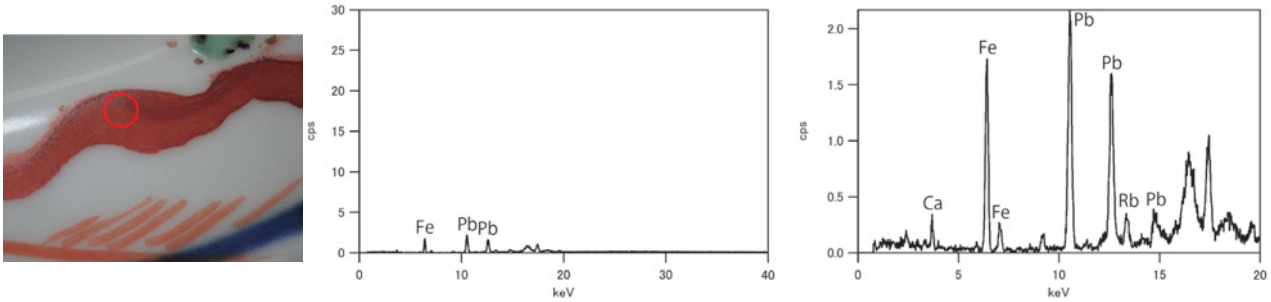


図 3-011　No.23 赤色　TDIA03-10 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

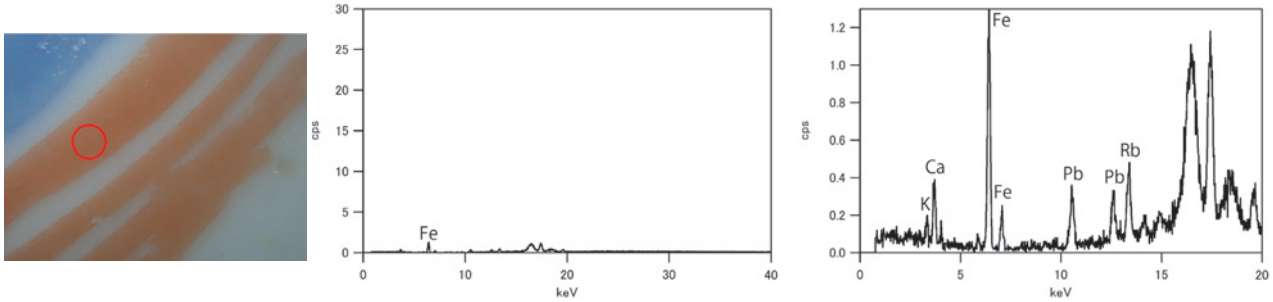


図 3-012　No.23 赤色　TDIA03-05 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

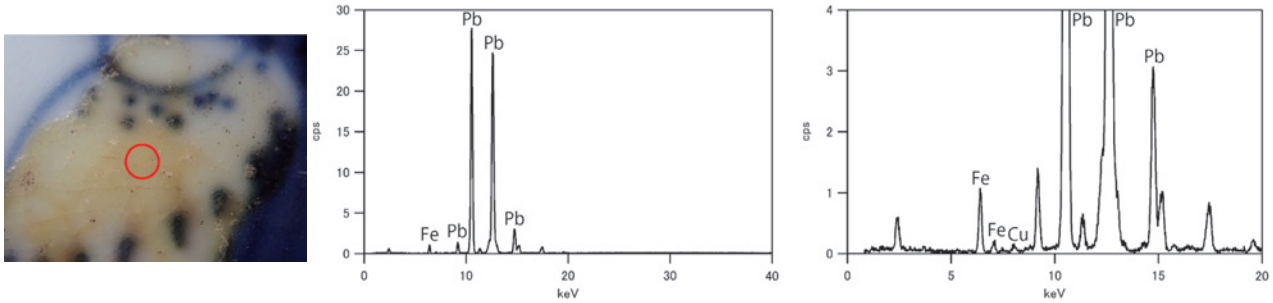


図 3-013　No.23 黄色　TDIA03-01 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

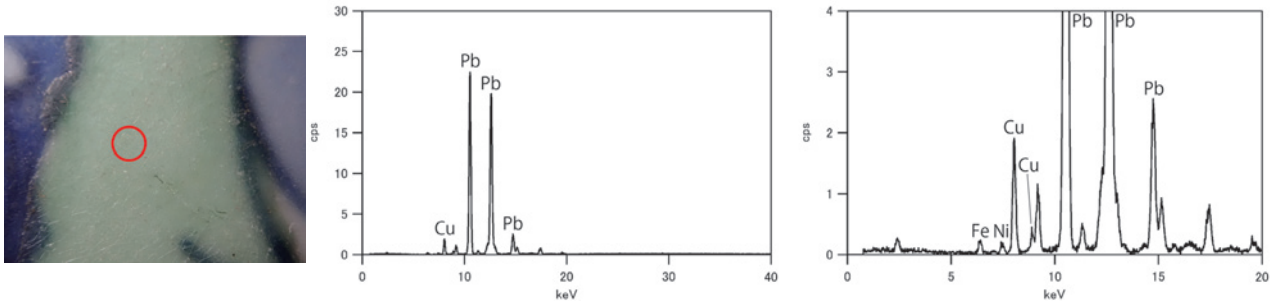


図 3-014　No.23 緑色　TDIA03-06 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

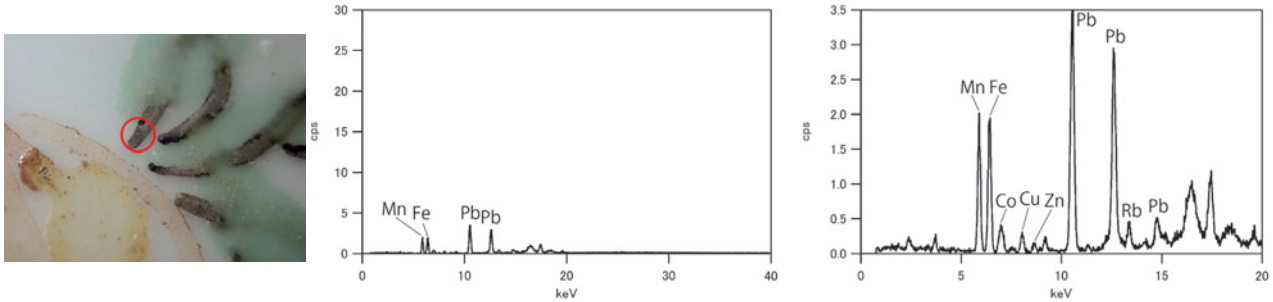


図 3-015　No.23 黒色線　TDIA03-07 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

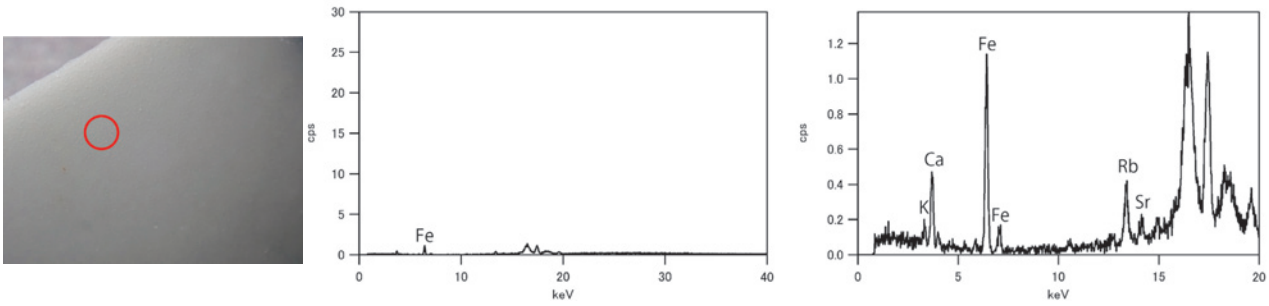


図 3-016　No.23 透明釉薬　TDIA03-02 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

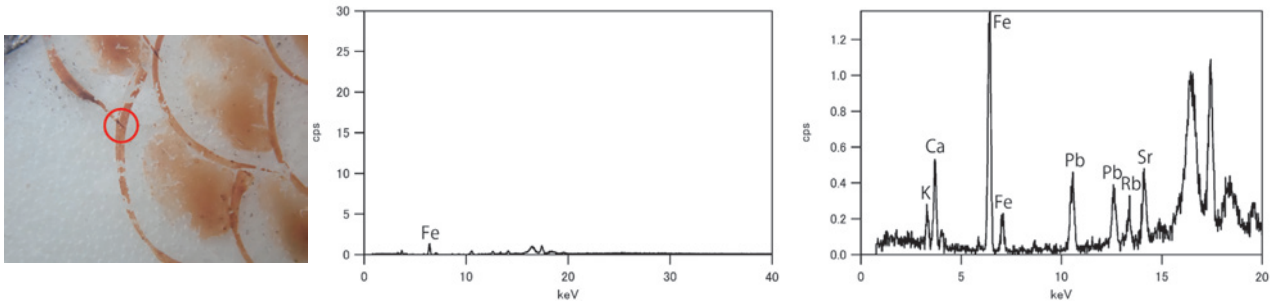


図 3-017　No.631 赤色線　TDIA04-09 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

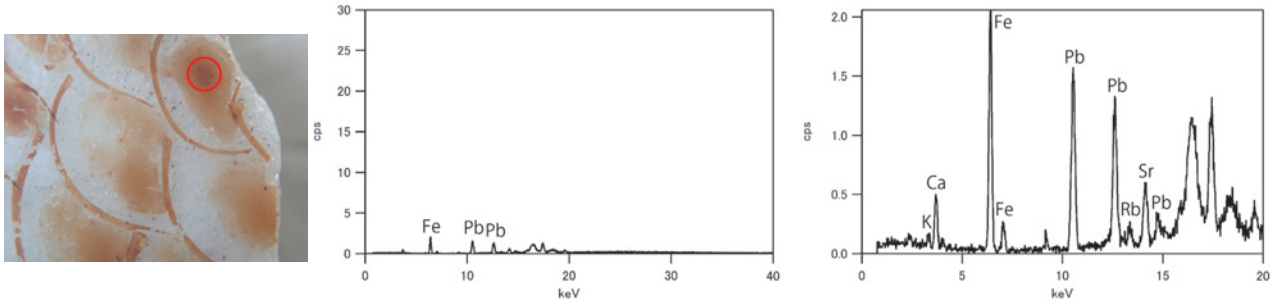


図 3-018　No.631 赤色　TDIA04-10 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

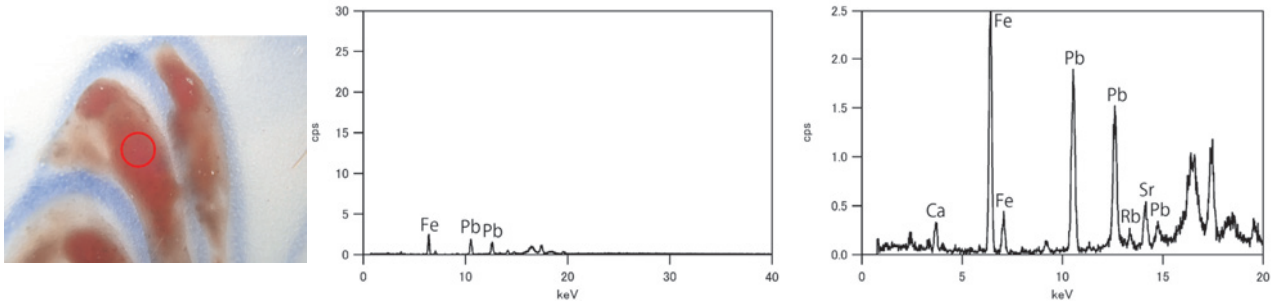


図 3-019　No.631 赤色　TDIA06-04 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

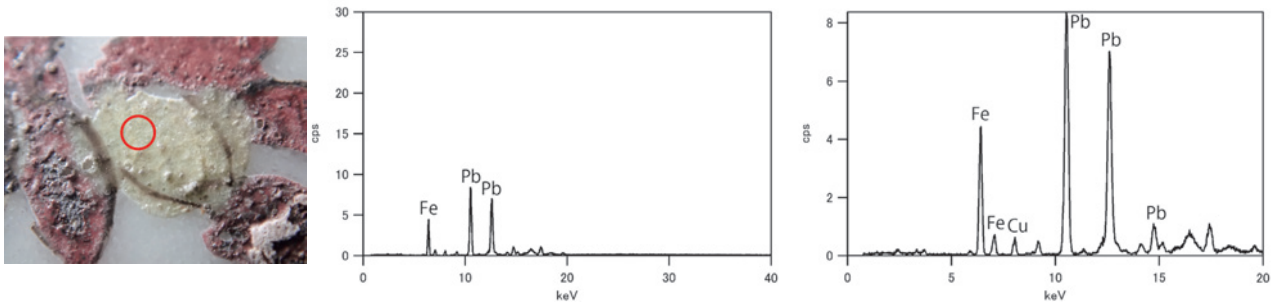


図 3-020　No.631 黄色（白緑色）TDIA04-03 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

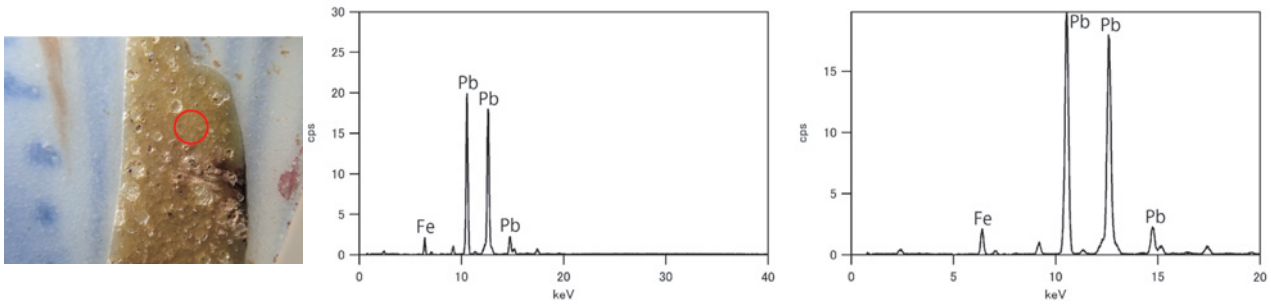


図 3-021　No.631 黄色　TDIA06-03 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

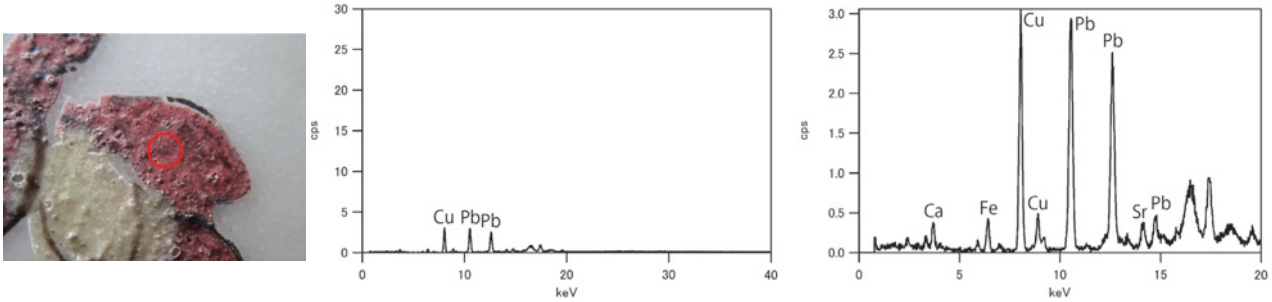


図 3-022　No.631 緑色（赤色） TDIA04-05 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

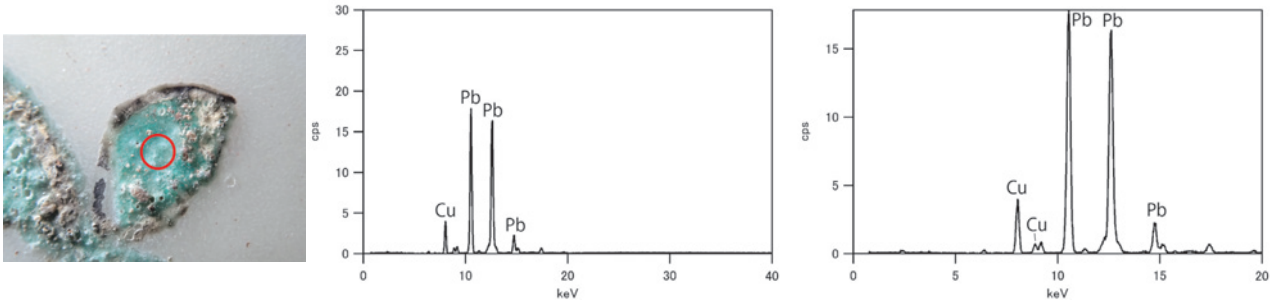


図 3-023　No.631 緑色（青緑色）TDIA05-06 の分析箇所写真とXRFスペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

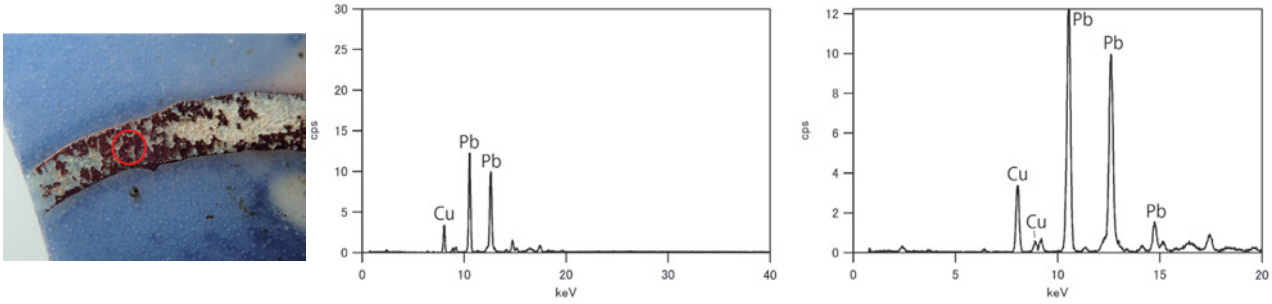


図 3-024　No.631 緑色（赤色） TDIA06-02 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

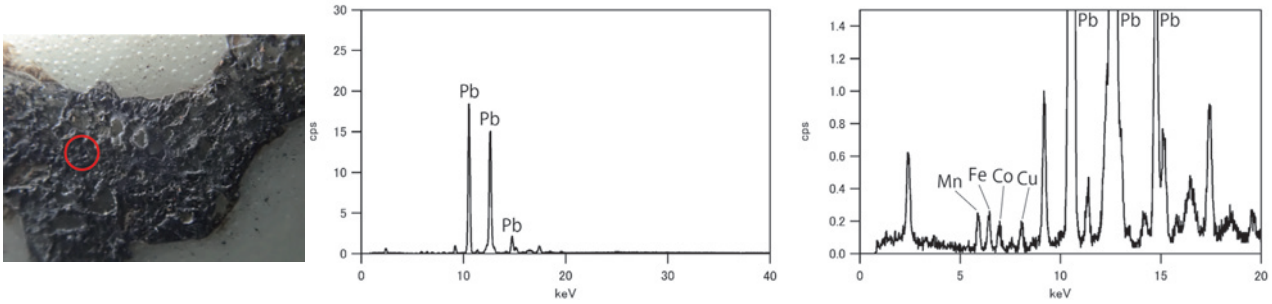


図 3-025　No.631 茶色？（黒色） TDIA04-07の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

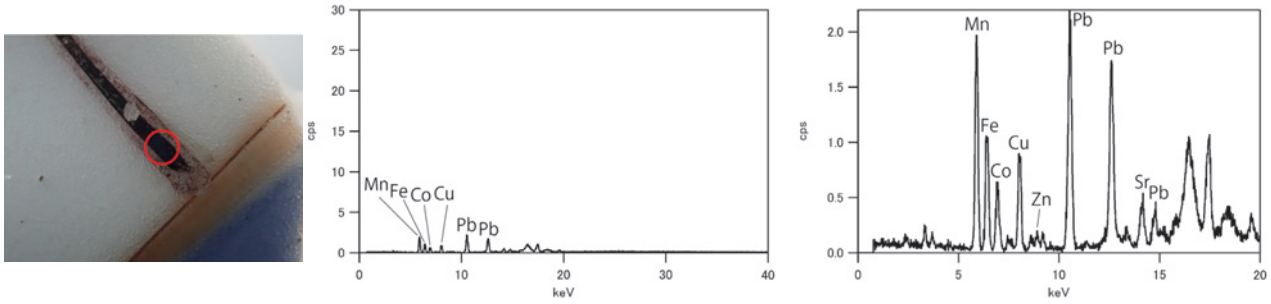


図 3-026　No.631 黒色線　TDIA06-07 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

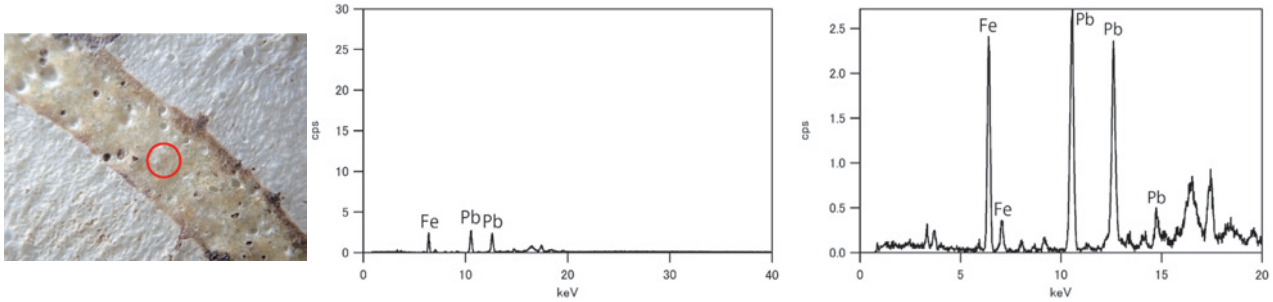


図 3-027　No.688b 黄色　TDIA11-13 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

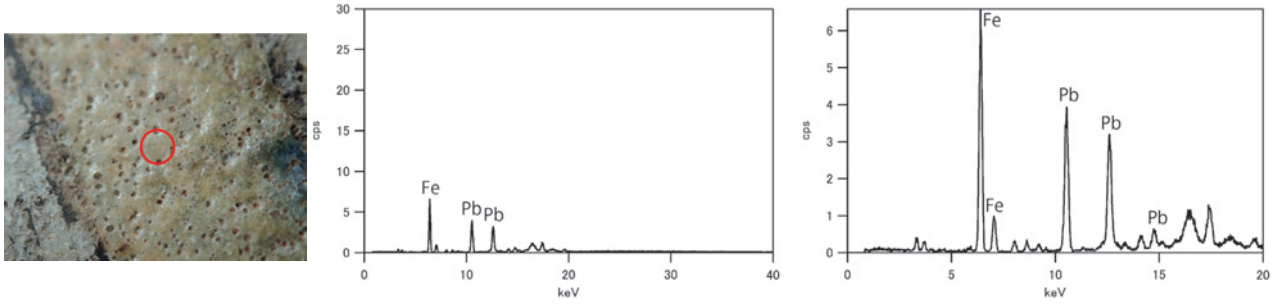


図 3-028　No.688b 黄色　TDIA12-10 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

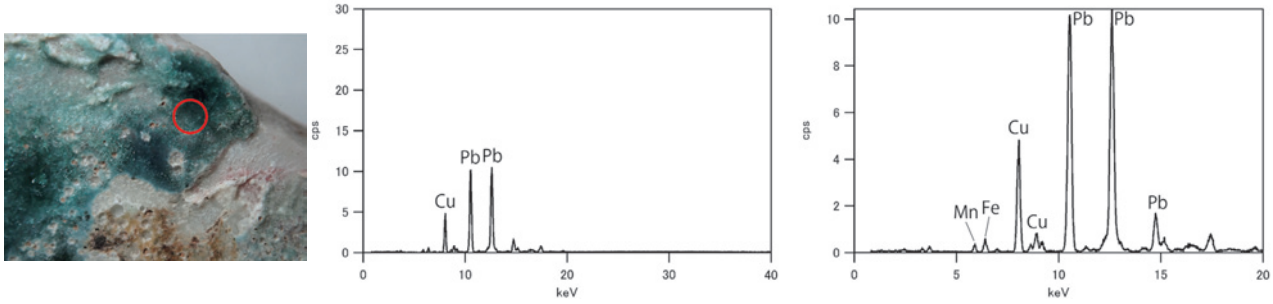


図 3-029　No.688b 緑色　TDIA11-11 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

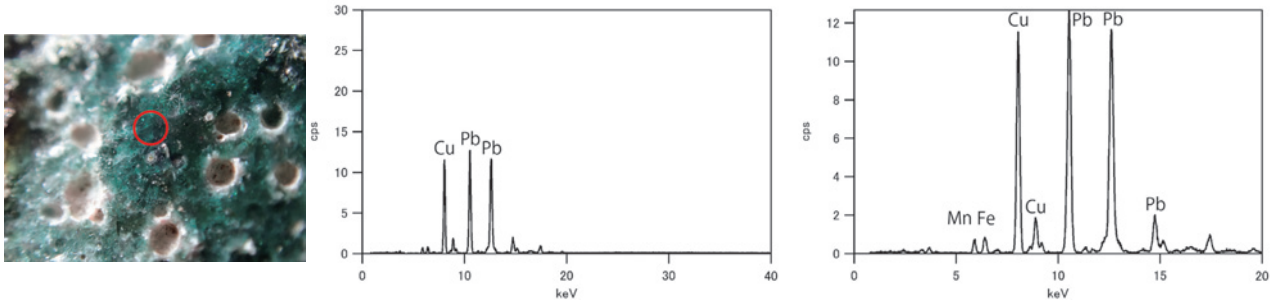


図 3-030　No.688b 緑色　TDIA12-06 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

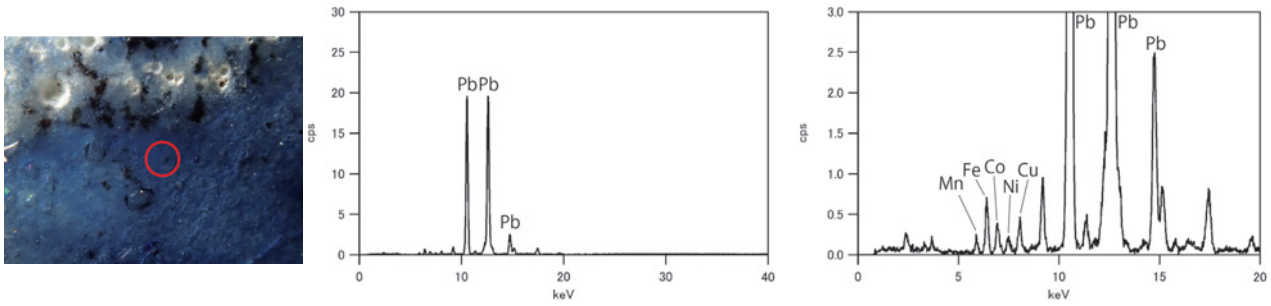


図 3-031　No.688b 青色　TDIA11-20 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

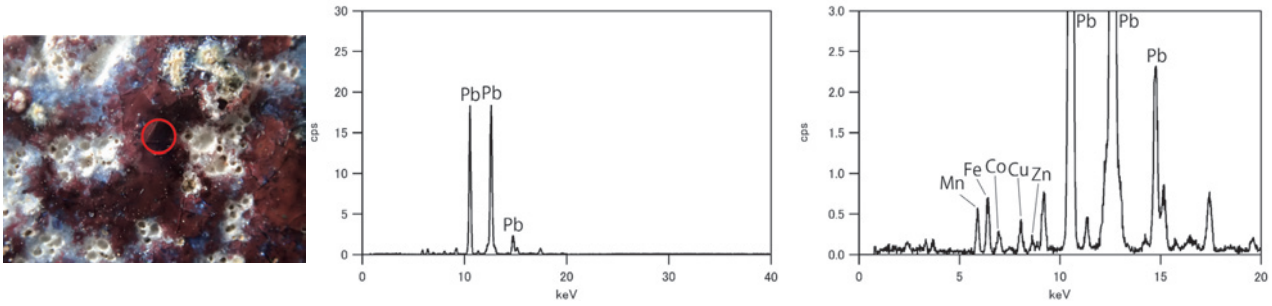


図 3-032　No.688b 紫色　TDIA12-02 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

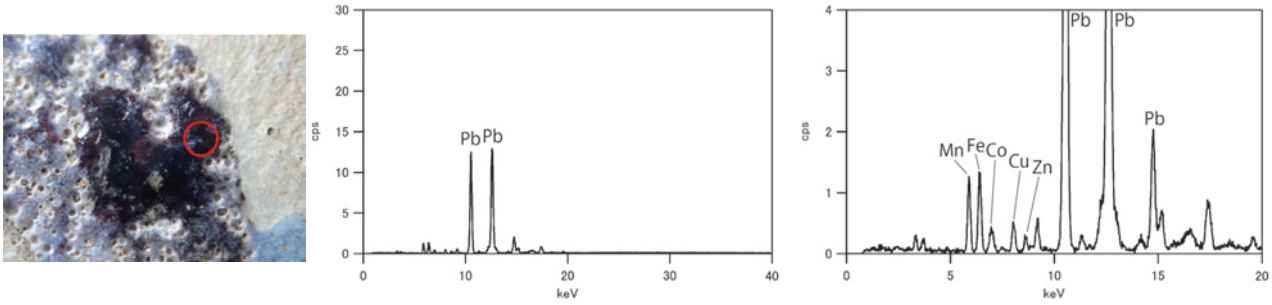


図 3-033　No.688b 紫色　TDIA12-08 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

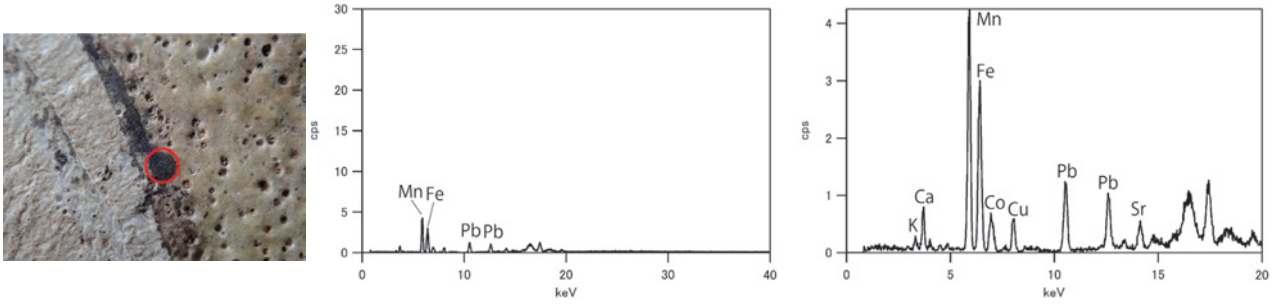


図 3-034　No.688b 黒色線　TDIA12-09 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

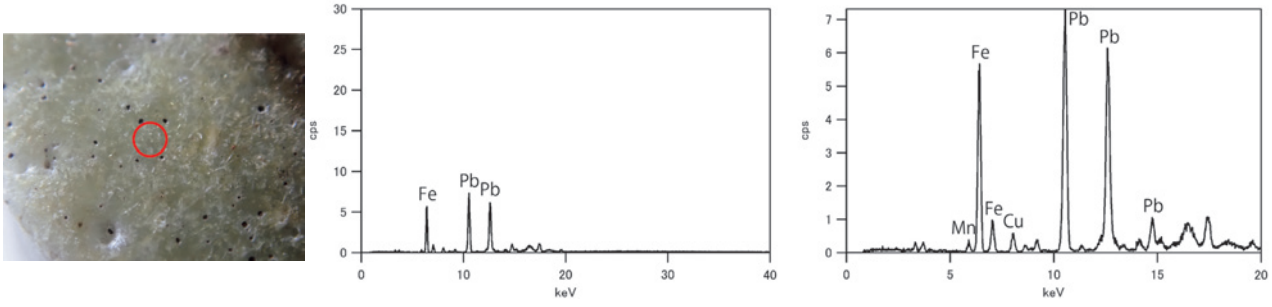


図 3-035　No.689b 黄色　TDIA14-05 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

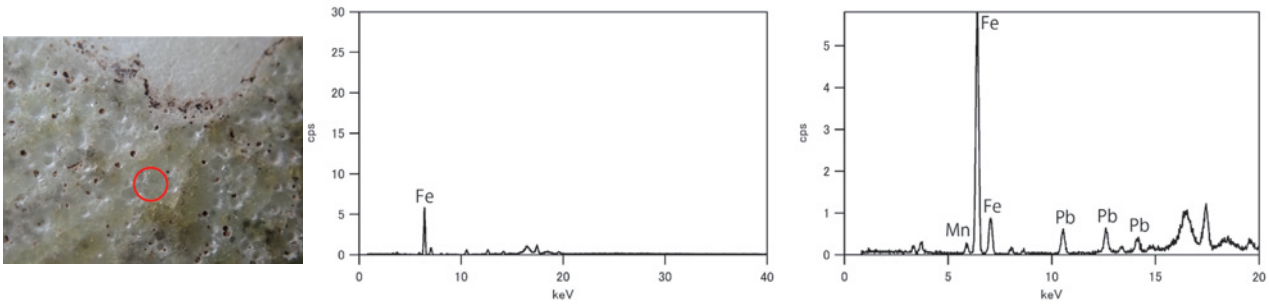


図 3-036　No.689b 黄色　TDIA14-09 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

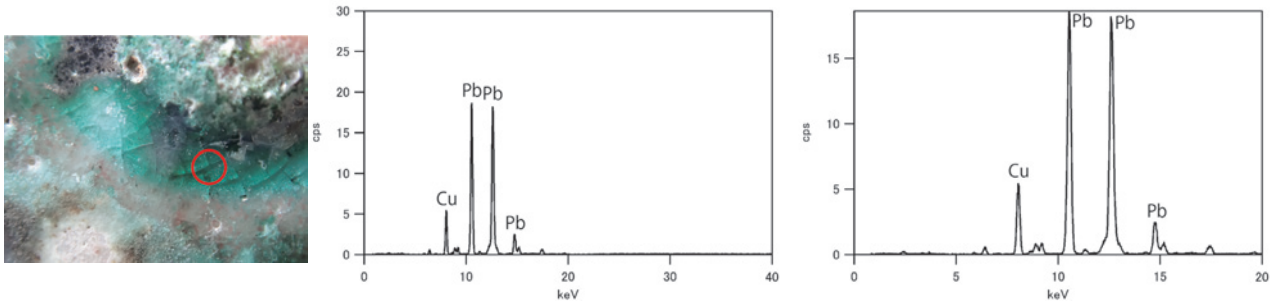


図 3-037　No.689a 緑色　TDIA13-04 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

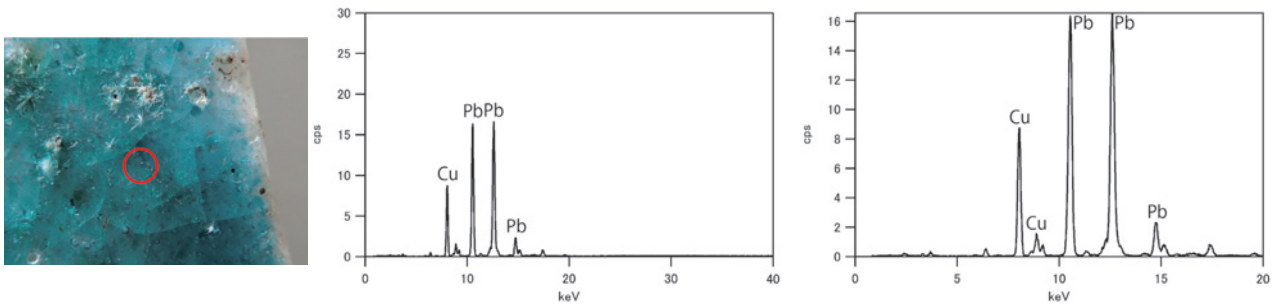


図 3-038　No.689b 緑色（青緑色）　TDIA14-03 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

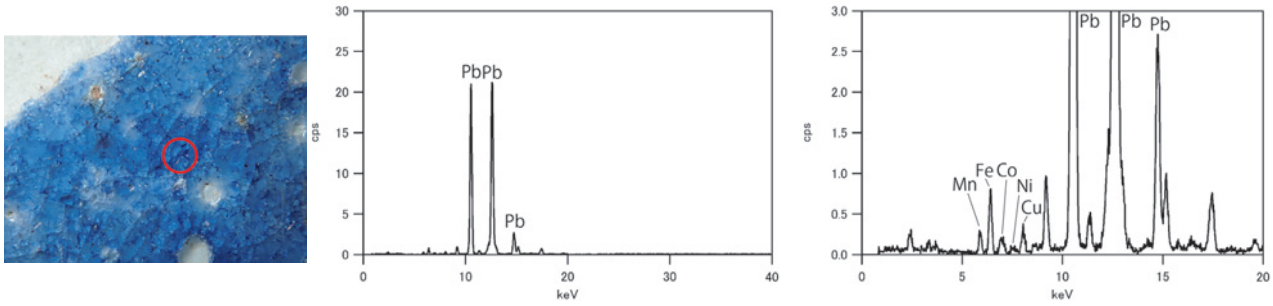


図 3-039　No.689a 青色　TDIA13-01 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

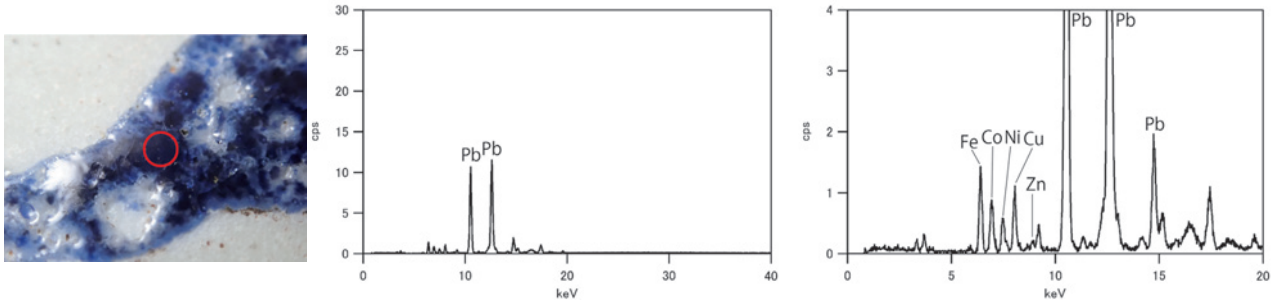


図 3-040　No.689b 青色（紺色）　TDIA14-08 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

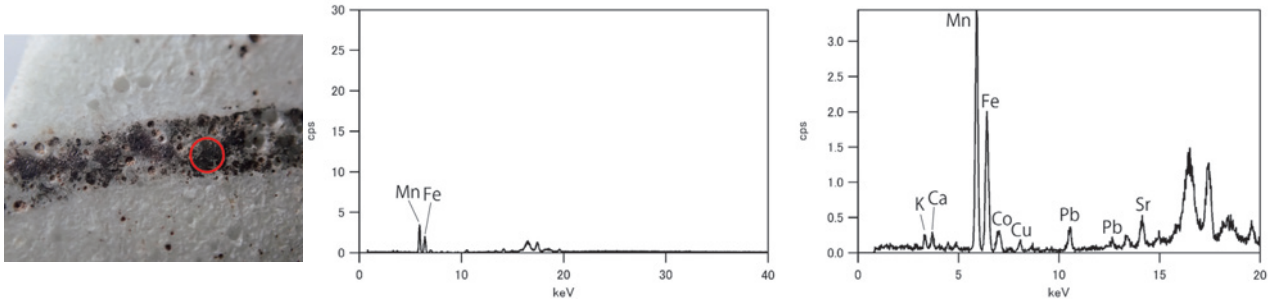


図 3-041　No.689b 黒色線　TDIA14-07 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

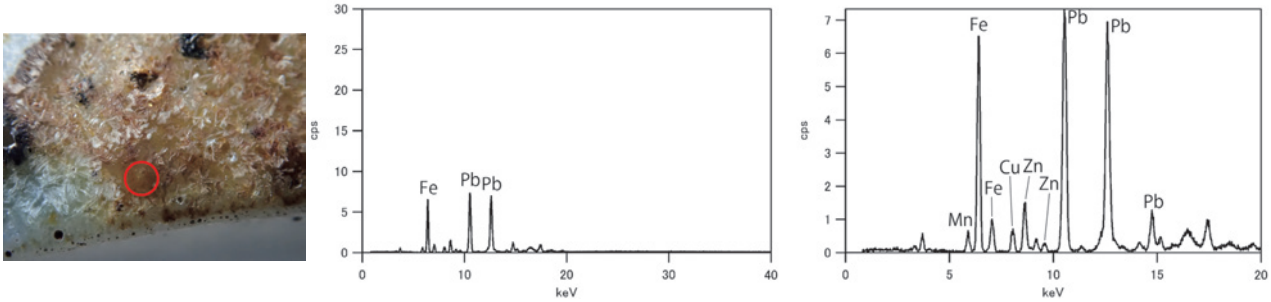


図 3-042　No.690b 黄色　TDIA15-02 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

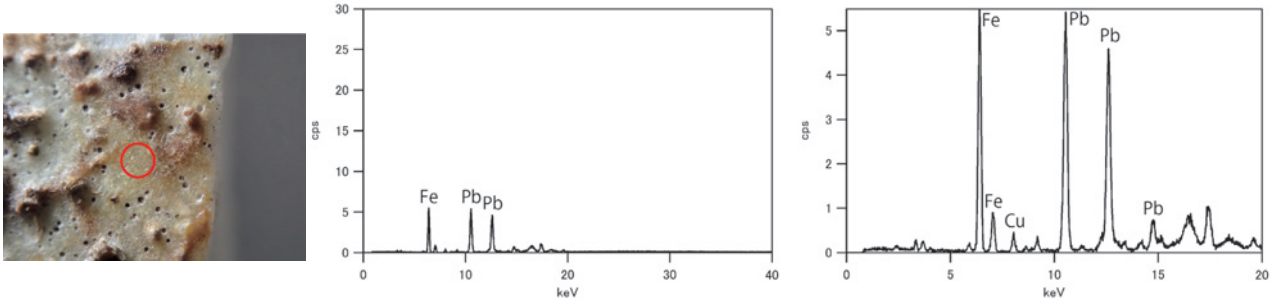


図 3-043　No.690b 黄色　TDIA16-05 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

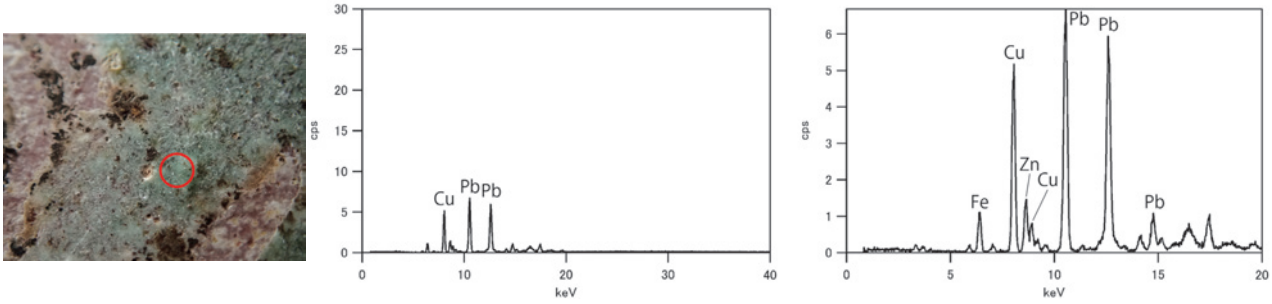


図 3-044　No.690b 緑色　TDIA15-07 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

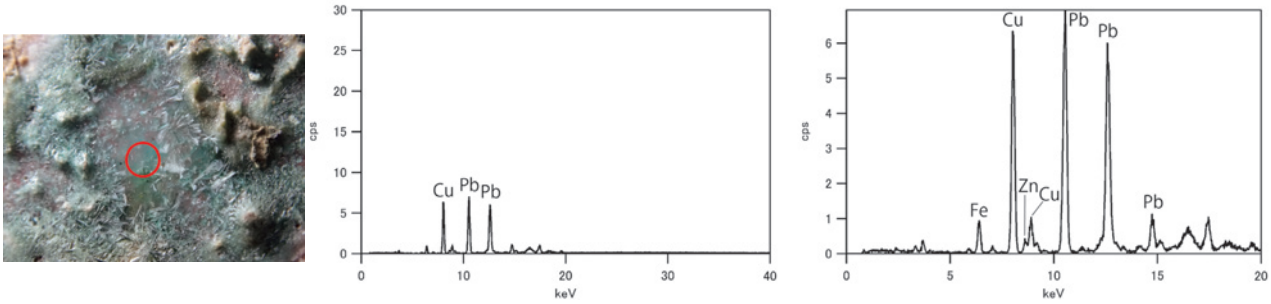


図 3-045　No.690b 緑色　TDIA16-02 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

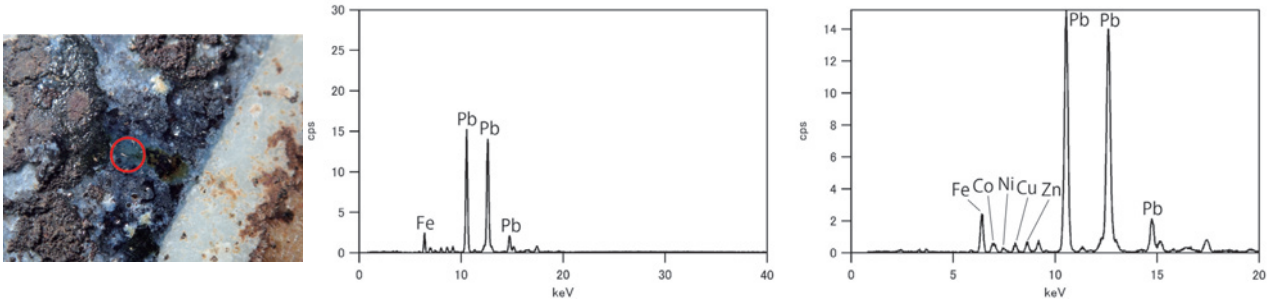


図 3-046　No.690b 青色（紺色） TDIA15-01 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

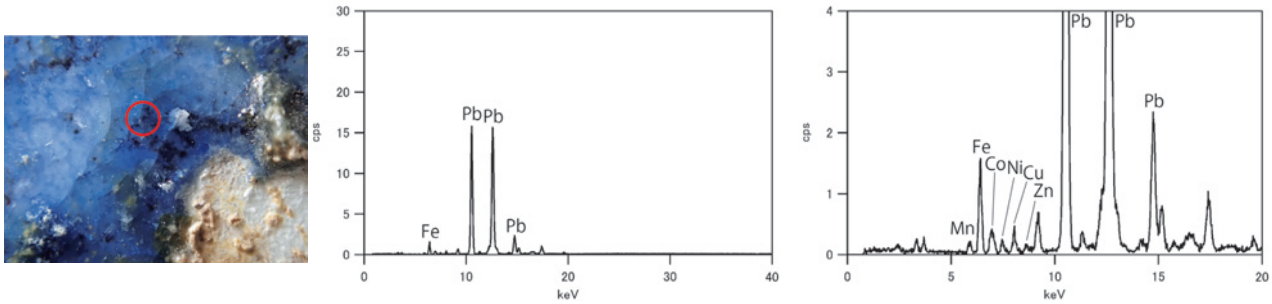


図 3-047　No.690b 青色　TDIA16-03 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

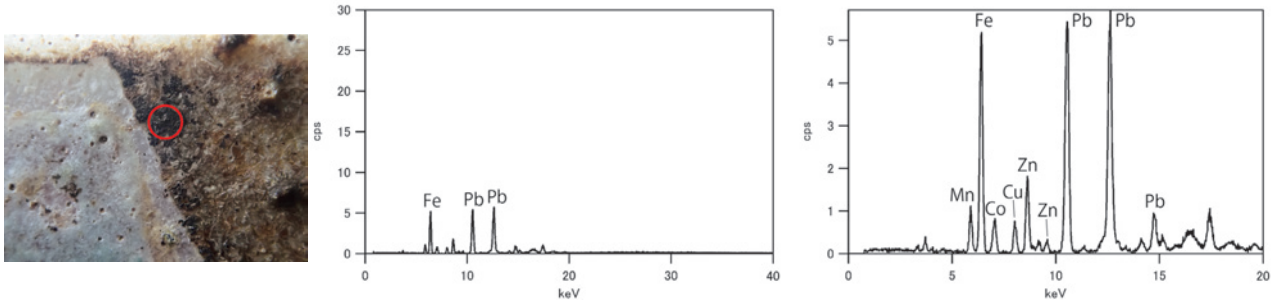


図 3-048　No.690b 黒色線 (茶色線 ?)　TDIA15-08 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

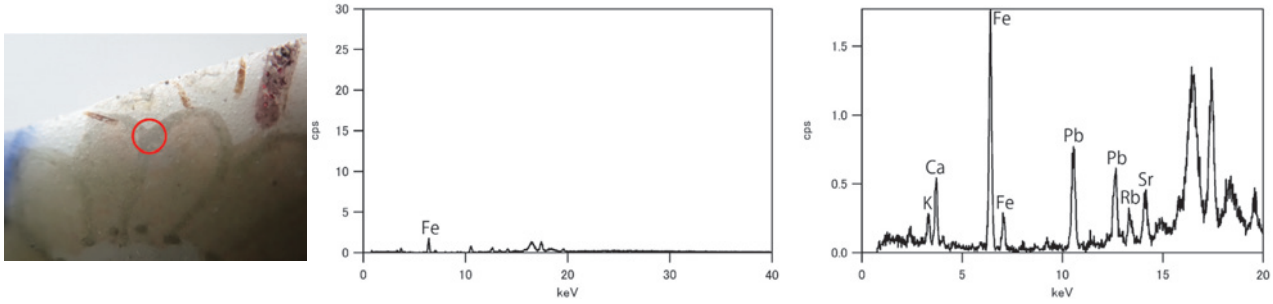


図 3-049　No.824 赤色線（灰緑色線） TDIA17-01 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

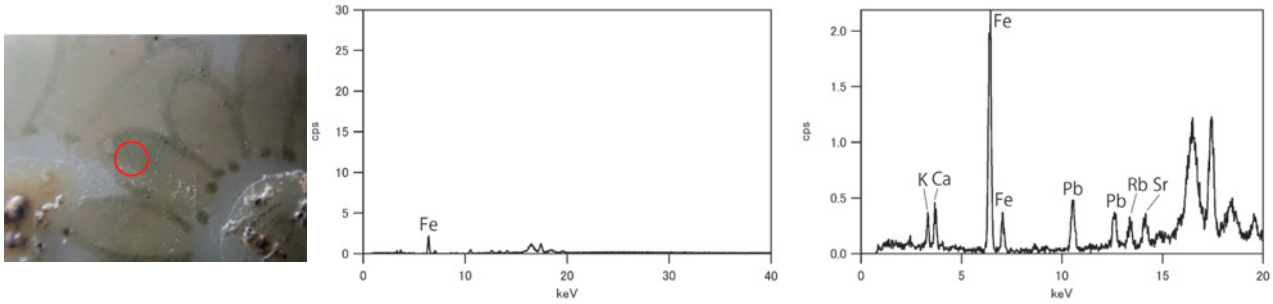


図 3-050　No.824 赤色（灰緑色） TDIA17-03 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

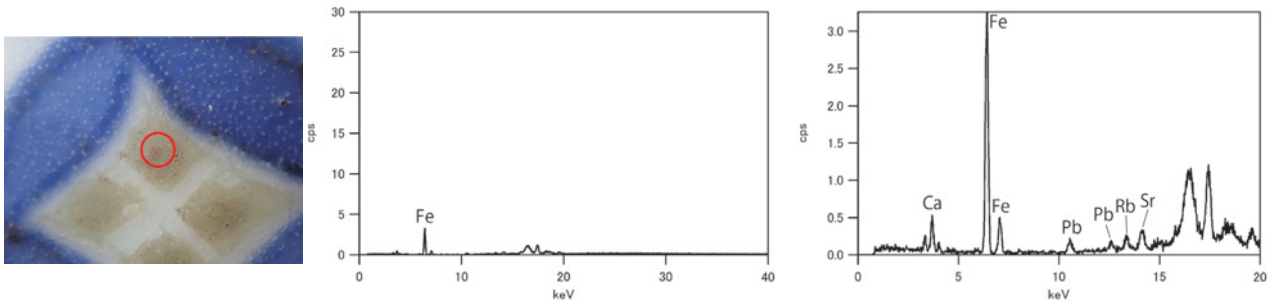


図 3-051　No.824（灰緑色）赤色　TDIA18-12 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

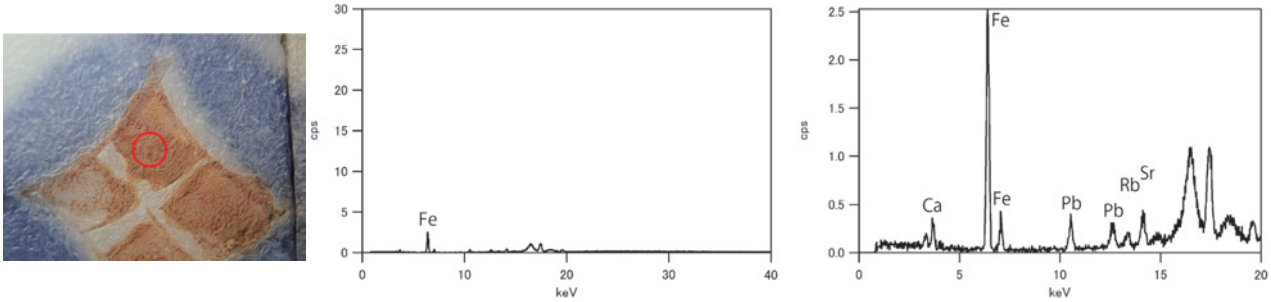


図 3-052　No.824 赤色　TDIA19-03 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

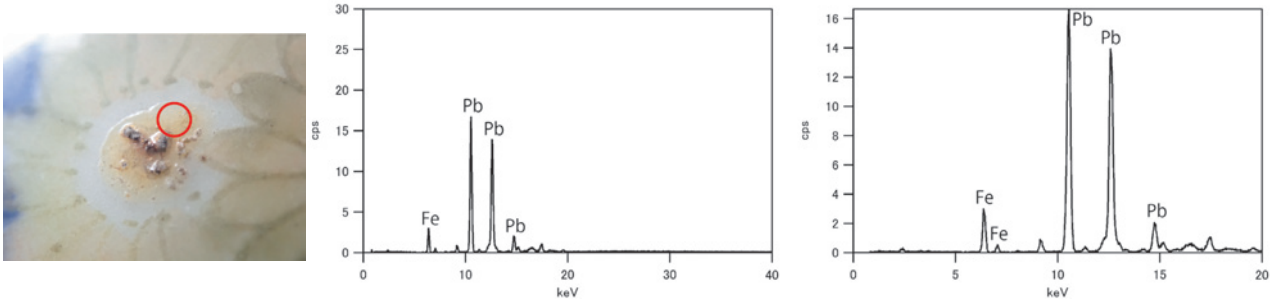


図 3-053　No.824 黄色　TDIA17-02 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

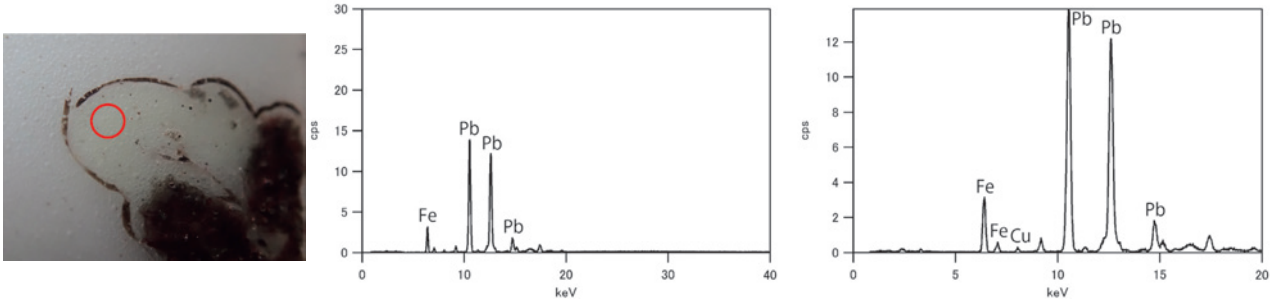


図 3-054　No.824 黄色　TDIA18-03 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

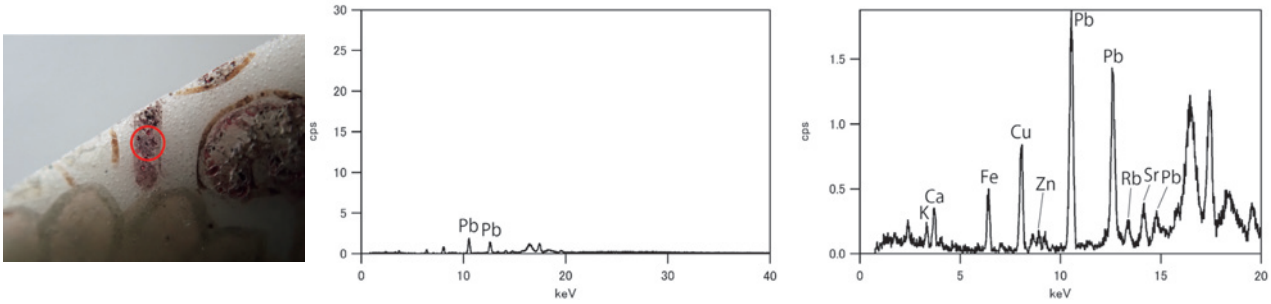


図 3-055　No.824 緑色（赤色）　TDIA17-04 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

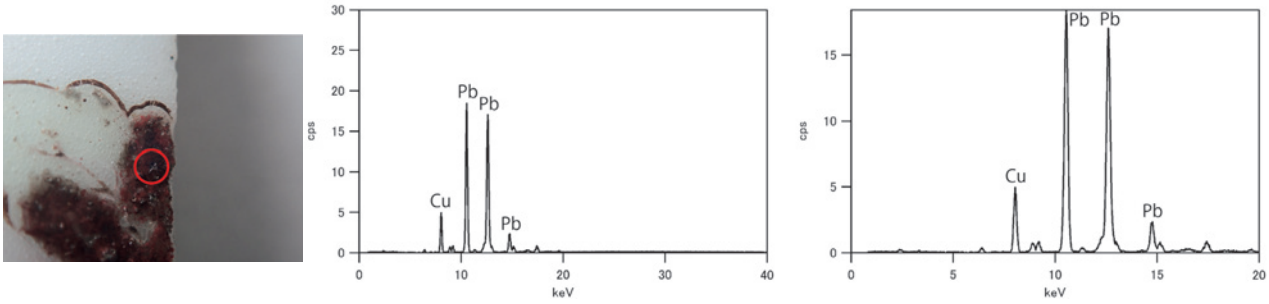


図 3-056　No.824 緑色（赤色） TDIA18-04 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

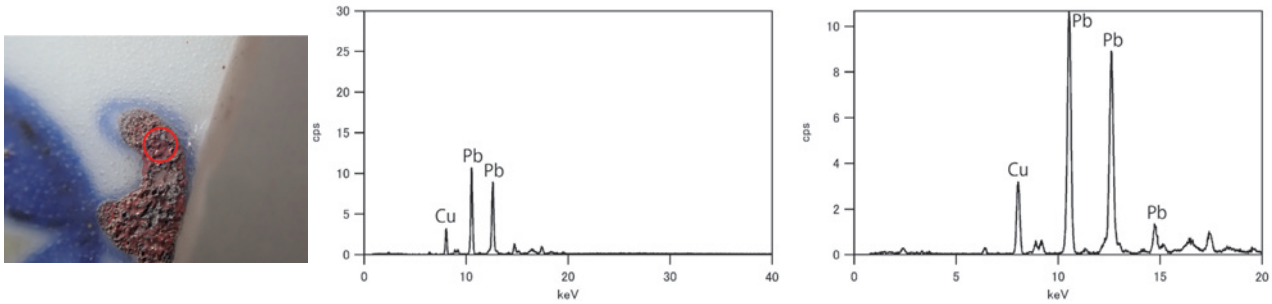


図 3-057　No.824 緑色（赤色） TDIA18-09 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

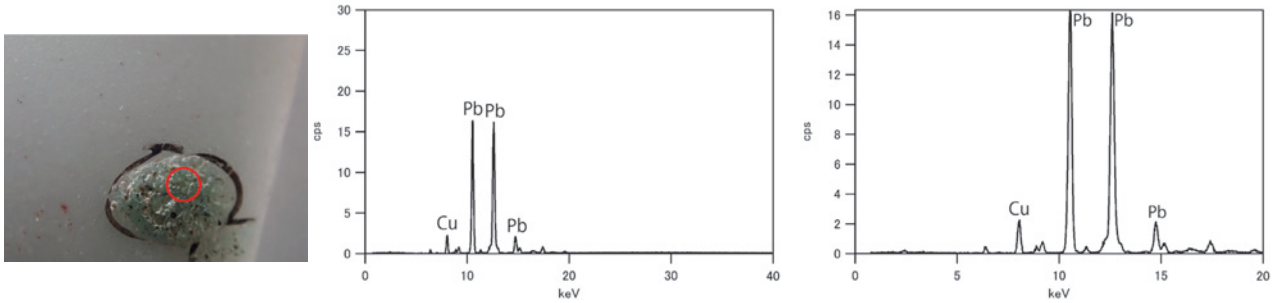


図 3-058　No.824 緑色　TDIA21-04 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

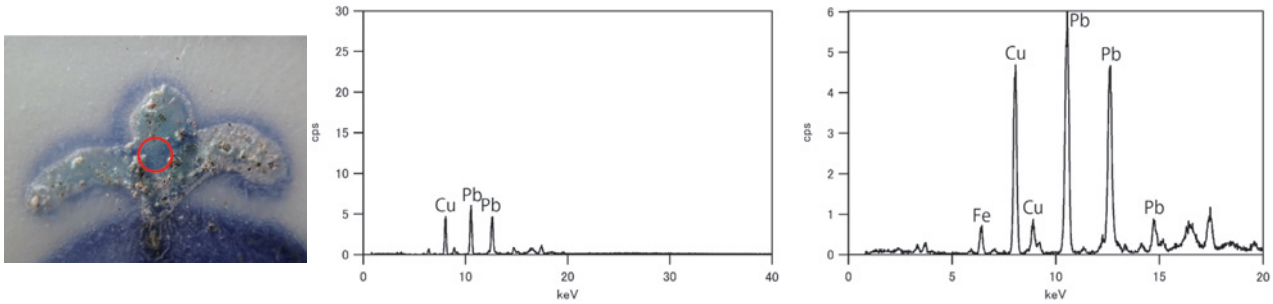


図 3-059　No.824 緑色　TDIA23-02 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

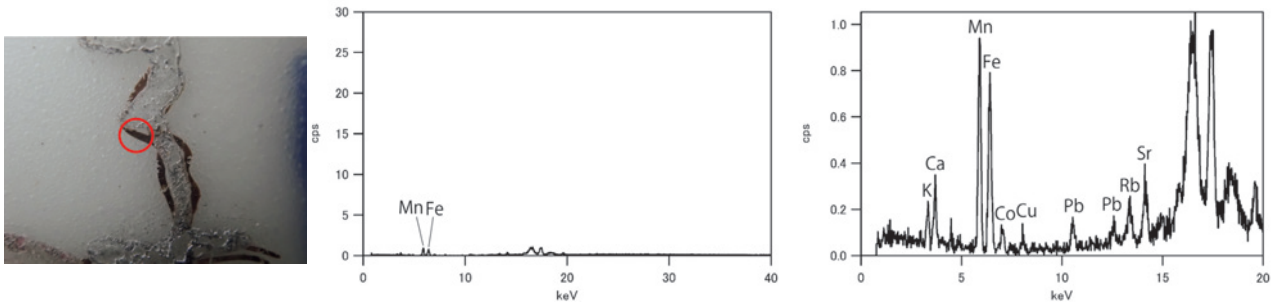


図 3-060　No.824 黒色線？　TDIA18-08 の分析箇所写真と XRF スペクトル（左図：全体、右図：部分拡大）

東京大学構内遺跡調査研究年報 14

2020 年度

2021 年 9 月 30 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場４－６－１
http://www.aru.u-tokyo.ac.jp
印　刷　能登印刷株式会社